女人藝術

昭和三年十二月一日發行（毎月一回一日發行）



六號記念

新女性鑑

菊池寛氏原作

報知新聞連載

五所平之助監督

野田高梧　脚色

三浦光男　撮影

藤野秀夫　田中絹代

渡邊篤　龍田靜枝

小村新一郎　鈴木歌子

結城一朗　筑波雪子

山内光　共演

松竹キネマ特作映畫

築地小劇場

十二月五日開演

マチネー　午後一時開演
夜　午後六時開演

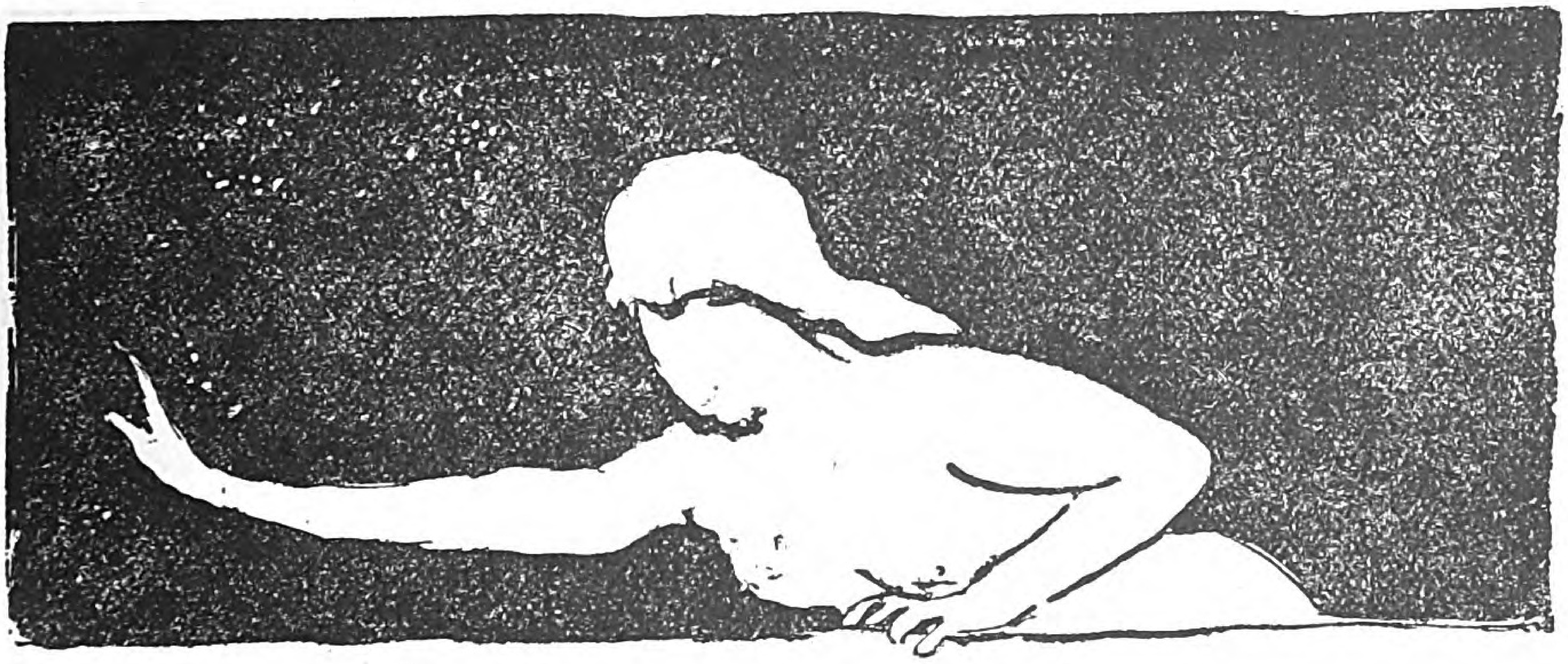
北村壽夫作
「鮒馬哲學」――六幕二十五場

女人藝術十月號所載
上田文子作
「晩春騷夜」――一幕――

演出者　土方與志
北村喜八
舞臺裝置　伊藤喜朔

A券貳圓五十錢
B券壹圓五十錢
C券九十九錢

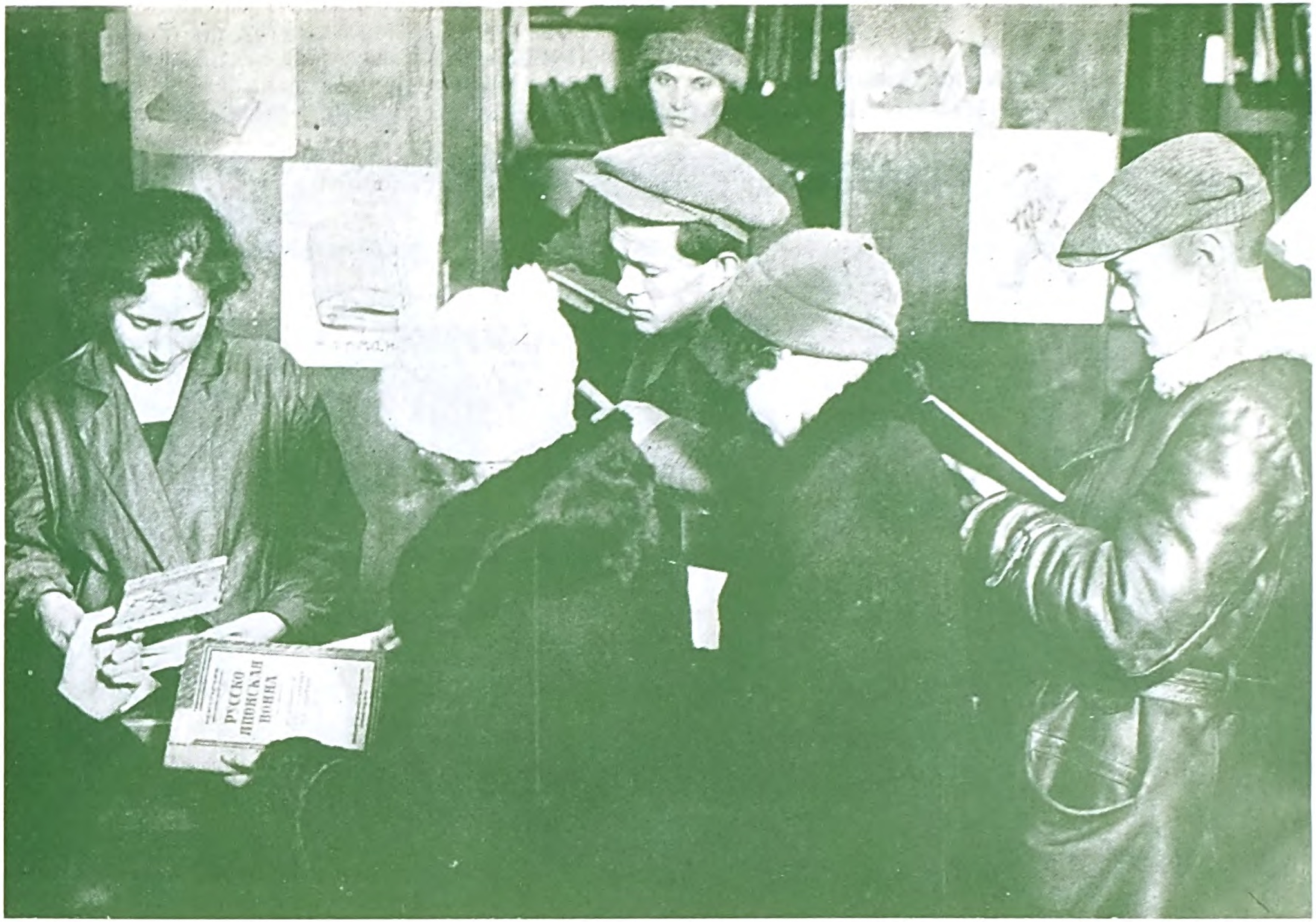
女人藝術觀劇デー十二月十日夜六時



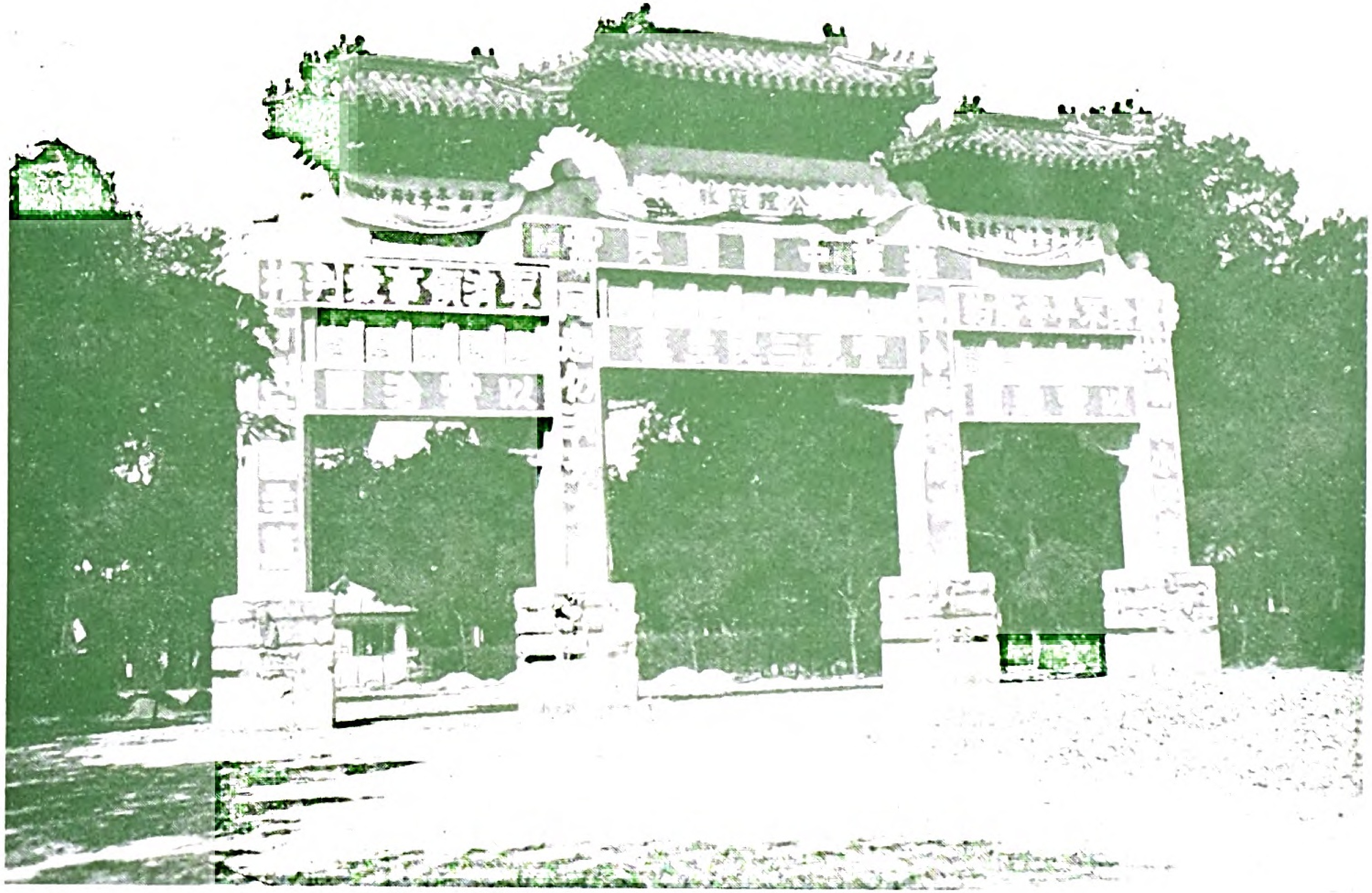
女人藝術十二月號目次

—禁轉載—





インテレゲンツアの女性と讀書する勞働者——完備せるソヴェット・ロシヤの圖書室にて



中山公園の石頭牌樓——義和團事件の時、獨逸公使ケツテレルを團民が慘殺した、その謝罪のため崇文門大街に四十餘萬圓を費して建てた大理石牌樓で、北京人は石頭牌樓と呼んで一偉觀とした。歐洲大戰の時敵國獨逸に對する國恥記念だといふので壁つて了つた。でその後身が中央公園の大戰記念牌となつて「公理戰勝」の石頭牌樓となつた。近頃は公園も中山と改稱した。公理戰勝は帝國主義だから「天下爲公」と改めるといふことであるが——(千鳥)

貴女の娯樂は――

笑ひを忘れんとしてゐる世相には強烈な娯樂が必要です。これからの冷い夜に團欒して遊ぶ道具を御持ちですか。麻雀は餘りに多くの時を要し人數に制限があり。歌留多は餘りに古く平凡になり過ぎてゐる………

貴女の幸運は――

出會ひがしらに素早く、その毛を摑まねば幸運は生涯貴女を見棄てゝしまふさうです。貴女はその機會を御存知ですか――

娯樂と幸運――そのため貴女に提供される品は唯一つ**けんこん**あるのみです。故に貴女は卽刻一組を必要とされる筈です。

一組三圓七十錢。三越松屋其他百貨店信用あるカルタ店にあります。

東京赤坂區表町二丁目一番地

日本の麻雀 **けんこん**

發賣元 **しやうび苑**

（振替東京七五一六四）



わが二十町娘にてありし日の面影つくる水引の花

御空より半はつづく明き道半はくらき流星のみち

昨日（さくじつ）の榮華の府の身なりとも思ひなさまし寂しきに過ぐ

われの名に太陽を三つ重ねたる親ありしかど寂し末の世

わがありしひと日片時子のために宜しかりしを疑はぬのみ

與謝野晶子



胸に
多くを貯へて語らず、
さびしげにも
また強きかな、
この人――
有馬さとえ女史

女人藝術

十二月號



男性訪問

3

市川左團次——長谷川春子

春子　こんなおかつぱの變な者が飛込んで來て、どんなお感じがなさいました？

左團次　いや、私はもうロシアで斷髮は澤山みて來たから平氣ですよ、ロシアは殆ど斷髮ですからね。

春子　奥さんの髮をお切りになりたいとお思ひになりませんでしたか。

左團次　この人なんか切り度くてもはげがあつて切れないですよ。

子　ぢや、ロシアの女の方が清新な感じがなさいましたか。

左團次　さうでもありませんね、そりやロシアの女だつて女ですからきれいにしてゐたい心はあるでせう．然しロシアはあんな國ですから女でも自分で働くことになつて、みんな盛に働きますからね。

春子　あなたはさういふのを御覽になつて、如何でした？　やつぱり美しい惚れ〲する方がお好きでせうね。

左團次　私はまあさうですね。

春子　藝術家だから——

左團次　ですがこの頃はよつぽど古い女でない限り斷髮が多いですね。フランスでも、ロシアでも、みんな切つてる。でも切り方がロシアとフランスとぢや違ひますね。

左團次夫人　（傍から）パリぢや短く刈つて、後をハート形にそつたりして——とてもすてきよ。

左團次　ロシアの人は大ていあなたみたいなおかつぱでしたよ。

春子　勇敢な方のね。

左團次　とにかくロシアぢや絹物が一切ない有樣で、服でも何でも、男はまづ絹は用ひないですよ。女は輸入品なんか使つてますがね。靴下でも絹のなんか殆どなくて、あつても非常に高價だから、女でも素足が多いんですよ。

春子　美しうござんすか？

左團次　美しくもないが、働いてる人は活潑に見えますね。それも若い人に多いですね。

春子　若い女たちはね…。あなたは今度ロシアへいらして盛に國粹發揮をしていらつしやいましたが、かつての自由劇場時代のものをもつて行つて、演りたいとはお思ひになりませんでしたの？

左團次　今後ですか？

春子　いゝえ、今度のことで——

左團次　え、そりやゝつてみたいと思ひます

が——

春子　古いものばかりやつてらして、内心不満をお感じになりませんでしたの？

左團次　さうですね、然し今の處やはり日本は純日本的な事をやらなけりや、今の新しいものなんかやつたつて西洋人は珍しかありませんからね。やつぱりチョンマゲものでも持つて行くことを望んでゐるんです。

春子　そりや新しいものをやる事はよほど困難なんでせうが——

左團次　然し、ロシアぢや、新しい芝居をやるつてことは決して難かしい事ぢやありませんね。

春子　ロシアらしいやり方で——



左團次　現にドイツのアレキサンダー、モイッシイといふ名優が一人でモスコーへ来て「生ける屍」をやりましたが、モイッシは獨逸人だから獨逸語でしやべるし、外のロシア人の俳優はロシア語でやるんです。それでもちやんと立派な芝居になつて、聽衆は満足してゐるんです。だから僕らもロシア人たちと芝居をやる時、日本語でやつて、ロシアの人にはロシア語でやつて貰つていいわけですね。

春子　昇さんなんか歸つてらして、ロシアの文化はとてもひどいつて言はれてますが、あなたは芝居やなんかで感心なすつた事おありになりましたか。

左團次　私は、あまり感心しませんね。ほんとのロシアの芝居は十二月頃にならないとやりませんでしたが、六つ七つ見たのはみんな宣傳劇ですね。

春子　純藝術ではないんですね。

左團次　我々は宣傳劇には興味がありませんね。チエホフやアンドレーフ、ゴルキーなんぞのものを非常にみたかつたんですが、尤もアンドレーフのものなんか今の政府に許されないやうですね。——シーズンになると、さういふ純藝術的なものもやるのですが、さうなると見物人がまるで違つてしまふさうです。

春子　昔のブルジョア時代の美しさを見たい人たちが——で、話が今度は日本へ戻ります、例へばあなたが大時代ものの毛拔なんぞやつてゐる時なぞにかつて寂しき人々のヨハンネスをやつた現代人のあなたが何だか馬鹿々々しい氣になりませんか？

左團次　そりや舞臺ぢや自分がその時代の人になつた氣持ちでないと——だから馬鹿らしいといふ氣持はないつてわけですがね。

春子　そりやさういふわけですけれどね。その瞬間はさうでなくても、ヂヤア舞臺がすんで、俺はこんなことをやつてこれでいゝのかなあとお考へになるやうなことはありませんか。

左團次　そんな事はない。一方に於ちやあれも藝術の一つで、あゝいふものを手かけてみなければならないのですから——馬鹿々々しいとは思ひませんね。

春子　昔、あなたが逆境にいらした時分、自由劇場をやつて、あの時代の青年に非常にいゝ影響を與へられたやうでしたが、巧なり名とげて、今、あゝいふものをやつていらしてそれでいゝとお思ひになりますか。

左團次　いやあれはさういふわけぢやないのです。つまり私達の仕事をはじめた時は誰も手をつけなかつた、後からの人の爲に見本に見せるやうなものだつたのです。で、まああの劇場をやりつゝあつた處へ、築地小劇場が出來たし、あゝいふ人達にゆづつていゝと思つたのですね。

春子　然し、築地にはあなたのやうに優れた技巧を持つた人はゐないし、資本主義時代の今、衣裳や道具なども、自由にお出來になる立場のあなた方が、どうして今進んでおやりにならないのでせう。

左團次　自分が立つてゞすか？　そりや、どうも、私も色々考へてるんですが…全然やめたといふでもないのですけれどね。

春子　あの時分より思想が常識的になつていらしたんでせうが…どうしてあんな乃木大將や日本海海戰なんかおやりになるんです？

左團次　そりやどうも仕方がない。商賣と藝術とは別に考へて頂きたいですね。

春子　あなたは、舞臺で、熱演なさるけれど、戀愛の場合なんか、とてもエゴイステイックな演出ね。すつかり戀愛に夢中になつて、とろけちまふつていふやうな人物はやりませんね。

左團次　さうですね。そりやどうも私には出來ないかも知れない…

春子　お相手の松蔦が非常に理智的だつていふこともあるでせうけれど——

左團次　えゝ、さうさう、さうです。

春子　西洋の女優のやうに、すばらしい肉體的な、それで理智的で蠱惑的な人があつた場合、やつぱりさういふ——

左團次　そりやさういふ人が出てくりや一緒にやつてみたいと思ひますね。ロシアでみた女優で、アリス・コオネンつて素的なひとがゐましたよ、今、タイロフつて俳優の細君になつてますが。あれなんか實にいゝですね。

春子　あなたでもその感情を起すことがおありになるんですか、あなたのやうな家庭平和論者で、常識家でも…

左團次　いえ、そりやまあ…

春子　ではあなたは俳諧をおやりのやうですが、芭蕉をおすきですか。

左團次　いや、俳諧つていつても、澤山はしないですよ。まあ少し位、所謂妙なものずきから、十七八の頃都々逸なんかに興味を持つて、その片手間に俳句の方へ行つたのです。それが未だに續いてゐるのです。別に得意なものでもない。

春子　それで、俳諧の方から言つて、芭蕉は野ざらしを覺悟してゐましたね。あなたはその事をどうお思ひになつてらつしやいますか。

左團次　私はまあ、藝術的にでも、野ざらしにもなりたくはないですがね。巧なり名とげて家庭的に安樂に送るなんて考へもまあないですね。

春子　然しそれも一個の人間としては樂しい事だとは思ひますがね。

左團次　それに、私の考へる所ぢや、役者といふものも、ある生命があつて、それ以上商賣をつゞけるのはいけないと思ひますね、

春子　さうでせうか？　例へば松助のやうにいつも年齡に應じたそれ〴〵すばらしい演出もあると思ひます。

左團次　そりやあゝいふ、永久にもうろくしない人は格別ですよ。

春子　あなたは頭はいゝし、圓滿な常識人だからもうろくなんかしません。

左團次　然しそりやそんな事はありませんよ。自分ぢやそのつもりでも、もうろくつていふのはそばから見ての事だから——

春子 でも私達から見てヤキがまはつたつていふ感じはしませんね。

左團次 さう、それで安心しましたがね。然し昔の役者は割に早く引退してゐる。松助みたいに、脇役としてなら生命があるわけですがね。

春子 でもあなたのやうに脇師でない人は、又それで新しい時代の團十郎になれる人だと思ひます。

左團次 いやそりや駄目ですよ。然し自分は何といつても一般の人からさう認められなきや仕様がないですね、自分ぢやその意志はあるんですがね。

春子 年をとるとみんな狸になつて、話をボヤかすから――あなたは直助權兵衛などする時、おや／＼あゝいふ感情があなたにあつたのかと思ふやうなエロテイツクな芝居をなさいますが、あなたでもやつぱり身體のどつかにあんなものがおありになるんですか。

左團次 えゝ、どつかにあるでせうね、若い時に、いくらか經驗があつたかも知れない。

春子 錦繪を大變巧くとり入れていらつしやる。

左團次 えゝ、そりや昔から好きなもんだから――それにあゝいふものをやるのに、非常に參考になるものですからね。何か、さういふ古いもので新しい演出をしてみたいと思ふのです。

春子 築地では演出者は頭があつても役者は充分ぢやありませんね、左團次氏は、家庭



圓滿で幸福な食卓ばかり樂しんでいらしてはいけないぢやありませんか。少し戀愛でもなさい。

左團次 どうもそいつは困りますね。

春子 あなたのやつていらした女優養成所は、大變いゝ思ひつきだと思つてゐましたが、解散してしまつたのは惜しかつたですね。あれはどうにもならなかつたものですか、

左團次 まあどうにもしようがないにはなかつたですがね、今築地にゐる山本つていふのなんかなか／＼いゝ女優でしたがね。

春子 頭がよくて――よくのみ込んで品もよし……

左團次 さうです／＼。實はあれの解散したのは少し素行の點でゴタ／＼した事があつたもので……

春子 しかしそりやア學校ぢやなし、修道院、お役所ぢやなし、さういふ事は藝術につきものですから――

左團次 それが具合の惡いことに、女優の方の素行でなしに、實は學校みたいな風になつてゐたものですから、先生側にいろ／＼

春子 あの時分より今の方が女の人もずつと進んで來たし、西洋ものも洋服が板について來たし、あなたなんかと一緒にやるにしてもずつとやりよくなつたのぢやないかと思ひますか、もしいゝ女優が出れば、共演するおつもりがありますか、

左團次 そりやむろんいゝ人が出りや辭しませんがね。どうも西洋の女優のやうなのは、ちよつと――

春子 然し日本の女と西洋の女との違ひは、

西洋の男と日本の男との違ひだと思ひます。だから、もう一度今のあなたの名聲を利用して新しいものをやつて下すつたら―

左團次　私はやり度いと心掛けてはゐるが――まあ何かこれといふ事がなけりや、やり度いとも思ひませんね。

春子　日本の演出家で滿足が出來ますか。

左團次　まあ、演出家としちや立派な人がゐると思ひますね、小山内氏など――

春子　でも小山内さんとあなたをはかりにかけると、小山内さんは永遠の青年空想家で――

左團次　小山内氏は、あまり自分が青年らしすぎると思ひます。も少し大家になつたつもりでゐてくれるといゝのだが――



アリス・コオネン

春子　さうですね、あの人は永久に大家にはなれないかも知れませんね、日本では演出家より役者の方に、例へば菊五郎やあなたなどの優れた人が多いから、演出家の方が巧くいかないんぢやないんですか。

左團次　そりやどうかわからないが、ドイツやロシアあたりぢや、役者自身が演出する考へでゐるやうですね。

春子　役者自身頭がよければ、それに越した事はないでせうね。

左團次　ロシアも今は大分行きづまつてゐます。我々は今度は遊びに行つたので、芝居といつても、歐洲の芝居を研究に行つたのぢやないから――

春子　でも日本を離れると日本の事をよく考へるでせう。誰でも――

左團次　日本の事は、日本人が考へる以上に西洋人の方が偉大に考へてゐるやうですね。歌舞伎なんかとにかく永久に保存しなけりやならないですね。

春子　保存しなくちやいけないといふ論が出た時は、文樂の人形芝居みたいに、本當に生きて、のびて行く力のなくなつたものだと思ひますが――

左團次　ロシア人の考へてゐるのは、單に佐幕時代のものです、どうにかこれを改革しなけりやいけないですね。ロシア人は歌舞伎位、三百年來ヨーロッパの風にしみない藝術はないと言つてゐますが、それは實際さうですよ。

春子　だけどそんな事を言はれてそのまゝおうけ入れになりますか。でもそりやいゝもので――祖先のこしらへた大藝術を誇るといふ事は畫描きですから私も大いに贊成します。けれどもそれを保存する事は十二單衣を着て、日常生活を通すやうなものぢやありませんか。

左團次　然し、ロシアの芝居が大變民衆的だといふが、歌舞伎は、昔から民間の風に育つて來たもので、ロシア以上に民衆的なものだと思ふのです。

春子　あなたは歌舞伎の保存と共に、新しいものもおやりになれば、芝居の神樣ともなるわけだと思ふんですが――

左團次　むろん、私は古いものを新しい形式によつて演じたいと思ふ、ロシアでメルホールなんて演じたやうに――

春子　ぜひやつて頂きたい。で、あの藝術と

生活とはある連絡があると思ふんですが、あなたの生活もそのまゝでいゝとお思ひになりますか。

左團次　現在の生活もやつぱり更へなけりやならないでせうね。

春子　では、あなたが日本へ歸つていらしてから、日本の女が美しくお見えになりましたか。

左團次　私には美しく見えましたね。一緒に行つた人たちなんか、日本の女は非常にきれいだつていひましたよ。

春子　顏面の智識美は――

左團次　人種が違ひますからね。――日本の人のですか。

春子　日本の變な人の顏でも藝の出來た人のは美しいでせう。

左團次　えゝ、そりやさう思ひますね、この人は藝人になつたらと思ふやうな人、そんな人は大てい變つてる顏がいゝですね。

春子　無論さうですね。その時あなたは、藝術的良心で誘惑をしたくなりませんか。

左團次　どうもそりや問題でせう。

春子　繪描きは自分の奥さんに似る人を――大てい惚れた人だと顏が似るものですが――役者はそれを出さないいんですか。

左團次　さうですね、繪を描く方はさうでせうね。

左團次夫人　（傍から）岡田三郎助さんなんか、みんな奥樣に似た顏をお描きになるわねえ、

左團次　どうも我々は――女形だつたらそりや細君のくせなんか出て來るかも知れませんがね。

春子　あなたが奥さんにもつと影響されてゐたら、舞臺にも出るわけでせう。

左團次　どうしても數を多くみてるから、さうなるでせうね。

春子　も一つ、今、あなたなんか江戸趣味の讃美者でせうが、今の新しい人達をどんな風に御覧になります。まさか思想善導家のやうにはおつしやらないでせう。



左團次氏の初戀の人

左團次　働いてる人達の事ですか。

春子　若い男達は島田をみて單に美しいとは思ふらしいが、興味は新しい女に感じるといふが、あなたは？

左團次　さあねえ、私なんか日本のかういふなりをしてゐるから、島田に興味を持つてゐるとは限りませんね、西洋の女なんか、あの立派な肉體美には魅力を感じますね。

春子　あなたの昔の戀愛から云つてもあなたがそれをお感じになるだらうとは思ひますが――ぢや奥さん、西洋の男にはずゐぶん綺麗な人がゐたでせうね。

左團次夫人　そんな事考へずに歩いてましたけど、西洋の男は全く綺麗だわねえ、

左團次　汚い人もあるけれど、綺麗な人はなか〳〵きれいですね。

左團次夫人　肌が違ひますからね。

春子　日本人でも、藝術なんか出來る人は別だけれど、男性美劣等な洋服細民をみますよ。そんなのはいやになる――

左團次　西洋の男は形はいゝし、體格は立派だしね。

春子　活動寫眞にお撮しになつたことおあり

になりません？

左團次　さあ、考へた事はありません。活動寫眞は智恩院で野外劇を演つた時私が知らないうちに撮られたのを見ましたがね、とても我々には駄目だと思ひましたね。

春子　どういふ意味で？

左團次　映畫には非常に癖が出ますからね。

春子　正直いふと、あなたの演出は誇張がおありになつて、坐談的な愛嬌や柔かみが――誇張を叩きこはして素でやるやうな新しい世話ものをおやりになつたら面白いと思ふのですが――

左團次　えゝ、まあ私もそりや考へてますがね。そりや仲々出來ない事で――自分でもこはしていかなきやと思つてゐるが、自分ぢやこはしたつもりでも、傍から見ればこはれてゐない事もあつて、仲々むづかしいですよ。

春子　あなたは、小山内さん以上に永井さんといゝ友情を持つていらつしやいますが、いゝお友達なら影響をうけあふのがあたりまへですが、あなたの藝風にはありませんね。

左團次　えゝさうですね。割合にね、でも浮世繪の方なんか先生ですから、その方は少し――

春子　あなたの一座で松蔦以外にほしいと思ふ役者は？

左團次　私は今いつたアリス・コオネンなんていふ女優がほしいと思ふ。男にはありませんね。

春子　市村羽左衛門を現代的にしたといふやうな……

左團次　ない。ありませんね。どうもモイッシなんていふのも、何だか泥くさい、あくが強いですね。

春子　あゝ、獨逸の役者はあくが強いですね、フランスでは、ジエーメルにおあひになりまして？

左團次　フランスでは芝居を見ませんでした。ゼノアではみたが――

春子　向ふの芝居を御覧になつて、自分の方が巧いなといふ事がおありになつて？

左團次　いやそんな事は考へなかつた。素人として見たんですからね。

春子　菊五郎ならさう言ひますよ。商賣だからあなたはさうおつしやるが、ほんとのところ――

左團次　總體に、日本の役者は巧いかも知れないが、あゝいふものをさしても――唯會話の中に柔か味がないですね。

春子　一體日本の芝居は會話の管絃樂がないと思ふ。女も男も――

左團次　西洋の芝居は會話が非常に柔かくいつてゐますね。築地なんかもそれがなさすぎるやうです。それも言葉の關係でせうか。

春子　日本の言葉でも少し氣をつけて書いたら。

左團次　えゝ、脚本の書き方によつて、ある程度までは行くでせうね。ロシアの芝居も何だか野蠻のやうですね。

春子　それだけ日本の芝居と外國の芝居とを比較して考へるのは、あなたよりないと思ひます。どうぞこれから新しいものをしつかりやつて頂きたい。

左團次　そりやどうですか、どうもわかりませんがね、ハハハ。

春子　その時は女人藝術一同ビラまきでも提灯持ちでも何でもしますから――

（この時、三田英兒來る）

左團次　（英兒に）ねえ、今も言つたんだか、アリス・コオネンはよかつたね。

春子　きれいですか。

左團次　この人（英兒）なんかも大いに感心してゐるが、女はさう綺麗ぢやないが、非常

に理智的な、小柄な人で・・・私も非常に敬意を持つてゐますよ。

春子 俐口な女は大概小柄なんですね。

左團次 年は三十七位でした。尤も芝居も内的ないゝものでしたがね。

4 菊池寛——北村兼子

北村 大衆文學と純文學との優劣は？

菊池 そんな文章倶樂部で聞くやうなことはお止しなさい。

北村 （眞面目な顔で）將來の望みはどちらにかゝるでせう。

菊池 さあ、

北村 どちらもそれ〴〵前途があるでせうがそんな事を云はずに、はつきりしたどちらかと云ふ事を・・・・

菊池 文藝といふ點から云へば、純文藝よりないでせう。

北村 あなた御自身としては、どちらをおとりになりますか。

菊池 氣持のいゝ時は純文藝を書くが、それでは金が取れないから——

北村 ホホホ・・・出版屋としてはどちらが有利でせう？

菊池 そりやあ澤山賣る方が有利ですよ。

北村 圓本の將來は？

菊池 圓本はある程度までゆけば行き詰るでせう。圓本といふものは、出版業者の出してゐる手形のやうなものでせう。

北村 約手の仕拂日なんか來たら、非常に困るでせうね。

菊池 そんな意味ではない。手形の意味です。そんな事を云へば、頭が惡いといふ事がわかりますよ。圓本の仕拂ひなんか無くなつたつて困らない。圓本なんかどうなつても關はない。

北村 久米さんが、洋行をなさる樣ですが、外國へ行くと智惠がつくものでせうか。自宅で寢ころんでゐるよりか——

菊池 そりやつくでせう。ある程度までは。

北村 外國へ行けば政治的のものなんか文學にとり入れるといゝと思ひますが、そんな作品は出來ないでせうか。

菊池 政治的の知識があれば出來る事ですよ

北村 そんな作品なら大きくなつてゆかないでせうか。

菊池 鶴見祐輔氏のものなんか、それを取り入れてゐますよ。北村さんいつ東京へ來たんです？ この前も來たんでせう。

北村 えゝ、直ぐ歸りました。あのう身邊雜記的なもので、戀愛を取扱つた純文學が、いつまでも壽命があるでせうか。

菊池 戀愛ものはいつまでだつて續くですよ。それは社會制度が變つても、戀愛のなくなることはないですから。

北村 それぢやあ、やつぱり惱みを書く方が受けるんでせうか——受けるつて云ふと一寸變ですが・・・・

菊池 惱みを書いたつて、歡びを書いたつて藝術的に表現されゝば——

北村 では劒劇物、探偵小説なんかが大變流行しましたが、もう下火でせうか？ その

御感想は・・・・

菊池　そりや僕は知らないね。流行である以上はすたれるでせう。

北村　女人藝術について？

菊池　女人藝術の一問一答なんか惡趣味だと思ひますね。たゞ女性が團結して一つの力を作つて行く事は認めるが・・・長谷川さん毎月損してゐるんでせう。みんなで心配してゐますよ。

北村　女性には雜誌經營の才能なんかありませうか。

菊池　それはあるかも知れない。しかし女人藝術の編輯には一寸認められない。

北村　婦人の小說、論文、隨筆なんかに就いてどうお思ひになりますか。

菊池　それは私の極好きなんで、相當認めてゐる人はあると思ふ。

北村　婦人の繪畫、彫刻なんかでも駄目を押すといふ點で遲れてゐやしないでせうか。

菊池　そんな事はいゝ惡いはわからない。文藝の點ではいゝ人が出ると思ふ。

北村　婦人の大衆作家は面白くありませんか

菊池　それは面白いかも知れない。併し少いでせう。婦人は劍劇ものや、武勇ものに興味はないでせう。

北村　日本婦人と西洋婦人の優劣？

菊池　私は日本人がいゝと思ふ。

北村　女はどの程度まで男の繩張りに切り込めるでせう。男はまた、女の繩張りに入れるでせうか。

菊池　それは入れないでせう。どちらも――



そんな事はどうだか知らない。

北村　貴方の理想としてゐられる女――娘さんかお婆さんか幾つ位の方がおすき？

菊池　僕は三十歲位までがいゝ。お婆さんは嫌ひですね。本當云へば二十三位までがいゝのだが、こゝにゐらつしやる方はみんな二十五以上らしいから、遠慮しといたんです。

北村　何故二十三以上の女がお嫌ひですか？

菊池　それは性的魅力がないからです。だけど僕の友だちなんかは、若いのに年とつた女の人がいゝつて云ひますがね。

北村　どういふ夫人を御希望ですか。

菊池　僕は妻とする婦人はおとなしい人が好きです。娘さんなら悧口で理解が深くて、おとなしくて、確つかりしてゐる人が好きです。

北村　職業婦人の前途？

菊池　職業婦人が增えて來ると、社會的に、性的に惡化してゆく弊害があると思ふ。

北村　まだ名を成さぬ青年男女はどうして文壇に出て行つたらいゝでせうか。文壇的進出は殆んど絕望でせうか。

菊池　このごろに至つてはいよ〳〵なくなりましたね。

北村　あなたはどんな時に氣持のいゝ作品がお出來になりますか。

菊池　僕は氣持のいゝ作品なんかできない。

北村　原稿はお家でお書きになりますか。

菊池　家で。

北村　夜？　晝？

菊池　朝、午前中。

北村 午前中座つてお書きになりますか。

菊池 僕は椅子で書きます。

北村 どちらがいゝんですか。

菊池 椅子の方がいゝ。

北村 關西の風俗や、婦人の職業とか生活とかについて？

菊池 食べ物はうまいと思ふ。道頓堀なんか歩いても、婦人は綺麗だと思ふのは見えないですね。

北村 大阪へいらしたら何處をお歩きになりますか。

菊池 大抵道頓堀で、つる源に行つてお辨當を食べます。

北村 大阪に、その他魅惑的なところがありませんか。

菊池 何處もない。

北村 では食べ物丈けなんですね。

菊池 その興味より他何にもない。

北村 講演旅行なんかにいらした時の御感想は？ 講演と筆とは兩立しないでせうか。

菊池 講演は如何なる場合でも嫌です。

北村 百貨店と小賣店との將來？

菊池 百貨店ばかりになると思ふ。

北村 販賣の綜合的だといふ意味もあるでせうね。百貨店の繁昌する所以は？

掘池 便利なのと或る程度の信用がある。つまり小賣店などに比べて大つぴらで、定價表をつけてゐる上からも、それに資本が大きい丈に、自然良い物も集まるし――

北村 支那料理と西洋料理とどちらがお好きですか。

菊池 僕は西洋料理よりか、支那料理の方がいゝ。

北村 では今までの藝妓と職業婦人に就いて。藝妓と女給、ダンサーと女優、カフエーとダンスホール、そんなものが兩立してゐるやうですが――

菊池 まあ藝妓と女給では 女給の方が教養が高いからいゝ。

北村 ダンサーと女優は？

菊池 ダンサーは僕は知らないよ。

北村 料理屋とカフエーとは？

菊池 カフエーの方がいゝ。料理屋は認めない。宴會する場所の料理屋は嫌やだ。

北村 原稿で頭の痛くなつた時なんか、どういふ風に氣分を轉換なさいますか。

菊池 やつぱり社へ來て人と話をする。

北村 將棋をおやりになるやうですが、勝負は心にお留めになりますか。

菊池 それは勝負を重くみる。勝てば氣晴らしになる。

北村 それで愉快になりますか。散歩なんかはお獨りですか。

菊池 散歩なんかした事がない。

北村 今までの作品のうちで、どれが一番お得意ですか、眞珠夫人なんか？

菊池 氣に入つたものもないですが、殆んど得意のものはない。

北村 小說をお書きになる時、女を不可解なものとしてお扱ひになりますか。明らかなものとしてお扱ひになりますか。

菊池 僕は女なんか不可解と思つた事がないではすつかり解かり切つて――

北村 わかり切つて居る。

菊池 娘の氣分とか、女房の氣分とかは？

北村 わかつたものとして書いてゐる。

菊池 文部省の文功賞についてどうお思ひになりますか

北村 與れるのもいゝが、文部省などの人達に文藝家の價値なんかわかりつこない。

菊池 では授けられるとすればどんな人に。

北村 自分の考へでは、文壇で文藝的に思想的に働いた人にやるのが當然だと思ふ。田山花袋氏、武者小路氏など――。

菊池 文功賞を授けられて喜びさうな人は？



菊池　喜びさうな人は文壇にはないでせう。

北村　さうですか。では皆漱石氏が博士號を辭したやうに、突き返すのですか。

菊池　博士號よりもつとつまらないからなあ、北村さん布哇行きは面白かつたですか。

北村　えゝ、でも日本の人達はみんな言葉が出來ないので。

菊池　それは言葉の出來ない人をやつては意味はないですね。

北村　皆さん、今度からあんな人を送るについてはも少し何とか選擇して欲しいと、布哇の邦人達も云つてゐました。

菊池　言葉が出來て、容貌もいゝ、體格も立派な人をやるのでなくては、日本婦人として恥かしい事ですよ。

北村　外國の婦人達はみんな社交のやうな氣分で來たやうでしたのに。

菊池　さうでせう。さうでせう。あんな連中なんか堅苦しくてね。

北村　洋行に就てはお考へになりませんか。

菊池　洋行ですか。行き度いとは思はない。行くなら三月位ですね。僕なんか風さいが上らないし、洋服は似合はないし、行つてひけ目を感じるのは嫌ですからね。

北村　東京の女と、關西の女とどういふ點がちがふとお思ひになりますか。

菊池　僕は關西の人は餘り知らない。大阪の人は悧口すぎると思ふ。

北村　東京の方は立體的でせう。そんな事はありませんか。ヴォヴォト……。あの婦人に選擧權が得られたら？　今騷いでゐるより、他の方面から出やしないでせうか。

菊池　そんな事考へたことがないな。

北村　やはり婦人には、婦人が投票しないでせうね。

菊池　さうかも知れない。

北村　では有識階級のゐるところで立候補しなくては。

菊池　あゝ、

北村　一體日本婦人に政治的の頭なんて有るでせうか。

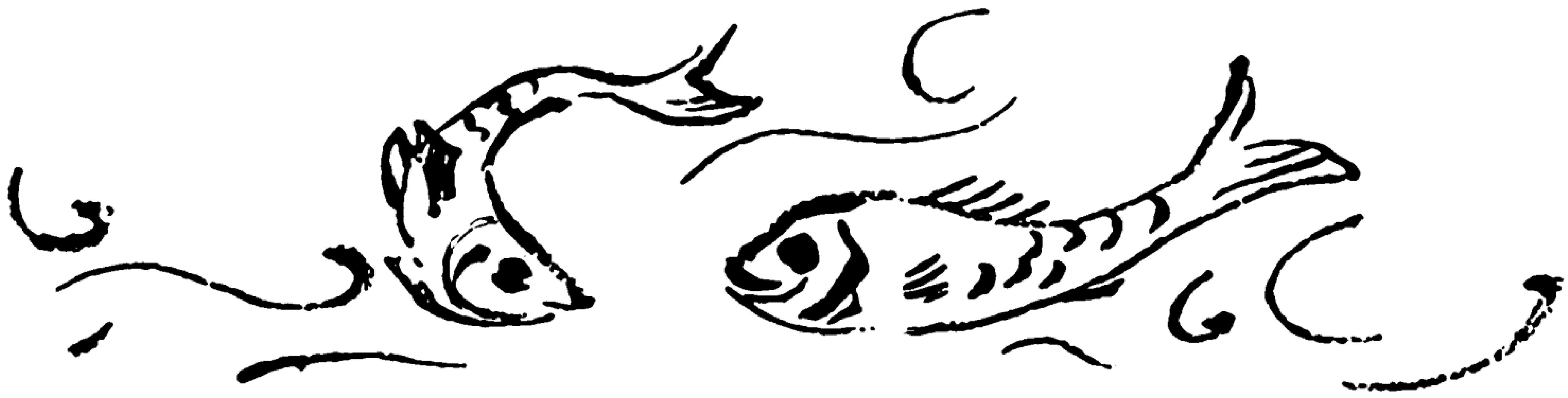
菊地　どうだか知らないな——。女人藝術は紙が良すぎるですね。

甲斐より——望月百合子

急に思ひ立つてこんな山の中にはるばるやつてまゐりました。ひどく遠くに來たやうで淋しうございます。けれど紅葉の美しいこと滴るやうな紅・黃・茶・濃綠・それが山と高原と、湖の上にめざめるやうな綾錦を織り出して居ります。自然は何と惜しげもなくこんなにも美しい裝ひをするのでございませう！人間のやることの小さゝに羞らひとかなしみとを覺えます。みなさんによろしく。すぐ歸ります。

布哇だより——加藤たづ子

其後お變りもなくおいそしみの御事と存じ上げます。日本ではこのごろの夜などは早、火桶も好ましうおもはれる頃で御座いませうのを、此地はいやに蒸し暑く、昨日なぞは正午の溫度八十二度を數へられました。海に近い宅からは毎日蒼々と晴れた海が見渡されます。秋立つ風も知らず、木の葉の色づく眺めもなく、落葉の佗しさも感じられないのが、何となく物足りなく存じます。今宵は珍らしくも雨の音が聞かれます。



大西洋船中

小金井素子

巨船(おほふね)もいゆきなやむ大洋の二日の風にさからふかもめ

北のうみの氷につゞく浪のうねり黑ずみふかき謎をひめたり

默々としてがらす戸を拭く老水夫とほきキャバンのナガサキを語る。

父はと問へばまみをあげて「死んだの(ゲトオト)」と答へしエルナにわがためらひぬ。

エーニーと呼ぶすみ子の聲す日ねもすを暗くかたむく甲板をはしり。

生きものの世界はるかに遠し船室のまひるをひとり歩みてくらす。

陰になりし甲板長椅子にボオドレエヌよむバロネスを今朝は親しく見たり。

陸とほく浮び來しかな暗き空の水平線に大浪うねる。

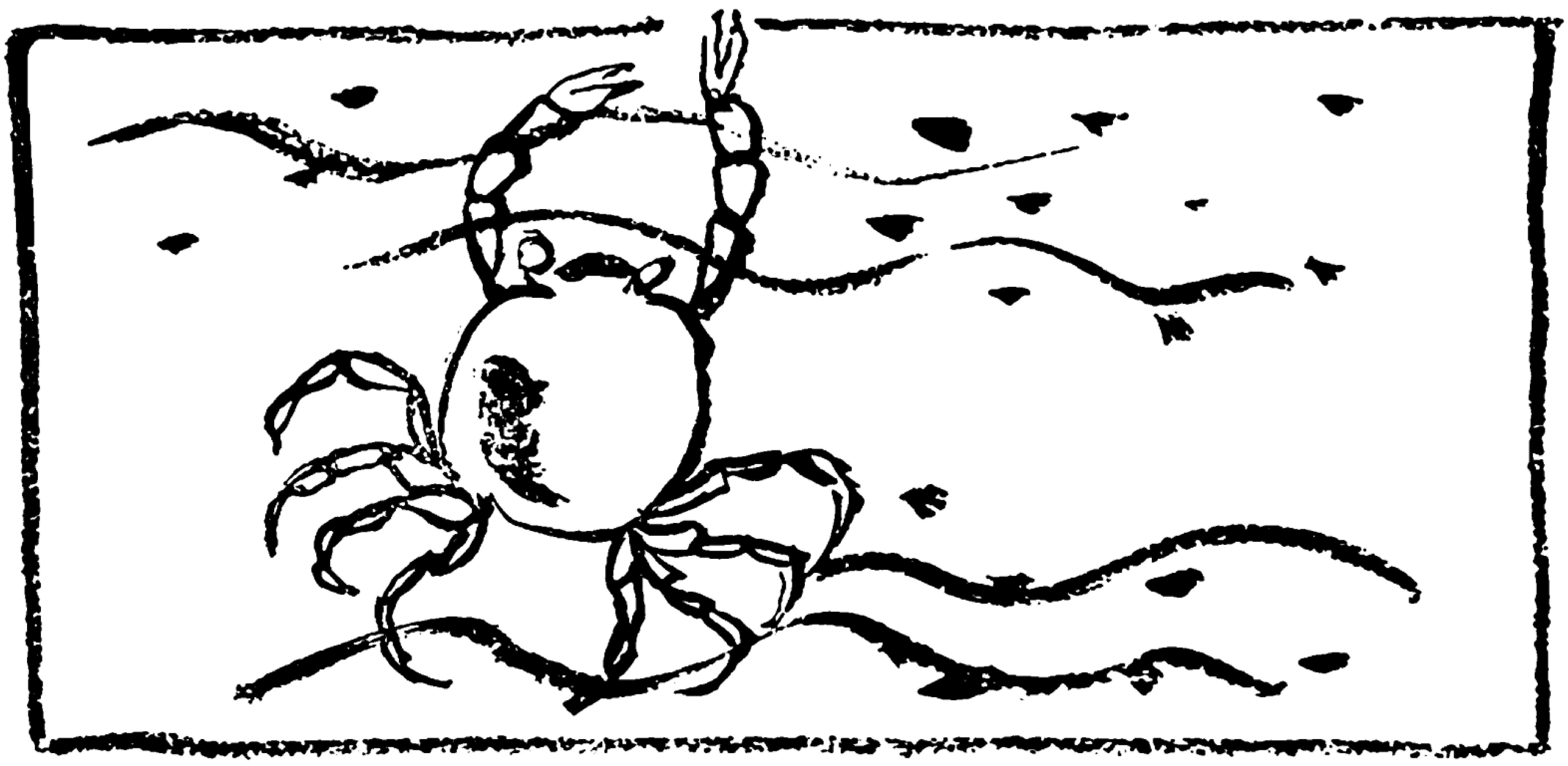
父のなき子エルナが叔母をたよりゆくその街は白くさぎりに浮ぶ（紐育）

シカゴへ嫁ぎゆくとふひと想はし氣に荷もつのわきにたゞずみ居たり。

海によせて

川路せい子

海よ、あなたは大きな望みの主
私は少さいなげきの踊り子
かゝはりのない一人と一人
それでも私は夢見るのです
朝の戸をあけながら私が
はづかしくなげるお早うの笑ひに
あなたの顔もバラ色に染つて居たと
夕方の散歩から私が門を閉る時
悲しくながめるさよならに
あなたも蒼ざめてつぶやいたと
もしもそれが　眞實なら
あなたは私の大きな戀人
そして私は
あなたの少さい者　あなたのいとしい者
けれどあなたは
晝も夜も望みのために
たへず砂地を打つて居る者
私が少さいなげきのために



なやみの踊りををどる時でも
あなたはその手で抱ぅとはしない
私が務めてはしやぐ時でも
けれど海よ
大きな陰望の主よ、あなたよ
私がどこからでも、ふと振り向いた時
あなたはぢつと私の目に見入る
おゝその目よ、心の底からふるへて了ふ
おそろしい目よ
なぜ？
だから私は夢見るのです
朝の戸をあけながら私が
はづかしくなげるお早うの笑ひに
あなたの顔もバラ色に染つて居たと
夕方の散歩から私が門を閉る時
さびしくながめるさよならに
あなたも蒼ざめてうなづいたと
あゝ、もしもそれが……。

今年の收穫

婦人界の活動とその短評

―附關東婦人同盟の解體について―

永島暢子

臺閣しがみつきの醜態を事毎に演ずる田中反動政府と、民政黨の内閣のつとり策の角力は、民衆の抗すべからざる聲に押されて、五十四議會の解散されたを皮切りに、我婦人界にも、種々活動が活潑になされた。そのうちでも國會選擧、府縣會選擧を通じての活動汎太平洋婦人會議を中心として起つた波紋、二業地許可問題、東京市會議員の疑獄のうねりに乘つて華々しき活動を見せたなど、婦人界も相當に、多事であつた事が肯かれる。而してかうした運動を通じて私達の前にはつきりと姿を表はして來たのは、變形的に發達した我國資本主義の溫床に成長した婦人運動の、既に一つの成果を結ぶべくして結び得なかつた自由主義的傾向が、漸次濃厚の度を加へて來た事であり、政治的關心がより擴大され、且そこに二つの潮流を示した事であつた。即ち二つの潮流とは、婦選獲得同盟、婦人參政同盟等の如き、普選より婦選へのモットーを眞向に振りかざし、あらゆる場面を婦選獲得に利用せんとする、所謂婦選第一主義の流れと關東婦人同盟、全國婦人同盟の如き、婦選それ自體より、階級鬪爭への一手段としての婦選獲得の要望の下に、總選擧をも契機として活躍した流れとであつた。名は普選、だが事實は多くの制限を附した僞瞞的普選であつても、とにかくこれまで政治に對して發言權を持たず、ブルジョアー代表によつて、勝手氣儘に料理されてゐた九百萬の無產大衆が新らしき權利行使に直面してその一票を正當に行使するか、瞞着されたまゝに行使するかの試驗臺に上つたやうに、我婦選運動も如何なるコースを取つて進むのが眞實であるかに逢着

し、各婦人團體の行動は、曾てなき注目を得たと共に、喧々の論爭が行はれたのも、特筆すべき事であつた。

選擧戰に直面しての各婦人會の態度

婦選獲得同盟は總選擧に際して、「婦人が政治的圏外に殘されたまゝ普選は行はれると雖も、あらゆる方法に從ひ、婦選議員の多數選出さる樣盡力し、飽迄、婦選の實現を速かならしむる事を聲名し、婦選を政綱に掲ぐる候補者に對しては、その政黨政派に拘らず、應援する事を決議し、實行した。元來婦選獲得同盟は、その思想の如何を問はず、常識にでも婦選を要求する人達によつて結成された團體であるので、正確なる指導精神を確立し、それによつて行動を決定する事は、この團體の破滅への道であると言はれてゐるのであれば、これ以上の決議はむづかしい事であらう。故に婦選獲得同盟はこの決議に從ひ、今日は政友、明日は民政、明後日は無産黨といふ樣に、源平藤橘の活躍振りを示し、その應援辯士の演說回數を誇つてゐる。一幹部は欣然として語つてゐる「私達は無産黨の運動者諸君の如く、臨監の束縛もうけなければ、また中止解散の浮き目も見ない。それだけ自分の言はうとする所を聽衆に傳へる事が出來る。」と恰も言語の數と大衆へのアッピールとが正比例でもするかの樣に考へてゐる所に、その運動に滿足が持てるのであらうが、これ等幹部に支配される該同盟の運動方法は、何に於てもその傾向に捕はれる樣である。斯の如き聲明書は、婦人評論家達の反駁を買ひ、嘲笑を買つた。或人はその態度の進展性なきを難じ、或人はその娼婦的態度を批評した、かゝる批難が反映してかあらずか、府縣會選擧には次の如き聲明書を發表してゐる。

「來る六月十日を以て行はるべき府縣會議員選擧に際し、本同盟は全力をあげて政治教育運動をもつて當り、直接の應援方法は今回は之を用ひない……府縣政が市町村政と同樣婦人の實生活と密接なる關係を有するは論を俟たず……故に今次の選擧に對しては、一意第三者たる婦人の立場より、客觀的に之を批判し、婦人大衆の輿論を喚起し、以て偏に選擧の公正を期する」事を表示した。該同盟の言に聞くまでもなく、策は時に應じてえられるべきである。然し若し政治は民衆生活の基本を限定するものとの見解に立つならば、國會選擧に對してあらゆる力を動員した樣に、府縣會議選擧に對しても同樣の熱と力とを持たねばならない筈である。府縣會は國會の如く、直ちに法の改廢に携はりはしない、けれども日常生活にはより密接な關係を持つて來る。

然るに該同盟のこの冷淡なる態度は、婦選を生活のための一手段として見ず、女權的要求より要求する同團體の態度としては、また妥當であるかもしれない。この言はそのまゝ東京聯合婦人會の選擧に對する活動にもあてはめる事が出來る。殊に東京聯合婦人會は婦選獲得同盟、各學校同窓會、美容師の修養團體等、目的行動が全然反對なる團體の集りであれば、尙更すべての運動は漠として居り、表面的で一時的であるそしりを免れない。選擧運動に限らず、二業地設置反對運動、市政淨化運動、何にても誠にお座なり的な、大根おろしを水に晒しすぎた樣なもので、ブルヂョア新聞社が大々的に支持するに拘らず效果は甚だ上らない。これに反して關東婦人同盟（該同盟は府縣會議選擧の折には既に解體したが、新黨準備會に個人的に參加し應援した）全國婦人同盟社民婦人同盟の態度は、或部分は、偏狹なるものとしての評を受けたが、各自判然たる方針の下

に活動した。關東婦人同盟は總選擧に際して「我婦人同盟はこの時に際してはつきりと婦人の前に專制支配の正體を暴露するために戰ひ、且從來鬪つて來たあらゆる鬪爭を積極的に進め、我同盟の綱領要求を婦人大衆の要求と結合させ、殊に婦人參政權の獲得鬪爭を中心鬪爭として展開して、婦人大衆をして專制支配に對立せしめねばならぬ」と聲名し、更に鬪爭をより强力ならしむる爲に、この總選擧を通じて婦人解放の戰線を統一するため、各婦人團體との共同鬪爭を戰はねばならぬ」と決議し、婦人の政治的自由を要求すると共に、無料診療所の設置、勞働婦人保護法、最低賃銀法等の要求をとりあげて無產政黨應援に努力した。これは關東婦人同盟に限らず、他無產婦人團體も大同小異の方針の下に活躍したのであつて、たゞ社民婦人同盟は、戰鬪的に階級鬪爭をさけ、何程かのフエミニズムを加味してゐる事が異つてる事を付け加へておく。

汎太平洋婦人會議の反響

汎太平洋婦人會議を中心として卷き起つた婦人會の嵐は、櫻花の散り際の如く華々しくそして他愛のないものであつた。元來汎太平洋會議なるものが、米國を先頭として太平洋沿岸の國々の代表が集り、永久的平和を議せんとする會合と言はれてゐるが、その實はブルヂヨア人の社交團體にすぎず、それが今年八月九日より十九日まで婦人會議を開催するについて、日本にも出席を慫慂されたのであつた。最初婦人會議に於ては、山川菊榮氏、市川房枝氏等十數名に招待狀を出したのであつたが、我國に於ける日本汎太平洋協會員より成る出席代表詮考委員、井上秀子、塚本はま子氏等によつて、代表が專斷に取り扱はれたので、金子茂、市川房枝氏等が、もつと廣汎なる委員會を組織し、出席代表を選定せよと抗議したのが以外の反響を起し、全國小學校女敎員聯合會の木內きやう子、平田のぶ氏等が、敎育を徒に壟斷せんとする所謂知名敎育者を否認し、敎育者としての立場より、小學校女敎員參加を聲名して井上氏等にくつてかゝつた。かゝる經緯から汎太平洋婦人會議問題が多少の興味をひいてる矢先き、讀賣新聞社が、職業婦人、婦人勞働問題の代表者を一般投票に訴へて選定する事を申し出で、氣勢を煽つたのでいやが上にも問題が大袈裟になり、お太鼓を叩いた市川氏等が驚く程に注視されるやうになり、東京聯合婦人會が、送別講演會を催した時には千百名の聽衆が詰めかけたなど、レコード破りの事さへ生じるに至つた。この眞只中に於て、全國婦人同盟、雜誌勞農の婦人版が、この會議を否認したがその否認に對して、婦女新聞子は「生活問題に直接關係がなければ無產團體は、すべてを無用とするらしいが、今回の婦人會議に取り扱はれる、政治、產業、保健、敎育、社會事業の五部門は、どれ一つとして間接に生活問題に關係を持たぬものはない——人間は衣食住の問題の解決のみで幸福を得られるものではない。保健と敎育の問題の如きは全然衣食問題と切り離しても、尙人生の理想を實現する手段として、重要なる我々の問題でなければならぬ」としてこの會議を謳歌し、否認した無產婦人團體に一矢を報いた。保健も敎育も人間生活より浮游してゐるが如くに考へてゐるらしいこの論をまづ默殺するとして、私達はこゝに取り扱はれるすべての問題が、一般民衆に直接關係あるものである故に、この會議に於て、ブルヂヨア婦人の單に研究調査を誇る所の、遊戯的會合なるがために、これを强く否認した團體の態度に贊成する。最もこの會議を意義づくべく骨折つた市川氏はなんと言つてるか。「最初婦

人會議が問題になつた時、お太鼓を叩いた所以は、決して婦人會議を有意義と認めた爲ではなく、敵は本能寺、國民をして殊に婦人をして國際的に眼をむけしむるがため」と稱し、その例に國際勞働會議の例を持ち出してゐる。市川氏等のこの無責任なる意圖の下になされた婦人會議の前景氣は、それこそ瓢簞から駒が出た感があるがその結果は　私達に何を見せたであらうか。豫定の如く所謂大所高所よりの研究調査を發表したのと、井上秀子氏と大江すみ子氏の名譽爭ひ、市川房枝氏と井出菊江氏との婦選要求の見解の相違、高等教育學校對小學校女教員諸君この對立の他、支那代表の詰めよせた日本の對支那の態度の批難に對して、研究と認識不足から、ぐうの音が出なかつたばかりでなく、時節柄支那問題が注目されるだらうとの豫想から、外務省のなした御馳走政略な何の號口令が效を奏してガントレット恒子氏が、手狎れた外交的手腕？　を以てのれんに腕押となさしめた手柄話等々をしか聞く事が出來なかつた。

二業地設置許可と市會疑獄

時と金とに惠まれたるブルヂヨア乃至はプチ、ブルヂヨア婦人の所謂社會に貢献せんがために、或は自己の社會的地盤を築かんが爲に活動しつゝある婦人方にとつては、事件のない事に致命的退屈であらねばならない。それ故にか、金と權力との前には目がなく、瓦斯でも砂利でも板舟でも、婦人の貞操までも食はふとするブルヂヨア共は、いゝ工合で問題を提供してくれる。宮田警視總監が、だしぬけに許可した池袋町、荏原小山、中野、立川に二業地設置、王子千住の三業地の擴張に對する問題は、漸く公娼問題の眞面目に考へられつゝある折柄であり、餘りに政黨的利害關係を露骨に表はした態度であるので、從來になき熾烈な叫びを聞くに至つた。日勞黨、社民黨が各の婦人團體を應援者として演說會その他によりて反對の氣勢をあげ、キリスト敎婦人矯風會は例によりて活動し、遂に地元婦人をして、二業地反對を標語とする婦人會を結成せしむるに至つた。更に婦人矯風會の提唱により、地元婦人會、廢娼聯盟、東京聯合婦人會、普通獲得同盟が聯盟して二業地設置反對同盟會を作り、これの取消の運動をすると共に、地元の名に於て、宮田警視總監を相手どり、二業地設置反對の行政訴訟を起すまでに議が進められてゐる。この事は許可になる以前、西久保前市長追出し策にからんで問題になつてゐた事であり、また東京聯合婦人會の如きは、曾て若槻內閣瓦解の際、太田警視總監が置土產として、府下七ケ所に、二業指定地を許可したので、今後かゝる事なき樣河口愛子氏をお目付役として警視廳監視に當らせながら、この寢耳に水を聞き事新らしく狼狽するとはその日頃の活動の熱心さこそ思ひやられる。けれど地元婦人が、兒童敎育上風敎上の問題からにして、蹶起し且行政訴訟を起すまでに至つた事は、大いなる進步と言はねばならぬ。その一層の活動を希望すると共に、指導的立場にある婦人會が、婦人矯風會であり、東京聯合婦人會及それと同じ樣の團體であるが故に、今後の活動に或危惧を持つ。これに對して全國婦人同盟、社民婦人同盟等の單に黨の應援者としてのみ演壇に上り聲を枯らしただけに止まつたのは、その原因は何にあるにしろ、決して階級的に鬪爭團體として取るべき態度でなかつたといふ事が出來やう。

かうして既に問題として、市民の前に投げ出されながら、それに火がつくまで拱手してゐたものに今回市會議員の約半數を獄に投ぜしめた板舟權、平田舟權の疑獄がある。この板舟權平田舟權は、日

本橋魚市場の權利であつて、魚市場が大震災の爲に築地に移つたりで、自然的に消滅する權利を市會に於て賠償せよといふ奇怪なる要求である。彼等少數者の理由なき要求に、大衆の膏血たる七十萬圓を約束せんとした市議連の醜事實は、西久保市長以前から、火を吐かんばかりに切迫してゐた。雜誌「政治批判」は本年一月號にそれ等の暴露をしてゐるが、この時に氣がつかずとも、三月三十日僅か三票の差を以つてこの案の市會を通過した時に、充分問題にして反對運動を起さねばならなかつた筈だ。しかし市民からはさほどの反對の聲も聞かず、司直の手が入るまで、誰もが氣にも止めずにゐたのだ。とにかく婦人界に於て、この問題に對して最も活躍したのは婦人市政研究會であり、東京聯合婦人會であつた。その活躍した婦人界の實際行動と云へば、單に市會議員辭職勸告、市會解散の決義を發表し、且市會淨化のために婦人公民權を要求したに止まつてゐる。殊に敎育運動の好きな婦選獲得同盟は、この好箇の敎育資材を提供した市會の行爲を取り上げる事もなく、婦選獲得共同委員會に於て折角大衆への呼びかけとして、市政淨化の演說會開催の相談がなされ乍ら、實現するに至らなかつた。やはり此問題に對しても無產婦人團體の果敢なる活動を見る事が出來なかつた。相變らず黨のお手傳ひ式に、二三演壇より叫びをあげたにすぎない。

その他の活動への一瞥

以上は今春以來相次いで起つた大問題を中心としての婦人界の活動のしかも政治的方面の展望である。その他の活動としては、愛國婦人會の大典記念事業としての全國的の兒童健康相談所、農村托兒所、姙產婦巡回診療班計劃、婦人市政研究會の女中の待遇に關する調査、婦人矯風會の婦人雜誌淨化運動、婦人平和協會の對支問題決議等があり、數へあぐればまだ〳〵等々ある。然しこれ等はいづれも反動的役割を勤むるものでしかない事は事實が證明してゐる。女中の待遇調査は、畢竟するに、市や雇主と協力して所謂模範女中を表彰するにあるといふし、婦人雜誌淨化運動は、矯風會の決議と共に、守屋東、ガンドレツト恒子、市川房枝氏等が陳情書を作製し七月十九日望月内相、横山警保局長に提出したといはれるが、この陳情書は、雜誌淨化のヴエールをかぶつて、無產解放運動の指導的雜誌により壓迫に振りかゝるものと見られてゐる。婦人平和協會の對支問題決議は、一、婦人平和協會は、支那の動亂に對し、列國が速に平和的手段により、これが解決を來さんが爲に、最善の努力を盡さん事を切望す。一、日本兩國間に戰爭的慘禍の起れる事を遺憾とし、速に平和的手段をとらん事を切望す」とあつて、「婦選」の如きはこれだけでも婦人が對支問題に目醒めた事を讃してゐるが、これは譬へれば、高利貸の細君が、夫の積極的の儲けを祈りながら、貧乏人をいぢめない樣にと、そつと神に祈つてる樣なものではあるまいか。日支問題は單に人道的の問題にあらず、我國帝國主義的侵略の然らしむる事であるのは誰でも知つてる所である。平和的手段とは誠に以て抽象的觀念以外の何物でもなく、從つてこの決議は、宗敎的に人道的に眠りつゝある所の、小ブルヂョア層の婦人をます〳〵眠り込ませるに役立つだけで、眞實に我國帝國主義の支那侵略を憤るものにとつては、屁の價値すらないものと言へる。我國の支那への出兵は、資本家の投資を保護するための手段でしかないのだ。

最近著しく無產階級に大きな抗勢力を持つて來たものは、前に言つた帝國婦人會の三事業である。帝國婦人會は農繁期に、猫の子に

もほしい忙がしさを利用し、地主の細君娘等の、細君處女會員等を動員し、小作人の小兒を托かり、溫情的きづなを以て小作爭議を未然に防ぐ方法に出るといふのである。これは尚更小農をして階級的觀念を眠らし、その生活を泥沼に陷でるものである故に、無產團體、特に婦人團體は斷乎として戰はねばならぬ。愛國婦人會と共に、いよ／＼强力の形成を見せて來たのに處女會女子青年團がある。無產婦人團體の、農村に於ける階級的鬪爭の活躍著しく、農村婦人の漸次覺醒の機運あるに狼狽した政府當局は、無產婦人團體の活動を壓迫し且、女子青年團のより强力化に力を注ぎ、反動勢力として對抗せしめ、農村より無產運動放逐の意ありといふ事を國民新聞は傳へてゐるが、この事實は新聞的報道ばかりでなく首肯して差し支へないと思ふ。

抹消神經が過敏にすぎて、打てば響いて動く我婦人界は、會自身の利害に對しても亦敏感でありすぎる。常に女性の尊貴をといて止まぬ名婦人團體は、かの男子にばかりに都合よき、花柳病傳播の罪を女性にばかり塗りつける花柳病豫防法案については、どの婦人團體も立つ氣配すらなかつた。公娼廢止を叫ぶ氣勢はあつても、廢止の前に彼女達が苛酷の成敗を受け、しかも公娼制度の餘波を蒙つて淫賣せざる人達までが檢梅を受けるといふ、人權蹂躙的な當局の仕打に對して何等の運動も起されないのだ。もしこれが新聞紙でもお太鼓叩いたら乘り出しもしたらうが、太鼓叩いた利益の見當がつかない限り動かぬ新聞紙が、同法案を報道したに止まり、そのまゝに颱風は一過した。かくて同法案は實施され「うつすなうつされるな氣をつけませう。子のため身のため國のため」といふ樣な變ちきりんなポスターを麗々しく街並にさらけ出されるに至つたのである。

政友會の婦選案

政友會内閣にしろ民政黨内閣にしろ、その支配的地位を强固ならしむる爲には、一般民衆の生活、思想の進展を壓迫して來ない政府はなかつた。しかし現在の田中内閣は、いつの時にも增して最も狂暴に民衆を壓迫するに絕大の力を用ひてゐると言はれる。その田中内閣が、その背後の政友會が、最近婦人に色目をつかひ初めた。婦選を問題にし初めたのである。政友會が普選を問題にしたのは今が初めてゞはない。年は忘れたが、普選が憲政會によりて機先を制された頃、婦選を持ち出し、しかも女世帶主を目安としたのだが、我國の女世帶主は、概ね水商賣の婦人に多いので、いよ／＼待合政治を盛大にするだらうなどゝ嘲笑を買ひ、そのまゝ流產に終つた事がある。今回とても一種の人氣取り策に過ぎなく、しかも婦選が、支配階級が最も心配したるが如く、思想的にも行爲上にも特別に變化を與へず、かへつてその性の保守的なるため進步黨より保守黨に組する事が、先進國によりて證明されたので、どうせ普選の改正をするなら、まづ誰も言はぬうちに婦選を問題にし、既に行き詰れる勢力を盛り返し、婦人層を味方づけんとの意圖が充分瞭に見える。初めこの事が新聞紙上に發表された時、流石婦選第一主義の婦選獲得同盟も問題にせず、折柄開かれた婦選獲得共同委員會でも議題にもせぬ狀態であつた。然るに間もなく全國婦人同盟は、政友會の意圖を暴露し、その僞瞞的に行はれる婦選を否認し、婦選實施を我等のものとして獲得すべきを聲名した、これに反し婦選獲得同盟の態度は、だん／＼政友會婦選案迎合に傾き、その動機目的の如何に拘らず、婦選その事を掲げた事に政友會の進步を認め、單なる聲明とし

て終らず、今議會には、何等かの形に於て政府黨として提出せしむる樣その運動に馬力をかけるに至つた。目的のためには手段をえらばざる婦選獲得同盟のその英雄的態度は壯とすべきも、熱中のあまり婦選の自家中毒に陷りつゝある事がわかる。權利は完全なる行使により價値を發揮する。現在の如く資本の抗勢著しきと共に、無產階級彈壓の網はます〳〵强烈にしかれ、女子靑年團、愛國婦人會その他のブルヂョア婦人團體の反動的役割をつとむる大勢力が、全國を覆ひ、無產階級が眠りに追ひやられんとしてゐる時、無批判な婦選はかへつて、婦人の手にて婦人を殺す樣なものではあるまいか一つのエピソードとしてこゝに付け加へるならば、常に婦選を口にしてゐる山田わか子氏、我國の婦人評論家であり新人であると言はれる同女史は、解放運動犧牲者救護會の寄附を申込まれた時、かう答へたきりである。「社會主義の運動をする人達は、自分が好きでするので、刑務所にぶち込まれたつて自業自得ですよ、それを外部から援助する事は彼等を增長させる事になるからお斷り」勿論女史のかゝる言動は、こればかりでなく、雜誌などによつても知る事であり、殊にはかの大正九年の東京市に於ける電車從業員のストライキの折、軍隊を出動せしめて罷業を鎭壓せよと叱呼した事は有名な話であるが、ことほど左樣に參政權の眞義を知らず、婦選にしても單に男女平等の立場から、或は抽象的な母性愛の立場から要求する女史が先覺者としての地位にゐるのである。婦選獲得同盟にはかうした傾向の人達が多く、幾分進步的な人達と雖も會の利害關係から、妥協して步調を合はせ樣とする悧巧者が亦多いので、該同盟の行動にはいつでも疑惑が伴ふ。前に述べた如く、同盟の構成の關係上、餘儀ない事であるかもしれないが、婦人の政治團體としては有力なものであり、大衆の支持も相當あるので、婦人參政同盟その他婦人政治團體に對する如く、默殺し難きものあるを感じる。

婦選獲得共同委員會について

婦選獲得共同委員會は、婦選獲得の目標を以て共同的に活動する趣旨にて、婦選獲得同盟の提唱にて、日本婦人參政協會、婦人參政同盟、全國婦人同盟、社民婦人同盟、關東婦人同盟（幾何もなく解體により脫退）等によりて三月初旬成された會である、けれど事每に意見の相違があり、且五十五臨時議會に提出すべき婦選法律案の提出について、ブルジョア婦人團體と無產婦人團體とに對立を來しその破裂を危ぶまれた事を新聞紙に傳へてゐるが、その後何等の變化もなく今日に及んでゐる。この委員會に對して無產婦人團體の參加の大いなる目的は、他婦人團體と協力する事によりて戰線を擴大し、指導權を握ると共に大衆をも獲得せんとの意圖にあつたらしかつたが、何せその道にかけては老練なる幹部諸君にあつては、勇敢なりと雖も若き鬪士諸君に齒がたゝず、いゝ加減ブルジョア婦人團體側の委員の心のまゝに引きずられがちの恨みがある。曾て野田爭議應援を全國婦人同盟が持ち出した時にも、對臨時議會運動が一段落を告げ、今後の運動の範圍を協議の際日常鬪爭をも共同にてせん事を圖つた時にも一蹴された事があり、今度、大典記念事業として日勞黨の提唱に基く社會施設要求の案を持ち出したのも一笑にふされたのみと聞く。この場合には社民婦人同盟は枯木も山の賑はひの如くであるため、力の均衡がとれない事夥しい。そればかりでなく、かゝる婦選第一主義に則る團體と、日常鬪爭をする事によりて婦選をかち得やうとする團體の共同は、幹部同志の意見の交換以外必要

なものだらうか。常に聲大にして實蹟あがらず、政友會の婦選案に對しても、共同の聲明書さへ出し得ざる程のものが、果してどれ程の意義があるか。かへつて共同する事によつて一般婦人をして歸趨に迷はしめるのみではあるまいか。今後この狀態で進むならば、自然消滅に至るであらう事は豫測される。

關東婦人同盟解體と若干の意義

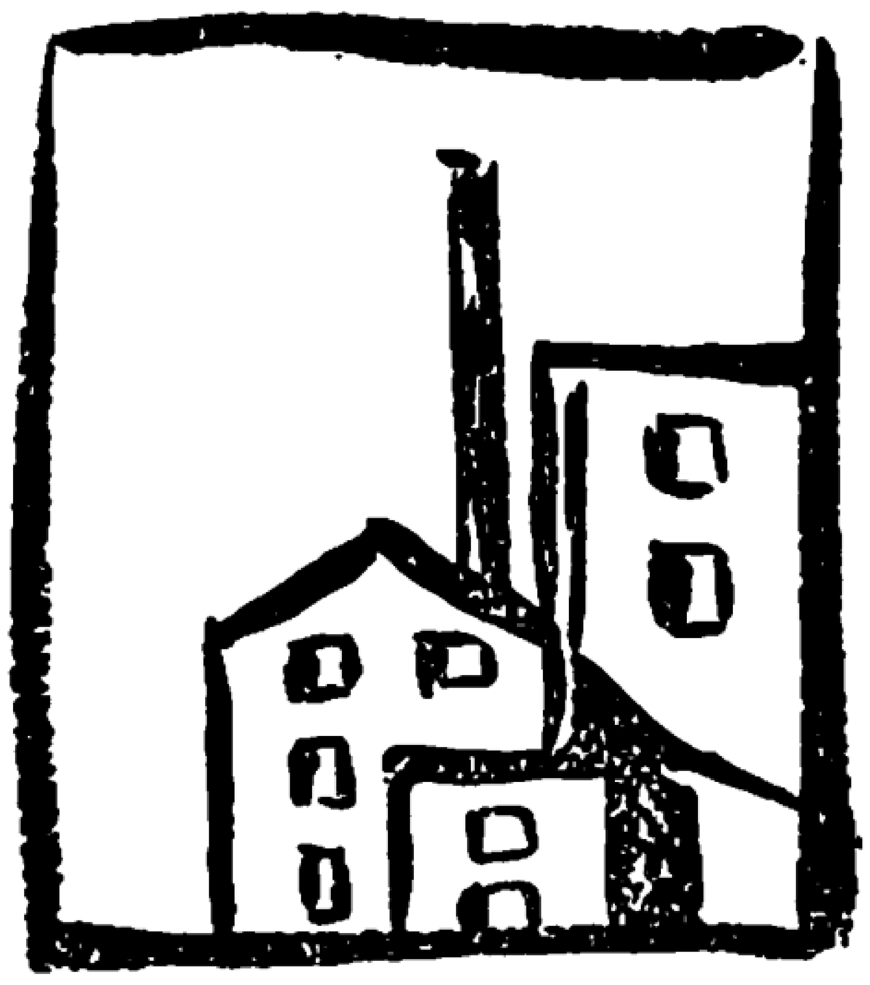
關東婦人同盟の解體は、婦人界の活動としては、直接關係のある事ではないが、婦人界の一角に姿を表はし、左翼として果敢な鬪爭をつゞけて來た同盟の突然の解體は、比較的内狀を知ると思はれる雜誌勞農婦人版にさへ判然しない節もあり、旁々これに關心を持たれる方々の納得の行く樣、曾ては同盟員であつた私の、一個人としての意見を些かこの折に述べたいと思ふ。

關東婦人同盟は何故に解體したか、それを一言にして言へば、より階級的に、より大衆的に、より本質的に支配階級に對する戰陣をしかんがため、と答へる他はない。勞農婦人版では、恰も同盟の解體は、少數幹部の意向によつて、決せられたかの如く思惟し、同盟の大衆に向つてアヂテートしてゐるが、それは左翼中間派がいつでも誤謬を犯すやうに、その同轍を踏んだに過ぎない。若し眞實に階級鬪爭を戰ふならば、無產階級運動は、決してブルヂョア運動者流の如く、少數幹部だけが動くのではなく、大衆の活潑なる動員によつて初めて本部員が、より果敢に鬪爭する事が出來るであらう事を知らねばならない。婦人の問題は、婦人同盟へとの標語は、この特殊的立ち場にある我國婦人の現狀にあつては、一應最もではあるが婦人版のいふが如く、勞働組合にも農民組合にも屬せぬ層、卽ちブルヂョア層に浸透するその事より、勞働者農村婦人の要求を取りあげ、それを政治的要求にまで高揚せしめ、大衆的の鬪爭を活潑ならしむる事を希求する者にとつては、單に婦人に結社權のない理由を以て、婦人同盟としての獨立の存在を望まなかつたのである。かうした大衆のうちより起つた聲は、本部にも響き、勞農黨の問題ともなり、やがて婦人同盟解體の勸告として表はれ、今一應勞働婦人は勞働組合へ、農村婦人は農民組合へ、家庭婦人は借家人同盟へ職業婦人は俸給生活者組合へと立ち歸り、まづ大衆の意識水準の高揚に努むると共に、黨婦人部に統一されて婦人の強き要求に持ち上げられる樣決せられたのであつた。その幹部の一存のみで解體しない一例は、東京市支部に於ては、それ〳〵同盟員の配置を行ひ、配置濟みの支部より解體を初め、全國の準備が終るを待つて本部が解體の聲名書を出す事になつてゐたので、婦人版をして、關東婦人同盟は解體してまで共同委員會に殘骸を止めてゐた、それは大衆を欺くものであるとの批難の口實を與へしめた所以のものである。

現在に於ては言ふまでもなく、婦人には結社權はない。が黨の黨員ならずとも鬪爭に參加する事が出來る。婦選が若し婦選のための婦選でなく、普選の擴大としてのそれならば、それは無產政黨としての一つの鬪爭要目であらう。現在幾分にても階級的意思を持てる婦人の活動の分野は自分の支持する黨の鬪爭に參加すると共に、私達姉妹の意識水準を高め、それを或點にまで導き、支配階級の抗勢に對峙する強力なる陣營を作るにあるのだ。それは決して理想理論によりてのみかち得べきものではない。果敢なる日常鬪爭によつて戰ひとらねばならないのだ。見よ全國婦人同盟を。見よ社民婦人同盟を立派なる姿をそこに保つと雖も、一體どんな活動をしてゐるか。聲

名書の作製と黨の應援者として演壇に上る以外にどんな足跡を殘したか。三・十五事件發生の時、三團體解散の折、且かの治案維持法改惡の緊急勅令の發布の時、どんな態度に出たか。ブルヂョア婦人團體の如く風馬牛の如く過ごしたではなかつたか。例をそれにとらないとも、七ケ月の困苦と彈壓の雨に苦しみながら資本家と戰つた野田爭議にどれ程の關心を持つたか。解決の時にあまりの悲慘さに、幹部を排して死ぬまで戰ふと爭議團の叫んだ悲痛な聲に對する幹部の處置にいづれかの婦人同盟の誰かゞ批評的言辭をでもした婦人があつたらうか。獨立の存在はしても獨立の出來ぬ婦人團體、それは階級的婦人團體として私共の望まぬ所である。

しかも關東婦人同盟の解體への批評は、まだ批評以前でしかないのだ。何故なら同盟員がその後の新らしき活動に入る前に、あの魔風の如く起つた勞農黨の解散により、婦人部に參加した婦人達が表面的なる活動をすつかり封鎖されたからだ。舊關東婦人同盟員にして、夫の、黨に對しての去就に從つて動く柔順さを持たない限り、抽象的な聲名書を作製し、ビラを撒く折はなくとも、それ〲の部署に從つて、潜行運動をつゞけてゐるものと、私は信じる。やがて舊勞農黨が確立し、その專門部としての婦人部が活躍する時、各組合に根を張りたる大衆と共に嵐の如き、目覺ましき活動が展開さるるであらう。(二八・十一・一)



一年を顧みて

大木耳子

今年一年をふり返つて見ると、何と云つても二月に行はれた最初の普通選擧は、特筆大書すべき今年初頭の出來事であつたと思ふ。私共の世代に屬する者は、始めて熾んな婦人の政治的興奮を見た。

當時の一般知識婦人の政治的興奮は、恐らく明治初頭に於ける自由國民權運動以來の事ではなかつたであらうか。私共は明治初頭に當時の卓絕した婦人達が勇敢に政治運動に加はつたといふ事をよく聞く。しかしそれは自由民權の運動それ自體が第三階級を代表してゐた性質上、婦人自身の意識も當然のことゝしてフエミニズムに止まり、女も男と同等の立場を得やうとする性的水平運動の發芽であつた。資本主義としての第一歩を始めてゐた日本としては、それは實に當然であり、當時としては、婦人の運動は、それ以外ではあり得なかつたのだと思ふ。

然るに當時と今日との間には、略々半世紀の月日が暮れてゐる。そして婦人の政治的意識も、當時のそれとはその本質を全く異にし

てゐる。第三階級は第四階級にその革命の主動力としての立場を讓つてゐる。そして今や婦人は第四階級を主動力とする社會變革の道によつてのみ、眞の解放をなし遂げることが出來るのだといふことが、進歩的な婦人全體の主張となつて來た。

婦人の間のこの情勢は、總選擧に當つてよく表はれてゐた。無論當時活動した婦人達の間には、專らフエミニズムの立場から政治運動に參加してゐた人々もあつた。又極く描象的な自由主義の立場から、婦人の政治運動を否定した人もあつた。しかし大勢は前に述べた通りで、無産階級を支持することによつて婦人の解放を實現せしめやうとする人々は、凡て無産政黨を支持し、その活動も最も目ざましかつた。

尙ほこの他にも今年の婦人界の傾向として殊に目立つたことは、右翼と左翼とを問はず全體に民主主義的な理論が理論としての存在價値を無しくて、全然その姿をかくしてしまつたことであつた。

（こゝまで書いて來てゐたら、女人藝術家からハガキが屆いて原稿が輻輳するからなる可く短かく書けといふ命令があつた。それをいゝことにして秩序立つた記述を止して思ひついた二三の事項について感想をのべて責を果たすことゝする。）

今年の出來事のうちでは、本誌の創刊も婦人界にとつては一つの大きな刺戟であつた。

『青鞜』以來、婦人がかうした自由に自分達で書いたものを發表することができる大雜誌を持つたことは、始めての事であつた。

時代は『青鞜』の時代を實質的にはもう一世代も過ぎてゐる。で雜誌としても昔の自由主義的な、女性のものであつたら何んな思想を代表してゐても甲乙なしに發表するといふ時代ではないと思ふ。明確な階級性を把握し、明らかな主張を示すことの出來ないことは本誌の弱點であるが、それにしても本誌が今や空前の活動期に入らうとする時代にある婦人界の爲めに貢獻するところは、決して少々ではないと思ふ。

婦人をして充分に自己を語らしめやうとする長谷川氏の意圖は、文藝方面に主張の方面に、實に多くの新しい人々を紹介しつゝある。私共は實力あつて世に現はれない人が、必ず多數ある事を前もつて想像してゐた。しかしかうして今日多數の新人に接して見るとそれらの人々が既成知名の人々に比較して決して遜色のない力を既に有してゐて、時代はこれらの人々によつて、既にとつて代らるべきところにまでそのテンポを進めて來てゐることを知るのである。

これは新舊二樣の婦人にとつて、決して少々ならぬ興奮劑でなくてはならない。彼女達がこの刺戟によつていかにその生活を意識し展開せしめて行くか、これは最も興味ある觀物であると云はなくてはならぬ。

目下檢擧收監されてゐる日本共産黨の中には、何名かの若い婦人が加盟してゐたといふことが明らかとなつた。

共産黨の歴史を見れば、婦人が加盟して活動してゐることは、決して珍しい現象ではない。彼女達は何時でも運動の先頭になつて、主義の爲めにつくしてゐる。

これ迄も日本の社會主義運動の中には、多數の婦人があつたことは、事實である。が、どうもこれ迄は彼女達に全體に意志の力を缺き、知識的な欲求を持たず、大成しなかつた傾きがある。

これは無論運動そのものが眞摯性を缺き大衆との連絡を持たなかつたことにも原因はしてゐるが、一方彼女達が餘りに不用意で情熱を有する割合に、意力と知識とを缺いでゐた結果であつたと思ふ。

極端な彈壓は、何時の時代にも必らずその豐富な收獲を生み出すものである。彈壓は激しければ激しいだけ、その目的するところと反對の結果を生み出すものである。この一般的形式から行けば、今回の彈壓の如きも、必らず日本の社會運動の前途に、大きな進展を來たす機緣を爲すことであらう。

そして彼女達も牢獄といふ無二の鍛練の機會を得て、その心身を練り、遲蒔き乍ら、外國の彼女達の姉妹の苦心を學び、更に研きをかけられたよき闘士として私共の間に歸つて來ることであらう。

ともあれ、今年の收獲と云へば、婦人評論界に民主々義的な傾向のものを云ふ人がなくなつたこと、、婦人參政權が略々獲得されさうな山が見え出して。婦人政黨がチラホラと問題となり始めたことであつたゞらう。汎太平洋婦人會議は、豫期通り、ブルジョア婦人連の社交的集合に終り、歸來ブルジョア婦人と小學教員との反目など、その醜くい爭ひの種は盡きさうにもない。

婦人雜誌は、益々尨大にしてそして益々その墮落的本質を如實に示し始め、富み榮える資本家の肥つて淫らなるが如くに醜惡見るに堪へないものがある。

二業地、三業地は、政黨的の色彩を帶びて到る處に許可されそれに對する婦人の反抗は、組織を有せざるが故に力なく反應がない。

古きものを行かしめよ！　新しい年は前にあるではないか。無產階級にとつて、新しいものは常に希望であり生命である。過去に惜しむものは持たないものは潔ぎよい。希望をもつて新しい年を迎へやう！



プロレタリヤ文學運動の一年間

平林たい子

一

プロレタリヤ文學運動の主要な目的の一つは、勞働者や農民の生活の中から、それらの生活の藝術的表現者を產み出す事にある。振り返つて考へてみると、今年の一年間にも、かなり多數の優れたプロレタリヤ作家を我々の運動は產み出してゐる。勿論これらすべての人が勞働者や農民の生活の中から出て來た譯ではない、しかし少數の知識階級出の人達も意識的にプロレタリアートの生活の表現者

たらんと努力しつゝある人々である。従つて兩者とも、プロレタリアートの階級的成熟の程度のバロメーターだと斷言していゝ。此の一年間、新作家として最も注目すべき作品を發表した人々は、岩藤雪夫、山本勝治、山内健吉、立野信之の四氏である。立野氏の事は知らないが、殘りの三氏は純粹のプロレタリアート出の人である。そしてこの四氏は、最も優れた作品を發表してゐる。

「文藝戰線」七月號に發表された岩藤雪夫氏の「吹雪」は豐富な體驗と強い階級的情熱とで讀者を壓倒する樣な作品であつた。難を言へば最後の結びが多少拵へものになつてゐたが、それにも拘らず全體から受ける脅迫的な階級意識の強さと的確な現實認識とは獨自のものであつた。この作家も後に述べる山本勝治氏もぢつと情熱を押へて書いた場合には成功してゐるが、作者自身がどなつてゐる場合には失敗してゐる。成功の例が「吹雪」であり失敗の例が文藝戰線三月號の「暴風を貫く喚聲」である。

山本勝治氏の「十姉妹」は新しい作家の作品としては最も反響の大きかつたものであつた。農村の階級鬪爭を描いたものは、從來もかなりあつたが、その大部分が觀念的な作り物か乃至は咏嘆的な農村讃美に墮したものかであつたが、「十姉妹」は充分な具體性をもつて組織された農民の階級鬪爭を描きプロレタリヤ文學の中に溌溂とした新鮮味を吹き込んだ。同じく「文藝戰線」十一月號の「員章を打つ」も、土地問題を中心に葛籐する地主と小作人、梅鉢の紋付を着て野良仕事をする天理敎信者の百姓、封建的な家族關係の中にあがく階級意識に目ざめた青年等を描いて強い感銘を與へた作品であつた。表現が非常に常識的に墮してゐたり、構成に混亂してゐる點はあるが、その底を貫く作者の觀察の深さと、強い熱情とは、それ等の缺陷を充分に償つて餘りがあるのである。同じく「文藝戰線」七月號の「荒療治」はイデオロギー的にプロレタリヤの足場を踏み外してゐる點に於いて大きな失敗であつた。しかし純眞さと自己批判とを充分に持つてゐるこの作者は今後決してこの失敗を繰返さないであらう。尙同氏は芝浦で沖仲仕をしてゐる人である。その方面の生活から材料をとつた作品の出現を私達は期待してゐる。

山内健吉氏は「文藝戰線」四月號に「線路工夫」といふ短篇を發表して現れて來た新作家である。この素朴な表現と作品の底に沈んでゐる強い反抗意識とはそく〳〵として讀者の胸を打つた。同誌六月號の「三つの棺」は、「線路工夫」には稍劣るが、しかし、作者がプロレタリヤの前衛的部分の生活の描出を意識的に企圖した點に於いては氏の一進展といはなければならぬ。

立野信之氏は「戰旗」がうんだ只一人の優れた作家である。氏は古くからのプロレタリヤ文學者であるが長い間の苦鬪がやつと酬いられて今年から少からぬ優れた作品を發表してゐる。所謂「軍隊」ものの作者として黑島傳治と共に得難い作家である。作品に稍々自由さを缺いた感のあるのは「戰旗」の極政治主義的傾向に邪魔されてゐる結果ではないだらうか。

これらの四氏の外にも鶴田知也、橋本英吉、窪川いね子の諸氏を擧げることが出來る。鶴田知也氏のエキゾチックな筆致とうまい話術とは獨自なものだが、反面に於いて反つてそれが現實味をうすくしてゐる傾向がある。私は「子守娘が紳士を毆つた」を第一に採る。橋本英吉氏は、最も囑望されてゐた一人であつたが、作品の構成に小主觀を盛り過ぎる樣になつて失敗をつゞけてゐる。「棺と赤旗」にしても「發端」にしても、消

極的に破綻を見せまいとする努力でいつぱいで、他の新進氣鋭の人の様に形式の破綻を招くとも自由に表現しやうとする樣な熱情に缺けてゐた。體力の弱い感である。窪川いね子氏について言へば、この人の生活經驗の狹さと間接經驗を藝術化する能力の缺乏は作家としての致命傷である。しかし、女性には珍しい主智的な感は一つの取柄である。女性の作家の大部分がブルジョア文學に行く時に、たつた一人でも女性の同志を得た事は心强い。

本年のプロレタリヤ文學運動を最も賑はしたのは、ブルジョア文士のプロレタリヤ文學への轉換であつた。

細田民樹、細田源吉、片岡鐵兵、今東光等の諸氏がそれである。片岡鐵兵氏は鳴物入の一擧一動で世間を賑はせ今東光はブルジョア文壇隨一の保守思想家と見なされてゐたゞけよけい世間の目を瞠らせた。細田民樹、細田源吉の二氏は從前からかなり密接に「文藝戰線」の人達と結びつてゐたので、左程世間の問題にもならなかつたが、それでもブルジョア文壇分解作用の大きな現れとして、かなりなショックを一般讀書界に與へた。

いかに自分が純粹なマルクス主義者であり、いかに自分が誠實な階級戰士であるかといふ事を、機會ある每に鐘太鼓で宣傳して來た片岡鐵兵氏が、プロレタリヤ作家としての實踐、卽ち作品に於いてそれとは反對のものばかりを曝露して物笑ひの種となつたのは悲慘であつた。東京朝日の「生ける人形」改造の「面白くなる」戰旗の「甘茶」新潮の「年少の友」等が片岡氏の轉換後の作品であるが、一體あれは何であるか。淺薄で常識的な生活認識と必然性のない幇間的な手練手管の小技巧！何よりも先づあの弱々しい感情は決して鬪爭しつゝある階級の心理の表現ではない。片岡氏は少女小說の主人公を勞働者に替へさへすればプロレタリヤ文學が出來上ると思つて居られるらしい。

細田源吉、細田民樹の兩氏は着實に一步々々轉向の道を步いてゐる。自然主義文學でデッサンを鍛へ上げて來た兩氏は、旣にそれだけで、もう一つの武器を持つてゐる。「文藝戰線」九月號の細田民樹氏の「或る砲手の死」と片岡氏の諸作とを比較して見るならば、いづれが眞の轉向の道を步いてゐるか明白である。

曾つて或るプロレタリヤ文學批評家達は、革命前に於いては絕對に勞働階級の中からはプロレタリヤ文學は産れないと斷言したと聞いてゐる。しかしそれの誤である事は事實によつて證明された。今までの所でも優れたプロレタリヤ文學者は殆んどプロレタリアート出身だし、本年現れて來た新作家を見ても、勞働者出身の人がより多く優れた作品を發表してゐる。この事實を見ても、我々の運動の對象を一分たりとも勞農階級から外してはならないといふ事が結論される。勿論ブルジョア文學者の中からもその他のブルジョアインテリゲンチヤの中からも少數の優れたプロレタリヤ文學者が出るには違ない。我々はそれを決して拒まうとする者ではない。しかし我々の運動方針が、それ等他階級からの轉向者を迎へる事にのみ氣をとられて、いさゝかでも勞働者農民階級への働きかけの手を休める事があつたならば、それは、本來を轉倒するものといはなければならない。これは本年の我々の運動の實踐が敎へた尊い敎訓である。

前田河廣一郎黑島傳治の二氏も先年から引續き旺盛な創作力を見せて來た。前田河氏は主として本年は歷史もの、開拓に力を注いだしかし、「ムッソリニ」「默禱」「拵へられた男」など近代プロレタリアートの階級鬪爭を取材したものに、より優れた作品が多かつた。氏

はあくまで小主觀を排して材料の生命で創作する人である。黒島傳治氏は「農夫の鞭」「渦卷ける鳥の群」「氾濫」等で一作毎に階級意識の鮮明さを加へて來た。それとゝもに、從來やゝ窮屈な感を與へつゝあつた形式の固定の束縛から、徐々に離脫の跡を示してゐる。氏は前田河氏とゝもにプロレタリヤ文學內に於けるリアリズムの傾向の尖端を示してゐる。

以上の諸氏の作品の大部分が代表するこの一年間の特長的な傾向は、從來よりより以上の勞働者農民的傾向が藝術的完成の過程の進行と並行して、同一物の裏と表として發展して來てゐるといふことである。尤も、これと對立する傾向の擡頭もこの一年間の特長的な現象であつた。「相戀記」を以つて代表される、同じ傾向の諸作で自由主義左翼にまで轉落した藤森成吉氏、片岡鐵兵氏等、主として戰旗を支配してゐる傾向がそれである。しかし、これらのプロレタリヤ文學運動に附隨する寄生蟲的現象はいつまでも長く存在し得るものでないことを斷言する。

更に、同性の作家として見逃しがたいのは、野上彌生子氏、中條百合子氏等の作家的觀點の働きである。中條氏は渡露以來「モスクワの印象」及び「赤い貨車」しか書かれて居らず、以上の二作をもつてしては、此の働き方を充分に窺知し得ないが、野上氏については、改造に二回だけ書かれた「眞知子」で可なりな斷定が下し得られる。野上氏が個人的な觀點を捨てゝ、社會的な觀點に立つて事物を觀る樣になられたのは、明に此の一進展を示すものである。が、しかし、それは、あくまで、小ブルジョア的な社會的觀點であつて、プロレタリヤ的な社會的觀點ではない。今日の如く、社會科學の研究が、無產階級運動者以外の有閑階級――ことに學生の間に玩弄物の樣に流行してゐる時代にあつて、外から一寸見て、その人間がさういふ方面に首を突込んでゐるからといつてそれを新時代――本統の意味の――斷定するのは早計である。今日は、惡い意味の近代的女性を意識的に描かうとするにも、ある場合には「女子大學へ行つてゐて社會科學を研究してゐる娘」位を借りて來ねばならない樣な時代である。野上氏が新時代の女性を描くつもりで眞知子の如き女性を描いたのは稍早計であつたと言はねばならない。そしてそこまで突進んで批判せずに、我々の最も唾棄する女學生の類型に近い女性をもつて來てそれを「新時代」として取扱つた所に、我々と嚴しい觀點の相違を發見するのである。――以上の二氏の事は決してプロレタリヤ文學の內部の問題ではないが、ある脈絡を持つてゐるので附加へた次第である。

二

評論の方面では往年の樣なブルジョア文壇との間の激烈な論爭は殆んどなされなかつた。それは、プロレタリヤ文學內部の論爭に主力が集中されてゐたゝめでもあるが、一つはブルジョア文學の方に以前の樣な積極的な主張が無くなつたゝめでもあつた。プロレタリヤ文學運動內部の論爭も團體間の政治的意見についての論爭が大部分を占めてゐた。本年度に於ける、文學運動獨自の批評としては轉向作家の問題等であつた。

轉向作家の問題について言へば、ブルジョア文壇からプロレタリヤ文學運動へ轉向して來る人のある事は當然な事であつて、それ等の人々を我等の運動の中に消化して行かなければならないのも當然である。たゞ問題となるのはそれ等の人を如何に消化するかといふ

ことである。言ふまでもなく、長い間ブルジョア文壇内に生活して來た人は多分な夾雜物を持つてゐる。自己のペンをプロレタリヤ解放運動の爲に役立たせ度いといふ眞面目な氣持と一緒にあはよくば「一般社會」からも喝采されたいといふ名聲慾が同居してゐないとも限らない。片岡鐵兵氏になどには明にそれがあつた。片岡氏にそれがあつたばかりでなく、氏を迎へた「戰旗」一派までがそれに迎合した。論爭はそれが中心となつて「文藝戰線」の側から火蓋を切られた。「文戰」もまた片岡氏の轉向以前に細田民樹、源吉の二氏を迎へたのであるが勞働者出の同志を得た場合にも曾つて低級な宣傳振りなどをやつた事のない我々は、二氏を迎へた場合にも「戰旗」の樣な馬鹿騷ぎはやらなかつた。ジャーナリズムに追隨して踊ることに一體我々としてどんな意義があるのであるか！、プロレタリヤ運動とジャーナリズムとが並行線をたどるものとでも思つてゐるのであるか。片岡鐵兵氏の「生ける人形」「面白くなる」等の前に慚死せよ。あんなにまで片岡氏を思上らせたのには半ば「戰旗」の責任がある。

　も一つの問題はプロレタリヤ文學の大衆化の問題である。中野重治、鹿地亘氏對藏原惟人、林房雄氏の間に論爭が重ねられつゝある。問題の提出者は林房雄氏であるが氏によると「藝術小說」も必要だが「大衆的な面白い小說も必要だ」といふことである。藏原惟人氏も同意見だと思はれる。それに對して中野重治、鹿地亘の二氏が反對の陣を張つてゐる。しかし、反對だといふ事は判るが何故反對かといふことはその千萬言の言葉の空費にも拘はらず誰にもわからない。が、兎に角　理論家としての兩氏の歷史から見て反對だと言ふ事だ　は理解出來る。

「藝術小說」も必要だが「大衆小說」も必要だといふことはこれこそ本當の意味の折衷主義である。大衆的でなければならないのは、プロレタリヤ文學の本來の要求であつて、もし現在のプロレタリヤ文學が非大衆的であるならば、その非大衆的なものを大衆的にして行く事こそが我々の任務である。それが如何に困難な事であるかといふことは、革命後十一ケ年を經たロシヤのプロレタリヤ文學が未だに非大衆的であるの故をもつて非難されてゐることによつても分る。しかしどんなに困難な事であつてもそれはやらなければならないことである。藝術小說も大衆小說も共に必要だなぞといふ事は一つの逃避である。

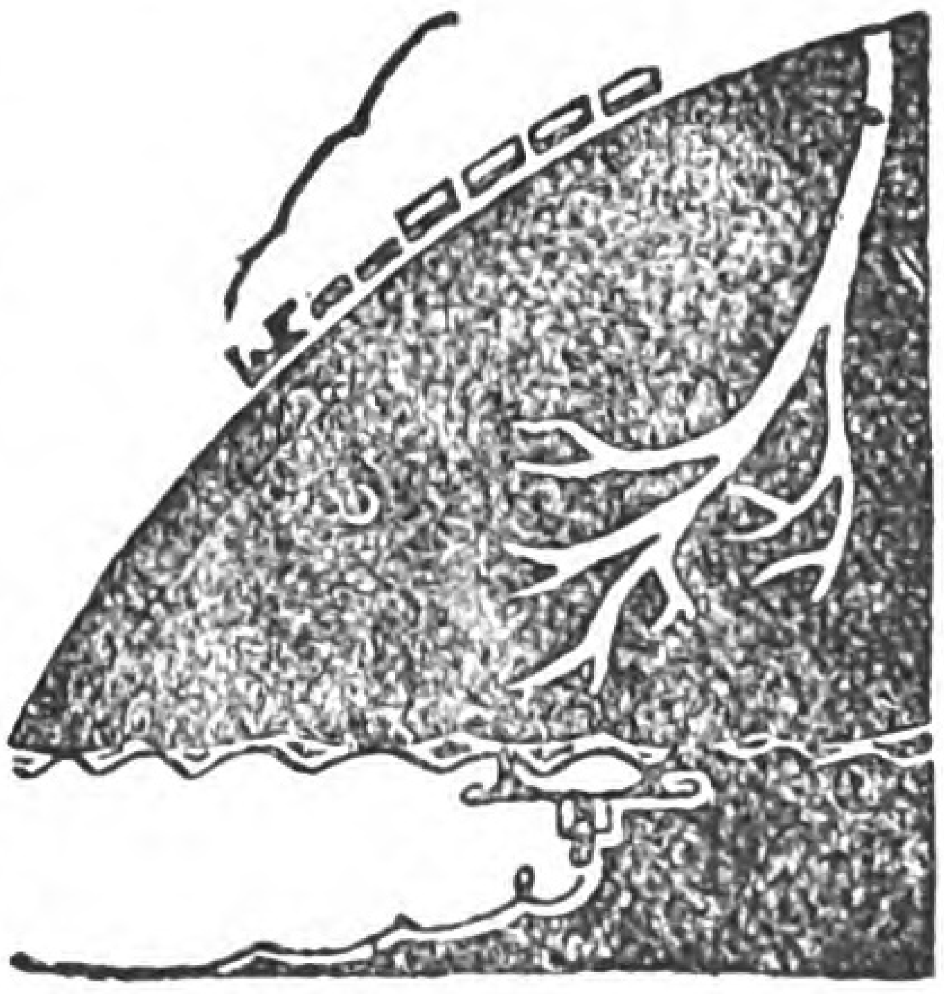
　さういふ考へ方は又ブルジョア的な物の考へ方でもある。敎養のある階級と一般大衆との間に藝術に對する要求の性質の相違が起つた時、ブルジョア藝術は、藝術小說と大衆小說とに分化することによつて、その二つの要求に應じた。だから林房雄氏はプロレタリヤ文學もまた二つに分化してお互の道を步めといふのである。しかしながら、現在のブルジョア文學にとつては、「藝術的」になることは非大衆的になる事であり、大衆的になることは非藝術的になることであるが、プロレタリヤ文學にとつてはさういふ藝術的と大衆的との間の背離などといふことはあり得べきでない。プロレタリヤ文學にとつてはより大衆的になることはより藝術的になる事であり、より藝術的になることはより大衆的になることである。尤もこの大衆的といふのは勞働者農民的といふ事であつてブルジョア大衆をも含む大衆一般でないこと言ふまでもない。勿論浪花節をもつて大衆の中にある事を宣傳する樣な場合もあるだらう。しかしそれは我々が浪花節以上の大衆的形式を創造するまでに至つてゐない場合の止む

を得ない妥協であつて、さうであればある程我々は現在未だ非大衆的な要素を多分に含んでゐるプロレタリヤ藝術をより大衆化する爲に努力しなければならないのである。所謂藝術小說も必要だが大衆小說も必要だなどといふ折衷論はプロレタリヤ文學としては階級的立場の放棄である。林氏自身の場合を考へても「大助の結婚」よりは「林檎」「繭」の方がより以上大衆的、卽ち勞働者農民的である。「大助の結婚」が若し大衆に喜ばれるならば、それはブルジョア意識を持つてゐる、ある一部分の者に、であらう。「結婚醫學」と銘打つて猥本を賣つてゐる場合もある。大衆的といふ名にかくれて大衆のブルジョア性に屈服してはならぬ。

三

プロレタリヤ藝術團體間の對立關係の變化として從來勞農藝術家聯盟・前衛藝術家同盟・日本プロレタリヤ藝術聯盟の三團體の對立狀態が、前衛藝術家同盟と日本プロレタリヤ藝術聯盟とが合同したゝめに勞農藝術家同盟と全日本無產者藝術同盟との二つの對立關係になつたことを擧げておく必要がある。合同前の前衛藝術家同盟は藝術論及び藝術家團體の組織論に於いては、勞農藝術家聯盟とよりはより以上、日本プロレタリヤ藝術聯盟と鋭く對立してゐた。その二團體が政治的意見の一致で合同したのである。藝術論の相違は兎も角として、組織上の意見の對立が未解決のまゝになつてゐるので、此の二團體の合同は其の點についてだけでも大きな矛盾を含んでゐる。此の矛盾が如何に整理されるかは今から豫想することは出來ないが兎に角全日本無產者藝術同盟の存在は一にかゝつて極左的政治運動の勢力の消長如何にかゝつてゐるので政治運動の方面の極左的傾向が清算されて行くにつれて、この團體の極左政治主義的組織も清算されて行くであらう。無產政黨運動の上の極左的要素、卽ち新黨準備會の誤れる指導方針は次第に清算されて行きつゝある。

今や暮れ行かうとする一九二八年は日本のプロレタリヤ文學運動、否全無產階級運動にとつて忘れ得ぬ年である。



大原アヤ子

昭和三年文藝大觀

——附詩壇——

生田花世

文藝の流轉消長は常に恒に社會狀態の變轉と深甚なる關係を持つ。今の——本年の文藝界が本年の社會狀態とはなれがたない狀態に於て語られた時はじめてそれは正しい文藝大觀となり得よう。その事を考へる時、どうしてもまづ最初に詳しく說かれなければなら

ないのは本年の社會狀態である。本年の社會狀態はどうであつたか、かういふとは今こゝに私が說明するまでもないことで、この兩三年(淵源はもつと遠く深いところにあるが)露骨に社會表面に現れて來た大資本の勢力の强くなつて來たこと、一般經濟界の不況、農村の疲弊かういふことから渦紋は渦紋と並び、倒れた樹は又次の樹をたほし、雪だるまはます〳〵ころんで雪の上で肥る、油の乏しい灯はやがて消えて行つて了ふといふ風に萬事文明の大勢が陷つてゆく狀態がこの日本に於いて漸進して來た、是が本年の大體的社會不安である。ところでかゝる社會不安のもとに大資本主義出版の本元である圓本の脅威を感じつゝ、損をしつつ(儲けたのは少いとおもふ)發刊されつゞけた『改造』『中央公論』『新潮』『文藝春秋』『大調和』『生活者』『文藝道』『創作月刊』などの本年度分を私はこの十數日涉獵一覽したのである。

各誌の創作欄、その全部とまではゆかないが力作らしいものを讀んだ。放浪時代(改造四月號、龍膽寺雄)とか又海人族(中央公論一月號　今東光)とか女優(中央公論六月、七月號犬養健)仕立屋マリ子の一生(中央公論七月號　十一谷義三郎)女禮(文藝春秋七月號　中河與一)其他、女性の作品としては童貞女昇天(文藝春秋十一月號　吉屋信子)老女マノン(改造七月號　宇野千代)眞知子(改造八月號　野上彌生子)赤い貨車(改造十一月號　中條百合子)荷車(新潮六月號　平林たい子)の諸作を讀んだのである。(その中の多少は前に讀んでもゐた)

定評ある老大家の巧緻なる短篇についていへば、德田秋聲氏の『別れ』とか『芭蕉と齒朶』の滋味、佐藤春夫氏の『春風馬堤圖繪』の奇才、久保田万太郎氏の『いのち』の雅趣、里見弴氏の『木を伐る』とか『海の上』とか『春光』とかの細緻、いづれも老成し切つてゐる上での面白味と、物足りなさとの複雜な感じをもつて私は讀んだ。

本年雜誌所載の長篇としては谷崎潤一郎氏の『卍(まんじ)』菊池寬氏の『半自叙傳』吉田絃二郎氏の『靜夜曲』室生犀星氏の『自叙傳的な風景』正宗白鳥氏の『男の一生』志賀直哉氏の『暗夜行路』などがあつたが、それらの多くは私は讀まなかつた。とにかく『卍』と『靜夜曲』とだけは長篇小說であるが、他はいづれも作家その人々の餘裕しやく〳〵たる思ひ出で、隨筆的自叙傳小說とも稱すべきものである。

兎にかく本年の創作壇に於ては新人としての龍膽寺雄、黑島傳治橋本英吉、木村庄三郞、久野豐彦、勝本清一郞、平林たい子、其他二三氏をごく僅かにその圈內に入れたといふ位で、いかに、かうした既成文壇の城廓の固きかをおもはせるには十分である。極めて限られたる人々のその獲得した地位が、いかに相當永く保たれるものであるかを深く思はしめる點において、本年度文壇もまた昨年、一昨年とほとんど同樣といつて差支はなかつた。『中央公論』などに於いては一人の新人も女流作家も見られないことを私は發見した。さうだ。一人も新人がない。これは何としても寂しいことである。中村武羅夫氏は『文壇の不振と新進作家の無力』(新潮三月號)に於いて、『現在文壇に於ける新進作家もその數としては甚だ多いのであるが數のみはいくら多くても、結局、群衆以上の何者にも過ぎないやうな、無力の人々の集りであることが、新進作家といふものの集團的存在を甚だ稀薄にしてゐる所以だと思ふ』と說明してゐる。老大家が大體に於いて生鮮の力を失つてゐる昨今こそ、もつとも新文藝の突進すべき時であるのは言を俟たないことであるのに、各誌創作壇

は『改造』もしくは『創作月刊』其他二三の小雜誌以外、新人紹介といふことが少いのである。新人が無力であるといへないことはない、しかし、又、單に、それのみであらうとも考へられない。そこには由つて來る遠因近因の甚だ多きを考へしめずには置かないのである而してその遠因は何であるか近因は何であるかといへば、私は一にも二にも最近の社會的生活不安及び圓本流行をあげたいのである。何しろこの二三年來深刻になりつゝある各社會一般的生活苦のため多くの青年又は若き婦人は生存上間接的なる（文筆職業者以外のものには）文藝よりもより必要なるより痛切なる方向へと、その身心を拉し去られつゝある。從つて、既成作家の一部分は、圓本の印税に得々とし、他の一部分は、益々その職にしがみつき、後繼文壇を形づくるべき未來の人々は十分集らない。才能ある人の、十分現れない理由である。なほプロレタリヤ文藝の方面に於いてもこの嘆がなくはない。眞に社會組織變更、人類開放のため、そのおのおのの信ずる主義に於いて戰つてゐる人は見よ、とほき彼方の森のむかうに屯してゐる。彼等はたゞその簡單なる必要的事實のためのペンをにぎる外、何も現在に於いては、書いてはゐない。彼等闘士の大多數は小説どころではないのだ。もつと直接的表現なのだ。（これは誤りではないことを信ずる。）

　プロレタリヤ評論家なる大宅壯一氏は、最近もつとも勇敢に『新潮』で、『中央公論』でその他のプロ雜誌評論壇で力闘しつゝある人であるが氏はいふ。『新しい知識階級の文學はこの悩みに徹し精神的立ちん坊たる自己の階　的立場を徹底的に批判し、檢討することから出發しなければならない』かくも勇ましき呼聲は、その曉望はいつ答へられるであらうか。多分いつかは答へがあるであらう、しかしそれにはなほ多少の時日があらうかとおもはれる。

　公平に云つて今、在來の少數文學は――心境小説所謂純文學――は苦境に立つてゐる。この在來文學の苦境に陷つたのは新興文學といはるゝ多數文學――集團的小説所謂プロレタリヤ傾向小説――よりの攻擊によるといふよりもより多く、圓本なるものの經濟的脈迫によるものと私は睹ないわけにゆかない。今は何事も、又何ものも經濟的に解決しなければならない時代である。（往時とてもさうではあつたが、こんなに甚しくはなかつた）大社出版が、勢力をふるふ時代に、プロレタリヤ文藝の戰陣の確立するのは當然のことであるし、通俗小説――大衆小説の振興するのも又當然である。一は反動的に反抗し、自由のためにたゝかひ、一は文藝そのものが民衆的要望に應ずるために時と處を得るからである。かかることについては『創作界の現狀を論ずるの會』（新潮十月號合評）で、種々多樣に實際的に話されてゐたことが、私には面白く思はれた。

　大衆文學――。この巨手は、この一二年ぐんぐんと伸びて來た。まげもの――題材を江戸時代、又は維新時代にとつての民衆文藝――、分りやすく、おもしろく、肩がこらず博く、この人生の諸相を平俗に語る大衆文學の勢力は、この頃いかに目立つてきたことであらう。『大衆文學の勝利』といふ一文、これはある新聞にかいてあつた林房雄氏の評論であるが『これら作家は少くとも身邊雜事を文學にすることを潔しとしない。たとへ作者自身が若干の興味を感じても、讀者に何物をも與へ得ないと考へたら、これを筆にすることを敢てしない。此態度は重要である。讀者に步調を合せることは時代と步調を合せることである。時代の關心に忠實であることである。すべての大作者は、時代の關心の向ふ方向に、敏感であるとともに

忠實であつた』
と禮讃の辭を披瀝してゐる。

大衆文學か、純文學か、この問題は昨今大多數の在來文學者の頭痛の種となつてゐるばかりではない。これから文筆によつて身を立てようとする人々にとつても相當考慮を要することで、それは、プロレタリヤ文學か、在來文學かの問題について文藝爭鬪のあつた五六年前の狀態よりも、より一層の深刻味を帶びてゐる。『中央公論』も大衆文學號を一月に出したし、『文藝春秋』は、二三號つづけて創作欄の一半をそれにさいてゐるし機敏なる『新潮』は『大衆文藝合評會』をこころみてゐる。席上白井喬二氏の言にもそれがあつたが林房雄氏は、『大衆文學の勝利』でそれにプロレタリヤ文藝を結びつけて、大衆プロレタリヤ文藝といふやうなものを唱道してゐる。大衆プロレタリヤ文藝！　これは當然考へつくべきことである。大衆作家、プロレタリヤ作家、いづれも世に多く布くといふ目的を中心にするからである。しかも今いふところのプロレタリヤ文藝作品では在來文學作品同樣に苦しい。もつと妥協的にならなければ大衆向きにならない點をどうするか、大衆が何をよみたがつてゐるか、その大衆の好むところところに從つてゆけば卑俗無意味になること勿論である。大衆の好むところを察し、然し大衆を引つぱつて行く、そのむづかしい藝當に、心ひかるゝ點が深い。

却說、壓迫を感じつゝある在來文學者の代辯として見るべきものは『中央公論』所載文藝隨筆正宗白鳥氏の新年號における言葉であらう。又批評としては十月號(?)における大宅壯一氏の『文壇縱橫論』中の『文壇の公娼私娼』の一文であらう。

しかし、在來の文學いかに衰退するといつても、それは全然全滅といふわけには考へられないことである。世の中といふものは、そんな風にもならないものである。佐藤春夫氏のごとき、又、島崎藤村氏のごとき作家もたとへ大衆からさほど重んじられなくなる時が來ようともやはり存在し得べき理由を十分にもつ。世をあげて唯物的傾向となればなるほど唯心的になる人もあることは、大資本的になればなるほどプロレタリヤ運動が反抗して立つと同じ轍に考へられる。とにかく文藝は世相の反映であるから世相が色々であるやうに文學も色々であるはづ、斷じて一律的にならうとは思はれない。殊に每月々々の雜誌は長篇となりやすい大衆小說、通俗小說もののみにて埋めるわけにもゆかないのだから雜誌掲載上好都合なる作品の地盤はさう崩れやすいものでもない。それを示すもの本年の諸雜誌である。『來年あたりから變りさうに見える』これは中村武羅夫氏の新潮合評會に於ける言葉であつたが、さてどこまで、どんなに變るかとおもふ。序に、本年はかういふこともある。『改造』などを見るとそこには故人についての評論がことにおびたゞしいのだ。夏目漱石、石川啄木、等、等、等、勿論、改造の編輯者に於いての註文ではあらうけれども、『改造』以外にあつてもこの風潮は旺んで、昭和二年、三年は、追憶的狀態にみちみちてゐる。あながちそれをどうかうといふわけではないが、しかしかういふ狀況を示す時代は決して明るい時代だとはいへない。いつまでかういふ暗い時代がつづいて行くか分らないけれども來年度あたりから多少とも一道の光明はさし入つて來ていいやうな氣がする。この一道の光明は、プロレタリヤ作家方面からいへば、自分たちの努力によつてと確言するであらう。何からであらうとも一向差支へはない。よくなりさへすれば、それほどよいことはないのだから。とにもかくにも時代は常

に恒にすゝむ。現代の一般的社會不安は、生活不安は、全日本人の心に何ごとかを陰影づけつゝある。都會において、農村において多くの人々の生活苦は、ましてこそゆけ減じてはゆかないのである。私をしていはしむれば、その痛切なる生活苦、その時代そのものの要求が適當の人をえらぶであらう。そしてその人が、どの方面の人であるかは、輕々しく吾人の豫想しあたはないところである。

本年の評論では何といつても生田長江氏の『主義者の主義知らず』(新潮)がよかつた。大宅壯一氏あてにマルキストへの進言を試み、又黒島傳治氏と平林たい子氏の『氾濫』と『荷車』とについての意見を發表して數十言を投して居る一文である。かかる立場の人としての力をこめての論述は是非讀まるべきものと思つた。可否如何にかゝはらず一考を迫るのだ。其他『藝術の社會的地位について』(阿部次郎)は讀みたくて讀まないが、私の左傾と前藝入りについて(片岡鐵兵)――)露西亜土産(秋田雨雀)文藝時評(神近市子)東京日日其他『中央公論』所載の正宗白鳥氏の時評『文藝春秋』、『新潮所』載の室生犀星氏の文藝批評など教へられるところ多く讀んだ。最後に本年評判の大衆小說、新聞小說は、矢田挿雲氏の『太閤記』大佛次郎氏の『赤穂浪士』三上於菟吉氏の『激流』加藤武雄氏の東京日日掲載中の『饗宴』などである。なほ其他書きたいこともあるが他日に割愛。

詩壇

本年度の詩壇はどうであつたか？　詩話會があり『日本詩人』が覇を稱してゐた頃とはちがつて詩壇はおもひおもひになつてゐる。あちらにかたまり、こちらにかたまりしてゐる。詩人協會はかなり大きいが、詩話會ほどに詩壇的行動がさかんでない。詩人協會の發送はいまだ將來にあるであらう。その他は『パンテオン』がある。それには西條八十氏、堀口大學氏、日夏耿之介氏がたてこもつてゐる。なほ『愛誦』『民謠詩人』『詩神』がある佐藤惣之助氏の『詩の家』川路柳虹氏の『炬火』千家元麿氏の『太陽花』正富汪洋氏の『新進詩人』中西悟堂氏の『濶葉樹』井上康文氏の『詩集』尾崎喜八氏の『東方』等これら多くの詩誌は、多くの詩人を生みつゝある。地方詩雜誌も多く、詩集刊行も多い。女人の詩集としては、深田花子氏の『喪服に挿す薔薇』小鷹みさを氏の『夢』下條綾子氏の『筑波野の春』高橋たか子氏の『夕空を飛翔する』館美保子氏の『明眸』等がある。なほプロレタリヤ詩なるものも大分讀んだ。しかしいまだ粗野未熟のもので、心にのこるものはない。一時盛であつたグロテスクなる詩風はややすたれて健實なるものの理解され、人間生活、人間感情に基礎をおくものの迎へられる風潮なのは詩のためにうれしいことだ。

歌壇概觀

中河幹子

最も優れた作品と評論とを提出したのは歌壇であつたやうに思はれる。

私はこの總評に於て、殊更らに女流だけを論ずる必要はないやうに思ふ。それは女の歌人達が既に女流歌人といふやうな殼を皆破つてゐるから。それに、女だけとつきあはねばならぬ事の――冗談ならねど、如何に1/2であり、やさし過ぎて、不自由で、もの足らぬことよ！

一、評論、研究物

さて歌壇に對して投じられた一石――それは文壇に於けると同樣に、(一)プロレタリア・イデオロギイによつて短歌の革命をしなければならないといふ說、(二)短歌の形式を破壞しようとする漠然とした運動。この二つであつた。然もこの二つとも論理及び實際の上で紛碎されたかの觀があつた。

(一)の場合の問題は經濟學の專門家、石榑茂氏によつて短歌雜誌二月號に發表せられた。これは一部の歌人に對してはよき刺戟を與へた。然しその論は、齋藤茂吉氏がアララギ五月號以來「歌壇萬覺帳」の題下に、數ケ月に渡つて指摘せられたやうに、プレハノフ、ブハーリンをそのまゝ踏襲し、歌論の上に直譯したやうなところがあつた。

齋藤氏の石榑氏に對する應酬は極めて正確で眞劍で、文壇稀れに見る壯烈さを示した。齋藤氏は、短歌のやうな日本獨特の詩形に對しては到底マルクスの飜譯では齒のたたない事を指摘せられた。即ち「何々の爲め」の文學といふものは、短歌のやうな詠嘆の形式に於ては存在し得ない事、及び短歌の性質を「飽食交合」のやうなものだと比喩して、藝術プロパーとしての短歌の立場を鮮明にせられた。即ち飲食に於ては思想は重要ではない。

恐らく文壇の總ての文學論中で、最も、ハッキリした見識と高く深い信念を披瀝(ひれき)したものとして誇るべきものであつたと思ふ。

(二)の場合に對しては、詩歌の前田夕暮氏が一時、二十七字形を試み、矢代東村氏が自由な口語歌を發表し、又香蘭の大熊信行氏が「短歌力學」の名稱によつて字足らずの新鮮さを主張してゐられたが未だ多くの理論上の應酬を見る事が出來なかつた。私は一つの形式至上主義的な立場から、三十一字型を嚴格に考へてゐる。

およそ形式破壞の思想は、時代的に言つて本質主義の深刻癖に人々が迷つてゐた時の思想であつて、今や新らしい時代は總ての方面に於て形式を要求しだしてゐる。實に短歌があの短い形式によつて一千五百年の昔から強く日本人の感情の中に生きてゐる事には縱くべきである。私はコーガンの口調を借りて申上げたい。「ブルジョアさへがあんなに巧みに利用した強い形式力を、プロレタリアが利用しないといふ事は間違ひである。」

たゞ石博氏に感謝するものは、次第に生活から遊離し、遊戲化に陷らうとする一部の人々に、一つの警告を發したといふ點である。

次に用語の問題に就いて、短歌の門外人が高慢さうに、現代人が古代語を使用するといつて、皮肉を云つてゐるのを見受けるが、あれは短歌の美學に無知識である事を證明してゐるに過ぎないが、その事に就いては此處に説明するのをはぶきたい。

さて研究物としては、井上通泰氏の「萬葉雜話」、土屋文明氏の「萬葉私見」共にアララギに發表せられたものであるが、教へられる所が多かつた。詩歌に於ける「短歌形式の成立」(阪口保氏)はよく調べたものと思はれたが、なほ新發見と新らしい順序とを要求したかつた。

北原白秋氏が詩に忙しく、殆ど歌論歌作を發表せられなかつたのは殘念であつた。

二、結社及作品

短歌の一首一首を批評する事は、とても困難なことであつて、又少ない頁では決してし得るものではない。で以下列擧的記錄に止めておきたい。

まづ主なる結社をあぐれば、アララギ、白撡、詩歌、覇王樹、自然、心の花、橄欖、香蘭、創作。光、水甕、あけび、あしかび、常春、青玉、白球、蒼穹、ボトナム、草の實、青垣、野菊、香円、癸皮、國民文學、潮音、それに私達の「ごぎやう」等である。左に目にとまつた秀歌を、それの結社の人々の中から選んでおく。

菊の花酢にひたしつつうらがなしかくしつつこそ秋も過ぎなむ(近代風景)

北原白秋

鏡が浦見おろす一目(ひとめ)にをさまりてまさやかに見ゆ陸奥(むつ)も長門(ながと)も(短歌雜誌)

窪田空穗

北窓に目張りをしつつこの冬を心しづかに我ありぬべし(改造)

齋藤茂吉

枝がちて蕾ながらの梅の園しら鳩を淸く居らしめにけり(文藝春秋)

中村憲吉

宮内の濃き黄の瓦かがやきてかささぎ飛べる春天府かな(改造)

與謝野晶子

をみなごの夜の歩みを遠く來て夏の寒けを覺えぬるかな(女人藝術)

岡本かの子

ゆるびなき寒夜つづきて月讀みは冴えきはまりぬ曉(あかつき)までも(アララギ)

今井邦子

わが心深くうれひてをりといへど責はつとめて夜は眠るも(アララギ)

久保田不二子

道すがら郵便配達よびとめて郵便うけとる散步の出かけに(香蘭)

杉浦翠子

馬の脊のゆらぎにもやや慣れそめて道べの草をほしと思へり(創作)

若山喜志子

人の世のかなしさつらさくるしさも味ふほどの齡(よはひ)には入る(婦女界)　茅野雅子

わだかまりを強ひておしのけ仕事に向ふひと日ひと日を尊むわれかも(女人藝術)　原阿佐緒

雨戸ささぬ寺のならはしの氣樂さよ障子の外は月あかりなり(女人藝術)　柳原白蓮

つくづくとふところ手して歩みゐつこゝら裏町の木犀の花(若草)　水谷靜子

虔ましく生きんと思ふ夜空には星のいろ冴えて秋づきにけり(ごぎやう)　清水千代

霧たちし妙義の嶺ろに月おちぬ暗きに馴れて道のしたしも(ごぎやう)　清水乙女

をみなのわざつたなきことをさびしみつみそぢを遠くわが過ぎにけり(草の實)　水町京子

ゆうぐれは遠く見えゐし大磯の濱と思ふあたり灯のとぼりけり(草の實)　川上小夜子

暗き顔になりしと言はればつとして笑ひしがわが涙見られぬ(ポトナム)　阿部靜枝

一生涯よく惚れたる男なりき惚れられしことは一度も聞かざりし(朝日)　土岐善麿

脇腹にぢかにかかへし濡れ西瓜着物をとほす冷やかさなり(詩歌)　前田夕暮

晝間より出てをる月は夕ぐれて山のみなみに光りそめたり(短歌誌誌)　松村英一

うちつけに云はれぬ心書きたれば妹(いも)が手紙はみなあはれなり(婦女界)　吉植庄亮

はや咲けとまちし櫻は咲きにけり事ししをへて見むよしもがな(經歌雜誌)　尾山篤二郎

けふの日の日和をよしと遠田(をち)こち田代掻(か)く馬の水蹴るが見ゆ(覇王樹)　橋田東聲

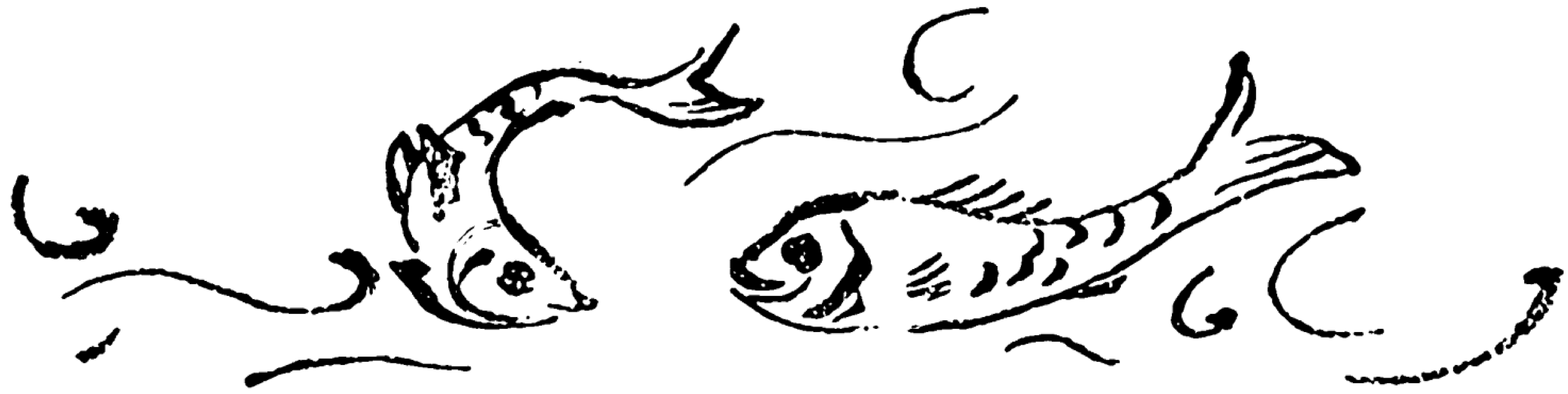
いちじろしくマルキストめきあげつらふ君が文よめばそぞろ笑ましも(短歌雜誌)　花田比露思

歌集としては、平福百穂氏の寒竹、前田夕暮氏の虹、土岐善麿氏の初夏作品、吉植庄亮氏のくさはら、白蓮女史の流轉、北見志保子氏の月光、花岡謙二氏の歪められた顔、古泉千樫氏の屋上の土、尾山篤二郎氏の白圭集、杉浦翠子氏の朝の呼吸、阿部鳩雨氏の良夜、岡野直七郎氏の谷川、中島圭子氏の棕梠の花、青山宣紀氏の玉葱畑春景、等があつた。

三、出來事

前田夕暮氏主宰のもとに「詩歌」が四月復活し、讀賣新聞社は正月昭和百人一首を現代によりて編み、その作品展覽會を五月、丸菱呉服店樓上に開催した。二月七日九條武子女史逝去、九月十七日若山牧水氏長逝、共に惜しみてもあまりある歌人であつた。

以上にて昭和三年の回顧を終つた。總じて多事にして緊張した一年であつた。擱筆する前に、強力な短歌の存在が一層世間に浸潤する事を望んでおきたい。女人藝術誌上にも多くの新らしい人々が推薦され紹介されたやうであるが、かういふ事は今後も續けて頂きたく、心からお願ひ申したい。



土蜘蛛

中原綾子

土蜘蛛がさと投げかけし白糸は悪業ながらめざましきかな

（以下三首能樂堂にて）

あはれなる梅若丸の亡靈の捕へがたきはなにに似たるや

君と見て御息所の怨靈もうれしきものとなりにけるかな

萩桔梗黄菊白菊さてもこの物見車に身を置きてまし　（扇の繪に寄す）

なにがしの歌のつどひのかへりみち惜しき月をばよその子と見る

ふとにくき妬きことをばのたまひておもしろがりてをはすうたてさ

あぢきなく一人やられてなぐさまず清雄の繪など見て廻れども

二三人わかき郎をともなひて酒場に入りて君を思へる

一念はかくても捨てじいかにしてこの日のうちにかの人を見ん

罪人のごとくみまへにうなだれてあるべき身ともおもほへぬかな

長流記——山田邦子

（その五）

編輯室のなかにはその時折のうさばらしといつたやうなものゝ流行が絶えず動いてゐた。或る時は机に向つて原稿を書いてゐる人の洋服の襟にこつそり紙きれをはさんで知らん顔をしてゐる。紙きれには「此男の顔はカキフライの如し」とか「昨夜あの妓にあひました」とか誰れにでも讀めるやうに明瞭に書かれてある。それを知らないで當人はどこまでも眞面目に原稿を書きつゞけてゐたり給仕を叱りつけたりしてゐる顔は後ろを知つて見てゐるものに此上もなく皮肉なおもしろさを與へた。或る時は又社員の二三人が秘密な遊びをしたのをかぎ出して一人がこつそり給仕に電報を打たせる、遊びをしたうちの人のよさゝうな一人の男の處へ細君からの電報を配達されてくる、男は一瞬眞面目な表情になつて電報をひらく、計畫をしたいたづらな數人は此上もなく平靜な顔でそのくせ内心限りなく興にのつてちよい／＼其男の方を見てゐる。

クヤシイクビククル

それが細君の名によつて打たれた電報であつた。男はきまりのわるい、かつがれた口惜しさの眞赤い表情をして電報を丸める、ドッと笑聲が編輯室に起るといふやうなのである……。

ボーナスの渡る前後は奥の黒板にそれからそれと漫畫やら狂歌やら警句(けいく)やらで書く處もない程に埋つてしまふ「一葉落ちて天下の秋を知る」と中央にたれか大きく書いたのを中心に思ひ切つた皮肉はそれからそれと限りがなかつた。編輯長やたま／＼顔を出す幹事の誰れ彼は見て見ぬふりをしたり一緒に笑つたりして其時期ばかりはせい／＼平記者のごきげんをとつた。…貧弱ながらボーナ

スの時期がすぎると、編輯室の流行は將棋に移つていつた。
厚紙にすぢを引いた簡單な將棋板に薄つぺらな駒を並べてそれでもおもしろさうに手のひまな記者たちは其まはりを取りかこんでうるさく助言をして笑つたり怒つたりした。ほんものゝ將棋のさせない連中は、子供だましのやうな戰爭將棋を買つて來て大將が間者にやられたのそれ地雷火だのとそのまはりも大さはぎであつた。此將棋の流行が編輯の空氣をぐつと親密なものにしてそれまでは社會部と政治部とが編輯長と平記者とがそこに何となく隔りがあつたやうに見えたのがいつか將棋のまはりをめぐつてその隔りがとれて快く親しみが一室をみたしはじめた。佐千子は入社以來編輯長とか部長とかいふ、是非そのさしづを受けなければならぬ人々に用事の言葉を交す外は、男の記者たちとさううちとけて口をきゝ合ふ事もなく無口で通してゐたがそれはその埃りつぽい編輯室に集つてくる人のことごとくが佐千子をぬかす外は男性であつた處から佐千子には何となく遠慮がちな氣持が先きにたつた爲めもあつた——此將棋戰が初まつてから佐千子も亦此空氣のなかに馴染んでいつた。佐千子は本將棋がさせなくて戰爭將棋の組に居た。

「岡本さん、一せきどう？」

「今日はだめです、これから會があつて行きますからね」

社のなかでも眞面目な、市役所の係りの文學士の記者は親しい笑顔を向けて佐千子に答へた。

「岡本君、女史の申込を受けたじやないか」

「イヤ、拒絶した」

此答にはユウモアがあつた。編輯室には彌次氣分の笑聲が起つた。

此流行の將棋も大方はヘボ將棋であつたがなかにはなか〳〵させる人もゐた、そのなかに特別に上手の二人がゐた。由井謙三と正田千代吉といふどちらも政治部の青年記者であつた。外の人々は代る〳〵此二人にかゝつてゆくのであるがどうしても此二人が最後の勝利者であつた。そして此二人の戰法にはそれ〳〵の特色が分れてゐた。正田氏の方はじつくりかまへてゐて考へ考へ駒を進めてゆくのであつて、時には相手が根氣で負けてしまふといふ程の勝利者であつたが、由井氏の方はそれと反對であつた。勝負が火のやうに烈しく殊に苦戰に向つてくると其頭腦も腕も冴えてくるといふやうで、時に突飛な冒險な手を用ひて驚くやうな乘り切りやうをして勝ちをとるといふやうなやり口であつた。それは實に見てゐるものをハラ〳〵させつゝ苦心の一路をひらいて行く時は大げさな

例を引いて言へば村正の切れ味のやうな殺氣をふくんであたるものを打ち切るといふやうな氣迫があつた。此戰法を佐千子は正田氏のじつくりしてゐるやり口より性格的に興味をもたせられた。

佐千子は由井氏がいつ入社した人であるかははつきり憶えてゐなかつた。たゞ佐千子の入社より後であつた事はわかつてゐた。……肩はゞがひろくて物を言つたり笑つたりする時よくぎくしやくと其肩をゆする神經質らしい癖があつたが、言ふ事はいつもおもしろく人を笑はせ上手であつた。神經質から來る其鋭く快活な冗談には誰れでも笑はされながら此人の快活は神經の太さから來るものでなく鋭どさから來る苦勞の多いものである事を思はされる處があつた。

佐千子が由井氏と初めて言葉を交したのは、佐千子が入社した年の夏の事で佐千子は其年名流婦人の組織してゐる木の花會といふ富士登山會に婦人記者として加入して行つた。そして其時富士山の麓の明るい村に濠をめぐらして城廓をなしてゐる一見大名屋敷のかまへの家の赤銅の大屋根を見上げてこれはどういふ人の家だらうかと不審に思つて乘つてゐた馬車の馭者にたづねてみた、黑目鏡をかけた馭者は得意になつて其家がそこらあたりの大名家で御維新の前後には築港の事などに關係して有利な德を收めた事、さる大名から嫁入して來たお姫樣は江戶を出るから何十里ある其家まで他人の地處を踏まないでお輿入れが出來たとか講談のやうな話が續いた。

「然し先代は歌にまでうたはれたしまつやで今でも土地で惡く言つてゐます」

としきりに馬を馭しながらしやべり廻してゐた馭者は黑眼鏡の顏をこちらに向けて階級意識をもつた白眼で訴へるやうに佐千子たちの顏を見渡した。

赤銅の屋根のお城みたやうなさうした家の噂話……大名のお姫樣のお輿入れ、主の吝しよくなど、それらは旅先きの通信のエピソードとしておもしろい材料と思はれたので佐千子は物古りたそこの宿屋の大廣間で一人机に向つて此通信を東京に向つて書いた。

佐千子が富士から歸つて來ると、それまで同じ社に居ても言葉をかけ合つた事もなかつた由井氏がニコ〳〵と佐千子の處へやつて來て、

「長田さん、此間の貴女の富士の通信を僕が勝手に一字消した處がありますよ、あのAといふ家は僕の母の叔父にあたる家でしてね……丁度あの校正の出た時僕は校正係の處へ用事に行つてゐて偶然あの記事をみたものだからね、惡く言つてゐるといふ惡の字を一

字消してもらつたんだ…失敬アハ…」

由井氏は一流の神經質に快活な調子で大聲で笑つた、佐千子はあの富士山の麓の宿でその通信をかく時にやはりそこの處が氣になつたのであつたがどうせ自分の周圍に關係のある人々ではない、と思つて職業意識を動かして記事をおもしろくする爲につい筆が走つてしまつた事を思ひ出して其關係者がすぐに自分の社に居たのかと驚いて赤くなりながら

「まあごめん下さい、自分に關係のない事だと思つてつい筆がすべつたんです」

さう言つて佐千子もおもしろさうに笑つた。それから二人は社のなかでも顏を合せれば頭をさげ合ふ知り合ひとなつた。事實同じ社に居ても社會部と政治部では顏を合せても頭をさげないちかづきでない人々もよくあつた。…編輯室の次ぎの大廣間は記者だまりといふやうな處で、大勢の記者たちが集つて三三五々話したり笑つたりしてゐる處であつたがそこでも時々由井氏は佐千子の處へやつて來て話すやうになつた。いつかの富士山麓の家の話に次いで由井氏の家が旗本であつた事、明治維新の時其父親が最後までの佐幕黨の一人で會津で戰ひ北海道の五陵廓までたて籠つてとらへられた事など、そして其後明治何年かにさきの幕臣の名のある者をそれぐ\お召し出しにあづかつて官を與へられた時榎本武揚とか大鳥圭介とかいふ人々と一緒にお召しにあづかつたのをその父の人はかたくお辭退して田舍の山深く農民の生活に入つてしまつたといふやうな事を、佐千子やその他の人々に時々きれぐ\に話してゐた。

將棋の流行はますく\盛になつて幾人もの人が十時頃までも社に殘つて將棋に夜を更したりするやうになつた、その仲間に佐千子もまじつてゐた。佐千子の明け暮れの一人の生活、そして職業を持つてゐる身の間斷なき心づかひからくる勞れ、それらが佐千子に勉强をものうくさせ刹那々々をおもしろく滿してゆかうとする危い心の狀態に引入れつゝあつたのである。

或る夜も月の光をあびて靜かに更け沈んでゐる番町の家に歸つてくるとA子爵邸の煉瓦塀の暗がりから突然「フ…」と陰氣な女の笑聲が佐千子を驚かした。佐千子が我にもなく立ち止まると

「佐千さん」

と四國なまりの柔い調子で佐千子の名を呼んであらはれたのは佐千子が上京の當時青山の下宿で一ヶ月一緒に暮した同じ女子文壇のお仲間の北山春代といふ友人であつた。

此友人も文學者となる志をたて〻、四國の山深い奧の故鄕から東京をさして出て來た婦人であつたが、小學校の先生をしたりして生活しながら勉强してゐたのが最近或る文學者の家へ家庭敎師のやうになつて其家へはいつてゐる噂をきいたがそれが思ふやうにゆかず行き詰つた心をもつて佐千子を久しぶりで訪ねて來たところが、此頃佐千子は歸りのおそい事を聞いて佐千子の下宿を一たん辭して其家の向ふ側のA子爵邸の練瓦塀によりか〻つて夜の十一時頃までも佐千子の歸りを待つてゐたのであつた。

佐千子はいつに變らぬ其友人のさうした根氣におどろかされながら、其晩狹い三疊の佐千子の部屋に、一組のふとんを半分づつに分けて床を竝べて寢ながら聞かされた春代さんの苦しい境遇を同情といふよりも胸苦しく聞いてゐた。その頃の春代さん――後には名をなした女流詩人である――はまだほんとに四國の山奧から出て來た質朴な都會ばなれのした婦人であつた、田舍の學校で敎師生活をして極端に對人關係に苦しめられた心がのび〳〵する間もなく都會のせはしい活動の空氣は更に其心をつらく吹き荒してゐた。山の奧の魚類のまれな土地から來て鯛もひらめも知らないでゐたのを正直に、其文學者の夫人が鰯を買つて乾してゐるのを見て

「奧さんこれは鯛ですか」

と聞いた事からこと〴〵く東京の子供たちにまで嘲笑されるやうになつた苦しい心境をも語つた。然し正直に言ふと其頃の佐千子も此友人に對しては時々心が勝手のわからない喰ひちがひやうをして困つた事があつたので――それは一方佐千子は信州の山奧から世間しらずで飛び出してきた空想の多い野性を帶びた女性であつたので、二人は時々互の心を固守して一歩も引くまいとした事さへあつた。春代さんが大福帳のやうな細長い半紙の帖面に雜誌女子文壇の投書家仲間からきたハガキ一枚の人の名でもちやんと書きしるしておいて其東京の住人をはじめから一度訪ねてみようといふ計畫や、讀み上げた本の自己の解釋を一々細長い帖面にたんねんに書きつけておく根氣に感心しながらも何んだか可笑かつたり…春代さんの方で、佐千子が男性を物とも思はずずん〴〵交際してゆくのが危いやうでハラ〳〵して…といふやうでいろ〳〵の點で互にしつくりしないで一時別れ〳〵になつたのだが何んと言つても女子文壇といふ其時代の婦人の文學雜誌を通じて互の氣心に親しみがあり殊にお互の心持が影響し合つてお互に故鄕を捨て〻上京してゐる心持にはどこか賴り合つてゐる深い思ひもあつてかうした心の行き詰つた時わざ〳〵訪ねて來てくれた、と佐千子は心で思ひ親し

みながら、自分の行き詰つた心とてもどう道が開けるとも分らず形こそ異へやはり自らの心もまつ暗な處にぶつかつてゐるやうな氣がして何と慰めの言葉も出なかつた。

又或る夜は十時すぎて歸つてみると、ほの赤い灯の下にぽつねんとお慶さんが座つて佐千子を待つてゐた。お慶さんは何か不滿さうに不機嫌な顏をしてゐた。

「貴女の運命も今年ぢうに定ると思ふわ」

ぽつり〳〵と言ふ言葉のなかに、お慶さんはこんな言葉を加へた、其言葉の意味は、今貴女は何かあるでせう、妙くもラヅに近い事がはじまつてゐるでせう、それを少しも私に話さないのが不平よ、といふ意味があつた事を後で佐千子はお慶さんから聞された。

然し佐千子はその時までまださうした問題には何もふれた心でなかつた。

どうしても泊らないといふお慶さんを送つて全く靜かになつた番町の道を麴町の通りへ出て二人は電車を待つてた。

「小母さん(下宿)がね、長田さんは此頃毎晩歸りがおそいが何事もないと思ふけれど、萬一の事があつてはいけませんから福島さん(お慶さんの姓)小言を言つてあげて下さい、なんて言つてるの。」

お慶さんは冗談のやうに眞面目のやうにこんな事を言ひ出した。そこへ赤電車が物寂しい光と凄まじい響とをもつて近づいて來た

「じや又ね、さよなら」

お慶さんは晴れない心を殘して赤電車とともに遠く寂しく去つてしまつた。

佐千子は一人うつむいて自らの足元を見ながら宿の方へ歩んでゐた。

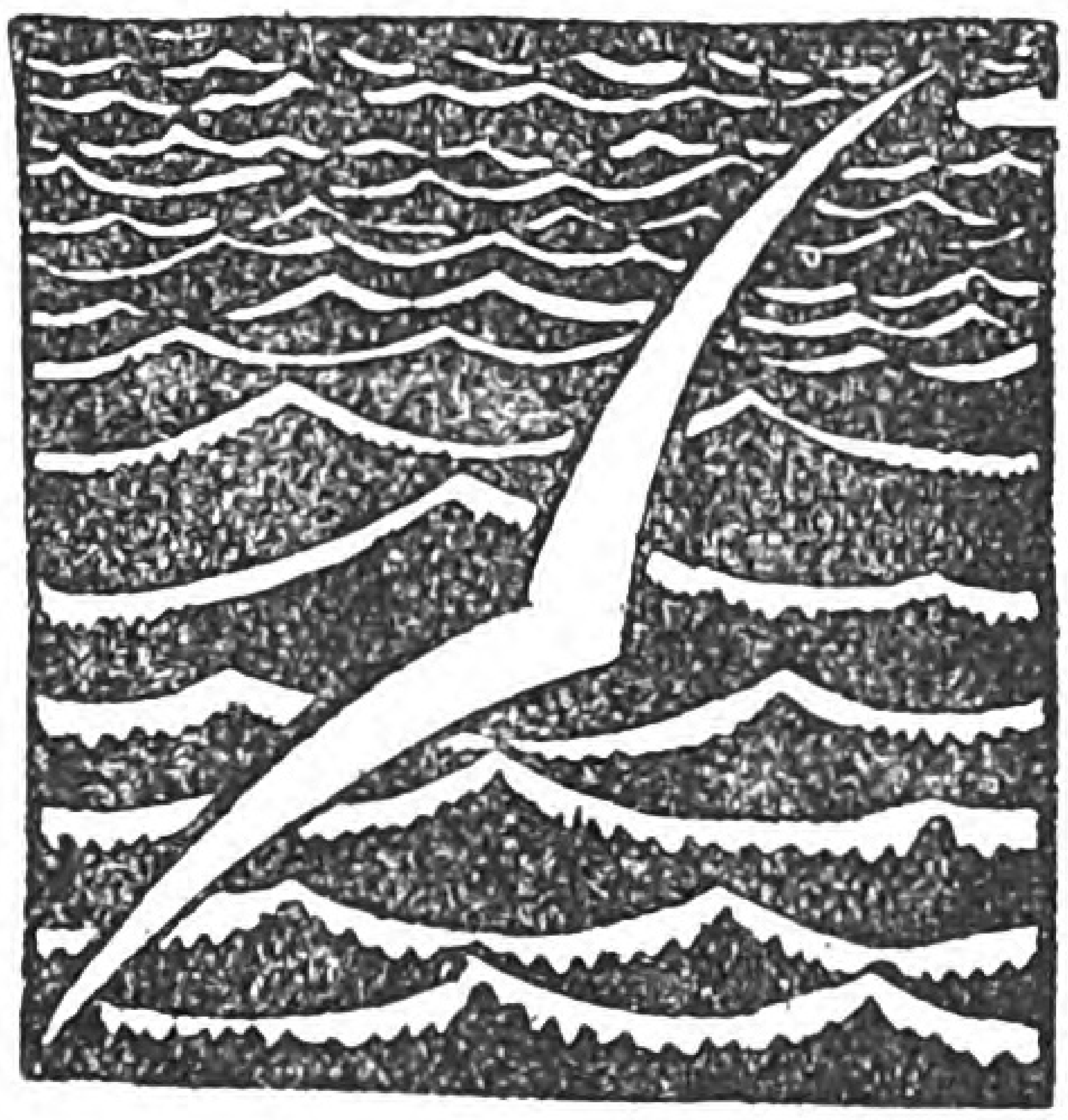
「好きな人は出て來ない、戀人なんか一人もない……」

さう言つて長い溜息をついた。やゝやつれの目につく佐千子の横顏をあはれむやうに月の光が照してゐた。

それから一ケ月も出ないうちに、「佐千子と由井氏とが婚約者とならうとは佐千子はもとよりお月樣でも御存じない事であつたらう。

一人旅
—放浪記—

林芙美子



大原アヤ子

十二月×日。
淺草はいゝ。
淺草はいつ來てもよいところだ……。
テンポの早い灯の中をグルリ、グルリ、私は放浪のカチウシヤ。
長い事クリームを塗らない顏は瀨戸物のやうに固くつて安酒に醉つた私は誰もおそろしいものがない。
テヘ！一人の醉ひどれ女でござんす。
酒に醉へば泣きじやうご、痺れて手も足もばらばらになつてしまひさうなこのいゝ氣持。
酒でも呑まなければあんまり世間は馬鹿らしくて、まともな顏をしては通れない。
あの人が外に女が出來たとて、それが何であろ、眞實は悲しいんだけど、酒は廣い世間を御らんと云ふ。
町の灯がふつと切れて暗くなると、活動小屋の壁に歪んだ顏をくつゝけて、あゝあすから勉强しようと思ふ。
夢の中からでも聞えて來るやうな小屋の中の樂隊にあんまり自分が若すぎて、なぜかやけくそにあいそがつきてしまふ。
早く年をとつて、いゝものが書きたい。
年をとる事はいゝな。
酒に醉ひつぶれてゐる自分をふいと見返ると、大道の猿芝居ぢやないが、全く頰かぶりして歩きたくなる。
淺草は酒を呑むによいところ。
淺草は酒にさめてもよいところだ。
一杯五錢の甘酒！一杯五錢のしる粉！一串二錢の燒鳥は何と肩の

はらない御馳走だらう……。

漂々と吹く金魚のやうな芝居小屋の旗、その旗の中にはかつて愛した男の名もさらされて、わつは……わつは……あのいつもの聲で私を嘲笑してゐる。

さあ皆さん御きげんよう……何年ぶりかで見上げる夜空の寒いこと、私の肩掛は人絹がまざつてゐるのでござります。他人が肩に手をかけたやうに、スイスイと肌に風が通りますよ。

十二月×日

朝の寢床の中で、まづ煙草をくゆらす事は淋しがりやの女にとつて此上もないよきなぐさめ、ゆらりゆらりと輪をかいて浮いてゆくむらさき色のけむりはいゝ。お天陽様の光りを頭いつぱいあびて、さて今日はいゝ事がありますやうに。

赤だの黑だの桃色だの黄いろだの疲れた着物を三疊の部屋いつぱいぬぎちらして、女一人のきやすさに、うつらうつら私はひだまりの龜の子。

カフエーだの牛屋だのめんどくさい事より、いつそ屋臺でも出しておでん屋でもしようか。誰が笑はうと彼が惡口を云はうと、赤い尻からげで、あら、えつさつさだ！一ッ屋臺でも出して何とか此年のけじめをつけよう。

コンニヤク、いゝね厚く切つてピンとくひちぎつて見たい……がんもどき竹輪につみれ、辛子のひりゝッとした奴に、口にふくむやうな酒をつかつて、青々としたほうれん草のひたしか……元氣を出さう。

或ところまで來るとペッチヤンコにくづれてしまふ、たとへそれがつまらない事だつても、そんな事の空想は、子供のやうにうれしくなる。

貧乏な父や母にすがるわけにもゆかないし、と云つて悄々と働いたところで、月に本が一二冊買へるきり、わけもなく飲んで食つて通つてしまふ。三疊の間をかりて最少限度の生活はしてゐても貯へもかぼそくなつてしまつた。

こんなに生活方針がたゝなく眞暗闇になると、泥棒にでもはいりたくなる。

だが目が近いのでいつぺんにつかまつてしまふ事を思ふと、ふいとをかしくなつて、冷い壁にカラカラと私の笑ひがはねかへる。

何とかして金がほしい……私の濁つた錯覺は他愛もなく夢におぼれて、夕方までぐつすりねむつてしまつた。

十二月×日

お君さんが誘ひに來て、二人は又何かいゝ商賣をみつけようと、小さい新聞の切拔きをもつて、私達は横濱行きの省線に乘つた。

今まで働いてゐたカフエーが淋びれると、お君さんも一緒にそこを止めてしまつて、お君さんは、長い事板橋の御亭主のとこへ歸つてゐた。

お君さんの御亭主はお君さんより卅あまりも年が上で、始め板橋のその家へたづねて行つた時、私はお君さんのお父つあんかと思つた。お君さんの養母やお君さんの子供や何だかごたごたしたその家庭は、めんどくさがりやの私にはちよいとわかりかねた。

お君さんもそんな事はだまつてゐる。

私もそんな事を聞くのは腹がいたくなる。二人共だまつて、電車から降りると、青い青い海を見はらしながら丘へ出た。

「久し振りよ海は……。」

「寒いけど……いゝわね海は……。」

「いゝとも、こんなに男らしい海を見ると、裸になつて飛びこんでみたいね。まるで青い色がとけてるやうぢやないか。」

「ほんと！おつかないわ……。」

ネクタイをひらひらさせた二人の西洋人が、雁木に腰をかけて波の荒い風景にみいつてゐた。

「ホテルつてあすこよ！」

目のはやい君ちやんがみつけたのは、白いあひるの小屋のやうな小さな酒場だつた。二階の歪んだ窓には汚點だらけな毛布が青い太陽にてらされて、いひやうのない幻滅だつた。

「かへらう！」

「ホテルつてこんなの……。」

朱色の着物を着た可愛らしい女が、ホテルのポーチで黒い犬をあやして一人でキヤツキヤツ笑つてゐた。

「がつかりした……。」

二人共又おしだまつて向ふの向ふの寒い茫々とした海を見た。

鳥になりたい。

小さいカバンでもさげて旅をするといゝだらう……君ちやんの日本風なひさし髪が風にあれて、雪の降る日の柳のやうにいじらしく見えた。

十二月×日

風が鳴る白い空だ
冬のステキに冷い海だ
狂人だつてキリキリ舞ひをして
目のさめさうな大海原だ
四國まで一本筋の航路だ

毛布が二十錢お菓子が十錢
三等客室はくたばりかけたどぜう鍋のやうに
ものすごいフツトウだ

しぶきだ雨のやうなしぶきだ
みはるかす白い空を眺め
十一錢在中の財布を握つてゐた

あゝバットでも吸ひたい
ヲオーと叫んでも
風が吹き消して行くよ

白い大空に
私に酢を呑ませた男の顏が
あんなに大きく、あんなに大きく

あゝやつぱり淋しい一人旅だ！

腹の底をゆするやうな、ボオウ！　ボオウ！と鳴る蒸汽の音に、鉛色によどんだ小さな渦卷が幾つか海のあなたに、一ツ一ツ消えて唸りをふくんだ冷い十二月の風が、亂れた私の銀杏返しの鬢を、ベツシヤンと頰つぺたにくつゝけるやうに吹いてゆく。

八ツ口に兩手を入れて、じつと自分の乳房をおさへてゐると、冷い乳首の感觸が、わけもなく甘つぽく淚をさそつてくる。

――あゝ、何もかにもに負けてしまつた！

東京を遠く離れて、靑い海の上をつゝぱしつてゐると、色々に交渉のあつた男や女の顏が、一ツ一ツ白い雲の間からもれもれと覗いて來る。

あんまり昨日の空が靑かつたので、久し振りに、故里が戀しく、私は無理矢理に汽車に乘つてしまつた。

今朝はもう鳴戸の沖だ。

「お客さん！御飯ぞなッ！」

誰もゐない夜明けのデッキの上に、さゝけた私の空想はやつぱり故里へ脊いて都へ走つてゐた。

旅の故里ゆゑ、別に錦を飾つて歸る必要もないのだつたが、なぜか佗しい氣持でいつぱいだつた。

穴倉のやうに暗い三等船室に歸つて、自分の毛布の上に座ると丹塗りのはげた、膳の上にヒジキの煮たのや味噌汁があじけなく並んでゐた。

薄暗い灯の下に大勢の旅役者やおへんろさんや、子供を連れた漁師の上さんの中に混つて、私も何だか愁々とした旅心を感じた。

私が銀杏返しに結つてゐるので、「どこからお出でました？」と尋ねるお婆さんもあれば、「どこまで行きやはりますウ……。」と問ふ若い男もあつた。

二ツ位の赤ん坊に添ひ寢してゐた、若い母親が、小さい聲で旅の故里でかつて聞いた事のある子守唄をうたつてゐた。

ねんねころ市
おやすみなんしよ
朝もとうからおきなされ
よひの濱風ア身にしみますで
夜サは早よからおやすみよ……。

やつぱり旅はいゝ。あの濁つた都會の片隅でへこたれてゐるより、こんなにさつぱりした氣持になつて、自由にのびのび息を吸へる事は、あゝやつぱり生きてゐる事もいいなと思ふ。

十二月×日

眞黃ろに煤けた障子を開けて、ボアッボアッと消えてはどんどん

降つてる雪をじつと見てゐると、何もかも一切忘れてしまふ。
「お母さん！今年は随分雪が早いね。」
「あゝ」
「お父さんも寒いから難儀してゐるでせうね。」
北海道に行つてもう四ヶ月あまり、遠くに走りすぎて商賣も思ふやうになく、四國へ歸るのは來春だと云ふ父のたよりが來てこつちも随分寒くなつた。
屋並の低い徳島の町も、寒くなるにつれ、うどん屋のだしを取る匂ひが濃くなつて、町を流れる川の水がうつすらと湯氣を吐くやうになつた。
泊る客もだんだん少くなると、母は店の行燈へ燈を入れるのを遊つたりした。
「寒うなると人が動かんけんのう……。」
しつかりした故郷をもたない私達親子三人が、最後に土についたのが徳島だつた。女の美しい、川の綺麗なこの町隅に、古ぼけた旅人宿を始めて、私は一年徳島での春秋を迎へた事がある。
だがそれも小さかつた私……今はもう、この旅人宿も荒れはうだいに荒れ、母一人の内職仕事になつてしまつた。
父を捨て、母を捨て、長い事東京に放浪して疲れて歸つた私も、昔のたどたどしい戀文や、ひさし髪の大きかつた寫眞を古ぼけた簞笥の底にひつくり返してみると懷しい昔のいゝ夢が段々蘇つて來る。
長崎の黄ろいちやんぽんうどんや尾道の千光寺の櫻や、ニユ川で覺えた城ケ島の唄や、あゝみんないゝ！。
繪をならひ始めた頃の、まづいデッサンの幾枚かゞ、茶色にやけて、納戸の奥から出て來ると、まるで別な世界だつた私を見る。
夜炬燵にあたつてゐると、店の間を借りてゐる月琴ひきの夫婦が漂々と淋しい唄をうたつては、ピンピン音つぽい月琴をひゞかせてゐた。
外はシラシラと音をたてゝみぞれまぢりの雪が降つてゐる。

十二月×日

久し振りに海邊らしいお天氣。
二三日前から泊りこんでゐる、浪花節語りの夫婦が、二人共黒いしかん袋を首にまいて朝早く出て行くと、もう煤けた廣い臺所には鰯を焼いてゐる母と私と二人きり。
あゝ田舍にも退屈してしまつた。
「お前もいゝかげんで、遠くい行くのを止めてこつちで身をかためてはどうかい……お前をもらひたいと云ふ人があるぞな……。」
「へえ……どんな男！」
「實家は京都の聖護院の煎餅屋でな、あととりやけど、今こつちい來て市役所へ務めてゐるがな……いゝ男や。」
「…………」
「どや……」
「會うてみようか、面白いな。」
何もかもが子供つぽくゆくわいだつた。
田舍娘になつて、おぼこらしく顔を赤めてお茶を召し上れか、一生に一度はこんな芝居もあつてもいゝ。
キイラリ　キイラリ、車井戸のつるべを上げたりさげたりしてゐ

ると、私も娘のやうに心がはづんで來る。
あゝ情熱の毛蟲、私は一人の男の血をいたちのやうに吸ひつくしてみたいやうな氣がする。
男の肌は寒くなると蒲團のやうに戀しくなるものだ。

東京へ行かう！
夕方の散歩に、いつの間にか足が向くのは驛。驛の時間表を見てゐると涙がにじんで來る。

十二月×日
赤靴のひもをといてその男が上つて來ると、妙に胃が惡くなりさうで、私は眞正面から眉をひそめてしまつた。
「あんたいくつ……。」
「僕ですか、廿二です。」
「ホウ……ぢや私の方が上だわ。」
げじげじ眉で、唇の厚いその顏を何故か、見覺えがあるやうで、考へ出せなかつたが、ふと、私は急に明るくなれて、口笛でもヒユヒユと吹きたくなつた。

月のいゝ夜だ、星が高く流れてゐる。
「そこまでおくつてゆきませうか……。」
此男は妙によゆうのある風景だ。
入れ忘れてしまつた國旗の下をくゞつて、月の明るい町に出ると濁つた息をフッと一時に吐く事が出來た。
一丁來ても二丁來ても二人共だまつて歩いた。川の水が妙に悲しく胸に來て私自身が淺ましくなつた。
男なんて皆火を焚いて燒いてしまへ。
私はお釋迦樣にでも戀をしよう……ナムアミダブツのお釋迦樣は、妙に色ッぽい目をして、私の此頃の夢にしのんでいらつしやる。
「ぢやあさよなら、あんたもいゝお嫁さんおもちなさいね。」
「ハア？」
いとしの男よ、田舍の人はいゝ。私の言葉がわかつたのか、わからないのか、長い月の影をひいて隣りの町へ消えてしまつた。

明日こそ荷づくりして旅立たう……。
久し振りに家の前の圭のついたお泊り宿の行燈を見ると、不意に頭をどやしつけられたやうにお母さんがいとしくなつて、私はかたぶいた鷄の瞳のやうな行燈をみつめてゐた。

「寒いのう……酒でも呑まんかいや。」
茶の間で母と差しむかひで、一合の酒にいゝ氣持になつて、親と云ふものにふと氣がついた。親とはいゝな、こだわりのない氣安さで母の多いしわを見た。
鼠の多い煤けた天井の下に、父母を置いて去るのは、いじらしく可哀想になつてしまつた。
「あんなもん、厭だねえ。」
「氣立はいゝ男らしいがな……」
淋しい喜劇！
東京の友達がみんな懷しがつてくれるやうな手紙を書かう。

——一九二八・一二——

母は行く

竹内てるよ

限られた枚數で解くにはあまりに大きい問題ではあるが、母さんはすでに自分の生命のおとろへを知り、たよりなく乏しい生活に、してしまはなければならない仕事を山積さしてゐるので、云ふだけのことは云つてしまはなければならないと思ひます。

徹也

お前はまだ三つで、そして何にも知らないけれど母さんはお前をおいて出て來ました。

お前が大きくなつて當然考へなければならないことは僕にはどうしてお母さんがないのだらう？　といふ一つの質問です。お母さんがないといふことは今日までどんなに多くの子供達の悲しみでありさびしさであつたことでせう、そのことのために幾人かは、のびることが出來ずに魂の病氣になつてしまつたり又早く死んでしまつたりしました。幸に他の人の手で一人前になつた人達でもきつときつと心の底に、どうしやうもないさびしさを一生持つてゐるにちがひありません。

徹也

お母さんも自分の母がなくて育ちました。ですから母のないといふことの不幸やさびしさは身にしみ〴〵とこたへて知つてゐます。

それだのに、それだのに何故お前をすてゝ父さんの家を出て來たのでせう。

徹也

先達ある友達が母さんに云ひました、「あなたは自分がしひたげられて來て子供にとつては母のないといふことがどんなにさびしいことであるかといふのを知つてゐながら又自分が子供をすてゝ出て來たのね、私達にはその冷たさがたまらないと思ふのよ、しひたげられて生きて來た人々が冷たさに對して鈍感なのがたまらないのよ」と云ひました。

徹也

この言葉は烈しく母さんの胸をゆすぶりました。母さんが出て來たのは個人としてのお前のお父さんに愛相をつかしてゞはありません。又乏しい貧乏世帶がきらひで出て來たのでもありません。殊更にたゞお前を泣かしめるためや、他に美しい世界があると思つてあはてゝ出て來たのではありません。

何物にもかへがたい母性の世界、女として母として生きる眞の生甲斐、そのことの眞實をあまりにもはつきりと知つたとき、母さんは多くのみじめな母と子を見ました。過つた社會の下水道にこれほどまでに純潔な母と子の愛をさへ、正しさをさへ、つよくはつきりさせることを知らない、又させられない人間から遠い人々を見ました。その多くの母と子は、同じく多くのみじめな未來へと、何の光もなく希望もなく、押しひしがれて生きてゆくのを見ました。

徹也

母さんは自分の健康のおとろへを知り自分の生きてゐる日にしなければないことは一人のお前の母としての生活以上に、來るべき社會のすて石として生命かけてやらねばない事

を知つたのです。勿論出て來るまでには相當に考へもし、思ひめぐらしてもみましたけれど、父さんは決して二人して一つものに全生活をかけて燃え得る人ではありません、父さんのためには制度による長男といふ動かすべからざるおきてがあり、孝養をつくすべき老父母があり弟妹があります、一家は病弱な母さんを必要としません。むしろどう始末しようかを考へた形でした、母さんは愛なき日々のあけくれにお前を抱いてしみ〴〵と考へた末に、決然とし、燃える反逆を胸にして、內なる要求にしたがひ、來るべき日の一つのすて石となるために家をすてゝ出て來たのですさうです、その生活をすてたのです。

徹也

お前は大きくなつて、制度に押しひしがれ泣いて死んで行つたあはれな女としての母と人間として少しでも少しでも役に立ちたいと希つた母と、そのいづれによろこびを持つでせう、お前は、この五六年の間を母さんに甘やかしてもらひ他のみじめな多くの子供達をさしおいてきれいな着物が着たいでせうか。

お前は乏しくしひたげられてよしんばその一生を終らうとも、止むなき止むなき一つの力によつて新しく人として生きて行つた母さんをよろこぶでせうか、いづれをもお前の判斷にまかせるとして、お前の一生を、母として呪はれてあらうとも、母さんはゆくべきところへは行かなければならないのです。

徹也

お前も人生の涙を知り、血にまみれて大きくなるのです。お前の悲しみや淋しさは、個人のものです、多くのみじめな子供達や、多くのしひたげられた子供達、更に胸一ぱいの愛をもつて、純潔な心を持つてゐながら母として生きるよろこびを切斷されてゐる多くの母親達! そのことのためにのみ母さんは戰ひ、よこしまな制度に押しひしがれ、涙にぬれて立上ることの出來ない人々のためにのみ母さんは自分の一生をすてゝ、ゆきたいと思つてゐます。母さんの現在の生活は、まづしく、それはみじめなものです、けれども母さんは、その生活の中に絶大なよろこびを持ち人生の生甲斐をはつきりと知つて働いてゐます、よろこんで下さい。これで云ふべきことはおほよそ終りました。緣あつてこの世に、骨肉をつなげて生きた二人、お前は私にとつてのたつた一人の肉親です。可愛いゝと思ひます、いぢらしいと思ひます、そのつらさのために、やがて相逢ふ日のためにと持つて來たお前のおへそのをも、父ちやんにかへしました。母さんとお前をつなげる、も早形の上の何物もありません。お前は、そろ〳〵歩んよが出來るさうだ、靴屋のショウウインドに小さいかざりぐつを見るたびに思ひ出します

さやうなら、さやうなら、徹也

永訣の朝、何にもしらないお前のねがほにそそいだ涙は、眞理を知つた私の涙です、その中には運命的なあきらめや、いさゝかの邪しまな反抗のための反抗はありません。單なるヒロイズムもありません。

徹也

すべての苦しみを正面から受けて、目を上げ胸をはつて進んでゆく人間になつて下さいお前の受けるべき苦しみをまつしぐらに受けて、倒れても卑劣にはならないぱつちりとした人間であつて下さい。お前はどんなに淋しくとも人生をあきらめない、より大ぜいにならうとする溫い人であつて下さい、

現實をすて、一切を否定し、お前をすてなければならなかつた母さんを許して下さい。だが母さんに、未來のお前を、そして、ひとしくもしひたげられた制度の子のお前を、生命かけて愛してゐるのだといふことを最後につけ加へてこの手紙をむすびます、さやうなら、涙を知つて人間におなりなさい。

おかみさんと「濟南」

松田解子

○

近來再び、新聞を開く度に「濟南」の文字が、私達の前に突きつけられてゐる。――今夕(十月二十九日)對支交渉は、同事件故に又もや一頓座を來たした事が報ぜられてゐる。

○

五月の或朝だつた。

メリヤスかゞりに夢中だつた私は、ふと、行商袋を擔いで、隣の緣側を前にして立つてゐる男を見た。

『奥さん。今日は!』

ギゴチない日本語が呼びかけたら

『はい。』

と云つたおかみさんの顏が其の儘引込んだ

『いくらだつけ?』

『奥さん 一圓五十錢殘つて居ます。』

彼は、小さな手帳を取り出して答へた。間もなく、手のひらに五十錢玉を並べて出て來た彼女は、投げ付ける樣に云つた。

『さあ、一圓五十錢。…あゝせい〳〵した。これで皆んな拂つた譯だね。』

『はい。どもありがと。今日も澤山あります。夏帶色々、一本どうです。』

『まあいゝわ。……支那人嫌ひさ。支那人根性惡い!』

彼は、暫くはあつけにとられて默つた。

『支那人どうして根性惡い?』

『日本人をうんと殺したぢやないか。

『どこで日本人殺した?』

『支那でさ、新聞にちやんと出てるんだ。』

『どうして支那人日本人殺した?』

彼は明らかに頰を染めて云つた。恥よりは恐怖の爲めに。

『どうもしないにさ。日本人を七十人も殺したんだ!』

私は鋭く耳を欹て乍らメリヤスかゞりの針を進めた。と又苛々しいおかみさんの聲――

『ね、あんたの國ではね、日本人を、何の罪もない日本人を七十人も殺して仕舞つたんだよ! 本統に!』

急に、彼の心臟に憎しみが燃え立つたのだらう。

『支那人根性惡くない。日本人惡いよ。日本人支那で金澤山儲ける。戰爭して……』

『へつ』彼女は唾をした。

『勝手に根性曲げてんだよ。此の人は。自分達が意氣地無しの、のろまだつて事は棚に上げて……。』

私は、思はず此の熱烈な愛國婦人を見やつた。支那人は、間が惡さうにうつむいて、行商袋の紐を締めにかゝつた。

『私…根性惡くない支那人。私何も知らない。關係ない。奥さん。買はないか……。』

彼女は、半ば放心の面持ちで默つた。

『奥さん。又來ます。………。』

彼は、ダブ〳〵のズボンのポケットから、垢染みたハンケチを取り出して、額を拭いてから、漸々行商袋を擔いだ。おつかぶさる樣な聲が、今度は私の顏に降り注いだ。

『あんた、こないだの新聞見たでせう。全く支那人と來たら、猪か豚だ！』
『支那人がねえ…。』
私は咽喉の奥で唸つた。

○

あれから――民衆の激烈な反對にも拘らず政府は、續けざまに對支出兵を斷行した。ブルジョア新聞は、特大活字と、寫眞と、講演と、活動寫眞と、等々を以て、一般民衆の『愛國心』を煽つた。M大資本會社では、如何に對支出兵が妥當であつたかを、從業員等に納得させる爲めの講演會を催したとか。そして日支間には、種々な形式と技巧を以て交渉が度重ねられつゝも、未だ解決を見ない有様である。而も、濟南事件に依つて、百パーセントの愛國心を發揚した出征者と其の家族。及び出兵費を捧げた無産階級――勿論隣のおかみさんも吾々もだ――は何を得たか。息子を失ひ、父を失ひ夫を失ひ、生活の柱を奪はれた悲嘆と、增稅の苦惱。それよりも、やがて來るであらう帝國主義戰爭の危機。その外に何を得たか。

何と悲慘な感激であらう！

擦り切れたズボンの中程を泥を上げて、シヨンボリと隣の緣側から消えた支那人も、子供の多い、隣のおかみさんも自分等も、何時軍隊を動員した事に依つて、幸福になつた事があつたらう。

日韓併合の當時、日比谷のベンチを寢床にしてゐる立ちん坊が
『日本が、朝鮮をとつたんだ!!』
と、云つて喜んだと云ふ話を、曾て先輩から聞かされた事があるけれども、その喜びよりも、より的外れな感激を、如何に執拗に、吾々は强ひられてゐる事だらう。如何に周到に、組織的に、ありとあらゆる機關を通して欺瞞された觀念が、吾々の心の底まで喰ひ入つてゐる事だらう。

隣のおかみさんは、今日も子供等の小使のために綿工場に行つた。――日本勝つた。ロシヤ負けた――と云つて子供をあやす箱屋のおかみさんは、激しい生活苦から、氣が狂つてしまつた。萎びかゝつた乳房を貸りに、私は大金持の乳母に傭はれねばならない。そして――何時吾々は血を以て戰はせられた爲めに幸福を受け取つた事があつたらう。

欺かれた眼、欺かれた觀念を生活の困窮に對するたゝかひの中に打ち碎かなければ、細い手を、煤けた家を、痩せた赤子を私は見る毎日〳〵降り續く雨空を見る。

論文、表紙繪、カットの募集

論文は女子の立場から見た時事に適切なる時評または女性生活に對する、希望・暗示に富む隨筆の類を募集する。

表紙繪は清新にして印象的なるもの、象徴的にして鮮麗なるもの、其他强烈なるもの、優雅なるものを募る。

應募者はすべて女性に限る。

論文

枚數――七枚以内
期日――毎月十五日
謝禮――薄謝

表紙繪・カット

洋畫――六號大
日本畫――菊版四倍大
期日――毎月十五日
謝禮――薄謝



シナリオ

人間料理 ―2

しの・たけじ

ボンヤリしてゐるH少年の背に、馬の背でも叩くやうな、コッピドイ愛撫が――痛い大きな手が來た。

「なにするんだ、君。」

――笑ひかけた故郷のママの顔も、鼻をならして待つてゐた、もうすこしで燒きあがるホットケーキのふくらみも、夢のやうに消えてしまつて、ボーイがついでくれたサイダはポッポッポッと泡が飛んではじけてしまつて――萬事終り！

そこにはニグロに近い、極めて獰猛さうで、その實決してさうでない、ごく人の好ささうな、鼻の平らかな、唇の厚い、眼の細い老爺(おいや)がニタニタ笑ひかけてゐる。

H少年癪にさはつて、右の足が、いつかフットボールをやる。だが對手は對手にならない。キヤッチボールときて、むづと靴ごと摑んでしまつた。

「なにするんだい。君がさきへしたんぢやないか、ばかにするな。少年(こども)だつて、毆られたから蹴るんだ。」

「アハハハハ！」

「なにがアハハハハアーーだ。」

「毆りはせぬ、撫でたのぢや。」

「噓言へ、噓言へ、あれが撫でたのか！人間だから破れなかつたのだ、硝子かなんかならビ

小サロン

「長流記」に文壇大中古モガ(フル)がお顔を並べてゐる。安成二郎、江馬修、北原白秋、田山花袋、水野葉舟、而して作者と伉儷(こうれい)幾年かの旦那さん。女性では故水野仙子さんと花世女史。

×

洋裝で本當のステッキをもつて歩く人ささきふさ、人間のステッキ幾本でも入用だといふ人大井さち子、各地に掛けひを澤山拵らへておくといふ北村かね子、やがてステッキの目差しを製造、假製男子販賣所を開くでせう。

×

大井幸子黑と赤を主調にし身に火焔渦まくごとき扮裝にて現れると、今井邦子感嘆して「それで里見さんを訪問させたかつた」幸子當前とばかり「さうだつたの！　だけど困つたわ。
里見さんが好になつちやつたやうだ。」

×

三上於菟吉の書齋机正面に綿細工の狸がブラさがつた。素川絹子の贈り物である。

×

北村兼子ある時に論客となり、ある時はやさしらしい娘(いと)さんとなつて華やかな着物を着る。蓋し往年自由黨の名物「箱入娘」の中島湘煙女史を學んだのであらう。文藝家になるのかと聞くと「呆らしい、文壇には偉い方が

シヤンコだ、コナゴナになつちまふぞ。」いきまくのも尤も！　事實コナゴナになつたのだ。硝子戸に鼻をピシヤンコにおつつけて――家へかへらして貰ひたいなあと思つて覗いてゐると、ママが出て來て、彼を抱入れてお茶の仕度を急々してくれてたのを――まだ、なんにも話もしないうちに、こん畜生が叩きつぶしたくせに！

彼は猛然と怒りが發した。

――こん畜生、こん畜生、こん畜生――

「こら、こら。」

叱つたのは、おまりさんだが、叱つても笑つてゐる。少年の足が、精巧な機械のように左右かはるがはる飛上るのを、ニグロ爺やは、左官屋の土投げのごとく柔らかく手さばきに握りかへしてゐる。そして言つた。

「庭の中にボンヤリ立つてるから、こら見い！　脛を蚊にすつかり食はれて眞赤にはれあがつてる。痒くはないか。」

「いイ、いイ、いいんだ。搔いてくれなくつていい。」

「甘さうに柔らかいから蚊の奴御馳走さまだ。邸には老人が多くて、皮が固いし、血だつて水氣がないから澁いのだらう。」

「よけいな世話をやくな、お前はなんだ。」

「わたしはわたし、風呂に入れてやれと、おまり樣がおつしやつた。」

「誰を。」

「お前を。」

「今はいやだ。」

「命令を反いてはなりませぬ。御都合のあることです。」

ニグロ爺、グイと反返つて、威嚴を見せて命令した。

華美、豪奢ではないが、お風呂場もなかなか瀟洒である。ただ、湯船が丸い。

たんとをるわ、うちは女辯護士になるの。」

×

いつけ口をすれば、雅子女史は心氣術擦祕法を體得した大家です。その證據はある晩女人藝術社の奧を覗いたら、時雨が背中を擦つてもらつてゐた。其時の會話。

「雅子さんに擦つて貰はうなんて、ステッキ候補者がきいたら羨ましがることでせうれ。」

「でも、いま擦らうてもらつてはならんわ。」

「門の右の方へ辯護士の看版を出して、左の方へ心氣術施療の札を出すの。」

「おほらしいことばかりいふて、いやゝわ。」

「もしさうなら、北村雅子の心氣術の疑惑についてとかなんとか、ステッキ氏たちに默られない用心に提灯をもつておくのだが」だと。

×

戀愛永久性をとく城さんに、しほらしい女だとある蓄膿性患者からラブレターが來たが今度新宿で、夫婦戀愛おでん「紀文」の店を開いたときいたら飛んでゆくかも知れない。しかし、どうも蓄膿性では氣の毒だ、おでんは匂ひがおいしいので、その香たるや夫婦戀愛永久をなつかしむのとおなじやうなものだから。

×

讀者から希望の「男性訪問」の中のキパッな顔合せは、王仁三郎と原阿佐緒、岡本かの子と大山郁夫、時雨と田中義一。

H少年、具合が違ふので、シャワーで浴びておくだけにしやうかと思つたが、湯船を覗いて見ると、丸い板が浮いてゐる。これは面白さうだと、片足突つこんで見ると、グルリとひつくりかへる。

得意の壇上、我意を得たりと、ヤッと飛込むと　――アチッチッチッチイ

――ひどいめに逢はせるなあ、意地の惡い細工をしたものだ。が！　と考へついた一案、濡れ身で飛出していつて持つて來たのが泥靴。

ところへニグロ爺がやつて來た。

「こら、何故はひつてくる。」

「洗つてあげやうと思つて」

「僕は赤ン坊ぢやない。」

「赤ン坊だよ、ヘビだ。」

「ヘビ　ベビーだらう。」

「さうだつたかな、ボンチの小さいのだ。」

「ボンチぢやない、ボーイだ。」

「なあに、ボンチでいゝのだ、分らなければいづれ分るやうになるだらう。――はてゝ、ボンチは、妙なものを尻の下に敷いてゐるが――アハ、アハ、それは風呂の中の板だ。や！　靴を穿いて――ありや、りや、こりや大變ぢや、風呂の中が泥湯になつてしまつた。」

「いいよ、いいよ、これを浴びて出るから。心配しなくつたつていい。」

「偉いことをやりをつて――。」

H少年すつかり快活になつて、裸ダンスをはじめた。

×

H少年安着の祝ひ膳に、正座は石炭カスの老爺さんが、大きな紋の附いた着物を着て袴をはいて座つた。並んでH少年、おまりさんは横の席にゐる。

うやうやしくお膳を捧げてきたのはニグロ爺で、その次に、眉毛のない、齒の黑光りする女



がお膳を額のところまで差上げて來た。その次に笑つた事のないやうな、青年男女が種々なものを持つて來た。こんなに人が居たのかなと、H少年が不思議に思つたほどだつた。

そこでH少年の服裝、白地のゴワ〳〵する大きな絣、木綿縞の袴――座らされて、箸を逆にひつつかんで、膝の上に立てて、目をまん丸くしてゐる。

お膳の上は、赤い魚が飛んでゐる。黑いお腕に、白い月形のものがはひつてゐる。皿に黃色い山があつて、白い帽子の庇みたいなものが立つてあつて、海老が踊つてゐる。白い濁つたスープに蓋がしてあつて、豆のはひつた赤いライスがある。

「皆のもの。」

紋附きを着た、石炭カスのお爺さんが言つた。

「この子供は、わしの友達の一つぶ種ぢや。わしの友達といふても、おなじ方面にゐたもんではない、ごく腕白な、少年時代の友で、いがみあひもやつた仲ぢや。併し、その友達がの、ふと、勿體ない事ながら、日本の土地に愛想をつかして國を去つた。勿論そのをりには、わしとも意見があはんでの、わしや國賊ぢやとまで罵つたが――や、互ひに血氣に逸つたことで面目ごわせんわい。今では、わしにもあの男の氣持ちがよう分つた。先方でもしきりとわしが戀しくなつた。といふより、お國が大切になり、國土が懷しうてならんのぢやろ。そこで、大切ない彼等の仲の子寶をわしが手許に敎育せいといふて投つてよこした。わしはの、その心を思ひますと――あはは、これは言はんでもよいことであつて、ただ、その友人夫婦は、只今は巨萬の富よりも、この伜一人を立派な人間――日本男子として育ててほしいといふが、たゞ一つの願ひだといひます。皆も、その心で、どうぞ、面倒を見てやつて下さい。但し、世上、見渡すところの若樣に仕立てては、遠い異境から、わざ〳〵この老ぼれを目ざして一人息子をよこした心に反する。で、どやすなり、ぶちくだくなり、各自わるいと思つたことは、遠慮なく、親身に對するやうにしてやつて下さい。これは、わしより、折入つての賴みです」

おまりさんも茵から下つて手をついて聞いてゐたが、その時、

編を書く唯一の筆であると信じろ。

▲作にあらはれたほどの力、及び魅力は映畫においては認められない。しかしまた、映畫には映畫だけのもつ魅力もある。ことに、あまり今迄の映畫になかつた場面が澤山あるので、目新らしくてよいところもある。

■作者の書いたスケールが大きいから、役者をとがめるのは無理だが――いますこし知識的青年を出す人がほしいものである。三吉



は儲け役である、秋山は割合ひ演じよささうだつた。

■夏川のお初は熱演だが柄がちつと無理であつた。專助もしどいが――あんな專助なら誰れも捨てろ――夏川はまだ蝶子の方がよか

「恐れいりました。」

と叮重に首をさげた。皆もそれにならつた。H少年は頭を掻いてちよいと首をさげた。

「さて、皆もそこでやつて下さい。」

と石炭カスおぢいさんは言つたが、ニグロ爺だけが殘つた。

×

「お！　お盃が出ましたな。」

「今日のことで御座いますから、天恩をいただかせまする。」

「それはよくお心附きだつた。」

茵をはづして、うや〳〵しくおぢいさんは盃をあげた。

H少年の介添にはおまりさんが附いてゐる。頭をおさへて拜させ、盃を飲むまねをして額の上まで頂かせ、終つて龜の子のやうに平べつたく背中を押しつけられた。

「めでたいことで御座ります。」

ニグロ爺さんが鼻をすすつた。見れば、石炭カスおぢいさんの眼にも大滴な雫がある。

「閣下、鑾聲をお聞きに入れませうか？」

「よからう！」

――風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不復還――

「閣下！」

次の間の敷居そとでピッタリと立ち、帽子の庇の横に手を――擧手の禮をとつたのは？

H少年は屹驚した、アメリカ育ちでも、少年は各國の軍旗や、軍帽に興味がある。その人は大將だ。しかも、石炭カスぢいさんがしたのではなく、大將が石炭カスぢいさんにむかつて敬禮したのだ。ニグロぢいやまで大將をそれほど敬してゐない。

「オイ、唄はんかい？」

とニグロが喚いつた。

つたかも知れない。體が立派すぎて、お初の可憐さがなかつた。これは蒲田の蓉子やなにかの方がよかつたらう。



×村田もちとかなしい。インテリゲンチヤを現はすことはもと〳〵むづかしいが――入江の蝶子は手一ぱいだが、ああなると、原作の大きさが知れる。美しいには美しかつた。

返事がまた振るつてゐる。

「貴様、をどれ。」

ニグロ爺や、大將の劒をかりて白眼にかまへた。

H少年はお臍の下で脈がうちだした。

——本能寺溝深幾尺、吾就大事在今夕——

白刄は宙に舞ひ、氣合は人の胸を打つ。秋の野の薄に風わたるごとく、刄身空を斬るとき、少年はピクリとし、雲風の廣野に猛虎の嘯くがごとき怒號におもはず後退りをすると、そのたんびに、おまりさんが優しい笑ひ皺を眼尻によせて、座布團ごと彼を前に押出す。

「奴はだいぶ避易してをるな。」

とその樣子を見て大將の服裝は笑つた。

「明日から世の中へ捨ててくれる。」

と石炭カスぢいさんは愉快さうだ。

おまりさんはコクリとうなづいて微笑した。

「それはいいでせう、よい時分にわしが拾ひに行きませう。」

と大將は言つた。

「いや、當分拾はん方がよい。」

と石炭カスぢいさんが答へた。

すると、大將の服が言つた。

「小僧、乞食になつて見るがいい。」

それでもニグロ爺やが贔屓して、元氣な聲で推賞した。

「いや、仲々愉快な倅です。」

と——

（つゞく）

●寫眞はとても美しい。むづかしい事はいふが、それは慾の慾だ。（×■●▲）

現在日本の活動俳優に——男女を含めて——原作通り表現期待を懸けることは無理かも知れませんが、何だか折角の幻映をぶち壞され



たやうで残念でした。丁度ファウストを讀んで數年後映畫化されたそれを見た時のやうな口悔しさとも淋しさを感じました。

きつと私たちは頭の中で個々的に美しい人格をつくりあげてゐるからでしよう。（北村）

カメラもカントクも充分の力を出してゐると思ふ女優もみんなよいお竹なんかだいぶ評判がよい。蝶子は三十を過ぎた、世味を充分しつた人で、入江ほどのよい顔であつたらきつと立派でしたらう。しかし熱演でる。（●）



長谷川春

ソヴィエットロシヤの勞働婦人

神近市子譯

大きな、日光が溢れてゐる部屋。織機では、梭が光つた色の布地を織つて右に左にとんでゐる。空氣中には唱ふ婦人の聲が器械の韻律的（リズミカル）な騒音を縫うて奇麗なハッキリとした糸を織つてゐる。婦人達は紡錘の間を、こゝには切れた糸をつなぎつゝそこには糸捲を揃へ乍ら氣安げにそして自由に動き廻つてゐる。老いた、勞苦の痕を止めた顏・腰を曲げた姿、節くれ立つた手。若い薔薇色をした顏、眞直ぐな四肢、熟練した指……私は、千九百二十三年に歸つた時ロシヤで始めた私が訪問した工場で、主として婦人の勞働者を使用してゐる、モスコオに於ける『赤いローザ』絹物工場のその繪畫を忘れないであらう。私を案内して廻つた年老いた機械工は、そこに長年働いて來てゐた。彼女は今は監督で、藝術家のやうな誇りをもつて機械の複雜な組立を説明してくれた。

『革命後は、勞働者達は何を得ましたか?』

と、私は彼女に訊ねた。

『私共自身のもの—』といふことを意味する、スヲーユ…といふ言葉が、彼女の脣にのぼつた最初の言葉であつた。

『あなたは機械の前の婦人達を眼に止めて御覧になりませんでしたか?』と、彼女は續けた。『彼等は一本の糸が切れても氣がつくほどに、何と緊張してゐることでせう? 以前は、仕事がぞんざいでした。生産額は、多分高かつたでせう。何故と云つて私共は一日十二時から十四時間は働きましたからね。それで今は私共は八時間働くだけです。けれど一人々々が今は前よりはズットよい仕事をしてゐます。何故です? それは工場も生産した物も私共のものだからです! 毎月支配人が私共に報告するのです——支配人も「私共の仲間の一人」です——そして凡ての勞働者が原料の仕入れに、修繕費に、賃銀に幾干支拂はれ——そして幾干の金が入つたかを知つてゐます。私共は自分達が生産額を増せば賃銀が増すといふことを知つてゐます。あなたは女工達が歌つてゐるのをお聞きでしたか? 前にはあんなことはありません。彼奴らは、時によると私共を擲つたものです——けれど今は私共は自由です。』



勞農ロシヤの新らしい教育法によつて教育された若きコンソモール達

工場の隣りは大きな白い家であつた。そこには、前にそこに働いてゐた人々が『肥つちよ』とよんだ前の支配人が住んでゐたところであつた。今は半分が托兒所で、半分が幼稚園になつてゐた。支配人の狩獵の獲物が飾られてあつた別の大きな建物は、倶樂部になつてゐて、それには、應接間、圖書室及び教室がついてゐた。又別に溫室はよく裝置された體操室になつてゐた。工場委員會は婦人が委員長であつたがその事務室は、同志タラソヴア、同志フヒリポヴアなど勝れたタイプの勞働婦人が、工場内の凡ての婦人の『無教育を淸算』しやうとするプランを立てゝゐた。

『赤いローザ』工場は、恐らくは最良の工場の一つである。私共はどこに行つてもこんな自由と歡喜の雰圍氣を見出すのではない。がモスコオで八千人の勞働者を使用してゐる『三つ丘』大紡績工場は、幼稚園と托兒所の設備、附屬の病院と施療所、育兒法の展覽會、倶樂部生活の盛んな活動などの爲めに、前者よりはより以上に印象を與へるものがあつた。こゝでは私は更に繪畫の別の方面も見た。勞働者の妻達は、狹いところにこれらの子供達と溢れるやうに暮してゐた。これらの子供達は、托兒所が工場に働く婦人達凡ての爲めの設備を有してゐないので、そこに收容されることは出來なかつた。婦人勞働者は、工場で八時間を過した後家に歸れば、多くの家族の爲めに洗ひ且つ食物を調理しなくてはならなかつた。

紡績業の大中心地であるイヴアノヴアーウズネセンスクでも、私は舊と新と同じ對照を見出した。そこにある工場は、舊く又不潔であつた。生産は戰前の標準に到達した。けれど古い機械はその極限迄使用されて來た。それでこれ以上の生産は新しい建物が建てられ、新しい機械が据付けられることが出來ねば不可能であつた。け

れど私が婦人達に何かゝ彼等には前よりはいゝかどうかを訊ねた時、返事は何時も同じであつた。『今は子供を生む時には、私共は前後共に各二箇月給料を全部貰つて休みます——私共は子供に乳を與へる時間を與へられ、それに手當てを貰ひます——その他に私共は一定の休暇を貰ひます——。』この産婦保險法は、革命後の他のいかなる變化よりも婦人勞働者に大きな印象を與へたものゝやうである。安全設備、吸塵機、よい通風機は到るところに据え付けられてゐる。階下の濕氣の多い染色室では、婦人は僅かに六時間働き、そして牛乳、肉等の特別量をうけた。

生活費の高價なことゝ、支配人が法律を無視しやうとするといふことについては、幾らか不平がある。生産を常則に歸さうとする、工場管理人がこれら復興の何年かに當面して來た困難な經濟上の問題は、勞働者に産業の狀態について知らしめる——ことの必要より他に注意を促がすやうになつた部分生産と大量生産の輸入は、仕事を極度に急がせた。それである工場内の雰圍氣は、數年前よりははるかに規則立つてゐない——が、それでも尙ほ勞働者達は、他の國の工場には、必ず見らるゝ束縛は著しく免かれてゐる。

私は同じ保護を目的とする方法が、ロストフにある大きな紙卷煙草工場で行はれてゐるのを發見した。私はこゝでは特に『夜間療養所』に感心した。これらの設備は今廣く輸入せられつゝある。そして全然床にゐなくてはならぬといふ程の病氣でもないが、特別の注意と食物を要する勞働者の爲めに設けられてゐる。彼等は自分の勞働をつゞけ、夜になると自分達の家に歸る代りに療養所に行く。そしてかうして結核その他の危險な病氣が豫防されてゐる。前に述べたものは、二十五人の勞働者を收容してゐた。その大部分は婦人で、これらの人々は各自の症狀に應じて一ケ月から數ケ月止まることになつてゐた。一日の勞働を濟まして灌水浴をしたばかりの婦人勞働者が、こゝに入れられた自分の幸運に、喜びで輝き乍ら、私共に質に氣持のいゝ少しの汚點もない部屋々々を案内して見せてくれた。

大勢一緒に工場に使はれるといふことは、ロシヤの婦人にとつては新しいことである。何十年かの間、彼等は纖維工業に働いて來た。そしてこの世紀の始めから 彼等は次第により熟練を要しない他の産業の仕事に使用されて來た。使用者達は、男子よりも『靜かで信用が出來る』のと、それに彼等の勞働の方が低廉なのとで、屢々彼等の方を歡迎した。しかし彼等の働き場所は一定されてゐた。そして男の勞働者達自身は、婦人勞働者達を同じ立場では受入れなかつた。けれども戰爭が始まつてからは、どの程度かに婦人の勞働が利用されない産業部門は一つもなかつた。この事はそれ自身革命的な效果を持つて、古い偏見の多くを驅逐してしまつた。そこに戰爭の終りが來ると同時に、婦人は右にも左にも職業を失なつた。千九百十七年には、印刷組合は凡ての婦人の解雇を決定した。ペトログラードでは、スコロハド工場の六百の結婚婦人達は歸還した兵士達に讓る爲めに解雇された。製紙工場も、同じ行動をとつた。この政策が、ソビエット政府の主義に全然反對をなすことは、直ぐに承認された。そして千九百十八年四月に、勞働組合ペトログラード評議會は、左のアッピールを凡ての勞働者と工場委員會とに宛てゝ發した。

『いかに失業と戰ふべきかの問題は、組合の前に切實に迫つて來た。多くの工場と商店とに於いて、問題は甚だ單純に解決せられつゝある……婦人を解雇せよ、そして男子を代りに使用せよ。

權力のソビエットへの轉歸と共に、勞働者階級は我々の國家經濟を新しい基礎の上に再組織する機會を與へられてゐる。この種の行動は、この新しい基礎と一致するであらうか？……失業に對する唯一の效果的な手段は、この國の生産力の復舊であり、社會主義的立場に立つ再組織である。工場並びに商店に於ける勞働者の馘首を伴なふ危機の時にあつては、我々は最大の注意をもつて解雇の問題に立向はなくてはならない。我々は各自の場合を個人的に決定しなくてはならない。勞働者が男であるか女であるかは問題であり得ない、たゞ單純に窮乏の度が問題となり得るのである：……かゝる態度のみが、我等の組織に婦人を止め、勞働軍に於ける分裂を防ぐことを我等に得しめるであらう……』

この態度は他の組合と政府の各組織によつて支持された。そして婦人の集團的な解雇は阻まれた。千九百二十一年に於ける産業の集中と共に勞働者の大仕掛けな解雇が行はれた時に、勞働組合は又再び男女勞働者の同權利の問題を持ち出した。その際に婦人勞働者の解雇條件に關して發しられた法令は、同じ熟練の狀態に於いては、婦人は男子と同じ條件で解雇されるが、滿一ケ年以下の子供を持つ獨身の婦人は、優先權を與へられるといふことを規定した。この種の婦人が解雇されなくてはならない場合には、彼等はその住所から逐はれることは出來ないし、又その子供達は托兒所、幼稚園或は學校に於けるその席を保有した。姙娠或は哺乳はいかなる場合にも解雇の理由とはならず、又婦人は出産の爲に休暇を與へられてゐる間に解雇されることは出來なかつた。これらの條款は勞働法に殘つてゐる。

最近數年間に、生産に從事する婦人の數は絶えず增加はして來たが、男子の勞働者の間の增加は、殆んどその三倍であつた。千九百二十六年一月には、産業に使用される婦人は七十萬八千人で、前年に比較して十七萬三千人の增加であり、産業勞働者全數の二・七四割に當つてゐた。婦人は、凡ての被雇傭勞働者の少くも九割と産業勞働者の殆んど十割を含む勞働組合の成員の四分の一を占めてゐる。組合に於ける婦人の率が最近數年間略々同じところに止つてゐるのに、決定數は百四十六萬五千四百人から二百二十一萬七千二百人に增加してゐる。組合は實際には産業的職業的生活を送る全婦人を網羅してゐる。現在に於ける婦人勞働者の大部分は、纖維、被服、食料勞働者、醫療、公衆衞生勞働者の間、及び教育に關する組合の中に於いて見出されてゐる筈である。産業に從事する婦人の半數以上が、纖維勞働者である。六萬以上の婦人が、金屬産業に働いてゐる。がこゝでは、非常に熟練した仕事に進む者は少數である。大部分がまだ未組織に止つてゐる唯一の婦人勞働者は、農業勞働者と家庭使用人である。がこゝでも事情は急速に變りつゝある。

千九百二十六年中に、家庭勞働者の組織數は、四萬七千人から十三萬三千人に增加した。彼等は他の勞働者と同じ勞働法によつて統轄されてゐる。そしてその上に特殊法が嚴格に彼等に課せられることのできる仕事と時間の範圍を決定してゐる。家庭勞働者には、大體に分けて二つの階級がある。ホテル、レストラン、學校などの公共團體に働いてゐるもの、個人の家庭に働いてゐるものである。前者は殆んど例外なしに組合員である。彼等の保護を約束する法律は、念入りに研究され、又彼等の勞働時間の配置が他の勞働者がうける凡ての利便を彼等も受けることを妨げぬやうに彼等の爲めに適

當な時間に、集會、組時間、娯樂等を準備するやう特別の努力が組合によつて爲されてゐる。この種の勞働者は一般に活潑でよく教育されてゐる。それでホテルの給仕女は、自分がその人の寢臺を造へてゐる派遣中の委員と同じやうに、切實にして聰明な興味を朝の新聞に對して持つてゐる。これらの若い女達の多くは、革命を積極的に助けた。

個人の家庭にある雇人達は、全體にやゝ後れてゐる。彼等の待遇は、無論彼等が雇はれてゐる人のタイプによる。雇人達は――普通一家族に一人の――大部分がネップマン、技術家とか官吏の階級、智識階級、及び古いブルジョアジイと貴族階級の家族によつて使用されてゐる。言葉をかへて云へば、最も非生産的な勞働に從事してゐるがしかし商業によつて遊惰な婦人を扶養するに充分な金を造る種類の階級と、婦人が一定の職業を有つてゐるが子供の世話とか、食事その他の家政の共同管理が餘り發達してゐない種類の人々によつて使用されてゐる。開けた家族の間では、雇人は共働者であり家族の一人である。が、別のところでは、搾取はまだ存在してゐる。しかしそれも昔日のそれより遙かに程度が低いもので、そして娘達が自分達は惡い待遇に從ふべきではないといふことを學ぶ迄のことである。實際に雇人に對する全體の態度は變つた。そして彼等は、社會の他の凡ての勞働者のやうに自尊心を有し、又尊敬もされてゐる。古い制度の下での長年の奉公が、消すに消されぬ卑屈な印象を殘してしまつた一人は、今彼女がどんなに暮してゐるかと聞かれるとその肩を聳かした。そしてその變化をかう要約した。

『オゝ！　今では彼等は私共に相當な寢床をくれて、もう私共をひどく扱ふことは出來ないから、前よりもズツとよく眠ることが出來ます。』

活潑な組合の仕事に加はる婦人の數は、組合員の數と一致しない。高い指導機關の間では、勞働者の中の僅かに六分四厘が婦人である。組合の有級オルガナイザアの間では、一・二六割が婦人であり、組合の中央委員の中では一・五割が婦人である。低い部門では婦人は比較的に活動的で、工場委員の數の約二割が婦人であり、勞働保護委員會に於いては二割以上が又さうである。

千九百二十六年十二月の第七回勞働組合協議會の席上で、チホメロワは婦人の間の仕事について報告をして、勞働者倶樂部の百二萬人の會員の中前年の二・九八割に對して三・三割が婦人であると云つた。約二十五萬の婦人が、勞働者倶樂部と關係ある各種の『團體(サークルス)』に



完備したロシアの托兒所の子供達

活動してゐる。左は婦人が加はつてゐる活動範圍の表である。

團體名	婦人の率
仕立、裁縫その他	九・四八九割
唱歌	五・七三割
圖書館	五　割
文筆	四・二九割
演劇	三・八七割
一般教育	三・五八割
自然科學	三・三四割
體育	三・一四割
生產問題	三・〇六割
勞働の科學的組織	三・〇四割
政治(基礎的)	二・九五割
マルキスト	二・八三割
レーニニスト	二・八二割
勞働組合運動	二・七〇割
反宗教	二・三二割
將棊	・七二割

これらの團體に於いて會員たることは、代表者會議の活動の上に加へられたものである。統計によつてこの活動の婦人の上に齎らす効果を數へることは、困難である。けれどそれらはどの程度の範圍に婦人が組合の廣い敎化事業に引入れられてゐるかを示してゐる。

凡ての工場と公共團體とは又、婦人の問題のみを扱ふ特別の欄を有つ『壁新聞(ウォールニュウスペーパア)』を有してゐる。普通の倶樂部の外に、組合は『レッドコーナア(赤い隅)』を設けてゐる。こゝでは、新聞、本、ポスタアなどが倶樂部に入らない勞働者に見せる爲めに並べられてある。どこか一定の活動に加へられてゐない婦人勞働者や勞働者の妻達は、時とすると遠足とか『見世物』などを通じて近づかれる。特別の『家族の夕べ』は、婦人を引寄せる爲めに組織される。男子は自分の妻や子供を携へて來る。プログラムには特殊の注意が拂はれ、赤坊は別室で掛りの姙婦が見るやうな設備になつてゐる。これがあるところでは一定の夜間托兒所に迄發達してゐる。

組合の活動によつて、工場はもはや單純な仕事場ではない。倶樂部、級、スポート、病院、劇場、圖書館――凡ての新しい社會的設備が、その周圍に群がつてゐる。勞働者は自分と自分の家族とに働きのない仲間の勞働者が恐らくは與へることの出來ない何かの娛樂を得る爲めに、隣りの奴を出し拔いてより多くの報酬を得やうとして闘鬪する必要はない。工場が生產を增すと共に、慰安と敎育の機會も增大して來る。勞働者は休みの日には、暑い日にコネイ島に彼の妻と十三人の子供とを連れ出して、皆がお互ひに怒鳴り合ひ罵り合ふやうなことはしない。その代り、彼は自分の組合が屆入れた短艇で、モスコオ河かドニエプル河かドン河を漕ぎ下る。子供達はピオニールの遠足に出かけ、彼の妻は一日閑暇である。多數の婦人は、又この凡てを利用するに怠惰であり冷淡である。けれど彼等は迅速に學びつつある。一年間には何千といふ勞働者達が、靜養所や療養所に休むやう送られてゐる。

婦人の間の失業は、千九百二十四年迄は增加した。その年は六十萬人に達して、それは登錄された失業者の總數の約半ばを占めた。

昨年あたり迄は、男女共に失業が急激に殖へた。工場が閉鎖すると、すぐに一大團體の村落への移住があつた。そして産業が復活すると、古い勞働者が群がり歸るだけでなく、賃銀や待遇がよくなつたことを聞いた新しい人々もやつて來た。さうなると産業の方が彼等凡てを收容するに足るほど迅速にとり擴げられることは出來なかつた。失業の增加は喰止められた。そして間もなく、産業の發達は必ずそれを最少限度に迄少くすることであらう。男子の失業者の多くは、不熟練工の間にある。けれど熟練工の要求は、殆んど無制限である。

共産黨、組合、及び勞働者(ナルコムツルド)は、婦人の間の失業を減ずる爲め絶えない戰ひをやつてゐる。その爲めには婦人を解雇する理由と、又婦人を雇入れるに障害となるものとをとり除き、彼等が熟練をうる機會を增すといふ手段をとつてゐる。失業保險は、失業者の五分を覆うてゐる。けれどもそれが主として熟練工に割當てられてゐる關係から、婦人よりも男子の方がより多くその恩惠に浴してゐる。手當そのものは、普通五ルーブルから十五ルーブルに達するだけである。けれど例へば無料宿泊所、無料公共食堂、免稅、値下げ等々の如きある種の特典が凡ての失業者に與へられてゐる。そして失業中の婦人は出産に當つては就業中の勞働者と同じ特別の手當をうけ、無料醫療をうけてゐる。失業を緩和する他の特殊の方法は、公共の勞働と『勞働者協同組合』(レーボアアルテル)とである。この手段で援助されてゐる失業者の約四分の一が婦人である。

ソビエット政府の勞働立法は凡て——八時間勞働、社會保險、療養所設備、休養所、毎年の休暇、特別の勞働服、保護的設備と衞生法、十四歳から十六歳迄の子供に訓練として僅か四時間の勞働を、十六歳から、十八歳迄に六時間の勞働を許して、十四歳以下の幼年者の勞働の禁止等——婦人には最も重大な關係を有してゐるのである。昔の不潔にして危險な狀態が男子によりも婦人の上により以上の有害な結果をすら招いたことを考へれば、婦人はある意味に於いて、これらの規定によつて男子より以上を得てゐる。男子と共に得るこれらの共同の利益の外に、母性の社會的價値の認識と、婦人の生理的相違に基づいて婦人の勞働を統一する特別法が設けられてゐる。産業勞働者の爲めの四ケ月の出産期休養は、その勞働が特殊の熟練を要する非産業勞働者にも適用され、同時に事務勤務者には三ケ月が與へられてゐる。三週間の休養は、又流産後にも與へられてゐる。婦人が四ケ月後も病氣であつても、彼女は更に二ケ月は解雇されることを許されない。赤坊の爲めの支給額は、雙生兒の場合には二倍にされる。仕事を求むる姙娠中の女は、分娩期の三ケ月を理由として取扱ひに差等をつけられることは出來ない。

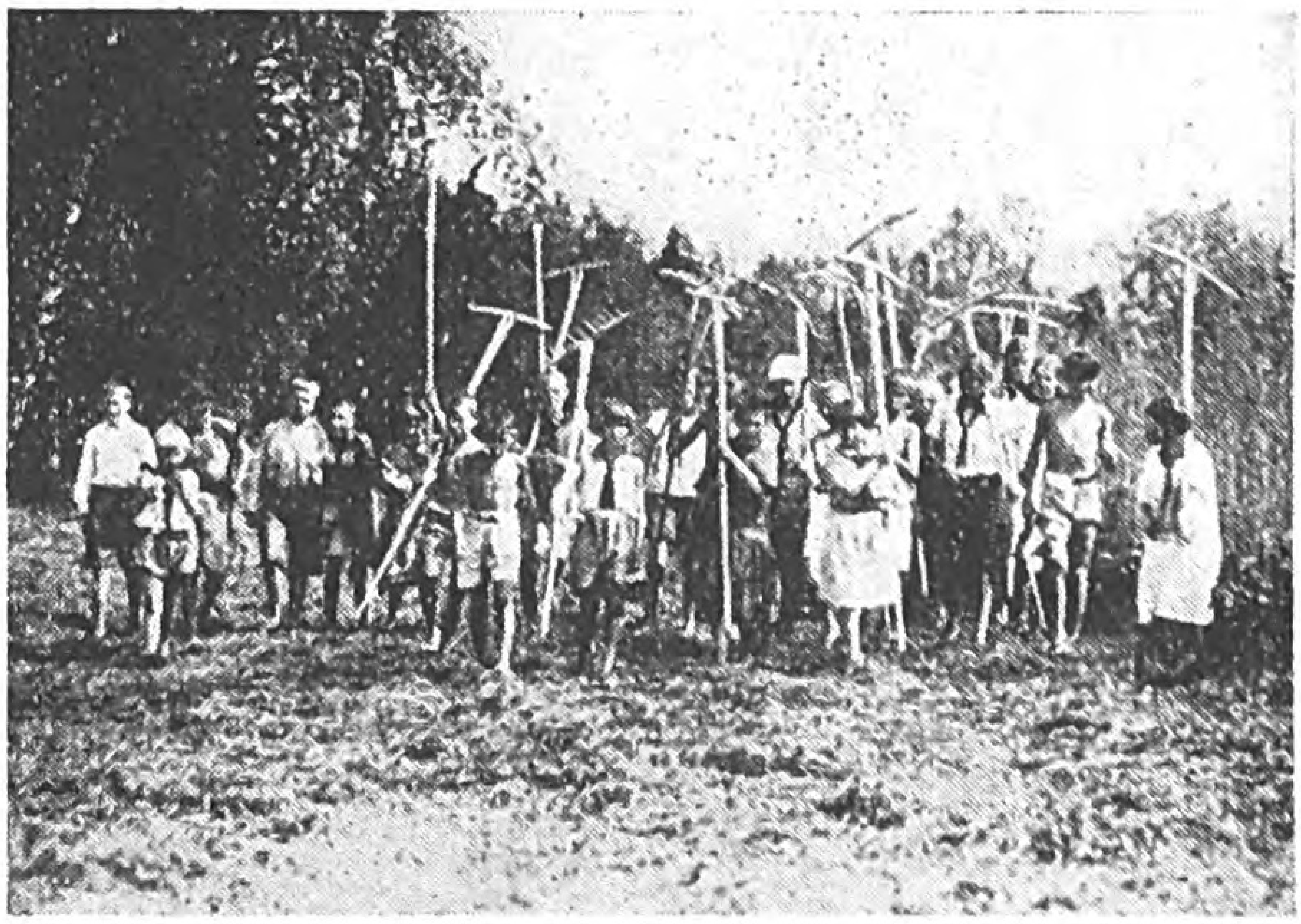
婦人が持上げることを許される重量については、勞働法に詳しい指令が與へてある。十八才以下の婦人は、物を上げる仕事に雇はれることは出來ない。婦人の運搬人が使用される處では、彼等の標準は男子の半分である。機械を動かし、或は特殊の熟練を要する仕事に從事する婦人は、一ケ月二日の休みを許される。勞働者が亞鉛屑、有毒ガス、又は他の危險な狀態に曝される印刷、化學産業、その他の職業の部門は、婦人には禁じられてゐる。そして彼等が不健康な場所で使用されるところでは彼等は牛乳と肉類の特別の給與をうける。本來は、婦人は極く僅かの例外を除いては夜間勞働を許されず、多くの危險作業を許されなかつた。これは不公平な結果を招き、失業を多くした。そして婦人自身がそれに抗議をした。この事は法律

の一時的の緩和となり、今日では婦人は特殊の場合には夜業を許され、又從來禁じられてゐた職業の或るものに從事することを許されてゐる。この緩和は、但し若い娘、姙娠中乃至は哺乳中の母親には適用されてゐない。車掌、油差、火夫等の或る種の勞働は、姙娠中或は哺乳中の母親には全然禁じられてゐる。そして勞働監査官は常に、婦人の健康に害があると思はれる凡ゆる勞働から婦人を轉じしめることが許されてゐる。

或る方面に於ける婦人に對する差別待遇とは反對に、婦人を彼等がその種類の仕事に適當してゐるか否かを問題とせずして、凡ゆる種類の勞働に就かせやうとする傾向がある。かうして鑛山學校に於ける女子の率を一割に引上げやうとする試みが、鑛夫組合によつて育まれた。そしてある婦人は、婦人を保護する特殊法は凡て何時でも差別待遇を生ずると主張して、その撤廢を要求した。

リヤザノヴァは、恐らくこの問題についてロシヤで爲された最も完全な研究である『婦人の勞働』と題する彼女の著書で、(千九百二十六年モスコオウヲーカア誌によつて發表された) この見解を論難した。彼女はかう書いてゐる。

『が、婦人は鑛山に於ける熟練を要する勞働に働いて成功することができるか？そして組合はその爲めに爭ふべきであらうか？私の考では、婦人が生理的にその種の勞働に適せず、姙娠中の婦人に取つてはそれが全然不可能である以上、婦人が鑛山に働く理由はない。これは「婦人の爲めに平等の權利」への道ではない。』



ロシアに於けるコンソモール達の農業實習

リヤザノヴァは、婦人にとつて特に困難である伐木及び建築勞働の如き他の勞働の種類を指摘してゐる。彼女は若い婦人が新しい職業に就くことを奬勵しやうとする傾向に對して警戒し、それは彼等を害するだけでなく、彼等がその損失を悟ることが出來なければ全運動を阻害するとしてゐる。

『勞働者が、産業それ自身の過程に急激な變化を持ち來たすことが出來なかつた以上は、』と、彼女は續けてゐる。『職業の選擇が偶然の事情にかゝつてゐて、傾向とか才能とかによつての新しい世代の特殊の研究がない限りは、「最虚弱の分子」が「特に危險な部門から排除されることは、進歩の一歩である……男女の子供の肉體的訓練に必要な注意が拂はれる社會に於いて、十六才以下の子供等には、職業的の活動が許されず、集團的食事、集團的生活の組織が、婦人とその爐邊から解放する時に、男女間の關係がどんなものであるであらうかを云ふ事は、無論困難なことで

ある——けれど、理想的な勞働狀態と最も健康的な生活狀態の下に於いてすら、母たる職務の完成は、婦人を特種の位置に置き、特殊の保護手段を必要とする。

凡ての婦人勞働者の中で一・六割は熟練工、三・六九割は半熟練工で、その殘餘が不熟練工であるので、ロシヤでは今は私共が婦人がそれをやつてゐるのを見て驚くやうな仕事の種類は一つもない。多數の婦人は、戰つて得た市電の車掌として運轉手としての彼等の地位を保つてゐる。ロシヤには、婦人の鉛管工、錠前屋、旋盤工、製圖家、電氣技師、船員、兵士、建築家、技師、赤衞軍士官、及び船長すらもある。

婦人の『經濟的獨立』といふ言葉は、ロシヤには餘り聞かれぬ言葉である。革命前には、全勞働階級にとつて大切なのは經濟的獨立であつた。革命後は、彼女自身の生活をうる爲めの婦人の權利を問題とはしなかつた。理論上では、凡ての健康な男と女とは、働く權利丈けでなく又働く義務を有してゐる。しかし乍ら、事實としてはロシヤに於ける結婚婦人の大多數は、尙ほ經濟的に彼等の良人に依賴してゐる。婦人がより高い報酬を與へられる產業の部門に入るべき充分な熟練を獲得し、今日よりも家計のもつと重要な部分を負擔するやうになる迄は、これは止むを得ないことである。『同じ仕事に同じ報酬』の法律は確立されたが、凡ての產業に從事する婦人の一ケ月の平均報酬は、千九百二十六年の終りに男子のそれが六〇ループルであるのに對して、平均四一・七四ループルであつた。これは、婦人が大部分不熟練であるといふ事實の爲めのみではない——それは又、多くの男が婦人と同じ賃銀で働くことを嫌ふので、何かの口實で男子と同じ仕事をする婦人がより低い場所に置かれたことにもよつてゐる。これは產業勞働者の間に於ける場合よりも、農業勞働者の間により多くある傾向である。

私が住んでゐたサウホズ(政府の農場)では、料理、洗濯等々の如き專ら『婦人の仕事』と關係があるこれらの仕事にのみ一定の數で使用されてゐた。けれど農繁期の間には多くの婦人が、耕耘、草取り、掃除、摘取り、及び收獲の仕事の日傭に雇入れられた。これらは婦人のバトラチキ——村の最も貧しい婦人達で、その多くは自分達の土地を耕やすべき方便を持たず、他人に雇はれて生活する寡婦であつた。これらの婦人達の三分一は、土地及森林勞働者の組合に組織されてゐた。凡ての農業企業にあつては、婦人日傭人は一日八十五コペク、そして男子は一・一〇ループルを支拂はれることが極つた規定になつてゐた。バッラホキは、ロシヤのいかなる勞働者の團體よりも、後れてゐる。私は彼等に何度となく、何故に彼等は男子と同じ賃銀を貰ふことを主張しないかと訊ねた。彼等は一寸その肩をすくめて云ふのであつた。『私共は前には一日に十五から二十コペック貰つただけです——今は私共は四倍から五倍貰ひます——何故もつと貰はなくてはならないのです? 女が男より安いことは、誰れでも知つてゐます!』

興味あることには、最後に日雇勞働が勞働者の性を目標とせずに勞働の質によつて賃銀が與へられねばならぬといふ提案を實現せしめたのはアメリカ人の支配人であつた。この新しい規定が實施された翌日、三人の男と三人の女とが果樹園の掃除に雇入れられた。男達は新しい規則を聞くと、持つてゐた道具を投り出した。

『婆さん達と同じ賃銀で働け? この世界にない事だ! 俺達は

大恥を掻くぞ――誰も彼も俺達を笑ふだらう。男の方が強くてよい仕事が出來ることは、誰でも知つてゐる……』

するど婦人は婦人で怒鳴し出した、

『よろしい、それではお前さん達の方が私達よりより仕事が出來るか、見せて下さい。果樹園を半分になさい――お前さん達はそちらをお取り下さい――私達はこちらを取る……』

婦人達の方が仕事が早かつた丈けでなく、彼等は又仕事をズッとよくしてゐた。男達は異議を唱へることは出來なかつた。同じことが他の仕事でも起つた。そして又婦人が勝つた。男子は最早や新しい規定について不足を云はず、温和しく彼等の云ふ『婆さんの日傭賃』を貰つてゐる。しかし公平に言つて、私は田畠の仕事に於いてはこれは最も簡單な仕事の場合にのみ眞實であるといふことを云ひ添へなくてはならない。熟練を要することになると、婦人は一般に非常に不手際な仕事をする。そして何故婦人の勞働が男子のよりも安いとされるかを見ることは、困難なことではない。極く稀れには、何人かの男の仕事に比較して引けを取らない仕事をする婦人がある。けれどこんな場合は極く稀れである。

かうして婦人達が、男子が自分達のものと考へてゐた世界に一歩一歩その道を開きつゝある一方では、各種の産業の部門に婦人の勞働の適用に關する組織立つた研究が、次第に注意を引きつゝある。全國にわたる支部を有つナルコムツルドの下に婦人勞働中央委員會とモスコオに於ける科學的勞働學會とは、婦人の職業と社會的疾患とについて、――重量運搬の母性の機能の上に及ぼす結果、及び各種の體的勞働、地下作業、震動、及び夜間作業等の婦人の肉體の一般的發達に及ぼす影響について、特殊の研究を行つてゐる。

これらの委員の發見は、新しい産業の部門の爲めの婦人の訓練に關する將來の政策を決定するだらう。その間は、肉體的の緊張を要する職業に入らんとする女子の爲めには、特別の體格檢査が必要である。工場に働く婦人勞働者の數に比例して、工場勞働學校に於ける席を持たうとする運動が行はれてゐる。

これらの工場勞働學校、或はフアブザウヒス（と呼ばれてゐるが）は、教育組織に非常に大きな役割を勤めてゐる。生徒は無論十才から四才位違ふことはあるが十四歳或は十五歳で取られた一般に徒弟で、その中の幾分かを凡ての工場が收容しなくてはならない。生徒達は工場で四時間働き、そして學校で四時間を過すのであるが、そこでは彼等は普通の學課と共に、更に高い熟練を要する仕事の部門に必要な理論的な智識を與へられてゐる。或る程度の基礎教育は、入學に必要とされてゐる。私が訪問した幾つかの工場學校で、私は女子の數と彼等の成功の度とに非常な異同を發見した。割合は殆ど何時でもその工場の女工の數より少なかつた。けれども殆んど到るところで、私は女子の數が急速に増加しつゝあることを發見した。紡績學校では、女生徒は愉快な觀物をなしてゐた。が、ロストフの紙卷煙草工場では、そこには以前は十二人の生徒がゐたのであるが、二人を除く外は、辷り落ちなくてはならなかつた。そして教師は私に、殘つてゐる二人の仕事がかよわい（スラッベィ）と語つた。金屬産業では未來は婦人は工場學校には入れられなかつた。しかし乍ら、彼等は次第に這入り込んでゐる。女子の一般に示すところが男子のそれ以下であつて、彼等が劣つた技術的の創造力と熟練とを見せてゐる一方で、彼等は旋盤と製圖の仕事に非常によく適し、そして特殊の場合には非常に高級の機械作業に適してゐることを證明した。凡ての工場學

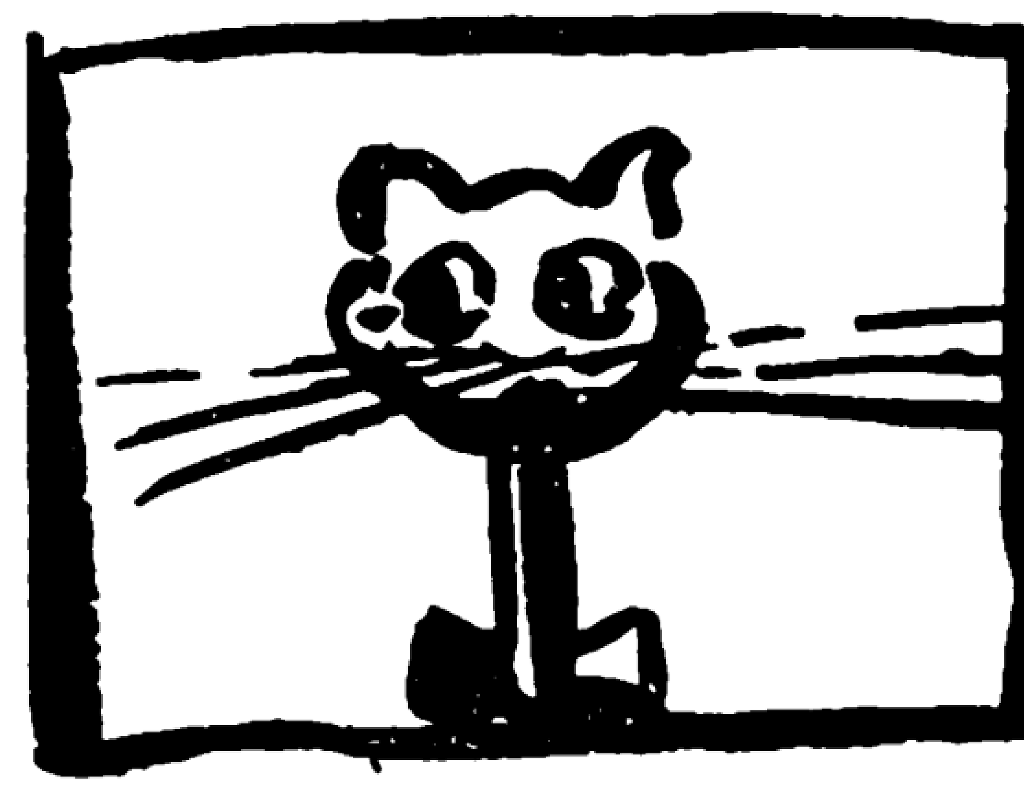
校を通じて、千九百二十三―四年には、僅かに一・六五割の女子があつた。千九百二十四―五年には二・二割、千九百二十五―六年には三・七割、そして最近の統計はその數が千九百二十六―七年頃には四割に增加したことを示してゐる。

組を爲した、又は個人としての徒弟制度は、又婦人により多くの熟練を敎へる爲めに益々使用されてゐる。この方法によつて、その仕事に熟練な勞働者は、不熟練な勞働者の爲めに敎師として使用されてゐる。この制度によつて、千九百二十六年には九千人の婦人が『熟練工』に編入され、八萬人が『半熟練工』に編入された。ある地方では、婦人をより高い熟練を有する仕事に進ましむる爲めに、『婦人勞働に關する地方委員會』の慫慂によつて、不斷の運動が行はれて來た。

又、婦人をより高い管理上の地位に進めようとする運動も、行はれた。比較的に少數の人が產業上の高い地位を占めてはゐるが、しかしその地位にある人々は、彼等の家政に長ずる傳統をよく善用して、嚴密に經濟管理を實行して、一般に生產を增してゐる。

古來の習慣が、大衆の間にはまだ深く根を下ろしてゐる一方では、革命によつて生れた新しい敎養ある婦人達がある。健康で、落付きあり、大膽で、彼等は投票をし彼等自身の生活をうる權利より、その包含するところ遙かにもつと廣い獨立を發達せしめてゐる。戰爭と革命とは彼等に、彼等が男子の勞働をなしうることを敎へた丈けでなく、又彼等が彼等自身の人生を營みうるといふことを敎へたのであつた。その仕事の上で管理者としての地位にあると勞働者であるとを問はず、彼等はもはや昔の服從的な踏みにぢられた生物ではない。彼等は仕事そのもの故に、自分達の仕事に興味を持つやうになりつゝある。彼等は威嚴と自尊心とを得、智識と熟練との爲めに飽くなき欲求を有つてゐる。彼等はまだ數に於いては少ないけれど彼等は他の人々の間に於ける醱酵素である。

（ゼシカ・スミスの『ソビエットロシヤの婦人』から）



落合ゆり子

レーニンの戀愛觀

——レーニンは婦人になんと敎へたか——

菊池小夜子

レーニンといへば、誰でもすぐ恐ろしい鬼のやうな人を想像しないでせうか？　けれども、レーニンの死をきいた幾百萬もの人々のうち誰にもまして嘆き悲しんだのは、先づ第一に、ロシアの婦人であつたのです。次のことばは、一勞働婦人が、レーニンの死を知つて、胸を震はせ語つたところの、あはれにも深い長歎息でありました。その素朴なことばのなかに、レーニンを愛し悲しむ眞實が寶玉のやうに打ち込まれてゐるのが、はつきりとわかるではありませんか！

「私はウラヂミル・イリキッチ（レーニンの本名）を一度も見たことがない。だが、私は彼を知つてゐるし、また愛してゐる。たゞ母だけがその子を知り愛することができるやうに、親愛なレーニンのすがたは、私の心の中に生きてゐるし、またこれからいつまでも生き私の全生活を滿たすであらう。私の生活全體はイリキッチによつてこんなに輝やかしく、自由に、そしてよろこばしくなつた。幾百萬のプロレタリア婦人といつしよに、私はいふ。イリキッチあなたは私達の指導者であつた。あなたは、私達を新しい生活へ導いてくれた。そしてあなたに對する私達の追憶は決して滅びないでせう。」

階級鬪爭の偉大なる指導者であつたあのレーニンが、わたくし達——苦しめられ、はづかしめられた無産婦人の指導者であり、敎師でなかつたはづはありません。いえ、レーニンは、工場内の勞働、家事の世話、子供の面倒と色々の仕事で二重三重の軛を脊負つてゐるわたし達無産婦人の最もよき指導者であり、敎師であり、また父でもありました。わたしはこのことをクララ・ツエトキン女史の「レーニンと婦人問題」といふ書物に接して、はじめて知つたのです。婦人運動や婦人問題に關する書物を書いた人は勿論かず多くありませう。だが、わたしはレーニンほどに虐げられた婦人大衆の立場に立つて婦人の解放のために叫びたたかつてくれた眞面目な婦人解放の鬪士を多く知りません。もしわたし達が眞劍に、彼が婦人に呼びかけた聲に聽き入るならばその中に婦人解放のための無限の敎訓を引き出すことができるでせう。

近頃、新聞に雜誌にコロンタイ女史の戀愛觀や小說がやかましく論ぜられてゐますが、おそらくコロンタイ女史も、もつとも多く學び敎へられたであらうレーニンの婦人觀、戀愛觀をしらべてみるのも決して無益ではないでせう。わたしがいま拙い筆をもちまして、なさんとするくわだても、その意味からするわたしのさゝやかな努力に過ぎません。

レーニンは、まづ、その階級的な立場から、婦人の解放は、無產階級の解放と勝利なくては行はれない。無產階級の勝利こそ、婦人大衆の永久の解放と勝利とを確保するものであると強く／＼叫んで居ります。そして、戀愛問題や性的問題もやはりこの同じ立場から、これらの問題をとりあつかつてゐます。

「家政は大部分の場合、婦人が實行しなければならぬ、最も不生產的な、最も無益な、最も野蠻な、そして最も困難な仕事である。それは何等かの方法で婦人の發展に資することができるやうな何物をも含まない、際限なし小さな仕事である」…「我々は婦人を家政から解放する模範的な設備、食堂、飮食所を建設する。正にこの設備を作るための、最も偉大な仕事が婦人の肩の上にかゝつてゐる。」

これがレーニンの家庭問題に對する意見と希望であります。そしてレーニンは婦人が家庭からの解放をなしとげ、これらの諸設備を完成するためには、どうしてもこの資本主義社會への闘爭をなし、その勝利によらなければならないといふのです。だから、ソヴエット政府のみが、家庭婦人を家庭奴隷から解放したと自信をもつて敎へてゐるのです。

わたしは婦人の解放は、資本主義が不當にも植付けた男性の支配――その優越的な支配下にある家庭からの解放がまづ最初の困難な、しかも、どうしても解決しなければならぬ問題かと思ひますので、レーニンの戀愛觀をうかゞう前に、すこしく立ち入つてのべたまでであります。

さて、レーニンは、人生のいろ／＼な問題のうちで、もつとも複雜微妙な問題とされてゐる戀愛と結婚について、なんといふでせう？

レーニンは、各個人の感情や、享樂に對する熱望も、結局「舊い支配關係が爆破され、階級社會の全世界が沒落し始むるときに、はじめて拘束なき力を容易に獲得する。ブルジョア的意味での性的形態および結婚形態では十分ではない。性的革命および結婚革命はプロレタリア革命に適應しつゝ接近してゐる。」と叫び、先づその階級的立場をあきらかにしてをります。ほんとうに、若い男女の百千の戀も、資本主義社會にあつては、眞に美しい花を開くことがゆるされないのではないでせうか。わたしは自分の身邊に繰り返される多くの友人の戀愛が、貧しきが故に、いつも悲劇に終るのをどんなに多く經驗させられてきたことでせう。すべてが價格がある商品社會にあつては、戀愛もまた、その鐵則を打ち破ることが出來ないのです。だから、結局、この搾取制度の改革をまたねば、プロレタリア婦人――いえ、ブルジョア婦人でさへも――は、ついに戀らしい戀はたのしむことができないでありませう。

とはいへ、レーニンは、そのために決して、戀愛と性慾とを厳禁してゐるわけではないのです。「青年に僧侶的な禁慾を、そして汚れたブルジョア道德の神聖を說敎することほど誤つてゐるものはない。」これが、レーニンの戀愛と性的問題に關する解答です。しかし、それかといつて、共產主義が戀愛や性慾のルーズな關係をあだかも許

容してゐるかのやうに、あるひは共產主義を「戀愛解放」の理論ぐらゐにしか思つてゐない不眞面目な考へかたに賛同してゐるのではありません。いえ、レーニンは「性的生活の放肆は、ブルジョア的であり、崩壞墮落の現象である。プロレタリアートは擡頭しつつある一の階級である。彼は痲醉への、或は刺戟劑として醉やアルコールによる泥醉に俊るものを、その階級的地位から、共產黨主義的理想から即ち、鬪爭への最も强い刺戟として受取る。」と、斷呼して性的生活、戀愛關係の放肆とにたたかひます。そして、さらにつゞけて、わたし達に敎へて曰く。「あだかも私が、私の批判によつて禁慾を說敎したかのやうなことは少しもない。そのやうなことは思ひもよらないことである。共產主義は禁慾をもたらすべきでなく、むしろ、生活の歡喜や、滿たされた戀愛による、生活の力をもたらすべきであるだがしかし、私の見るところによれば、現在しきりに見受られてゐるところの性的肥大症は、生活の歡喜や生活の力を與へはしない。それは單に奪ひ取るだけである。革命の時期に於ては、それは害惡全く害惡である。と。これです。これがレーニンの戀愛と性慾とに關する根本的な意見です。

要するに、レーニンは、婦人が、わけて勞働婦人農村婦人が實際生活の中で家庭で、社會の上で、男子との完全な同權が確立されなければ、即ち、資本主義社會の革命が、プロレタリアとプロレタリア婦人との巨大な力によつて遂行されなければ、婦人の幸福——戀愛、結婚、性慾、家庭に關するあらゆる幸福はない、しかも、これこそは婦人みづからがなさねばならぬ、もつとも貴い、もつとも大きな仕事であることを、私達、貧しき婦人に敎へてゐるのです。

では、レーニンにしたがへば、戀愛も性的問題の根本的な解釋も現在の社會では所詮、はかない望みに過ぎないといふのでせうか？

禁斷の木の實にも等しい、食すれば身を滅する以外のなにものでもないといふのでせうか？　わたしは思ひます。決して、さうではない。と。しかし、レーニンにとり、わたしたち無產婦人にとつてここに問題となるのは、戀愛や性慾を、現在でもなほ、否定するといふことではなしで、これからの問題をわたしたちが、どんな態度をもつてとりあつかひ、また、それをわたし達の多くの仕事の中でどんな地位をあたへるかといふことです。

すべての意志、すべての感情、すべての力を、たゞ戀愛のために捧げる、これは申すまでもなく戀愛至上主義です。だが、わたし達にとつて、すべての意志、すべての感情、すべての力を與へるに値するものは、無產階級を、貧しく、虐げられたものを、解放する事業と運動とのほかにありません。だから、今日わたしたちのあらゆる力はこのプロレタリア革命の上へ向けられねばならぬのです。したがつて、戀愛や性慾やの、さうした問題は、わたし達の生活と思想の決して中心問題ではなく、また、あつてはならないのです。けれども、もしも、それがさうしたわたし達の仕事——プロレタリア婦人解放の事業をかへつてたすけ、はげます力となるやうな場合のみ、戀と性との相手が、戀人であり、愛人であり、また妻である以上に同志として堅く結合され、しかも、その同志的結合が、かへつて解放運動を益する場合のみ、わたし達も、戀愛と性慾とを享樂することが許されるであります。

しかし、多くの優秀な同志が、支配階級の手によつて、日夜わたし達の陣列から奪ひ去られつゝあるとき、さうしたたつたひとつの望みがなんとはかない慰めであるかゞわかるではありませんか！

さうです。それであればこそ、わたし達はいよ〳〵レーニンの聲にきき、レーニンの教を學んで、はげまされ、みちびかれて、レーニンが指し示してくれた、婦人もほんとうに幸福であり、自由であり、平等である社會建設の道を進んでゆくことができるのです。このやうなレーニンを紹介するにもつともふさはしいクララ・ツエトキン女史によつて、この書物が世に送られたことを、わたしはこよなくうれしく思ひます。をはりに、七十歳の誕辰を迎へられながら、今日もなほプロレタリアとプロレタリア婦人の解放のために建闘してゐられる著者ツエトキン女史にこころからなる感謝を捧げたいのです。

——一九二八年——



勞働婦人の戰線を展望して

赤松明子

一、婦人の自主的運動の擡頭

我國の社會運動は後進國として特殊的な發達をとげつゝあるが、婦人運動もこれと傾向を同じうし、歐米先進諸國に比して極めて變則的な發展過程をとるに至つた。元來婦人勞働組合は婦人勞働者の切實な生活意識から生れた婦人自身の經濟團體であり、また婦人の政治的團體は婦人自らの政治的自覺と要求とによつて生れた婦人の自主的團體でなければならないのに、我國の婦人團體はその經濟的たると政治的たるとを問はず、主として男子の必要のために、男子の手によつて造られた傾きがある。そして婦人勞働者は殆んど凡て勞働組合の婦人部として男子によつて組織され、男子役員の意志のまゝに動かされてゐる傾きがある。また三個を數へる無產婦人團體も各無產政黨の婦人部の如き感を呈し、甚だしきに至つては單に無產政黨の陣容を整へるためにのみ生れたかの如きものがあり、何等婦人の自主的自覺に基かないで、唯だ男子のお先棒としてビラまきをしたり、演說會に出たりすることのみをしてゐるやうな團體もないではない現狀である。

勿論婦人の解放は無產階級の解放と同時に可能であり、從つて婦人運動も單なる女權運動としてではなく、全無產階級運動の一翼として、男子と同一戰線に立つて資本主義改造の終局の目的のために戰はなければならないことはいふまでもないけれども、それに至る一段階として婦人が婦人の自主的意識に目覺め、婦人の特殊的問題を自らの手によつて解決してゆかなければならない一時期がある。即ち女權運動の如きがこれである。これは次の段階に至る必須的過程であつて、この時期を通じて婦人は眞の無產階級意識を明確に把握するに至るのである。然るに我國の婦人運動はこの發達段階を正しく經過することなく一足飛びに全無產階級運動の中に捲きこまれてしまひ、唯だ男子の意志に盲從し、婦人の特殊的立場をいつか忘れて男子のお先棒に使はれるやうな狀態を現出するに至つたのである。しかし今や我々は、この誤謬——必然的な誤謬ではあるが——

をはつきり認識して、我國の婦人運動を正道に導くために、また我國婦人運動の健全なる發達を促進せしめるために、無產階級運動に對する全面的理解の上に立ち、且つこれと正しき友誼的關係を保つところの婦人の自主的運動を起さねばならぬ必要に迫られてゐる。

この時に當り少數ではあるが、本當に婦人の自主的意識に目覺め婦人運動の正道をはつきり認識して、その戰ひに勇敢に參加せんとするものが現はれて來たことは喜ばしい現象である。この傾向は最も長く組織的訓練を經た婦人勞働組合員の間に著しい。例へば去る八月二十二日に行はれた鐵道現業委員會の選擧に於て、はじめて選擧權を與へられた婦人がこれを有效に行使し、相當の成績を收めたことは本當の意味に於ての婦人の自主的進出を物語るものでなければならぬ。また勞働總同盟の日本縫工組合の婦人鬪士五名が、從來男子によつて壟斷されてゐた勞働學校へ、組合の派遣生として送られた如きことも注目すべき事實である。

更に私は、婦人の自主的運動の最も顯著な表れとして、勞働婦人聯盟の成立、野田勞働爭議に於ける婦人の戰績、勞働組合婦人による同一勞働に對する同一賃銀の要求に就いて語るであらう。

二、勞働婦人聯盟の成立

勞働婦人聯盟が創立されたのは昭和二年六月二十四日であるが、その成立を促した根本的原因は三つある。その第一は婦人勞働者の自主的運動を促進せしむることの必要、第二は我婦人勞働運動の現在の發展段階に於ては知識階級婦人の協力を可なりに必要とする事に對する認識、第三は現實主義を奉ずる無產階級婦人の緊密なる聯絡機關の必要である。

抑々我國の婦人勞働組合は殆んど凡て男子勞働組合の婦人部として男子勞働者によつて組織されたものであつて、決して婦人勞働者自らの自覺と要求とによつて生れたものではない。それは慌ただしく發達した我國社會運動の必然的結果であるが、しかしそれがために、各勞働組合の婦人會員は、二三の優れた鬪士を除いては、殆んど凡て組合行政に無關心であり、唯だ男子幹部の命令によつて盲動する傾向がある。まして婦人勞働者組織に積極的に活動するやうな婦人を見出すことは非常に困難である。こゝに於て婦人勞働運動の自主的發達に貢獻する過渡的又は補助的要素として、時間と熱情と誠實を持つ知識階級婦人が、婦人勞働運動に協力することも亦決して無益にあらざることが一般に認められた。

然しこれは我國婦人勞働運動の現在の發展段階に於ては必要であるけれども、決して永久に亘るものではない。また婦人勞働者解放の根本的條件は、あくまで婦人勞働者自らの力を原動力としなければならないことはいふまでもない。故に我國現下の婦人勞働運動の最も重要なる任務の一は、一方優秀なる婦人勞働運動者を養成してゆくと共に、他方彼等をして、終局の目的意識をしつかり把握せしめつゝその當面の過程に適應する婦人の自主的運動を起させるやうに訓練して行くことにあると思ふ。

要するに我國現下の婦人勞働運動の進むべき道は、相當期間男子勞働運動者並びに知識階級婦人の協力を求めると共に、他方勞働婦人の自主的運動を促進せしめるやうに努力することにある。ここに勞働婦人聯盟存立の重大意義が存する。

現在我國の社會運動界に右翼、中間、左翼の三つの分野があることは改めていふまでもない。この中、中間的要素は將來何等かの形

に於て整理されるべきものであつて、結局に於ては右翼と左翼との明確な對立を形成することになると思ふ。而して早晩社會運動の凡てが右翼か左翼かどちらかの旗の下に統一されるべきは必然的過程である。

然るに從來私達現實主義を奉ずる婦人の緊密なる聯絡機關の必要が各方面から叫ばれてゐたにも拘らず、不幸にしてそれは一つも存在してゐなかつた。そこで私達はこの目的を達するために、卽ち婦人の大同團結を圖るために勞働婦人聯盟の創立を企てたのである。

從つて勞働婦人聯盟の構成分子は、主として勞働婦人であるが、その他勞働者の妻や姉、小中等學校教師、職業婦人等がゐる。そしてその當面の仕事としては、講演會や研究會を開いたり、講習會や懇親會を催したりしてゐる。また勞働婦人のためにパンフレットも發行することになつてゐる。其の他爭議の際には寄附金や慰問品を集めたり、その應援に會員を派遣したりしてゐる。就中最も力を入れてゐるのは研究會であつて、毎月二回婦人問題、經濟問題、政治問題等を組織的に研究し、且つ時事問題に關しては活潑な討論の火花を散らしてゐる。

現在勞働婦人聯盟の役員は主として勞働婦人であるが、彼等は、小面倒な會計の仕事から可成りの才能を要する聯盟の行政的職分に至るまで、立派にやつてのけてゐる。この現狀から押せば、近き將來に於て、勞働婦人が、勞働組合の支部に於ては勿論のこと、中央本部に於ても、責任ある役員として、男子に劣らぬ能力を發揮するであらうことは容易に想像され得る事柄である。

三、野田勞働爭議に於ける婦人の戰績

一世の視聽を集めた野田の勞働爭議は七ケ月餘に亘る長期の鬪ひであり、我國最長の爭議としてのレコードを作るに至つたが、この爭議がかくも長い間相當の秩序を守り、あくまで正々堂々と一絲亂れず最後まで鬪ひ續けて來たことは、勿論日常に於ける組合の訓練がよく行き届き、結束が非常に强固であつたことに起因するものであるが、決してこれが全部ではない。私達がこゝに見逃すことの出來ないのは、後方に働く人々、卽ち夫を勵ます妻、男子組合員を助ける婦人組合員、また父親を援けて可憐な鬪ひを續けた少年少女の力である。若しもこれらの人々の雄々しい健げな努力がなかつたならば、この爭議はあれ程の持久力を、發揮し得なかつたかも知れない。家庭を守る婦人がしつかりしてゐなかつたために、男子が會社に買收されたり、また妻がその窮狀に堪へかねて夫を責むるのあまり、爭議團に多くの裏切者を出して、その結果、爭議の慘敗を招いた例を私達は數多く知つてゐる。然るに野田の婦人達は、或時は先頭に立つて請願運動を起し、また或時は男子を勵まして決死的鬪ひを續けさせたのである。

野田の勞働組合には當時三百名位の婦人組合員がゐたが、彼女等は一人殘らず爭議に參加して、爭議團本部の炊事を一手に引受けた。また婦人組合員は毎日〳〵集合所に詰めてゐて、朝夕の掃除から、第一線に働く鬪士の汗と塵にまみれた衣類肌衣の洗濯やほころび縫ひに至るまで寸暇もない有樣であつた。しかしこれは婦人組合員の活動であつて、左して珍らしいことではないが、この爭議に於て最も注目に値するものはなんといつても家庭婦人の働きである。

野田の組合は、その財政の豐かな點に於て、組合員の訓練統制がよく行はれてゐる點に於て、またその基礎が最も强固な點に於て日

本一の組合といはれてゐただけあつて、家庭にまで勞働組合主義が徹底してゐたことはよそに見られないところである。各家庭婦人は全く獨立してゐて何等の組織も持たないのであるが、凡ゆる運動を自發的にまた自主的にそして剩へ組織的に敢行した。

爭議團員の妻女達が、生れたばかりの赤兒を背に負ひ、頑是ない幼兒の手を引き眞夜中に諸所の神社に戰勝祈願をしたのも、また婦人組合員と力を協せて諸植の陳情を行つたのも皆婦人達の自發的行爲であつて、爭議團の少しも與り知らぬところである。尙ほ本年四月一日には家族全部(四千人以上)大擧して上京し、爭議の實情を請願によつて訴へんとしたが、警官のために喰ひとめられ、解散を命じられるや、大いに憤慨し、方向を轉じて猛烈な勢で町を練り歩き婦人の威力を示した。このやうに婦人の意氣は素晴らしいものであるが、殊に婦人の通有性として感情的に强く、裏切者に對しては何等假借する所なくビシ／＼とやつける。これに就いては次ぎのやうな悲壯なエピソードがある。婦人部に屬する某女はその夫が裏切行爲をしたために、大いに怒つて、早速衣類を纏め、子供を連れて彼の許を去つてしまつたのである。これら婦人達の目覺ましい戰績は永しへに我國勞働運動史の一頁を飾るものでなければならぬ。

四、同一勞働に對する同一賃銀の要求

婦人の賃銀が男子のそれに比して不當に低廉であることは世界各國共通の現象であつて、婦人勞働運動の永き歷史を有する英國に於てすら、永い間同一勞働に對する同一賃銀の要求が戰はれて來たのである。我國に於ては、曾て男子勞働運動者や社會主義者等が、理論として同一勞働同一賃銀を主張したことはあるが、婦人自らの實際問題としてこの要求が叫ばれたことは未だ曾て一度もなかつた。それは一つには婦人勞働者の無自覺によるが、他方に於てはいまだ社會的環境がそれまでに成熟してゐなかつたことによるのである。しかし最近に至り資本主義の成熟に伴ひ婦人勞働者の社會的、經濟的自覺が急速に進んだ結果、婦人勞働者自身の間から同一勞働同一賃銀の要求が叫ばれるやうになつて來た。

從來男女の賃銀の著しき相異を是認する理由として擧げられたものは、一、男女間に於ける能率の相異、二、婦人の生活程度の低きこと、三、婦人に小遣ひ取り職業者が多いこと、四、婦人に家族扶養の義務がないこと、五、婦人の間に於ける團結力が薄弱なこと等である。けれどもこれは、過去に於ては、幾分眞實であつたかも知れないが、現在に於ては狀態が變つてゐる。

第一に男女の能率の問題であるが、今までは婦人が勞働生活を嫁入りまでの腰かけと考へ、永久的勞働に就くことが少かつたため、必然的に不熟練勞働者として止まつてゐることが多かつたので、能率に於ても男子に劣る傾向があつた。しかし漸次婦人も經濟的壓迫により永久的職業に就くことを餘儀なくされ、その結果熟練勞働者として男子に劣らぬ能率を發揮するものが續々現はれて來た。然るにこの場合に於て婦人なるが故に不當に割引された賃銀を支拂はれてゐるのである。また紡織業に於ては、婦人殊に十四五の少女でなければ出來ないやうな特殊な仕事があるが、斯くの如き場合に於ても、婦人等は明らかに男子と同一賃銀を受くる權利があるのに拘らず、五割六割も低い賃銀を受けて甘んじてゐなければならないのが普通である。しかし能率問題は個々の場合に夫々異るので、可成り面倒な問題であるが、從來は同一の能率をあげる男女勞働者に對し

て不當に相異した賃銀が支拂はれてゐたのである。

第二は、今までは婦人が男子よりもまづいものを食べ、何等の娛樂をも味はないで、唯だ臺所と洗濯をしてゐるのが婦人の美德のやうに考へられてゐたが、婦人の社會的自覺が進み、單なる男子の奴隷としてではなく、一個の人格的存在を求むるやうになつてくると、種々の欲望が出て來る。故に婦人の社會的自覺の進んだ現在では男子と婦人との間に生活程度の差異は殆んどみられないといつても大過ない狀態である。

次ぎに婦人に小遣ひ取り職業者が多いといふことは、婦人に對して家族扶養の義務がないといふことを示すものであるが、現時の社會狀態は、男子の收入だけでは一家を支へて行くことの出來ない者がだん／＼增加しつゝある傾向にある。內閣統計局で行つた大正十五年九月から昭和二年八月までの一年間の東京市の家計調査によれば、調査世帶三百九十三個の中主人の腕一つで支へてゐる家は一戶もなかつた。その副收入としては配偶收入、家族收入、財產收入等がある。殊に中產階級以下の家庭では、收入を生ずる財產が少しもないのが普通であるから、いきほひ夫婦共かせぎとなり、子供の收入に多大の期待をかけることになる。故にこの三四の理由は少しも意味をなさないことになる。

最後に婦人の團結力が弱いといふことは確かに婦人の低賃銀の原因となつてゐる。また一方から考れば、婦人の低賃が團結の妨げとなつてゐることも事實である。即ち兩者の間には因果の關係があるので、畢竟いづれにしても婦人の團結を强固にすることが急務である。尙ほ婦人の低賃銀は必然的に男子の賃銀を下げることになり、且つそれは、婦人が賃銀の不足を補ふために、その貞操を賣らなければならないやうな悲しむべき結果を作ふ。

斯くの如くいづれの點からみても同一勞働に對する不同賃銀は不當であるが、最近勞働總同盟の日本縫工組合の婦人會員は、この事實をはつきり認識して、去る八月五日に開かれた勞働總同盟關東同盟會の大會に「男女同一勞働に對する同一賃銀要求の件」をその議題として提出したが、これは滿場一致可決された。引續き十月七八九日と開かれた總同盟の全國大會にて彼女等はこの議を上程し、再度滿場一致可決された。しかも尙ほ今後この條項を總同盟の標語に加へることまで獲得された。同時に婦人等はこの要求が貫徹されるまで、凡ゆる猛運動を試みることを決意したのである。

五、結　語

最近の我國婦人勞働運動は婦人の自主的運動を起すこと即ち從來のやうに婦人が男の人にばかり賴つてゐないで、全社會運動の中の民主的一翼として婦人自らの手によつて婦人の問題を解決してゆくことの方向に進みつゝあるが、これは婦人が本當の無產階級意識に目覺めつゝある有力な兆候であるといはねばならぬ。しかしこれは後進國の婦人運動に課せられた一個の特殊的女權主義運動であつて、その過程に於ては男子の利害と衝突を生ずる場合もないとも限らない。即ち婦人等は、終局の目的たる資本主義改造の明確な認識の上に立ちながらも、婦人の自主的立場から、資本家と男子と兩方を敵として戰はなければならない場合があるかも知れない。この場合、單なる無產階級意識の概念に漫然と捲きこまれて男子の意志に盲從することなく、勇敢に婦人の自主權を獲得して行くことが、現在の婦人勞働者に課せられた重大任務であると信ずる。



よろこび

壺田花子

眼には見えぬが
たれがよろふのでせう、
色どり美しい寛衣を
きれいなやさしい足がふむ
一面の厚い絨毯を――

清い水は流れ
梢は五彩に火を燃やす。

丸いひざを上手にささえて
私の姿を映しませう



おいしい水も飲みませう、
走るにつかれた小鹿のやうに。

こんなにも不思議な美しさを
誰れが持つて來てくれるのでせう。
初めての山　初めての路
身うち馳せめぐる喜びに
私はただもう　むせかへる。

ゆきませう!
もつと燃えさかる林のなかに。

はばたいて啄木鳥がすぎる嶮路のほとり
おゝ　ここでは慈愛深い秋のお母様が
私の兩のてのひらにも載せきれぬ
いつぱいのあけびをみせてくれます。

大阪から東京まで

北村兼子

東海道を走る汽車の中で、感想のようなものを書いてみる。

煤煙の大阪を立つて京都へくると氣が俄かにゆるむ。名古屋へくると又、大阪氣分に戻り田子の浦では西行氣分になり富士の裾野からすつかり東京氣分になる。

震火災前に上京した時には未開國から文明國へきた心地がしたが、あのゆら〱で根こそぎやられてから、近ごろ東京へきても以前のような文化刺戟を感じない。東京の退却と大阪の進出とで兩都も水平になつた。

どうしても東京の脚もとへ寄れないものは文學と政治と敎育と流行と趣味とである。みな無形のものではあるが、それを有形に表現するものは新聞であり雜誌であり書籍であり議會であり學校であり衣服であり風俗である。大阪人はあきらめろ、とても及びもつかぬ。

大阪で雜誌を發行して氣張つてみたが、みな潰れた。續いてゐるものも潰れない程度で辛うじて續いてゐる。書籍を出版したが、みな損をした。低級なものだけが少し發行せられてゐるだけだ。震火災後に大阪へ移つた雜誌社もあつたが印刷所が一早く復舊したから又引きあげてしまつた。その當時印刷文化を大阪へ奪つてしまはうと鬪つて印刷と製本の工場を擴張したものもあつたが、雜誌社が居心地が惡いとみえてみな元の巢へ歸つた後は今に擴張工場を持て餘してゐる。

東京ではビルヂング・雜誌社があるのが大阪ものゝ眼には珍らしい。大阪には殆んどない。書籍でも東京ものでなくては賣れない。たゞ新聞だけは發展してゐる。それもたゞ二つだけである。琵琶湖から滿韓へかけては大阪の勢力範圍で、それから靜岡までは名古屋と東京、靜岡から向ふ日本の端までは東京の細張りになつてゐる。東京では二三種の新聞をとつてゐるが大阪の町家では大てい一種である。郊外住宅なんかは一種をとつて午後にはお隣りと交換して讀んでゐるほど新聞代を惜む・・・人も・・・ある。もし大阪人が東京ほど新聞を併讀するものなら大阪新聞はもつともつと發達してゐるだらうと思ふ。

その新聞が大阪へ支店を出した。大阪の廣告代理業に聞くと東京の大新聞を拔いたといふ。東京で聞けばまだ〱距離があるといふ。どちらが本當か私は知らない。知つてもいはない。けれども東京新聞界は大阪の闖入者によつてかき亂された形迹はある。

東京から支店を出したものもあつたが創痍滿身で東京へ引きあげた。それほど東京からは一指をも染めしめないと意張る大阪の新聞だつて、活字を東京から取り小説や寄稿を東京に求めて居る。政治文學の記事は東京支局からきてゐるから紙面の三分の二は受け賣りに過ぎない。殘り三分一を大阪の記者が奪ひ合つて書いてゐるとはいふものゝ、その記者は大てい東京のものである。少くとも東京で仕込まれたものである。大阪で育つて大阪で

教育されて大阪で記者を稼いでゐるものは私の知つてゐる範圍では極めて少い。あつても下廻りの記者に限られてゐるやうだ（除外例もあるにはあるが）

大阪は生産地で東京は消費地であるが、雜誌はその逆を行つてゐる。汽車の中で知り合ひになつた東京の商人は大阪の工業を視察しての歸り途だといつてゐたが、大阪の繁昌に魂消てゐた。大阪へ洋行して啓發するところがあつたさうだ。私は文筆に關することが眼につき易いから、いつも東京の隆盛にたまげて歸る。業務によつて大阪にたまげたり東京にたまげたりするものもあるらしい。甲がたまげることと必らずしも乙のたまげることではない。

東京では雜誌が一種の製造工業化してゐる。大阪では機關として缺損覺悟で發行してゐるものはある。廣告本位のものもあるが、週刊もの一二を除いては算盤に合ふものとは思へない。

大阪を輕視した雜誌工業は必らず衰頽する東京の書籍でも雜誌でも大阪を根據として關西に販路を求める。近ごろは政治家でも大阪に眼をつける、歴代の内閣は絶えず大臣や總務を西下せしめて大阪實業家の機嫌をとる。大阪の商工會議所は大臣送迎の機關たといはれてゐる。政友もくる民政もくる、政黨は支部を持つてゐるが内閣にはそれがない。日本政府大阪支店があつても便利であらう。

これだけの經濟組織をもつてゐながら東京雜誌の消化地ではつまらない、何とかして東京に對峙して見たいと考へてみたが、大膽な宣傳、安い原稿に算盤を投げた。算盤以外に印刷も裝幀も繪畫も原稿も、とても駄目だと匙を投げた。どうしてやつて行けるだらうかとの問題に對して大阪ではどうしても答案が出てこない。段ちがひもこゝまでくれば競爭心も起らない。

新聞は勝負が早い。編輯締切間際に原稿紙に走り書きしたことが一時間たゝないうちに輪轉機から紙の雨となつて降つてきて配達の手に渡る、特種なんかは五時間たゝないうちに反響がある。一ケ月も二ケ月も前に書いたことが忘れた時分に本屋の店頭に出る雜誌はまどろしい。けれども新聞の走り書きは文章がだん／＼下手になり拙速の間に合せ主義が癖になつて、電話、電信、キャリアー、印刷機、雜談などの雜音が頭の調子を狂はせる、それが狎れてくると雷のような雜音でも何とも感じない。耳と頭と手とが別々に働く、汽車の中でも原稿が書ける、自分の書齋で靜かに書いてゐる著述や雜誌原稿は惠まれてゐる。秋雨ふるこの頃なんかは巧遲主義にふさはしい。

東京の雜誌を手にした時の大阪ものゝ感想は、とてもかなはないといふ一語に盡きる。冑を脱ぐ。私も投降者の一人である。

早く見切をつけた悧巧なものは、さつさと大阪を引き拂ふ。文士も出版屋も大阪に未練を殘さない。ために大阪は淋しい。文筆の友がない。欠伸の色が青くなり白くなり青白くなる。私は淋しい。お友だちは歌人となり小說家となつてみな東京へ去つた。私はまだ東京へ移民に出かけるだけの思ひ切りはない。まだ煙の中に取り殘されてゐる。

大阪言葉と大阪文士とを東京へもつてくると聞いてもゐられない見てもゐられないほど田舍くさい。大阪から東京へ頭を突つ込んだ田舍ものゝ私でも大雜誌社が歡迎してくださることは私に取つて心からうれしい。何といつても法律經濟畑に育つた私のことだから歌や小說はできない。大阪の大新聞に記者を働いてゐた私も東京で筆陣を張つてみたい。それもほんの一度でいゝと思つてゐたことが偶然の機會から東京の大家に列んで法律や經濟

の論文が世に出た。これで遺憾はないから柄にもない東京進出の野心を懐に片付けて大阪で御飯たきでもしてゐるのが私にはふさはしいが、東京は好きだ。銀座の土にかぢりついても何かの味があるやうに思ふ。ア、東京、私は忘れない。

大阪の人口が何百萬に殖えようとも學問的には何もない。たゞ東京の出版ものをはかす役割を勤めるだけである。大阪は淋しい。私はこゝで葬られることになるのか。

嫌疑

樺山千代

「おい、お前俺の蟇口を盗んだな?」と突然他人に云はれたとする。勿論、盗んだおぼえがなくつても、調べられる時には、自分の懐から相手の蟇口がとび出して來さうな不安に襲はれる事があると思ふ。また、反證をあげ得ないで冤罪を蒙つた場合などでも、その人は、自分が眞犯人ではないかといふ不安におそはれる事がありはしないかしら?、人間は時々、かういふ不幸な暗示にかゝるものだと思ふ。

私は、この間一寸、それに似た心理を味つた。

その夜私は、友達を訪問しやうと思つて家を出た。ところが、途中でまだ新しい草履の横緒を切らしてしまつた。暫く行くと今度は道ばたの垣根から突き出してゐた棒切れに袂をとられて、袖付を五分ほど裂いた。

二度ある事は三度あるといふから、出かけるのはやめやうかしらと、一寸、縁起をかついでみたが、「自分の過失を天意にかづけるのも卑怯だ」と思つて行くことにした。そして下駄屋によつて、新しい草履を買つた。と、古つぼけた足袋が氣になつて、近くの足袋屋にはいつた。すると、そこに、やつぱりまるで天意のやうにいやな事が待つてゐた。

「九文の白をちやうだいな」私はさう云つて五十錢銀貨を出して、店先にあつた小さい椅子に腰を下ろして自分の足袋をぬぎはじめた。そして、店員の出して來た足袋をうけとつてみると、今までのよりよほど大きい。

「これ九文? なんだか大きいやうね」

「おはきになつてごらんなさいまし」

「かまはない?」さう云つて足を入れるとガボ〱だ。

「とても駄目。ぢや八文七分のにしてちやうだい」私がさう云つて九文のをぬぐ間に、店員は棚の上の箱の中をさがしはじめた。

「手前どもの足袋は他所さまのと違ひまして布をたつぷり使つてございますからね」

皮膚のなめらかな丸髷のお主婦さんが、ミシン臺の方から愛想よく云つた。

「さう?、さう云へば店によつて同じ九文でもずいぶん大きい小さいがあるわ」

足袋は中々出て來ない。

「お待ち遠さまでございます」

お主婦さんが云つた。

その内、やつと八文七分の足袋が出て來た。ピチンと形よく足に合つた足袋の爪先を新しい草履に入れると、私は早く、さば〱

と大股に夜の町を歩きたくなつた。
「お釣ちやうだい、いくら？」私はもう片方の足袋をはきながら、急がすやうに云つた。
「へえ、二十五錢でございます。かうつと‥‥」
手提を持つて、しよきつと立ち上つた私は、ニキビの出た店員が赤い顔をして、うろうろと、私の前の疊を見まはしてゐるのに氣付いた。私も誘はれてみると、さつきおいた五十錢銀貨がない。
「おや！」
私は突差に自分の記憶を辿つた。私は忘れつぽくつて、買物に行つても、よく「もしもしお代を‥」と云つて呼び戻されたり、「釣錢ですよ」と追ひかけられたりするが、今、私の網膜には、たしかに裏返しに、疊の上におかれた新しい銀貨がはりついてゐる。それに革の紙入を斜にした時、銅貨や白銅と一緒に流れ出て來た五十錢銀貨の記憶も新しい。で私は自信をもつて、
「私、こゝへおいたのよ」
「へえ」
店員の返事が煮え切らないので私はつひ、
「まだあげなかつたかしら？」
「いえ、たしかにいたゞきました」
「ぢや、お釣ちやうだい」
「それが‥出して來たと思ふんですけれど‥かうつと‥どこへおいたかしら？」
店員はさう云つて、私のそばに置いてあつた縫ひさしの足袋ののつた錢皿の中や、足袋棚の上などを探しはじめた。私は、待たされるのゝ辛さにじりじりしながら立つてゐた。と、ふと、私はさつきとは別人のやうに、石のやうに冷たい表情で、お主婦さんが、二人の様子をみつめてゐるのに氣付いた。私はひどく自尊心を傷付けられて、思はず
「別のを出してちやうだいな、急ぐから」
と云つた。當然うけとるべき釣錢ならさう云つて然るべきだと思ひ、同時に、さう云ふ云ひかたが、自分の潔白を證明するものゝやうに、無意識のうちに感じてゐたのだつた。
「出しておあげ！」
お主婦さんが、投げつけるやうに云つた。
私はハツとした。此の時、私ははつきりと、疑られてゐる自分を感じたのだつた。私は、怒るよりも、もつと惨めな心の状態になつた。どうすれば、私がこの不名譽な釣錢二重どりの嫌疑から救はれるか‥私は、恥しさに眞赤になりながら、色々と、未だうけとらないこの辨明をしはじめた。勿論、二十五錢の金など問題ではなかつた。いや、そんな金は受けとりたくなかつた。が、今更ら受けとらないで出れば、自分の罪におそれをなして逃げ出したやうでなほおかしかつた。(今考へれば、そんなにもこだはつた自分に腹が立つ。釣錢を持つて平氣で出て來るか、そんなものはいらないと、なげ出してくればよかつたと思つて)
「どうぞ、お持ちなすつて‥‥」
お主婦さんは冷淡に云つた。
「相すみません。どうぞお持ち下さい」
店員は心から氣の毒さうに云つた。
「ぢや、持つて行くわ」
と云ふより早く私は釣錢を握つて外にとび出した。まるで、自分が寳石の詐欺犯人で、あくまで白を切つて、二十五錢ごまかして來たやうな興奮を感じてゐた。私は新宿に來ると賦品を捨てるやうな心持で、道ばたにうづくまつてゐる手なしの乞食の、逆さにおいた破れ帽子の中に、敵のやうに握りしめてゐた二十五錢を投げ込んだ。

節穴

六條眞利惠

ギイと鳴る事務室の扉の音を後に聞いて、翠　、其刺繡した支那靴が、トトトと階段をのめり降り、金髮や斷髮のオフイスガール達の棄てた貞操で一杯になつてゐる居留地の舗道を、三ノ宮電車通り迄歩く間に、『そんな家が此神戸中の何處かになくてはならぬ筈だが』と信じ初めたのである。かう信じて以來四時の退社時を待ちかまへて、日課同樣所謂『そんな家』を東西南北、彼の帶のやうに長たらしい市中を探しまはりかけてから、二ケ月目に、充分ではないが、やや條件に近い二階を探しあてた。

今迄、同じオフイスに勤めてゐる大淵と、時々自由な幾時間かを樂しむために借りてゐた青谷と云ふ場所は、周圍が閑靜すぎたためか、人目につき易く、それにもうよほど永い期間を借りて居るのでソロソロ倦きが來てゐる矢先きでもあり、も一つは、翠の支那服姿に興味を持つたヤンキー型の男達が、尾行して來たりして、うるさくもあつたし、してゐる所へ以つて來て、大淵が、二三ケ月前からダンスホールに通ひ、うつつを拔かし、翠との逢瀨を割引きし初めたので、私立探偵に頼んだ結果が、大淵はよく青谷の借二階にダンサーを連れ込んで泊る事實が明されてしまつたので、翠の所謂『そんな家』を探す必要が生じたわけである。

ここならいやでも南豆町を通らねばならぬから、支那服に興味を持つたり尾行したりする男も、まづないものと見てもいい、よしんば誰かに尾行されたとしても、幾曲りも同じやうなせまい、風も通らぬ暗い露路を曲り曲つて、ドンと突當つた板塀の曲り角、だが、その實板塀の一角からドブ板の小路が向ふへ拔けてゐることは一寸誰でもが氣づかないで普通の曲り角と思つて曲つてしまふであらうところの、其ドブ板通路を十歩も踏めは、今度借りた家の勝手口なので、眞黑く煤煙で汚れたひくい格子のくぐりが待つてゐるのだから、尾行者が來ても幾曲りも曲つてる間にマカれてしまふ筈の皮肉な場所なのが彼女の氣を惹かれた理由の一つである。それにしても二ケ月もかゝつて探さなければ見つからなかつた家である。神戸ともあらうものが、何と云ふ氣の利かない家ばかり並べたものだらう!!　條件と云つたつて只『二階の天井板に幾つかの節穴があつて天井裏に腹這ふ事が出來て、その節穴から室內の一部を覗き見る事の出來る家』と云ふに過ぎない、それだのになかなか『こんな家』が見つからないで二ケ月もかかつた。ところがここは天井板が薄くて腹這ふ事が出來そうもないのと、節穴が一つもないのだが……外觀は角砂糖の上に物干臺を載せたやうな、ペンキの剝げた西洋窓がつけてあつて、二階の窓と云へば四方八方窓の鼻先きが直に他家の土藏の壁であつたり物干臺や植木棚であつたりで、物干臺をつける餘裕がないところから、屋根の斜面に物干臺を載せてゐると云ふしまつだから、此物干へ

上るために二階の屋根裏を通路にあててあるのが翠の卽ちつけ目なのである。間數は三疊に四疊半、其三疊の間の天井は隅が四角な切抜きになつて、蝶番ひがつけてある、そこをトンと突上げると、内部が自在鍵式になつてゐて鐵の棒が開閉を司つてゐる、だが然し、此穴へ登るには勿論梯子が必要で、それも三疊の間にちやんと設へつけてある。その代り天井裏から屋根の物干臺迄は頑丈な小さい階段が沈默つて四疊半の間の天井裏を通つてゐる。板が薄いから鼠の外は歩けさうもないので、彼女が室内を覗くためには、此階段か或は屋根を支へてゐる太い材木をでも利用する外はない事を彼女は突嗟の間に考へに入れておいた。そこで彼女は、乳から腰にかけて支へられるだけの幅を有するハンモックが必要である、それを上から釣つて天井板にスレスレにしておけば、ハンモックの中に腹這ひ乍ら節穴に眼を擦りつけて室内を覗く事が出來ると云ふものだ。彼女は元町の船具屋に行つて帆布を買ふとそれを靴屋に持つて行つて、皮と太い絲綱とで以つて幅廣のハンモックを作らせる事にした。『節穴を拵へる迄は大淵に氣づかれてはならない』ので、青谷の借二階はそのまゝにしておいたし今迄通りに、オフイスの人々の頭越しに目と目でしめし合せて何氣ない態で別々の方角から青谷の借二階に落合つては幾時間かの享樂に淺る事も定例通り續ける事にしたものの、決して自分から先きに私語きかける事なんかしないで、對手の波動を受入れる事にしておいた。

もうソロ〳〵倦きて來たのかい、此頃ちつとも君の方から青谷へ行かうと例の目のラヂオが通じて來ないぢやないか、僕は大いに不平だよ。

或日翠の手許にこんなタイプライター！の原稿が大淵の手から渡された、勿論彼女は此原稿をタイプライターに刷るわけにはゆかないのだ。

『フン此野郎、保護色的技巧を勞しよつて』とは彼女の鼻がつぶやいた事で、彼女は毎日タイプライターを叩き乍らも『如何にしてあの天井に節穴を最も自然にうがつ可きか』で頭を一杯にしてゐたから、此原稿に對しては別に辨解がましい態度等見せる必要がない。

『今日こそは必ず實行しなければ、節穴を……』

彼女のオペラバッグの中にはマドロスナイフが入つてゐた、これは嘗つての戀人であつた船員が忘れて行つたものだ、無論大淵はそれを知らう筈がないので、次の日出勤すると例に依つて、人々の頭を越して波動を送つた

『今夜はどうだい青谷へ行かないかい？』

彼女は目でそれを受け止めて、風のやうに平氣な態度で、イヤ〳〵をして見せておいて、

其日は誰よりも先に、事務室の扉を押すと、まるで追ひつめられてゐる者のように急いで暗い露路のドブ板を踏み鳴らして、勝手口から、今度借りておいた、角砂糖の二階へ上りゴロリと仰向けに寢そべつて後頭部に兩手をあて乍ら天井一面を見まはして見た、かれこれ三十分も經つと、三ヶ所だけ穴をあけても左程に目立たない部分を見つけ出した。それは、木目の出來はじめの所を中央にして裁斷された板が三枚あつたおかげてある。從つてこれ等の板は木目の芯が隣接した板の合せ目に半圓形を描いて黑ずんでゐる。マドロスナイフで大豆ほどの大きさに此半圓形の芯を、えぐり抜けば極めて自然な節穴が出來る理だ

彼女は此發見をすると早く穴があけて見度くなつて、踏臺がほしかつたが階下の人には祕密を要するので、一そ青谷の荷物を運んでからにしようかとは思つたが、それ迄待つてはゐられない。

『あの小母さん、椅子か何か貸して頂けない

でせうか』と云つて見ようとしたがそれもやめると、翠はいま〳〵し氣に、ナイフにつけてある太い黒紐を握つてビユウ〳〵と力一杯室中を振りまはした。

『一體どうしたんだい青谷の家さ、いつどう云ふ理由で以つて空け渡してしまつたの、全くびつくりするぢやないか』

　大淵は、翠の下宿の石垣の下で、彼女の出勤するのを待ち伏せしておいて、二人が並んで電車迄歩く間の短かい數分間を利用して、氣難かし氣に眉を寄せた。彼女は對手が大分狼狽してゐ乍ら無理に澁面を作つて見せるのがをかしかつた。

『あらあんた何時彼方へ行つたん？　あてに約束もせんといて一人で行つたん？』

『ウン一寸氣がクサ〳〵する事があつたもんだから一人で寢そべつてゐ度いと思つて昨日行つたら、あのしまつさ、おかみさんが、アラあんた御存知やないのですかいなつて意外な顔してたよ』

『ハヽヽ、もう一寸あの家も鼻について來たやないの、それに變な野郎共が尾行て來るさかい怖ろしいてナ、實を云うたら倦いたんかも知れへんわ』

『俺との逢瀬に倦いたのかい、それとも彼の家に倦いたのかい』

『逢ふ方法に倦いて來たの』

「逢ふ方法に？　ぢやもう俺との事はおしまひにし度くなつたつて云ふんだね」

「バカねあんたは、そんな阿呆な事……あんた頭が惡いし、逢ふ事と逢ふ方法とは異ひますよ、そやから今度な、目先きが變へ度いと思うて、えゝ所を探して三日前に引越たの、宇治川で電車を降りて、あての行くのを待つてくれる？』

『ようし、それならわかつた』

　翠の乘つた電車は、朝日の黄色い光りの粉を往來の人々に浴せかけて走つた。一車遲れて大淵の潑溂たる背廣の肩も、車掌臺から車室へ吸ひ込まれて行つた。

『まだ彼の女にも緣があるわい』

　大淵は得意氣に髭を撫でゝゐた。

　それから二人は、そ知らぬ顔でオフイスで改めて朝の挨拶をなした。翠は、大淵が、例に依つて其妻に巧みな嘘をついて、ダンサーを青谷へ連れて行つたものの、あつけらかんともと來た道を逆戻りしたであらう姿を想像すると、タイプライターを打つ指先きから迄全身の痛快味が飛んで出るのを覺えた、するともう嬉しくなつて支那靴で思ふ存分床を踏み鳴らさずにはゐられなかつた。

『ザマア見上れだ、罰當り奴が、ハヽ……彼の男の尻にくつついて、一夜の享樂をゾク〳〵と夢見乍ら、豚のやうに太つた洋裝の腰を振つて、彼の青谷の阪を登つて行つた筈の、ダンスガールの途呆けた面が見てやり度かつたわほんとに〳〵。だが何にしても是からが面白くなるんだ、痛快〳〵。決して嫉妬ぢやない、嫉妬なんて私を慘々にコヅキまはした憎い過去の幽靈だ、いつ迄もそんなものに嚇されてゐては、おたまりこぼしがありやしないぢやないか、彼の船員との時だつて私は此幽靈に取つかれて自分を不幸にしたんだもの、これからは何でもビヂネスで行くことだ、ビヂネスだ〳〵』

　カチヤ〳〵〳〵ッ、とタイプライターの顔が笑ひ出した、彼女もをかしかつた。それにしても、天井裏に釣り下げておいた帆布のハンモックが、翠の腰と乳房とを待ち、彼女は彼女に祕密で大淵が、青谷でしてゐたやうにダンスガールを連れ込んで幾時間かの享樂に浸るであらう筈の場面を、三つの節穴と共に待つてゐる。

帝展雑感、大調和の諸作

長谷川春子

現代教育を受けた若い人々にとつて帝展の日本畫といふものは恐らく何の興味、同感も有るまいと思ひます。洋畫の方といへども官學臭きことは夥しくとも、日本畫はお雛樣の干菓子のごとく、これは粗末な洋食の如く、無味な紅白の干菓子より惡脂でもカツレツはいやでも食べる場合がある。

帝展の日本畫だとて技術は多少は(?)年々進歩して居るといふかも知れない、然し頭腦の方の速度は實に遲々である。どうも飛行機をより實用化しようと云ふ際に人力車の改善に人生を費やすような感じだ。それは審査員邊りの人々に畫面から見ても人を頷づかせる多少の識者の存在することはわかる。けれども悲しい哉此所にも又新進の人々の中に未來の指示者は愚か現代の知識人を牽き付けるさへもの人がない！少々ばかり技術に新工夫して見せる所謂新人ではない、新鮮にして偉れたものの見方をする現代人が慾しいのである。嘗つて充分、なかなかの新人だと思つた廣島晃甫氏を初め展覽會、才人堂本、また福田、中村氏達はみんな並みの帝展人に化して了つたことである。その以後の人々には初めから何事も期待しなくなつてしまつた。

會場中を忽ちにして私は少しも疲れずに面白くもをかしくもなく只僅かに數點の作品の前に止つたきりどん／＼通過してしまつた。讀者よ察して下さい。今時如何にキレイに出來て居ようとも現代繪畫展覽會で大塔宮や文覺や謠曲物や秀次夫人——無論獨特の觀方がある譯ではありません、さりとては又、題は近代婦人像だのダンス、玉突、の現代並みでも飾窓の生人形の如く少しも近代人の感情のない畫に關心が出來ませうか。



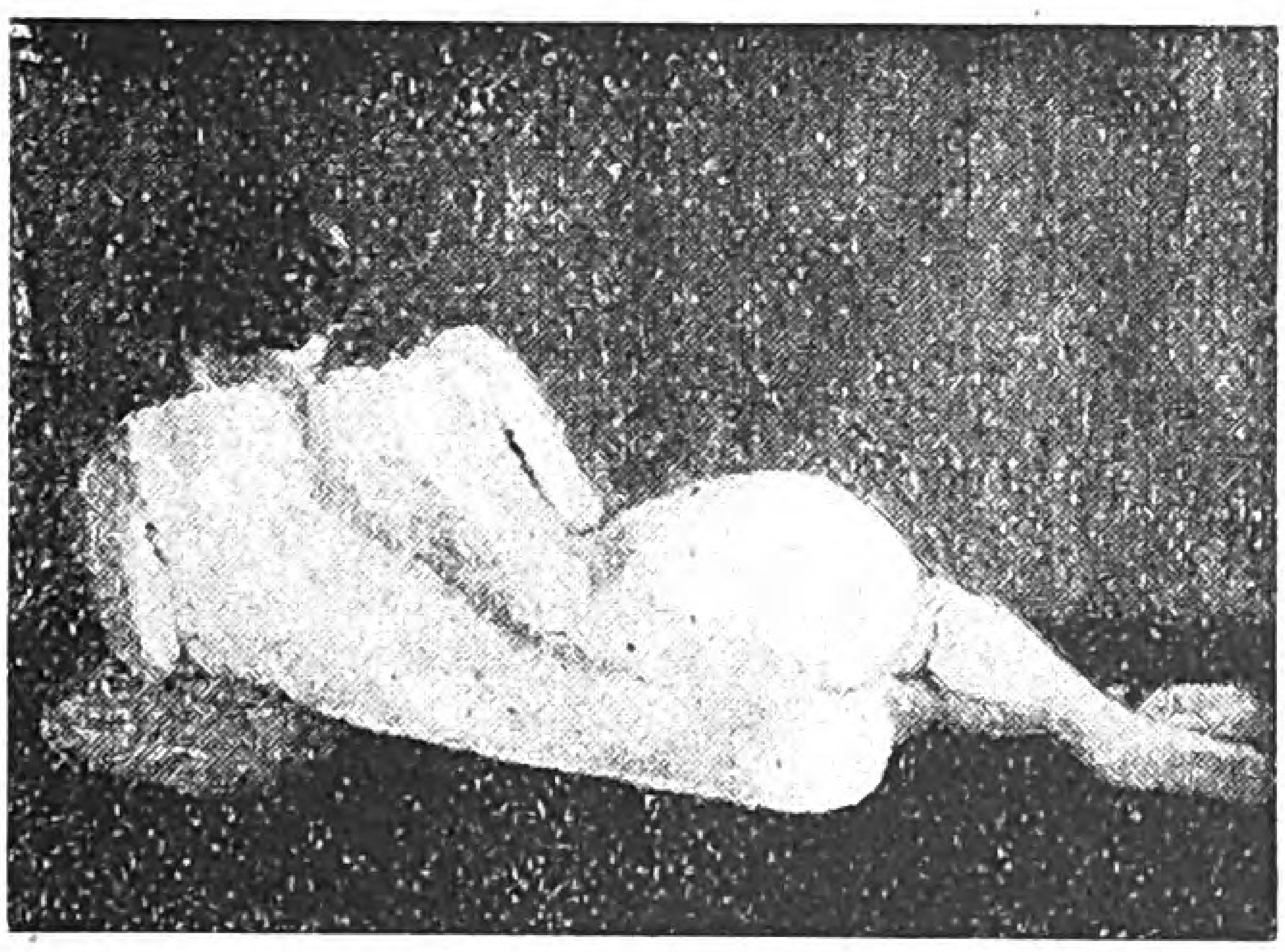
草光信成氏畫（立像）

でも、流石に美術學校派の二三の人々は松岡氏の暗示あつてか、自らか、少々は他より考へて居るらしい。山口蓬春氏など甚だ良くない成績だが何時まで新興大和畫で居たくないのは譯る。品山錦成氏は學生時代子供らしい純な少女畫で印象に殘り以後散々低渟して居たが今年はかつきりして來た、高木保之助の態度も結果はあまり贊成できなくとも多少頷づかれる、ただこの人々が繪具の綠靑や群靑の家來になつて居ることだ、繪具の方を家來にして驅使しきらねば、繪具共が勝手に畫面で『余

は緑青也、群青也』と冴えた色をして居るのでは渾然たる畫面はならぬ譯だ。

それにしても此等の人より、いや筆技は世にも稀れな力を持つて生れてきた伊東深水氏はついに精進溥くして藝術の神秘の扉を探り當てずに終るのか、中々利巧な度胸よき此人は今の中——も少し此儘だともはや遲れたりです、再考三思してほしい、大才だけに。

こと變つて福田平八郎氏はトボケた人だ。友染のよき脫化たる感じのいゝ色調の畫だが、然しかういふ風に畫面を段々略して行つて只の一個のもので畫面を引締めキカセようとする、去年の茄子對蜥蜴もさうであつたが今年は愈々、藥が強くなつて此の簡單すぎる菊の圖で、菊の中で赤い菊を一輪、根元で黃になつた露草を一本、菊の覆ひの屋根の上へ落葉を一枚、——此の疾ひが興じると墨の輪を一つ描いて此裡に宇宙ありなどと煙に卷く野狐禪になりさうだ、今のわかさですこしへんだ。菊池契月氏の「南波照間」、琉球人の理想鄉なのださうな。古徑氏とは隔たれども冷靜に自己を壓しつけ切つた人の理智の畫だ。若し畫面を一寸四方に區割して蟲眼鏡で見たにもせよアラや突込まれさうな所は



村野進吉氏畫（裸婦）

なかなか出て來さうにもない、流石にと云ふ副詞は用ひられるが、いゝと云ふ私の形容詞は無條件には用ひられぬ。白狀すると私はかくも明るく朗らかなようではあるが空氣の沈んだ土地と死のような靜寂な表情の女達の居る此の理想鄉へ送られるのは御免だ、此の苦しい恐ろしい現世の方がもつと暖く笑ひも喜びもタマにはあるから、上村松篁氏の蓮と群鷺は見方が素直でまだ新鮮な所があつて中々よく出來てゐる、お母さんの松園女史のやうなキツイ、リンとした或物が加はつたら境地は一段高まらう。

さて、いたづらに大きく雜莫な日本畫から洋畫へきて見れば、さてこれもよく見なかつた、只牧野虎雄、草光信成の畫がまづ眼についた。牧野氏の畫(南の部屋)は帝展で只ひとつきりの私には明るい快い、さうして賢く美しい畫心だ。この畫はこの儘私は好きだ。筆者が美しいと感じて描くものは觀者にもすぐ其儘通じる、南の部屋中みんな樂しいが、窓からの庭の木々の綺麗でうれしきこと哉。

さて草光信成氏の婦人像も愉快だ、この上心境が高まり奔放大膽がより加はつたら隨分光る特異な作品であらうさうしたら神様とも惡魔の方ともちよつとおつきあひができさうで、バルザック、スタンダール、ゴヤの徒弟らしい。態度もしつかりして居るし、やり方も贊成である。色にも隨分好み、グウをもつ人らしい。氏よ無論同感でせうが、周りの帝展の畫を見まはしたり考慮しないで下さい。先人の素敵な傑作だけ見て、あとは人生から自ら掴み出すことです。

横山潤之助氏はあたり近所に澤山ある平々凡々なモガをモティーフにした中では傑れて見える、構圖は完成だが榮果の質がすこしアヤフヤだ作者も同感ならん。

金山平三お得意の菊は品のいゝシックなすましたイギリス紳士ではある。今それに對して思ひ出すのは大調和の片多氏のバラ、隨分筆がフワ〱な所があり乍ら見てゐると正にバラだ、そのまゝスグに美しいバラの色だつた。江藤純平氏も伸びる將來を持ちさうに思ふ。草光氏はカナリ他人なぞ何とも思はぬ所までやつてゐるが、



將貞雄氏畫（順子夫人支那服像）

氏にはより其の注意が肝心だ、必ず必ず邊り近所を右顧左辨せぬこと。此處は困る方を擧げると齋藤與里氏の大作、正に勇なる代表だ、たしか審査員位の人でした。これは確實に日本畫の恐入の大作と充分五角以上である。それから青山熊治氏の大きな牛の畫、嗚呼この人が一二年前日本最高の賞とかを取つたのです!!!

數日後大調和展の最後の日に一寸ゆく事が出來た。帝展で凡なるものを見過ぎたあとの不愉快な憂鬱の折柄か中々樂しかつた。小さくとも藝術的な香氣のあるものがあつたから。去年の惡會場美術協會より場所の感じも狹くはあつても畫の大さに對してこれでいい。一般の出品は小さいかはりに佳作が集まつてゐる、だから恐味な空氣は幸ひに殆どない。ただそのかはり、性格のキツイ異色の人のないのがいけない。上にキツイ、偉い人の居る所はそれがよく有り勝ちなものだ。山岸信一氏とか坪内節太郎氏とか村上巖氏とか惡くはないあるものはまとまりすぎてゐる位だ。然しその癖觀後暫くした今日印象は薄れてしまつた。筆者自身の拙なる獨自の力と、精神とが薄いからだとおもふ。そして何故岸田家の粉ふき冬爪並びに其の配列法──今や流石にシナビ蜜柑はなくなつた、──又梅原のパンソウなぞを其儘借用するのか、かういふ場合藍より青きことは奇蹟である。その故に何時迄經つても梅原、岸田、河野はトリドリに光つたり眼立つばかりだ。珍らしくも、さうでない人が、たつた一人あつた。村野進吉と稱する武者小路氏の畫だ。藝術に味到した偉れた人の拙い流石なる手わざである、並みの畫描き連中には一生掛つても感じられぬ點迄の美をすでに見、感じてゐられることが嬉しい──結果は思餘つて充分筆にのぼらずとも──それもまだ不充分なのは筆技と發色だけだ、時間が經てばそれも獨得におもしろくなつて來る、其の諸作は今でも頭にはつきり浮ぶ。專門業の畫家以外かういふ人に畫を見てもらひ撰んでもらふのは嬉しくあり安心であらう。

さて梅原龍三郎氏の松並木のさすがの事よ。單なるスケッチではあるが暖くて力強くて畫中には淡しくも持ちたきタンペラマンが澤山ある。岸田氏のは右の端の切子と赤い椿の畫が一番好きだ。やつぱり此所迄の畫が描き得ることは大變だ。河野通勢氏の裸婦造型、直接モデルによる畫をあまり發表されない氏がこの美しいいい所と、不完全な所と兩方澤山ある畫を出したのは同感だ、構圖も領かれる。私は不充分な所が澤山あつて、そしていい所も研かれたり、又まだ研かれずに、其儘澤山ある畫も懷しく思ふ。氏はすこし變つた。色が唱ふが如くなつてきた。ここの日本畫はなくてもよささうだ──こんな具合なれば。彫刻はある方が贊成だ。高村氏の柘榴は近付いて充分味はふことが出來たが、去年の桃の方が大摑みでゐてそして好かつたな。割れた實の内側は微かにシックな技巧を感じ、外皮は好けなかつた、蜘蛛も蛇の虫ではないかしらん。無論氏に對して故最高水準で申すのです。



篠田　ちか子

柿をもつてきた父

八木秋子

職工の數だけでも優に五萬の勞働者がはたらいてゐるY製鐵所の在るY市の社會問題講演會が濟んだのは夜も十時をすぎてゐた。町の會場を出ると、そして明るい灯から直ぐ遠ざかつて暗い濕々した勞働者街の方へ鐵道線路の脇について歩むと、人々は溜息をついてY製鐵所を見上げた。彼等は、あの東洋一の大溶礦爐からはるか東の方の地點で立止つて、十月の夜の暗い空を焦がしてゐる巨きな赫い炎々とした焰を、いま一度ふりかへつた。そして、その逆光線の中に浮み出た何千本かの交錯した鋼鐵煙突と、屋外クレインと、壞れた硝子窓をもつた工場の一部と黝ずんだ溶滓煉瓦のあつい砦壁とを見た。そして人々は海際の方の不夜城の工場で戰時の大クルップ工場のやうに二萬の『夜の部』職工が齒車や飴のやうに燒けた鋼板や鎖や車輪や蒸氣や火花の中で、瘦れた魂と躰と神經とを鞭でうたれながら器械の犧牲になるまいと必死に喘いでゐる姿を胸に描いてゐた。

何といふ呪はしさだ！

人々の顔は歪んだ。

「おい、行かう、行かう！」

平山は顫へる聲で呟いた。やがて廣い盤石を支へて歩く人のやうに重苦しく人々は歩き出した。まだ遠いその夜の宿。同志の家の方へ――。

講演會に西下した彼等一行を犒ふための、Y市の同志の温い情の肉鍋が彼等を待つてゐた。

酒が出た。

油染みた若い勞働者が起つて――唄つた。その朴訥な力强い言葉が嬉しかつた。

夜が更けて、ぶつ倒れて寢こんだ平山はふいと眼をさました。すつぼりとかむせて呉れてある毛布を押しのけて、水を呑みに臺所にふらふらと歩いて行つた。くみ置きの冷たい水を柄杓に口をつけてぐつと飲むと、喉がゴクリと鳴つた。――そして彼は、いくらか正氣づいた。

廣い方の部屋には皆が亂雜に寢ころがつてゐる。――

「何時頃かしら。」彼は、この家の主人公の机の上にある目醒時計をもち上げて覗いた。――午前一時を少しまはつてゐる。時計を置くと、バットを一本ぬいて火を點けた。

「ふうむ、すると俺は醉つぱらつて寢ちまつたかな……」

彼は、もとの場所に歸つて毛布の上に坐り直したが、思案するやうに天井を睨んでから、立上つた。そして上り框で燐寸を擦つて自分の靴を搜しあてると、戸外に出て行つた。

底冷が身に泌みた。すると眼が瞭乎り冴へて來た。彼はぶら〱と歩きはじめた。

Y市、そして北部九州一帶は彼が忘れることの出來ない土地であつた。その頃平山の兄はこのY市のある活動小屋で洋樂の噺方をしてゐた。兄の下宿に轉げこんだ平山は、二階の兄の部屋から見下せるやうになつてゐるY製鐵所の一部分を、毎日のやうに呆やり窓に凭れて見下してゐた。その時の平山は、Y製鐵所の溶滓を、今日ではそれから洋煉瓦の一種を廢物利用的に作つてゐるが――當時は小蒸氣船が溶滓を積んだ鐵甲舟を曳いて洞海から玄海灘の沖まで海の中に捨てに行つたものである。その小蒸氣船の機關長の世話でY製鐵所職工養成所に入る目的からY市に來たのであつた。しかし、それは失敗して三菱の曹達工場の分析室に職工見習に入職する始末になつた。平山の勞働生活はそれから始まつたのだ、

米騷動の夏は、恰度交替番が夜勤の部であつた。三菱では何萬圓かを騷動が起きると直ぐ貧民に寄附をしたが、群集はやつぱり三菱を狙つてゐるといふ噂が立つてゐたので、平山達は技師の命令で大切な分析用の機械やフラスコを夕方倉庫に運びこんだ。倉庫に搬ぶものを運びおはると彼は秘かに通用門から拔け出して、胸をワクワクさせながら街の方に樣子を見に行つた――と暗い物かげから兵士

が劍突鐵砲で彼の行手を阻んだ。……

で、その晩はそれなりで工場に歸つたし、群集は察つて來なかつたが、翌朝下宿に歸る道で、米屋が二軒半燒になつてくすぶつてゐたのを彼は見た。兄の活動小屋は營業を停止させられて、そこには兵士がぎつしり詰つてゐた。彼等は三等席の椅子の上に鐵砲をもつたまゝ眠つてゐた。

「――米騷動つて當りまへや、かう物價を騰げよつて生活できんがな」關西に長く住んでゐた兄は平山にさう言つたが、別に米騷動の彌次馬について行かうとはせずに、休みを好いことにして下宿でのうのうしてゐた。

平山はそれからK市の郊外に在る鐵道の車輛工場に入職した。その時は組立工場の手傳になつた。組立とか木工部には地の者が大半で半農半工の彼等は小遣ひとりに工場で働くといふ一種の空氣があつて時世の潮流から殘されてゐた。しかし平山が始めて勞働組合やプロレタリアや社會運動や、さうした新らしい知識を與へられたのは、職場ちがひの、渡り者の多い電氣場の男からだつた――。

ずつとのち、平山は、機關車をそのまま吊り下げて搬んで行く重量噸の移動起重機が、天井から機關車のフレームをつゝて、職工の頭とすれすれに工場の一角から他の一角へと滑つて行く途端に、高い足場にゐた彼の背中を後からガンと喰はした――肩胛骨を打つて昏倒した彼は殆んど死でゐた。この椿事の頃には彼は組合運動に沒頭する若者となつて職場から職場をとびまはつてゐた。

平山は無論それがために馘になつた。それから轉々と町工場を歩いてゐるうちに、九州から關西へ、關西から東京へと移つて行つた。……

平山の父は先妻との間に平山の兄を儲けると間もなく先妻を腹膜炎で死なした。父は子供のことを考へると二度目のを繼母として迎へる氣になれなかつたので、ずつと獨身でゐた。父は株式會社時代の鐵道に驛夫からつとめて、貨物掛にやつとなつた。妻に死なれたのはその頃であつた。それから交際知らずの固い一方の父が、やつと鐵道手といふ判任待遇になつた時は、頭がソロソロ禿げかゝつてゐた。

その頃、二度目の妻、彼女はW驛の赤帽の娘で、夫に死なれて出戻りになつてゐた、と結婚した。平山はその間に生れた。五年おいて平山の妹の澄子が生れた。

父は月給三十三圓で驛の構内主任をしてゐた――老朽で馘にするならば父は仕方がなかつた、毒にも藥にもならないやうな昔氣質の父の、草鞋を穿いて構内をみ廻る古風な姿を事務所の方では氣紛れから放つておいた。

K市の鐵道工場で平山が勞働運動をしてゐた時分、鐵道手の桐のマークをつけた父が、工場に彼を尋ねて來た。

父はのつけからみけんの筋をピク／＼と痙きつらせてゐた。黄ばんで頬骨の尖つた、そして顴骨のあたりの皮膚は老人らしい斑點がしみついてゐる。顔が心持ち青ざめてゐた。平山は、始めは、突然に會ひに來た父の用向が少しも見當がつかなかつたが、默つて彼を見据えてゐる父の眸に氣づくと、ドキンとした。そして重苦しい壓迫と一緒に、何！といふふうな反撥をかんじた。

「昌作！吾りあ……」

父は、云ふか云はないうちに喉が嗄れて一層激怒で顫へた。そして、面會所には、ほかに待合せてゐるお主婦さん風の人がゐるのにかまはず、壓しつぶされた聲で叫んだ。

「工場罷めてしまへ、この極道者めが！」

平山は心臓が止まつたかと思つた――みるみる自分の顔色が眞蒼くなつて行くのを感じた。何かいひ返してやらうと思つたけれど聲が出なかつた。

父は帽子を脱いで、古ぼけた手帛をポケットから出して額の汗をふいた。手がわなわなと戰いてゐた。

「お父つさんがそんな風だから、兄さんだつて私だつて自家を飛出すんだ。何だ！お父つさんになんか判るもんか。」

平山は唇がひき歪んで胸が早鐘のやうに動悸たうつた。スーと冷い汗が脇の下から流れた。嚴格な父、その父の怖しい眼を子供の時から平山は怕がつた。それがギラ／＼して、いまにも平山にとび掛るやうに父は睨めすえた。そして、拳をにぎつてギユッと締めつけながら、危く體を保つてゐる父の姿を平山は恐怖と憎惡の眼でチラと仰いだ。

「お上に不忠な奴悴は、この俺が成敗してやる。不孝者奴が、こんどといふ今度は許さんぞ。」

平山の兄が、父から日本刀で追つかけられた時のことが、その古い記憶が、眼の前を通りすぎた。すると、急に悲しみが胸にこみあげて來て、平山の眼のうちが熱くなつた――泪が眼がしらをつたつて、煤煙で汚れた卓子の上に落ちた。

「うぬが何大きなことをこくことが有るか。高助もお前も何といふザマだ……」

父は自分の息子を、この半端者が若僧のくせに生意氣らしくいふ事にことを缺いて社會主義だとか何とか、愚にもつかぬ危險千萬なものに感化れるなんて、外國人の手先になつて日本を亡ぼさうといふ、何といふ大それたやくざだらうと思ふと、これがこの自分の息子かしらと疑つた。そして息子であるだけに一層憎しみが倍した。兄の高助にも父は言分があつた。三十すぎてまだ嫁さへとらうとせず、活動の噺方なんかといふ河原者の、世間の爪彈きの滓の滓に、それもわざとえり好んで成るとは！すると新たな憤怒が濃を搖ぶつて來た。

「兄弟そろつて碌でなしが、この儂が、これ見い、面を上げて見い、

この年寄の儂を働かして、立派な若い者が二人もありながら、儂は鐵道に奉公せんならんのだぞ。儂は、お前達の世話にならうとは思はん、思はんが、子としてこの儂を、鐵道ぢあお情けで使つて下さるからいいやうなものの、儂もいつまで働けるか、隣ぢあ儂に罷めて貰ひたがつとるといふ事務所の評判も、儂の耳に入らんことはない。それに何事ぢや。兄はあの通り道樂者、お前は！お前はな知らんぢやらう、儂は昨日事務所に呼びつけられて、ええ恥さらしならまだええ、お前の不行跡、こら昌作、お前のやつとることはお上がよう知つとる。不忠極まる、何んぢや社會主義とは……お前が改心すればよし、若しもお前が……」

父は茲までいつて拍子拔けしたやうに、默つてまた汗を拭いた。

「昌作、眞面目で聽いてくれ、若しもお前が儂のいふことを肯いて改心せん時は、儂も、べんべんと鐵道の奉公は叶ふまい……」

若い平山は、父までが自分の犧牲になることは、少しも考へてゐなかつた。ニユマチツク・ハンマの音があの喧騷な轟音が、平山の耳には遠くにしか聞えなかつた。

父は立上つた。長いそれはかなり長い制規を超えた面會時間だつた。それを憚るやうに父は守衛詰所の前を小屈みに通つた。柵のところで平山は妹の澄子のことを尋ねた。

父は險しい顏をして、溜息をついた。

「儂には子供の運がないんじあ、澄もどうなつて行くのやら……。」

獨語のやうに呟いて正門からとぼとぼ歸つて行つた。……

父は平山のために、少くとも息子等が企てたK車輛工場勞働組合が動機になつて鐵道を罷めた。そして、W市の小さな造船所の夜警番のやうなことをしてゐた。

その年の冬は殊に雪が多く、老年の父は炬燵なしには寢めなかつた。造船所の海風の吹きつけるバラツク建の見張小舍で、父は相棒の爺さんと二時間交替で起きてゐる間、二疊ばかしの茣蓙をしいた板の間に煎餠蒲團を敷いて炬燵を入れてうと〳〵するのだつた。自分の番が來た、父はカンテラを携げて揉み千斷るやうに吹きつける風のなかを、木屑を踏みながら船渠の方までコツト、コツトと巡回した。その時、ひよいとい ま來た方を振向くと事務所の右の方の、自分の見張小舍のあたりが變に茫やりうす赤く見えた。

「おかしいぞ……」

周章てゝ父は外套の裾に躓きながら走つた。それでも相當に廣い構内を横切つてしまふためには年寄の足には何分かかゝる。——

小屋の近所まで來るとガクンとして父はつんのめつた——轟といふ風の音の中に精一つぱいに喚き立てる聲が、それも泣くやうな風に海の方に攫はれるだけであつた。父は夢中で内部に躍びこむと、刺すやうな煙りで眼があけられなかつた。と、黄くさい臭ひが鼻をついた。あれだな！その瞬間獸のやうた蒲團の端を摑んで父は戸外

に走り出た。次の瞬間、冷い慄つとする感觸が父の手にふれた。水だ、用水桶の水を何うして酌んだのか馬穴を提げて小舍の中にとつて返した。それを操かへしてゐるうちに燃へ上つた火はどうやら鎭まつて來た。其處へ相棒の爺さんが外からひよつこり歸つて來た。爺さんが私用でほんのちよいと小舍を出てゐる間に起きた椿事だつた。

父は造船所を罷めた。そして、勸める人もあつて、炭坑地のＮ町にあるＳ炭坑、この炭坑は貝島の三分の一もない小規模なものだつた。その社員合宿所の、母は賄婦に傭はれることになつた。

父は合宿の風呂をわかしたり、裏の其處はすぐ坑の入口にある事務所の涯の下であつたが、その空地に落ちこぼれてゐる泥炭を拾ひのけて、蔬菜を作つたりして、滿足さうにしてゐた。

――さうした一家の事情は、澄子の一年に何度かの稀な通信によつて、平山は辛ふじて知るのであるが……。

大正十四年の春、澄子が突然に彼をたずねて上京する間なく、狂氣のやうに澄子を追つかけて來た父、その父の風貌は驚くほど老境を示してゐた。

御飯をたべる時などは、ムシヤ〳〵と食るやうにとつて喰べた。そして心から美味しさうに舌鼓をうつたのだつた。それはいかにも滿ち足りた樣子に見えた。その有樣を、平山は凝つとそれとなく見まもつてゐたが。食ふといふそのこと、そのことにのみ滿足しきつて、ヤット食べ終へると前齒だけしか殘つてゐないその黃つぼい齒の間にはさまつた殘滓を、白湯でグルグル含嗽して、それをゴクリと飲み下すとき、喉佛が露はに上下するのが、蕀々しい細いのどの皺で重なりあつた皮膚に動いて見える――。

澄子にそんなことは話せず、折角、父から離れたいといふのぞみだけで上京した彼女に、また溺れさせてしまふやうな情實に絡まらせることだと思つて、平山は默つてゐたが、その悲しみは耐えられない位だつた。

父は、平山に隱れるやうに、澄子を近くの神宮外苑に連れて行つた、平山にはそこいらを見物に歩いて來るといひ置きながら、秘かに澄子の歸國を迫るらしかつた。

「澄子、今日は、どこに阿父さんを案内したのかい？」

晚食のあとで、父も大變機嫌がいいしするので平山は晴々した心で尋ねた。妹は傍で嗤つたきり應へなかつた。すると父は、口をモグ〳〵させて狡猾さうに笑ひながら言ひ譯するのだつた。

「神宮外苑の、それ、ずつと向ふの方の、澄子、あれは何とか言つたのう。」

澄子は面倒くささうに突放すやうに應へた。

「日本靑年館でせう？」

「うむ、さうぢや、さうぢや、彼處の柵のところから內側に這入ら

うとしたら、守衛が怒つたぞ、昌作、」
澄子がムッとしてゐるので、平山は父に氣の毒な氣持が湧いた。
「明日、お天氣だつたら上野公園にでも櫻見——だがもう遲いかなあ。あんな方面へ連れて行つてあげたらどうだ。」
夕刊を拾ひ讀みしながら澄子は碌すつぽ返事もしなかつた。父は父で、澄子が腹を立てゝゐるのを充分知つてゐながらその上で甘へつくやうに云つた。
「澄と一緒なら行かうか。澄は東京へ來てどこぞ名所へ行つたかな、まだ行つとらんぢやらう。阿父さんと一緒にひと巡りするとええ。郷里に歸つたら二度と出て來る譯にあ行かんぞ——どうな、行かうや。」
平山は澄子が郷里にかへる氣になつたのだらうかと不審つた。けれども父の語調には、宥めるやうな訴へるやうな、はつきりと決まらない相談を確かめる、さうしたおどおどしたものがあつた。澄子は鳥渡かほを上げて眉のつけ根を顰めながらチラと父の方を見た。
澄子の問題で平山が口を出すと父は眞蒼くなつて顫へた。
「貴樣、默つとれ。澄子が貴樣の入れ智慧で東京に飛び出した位のことを儂が知らんでゐると思ふとるのか、阿呆が！澄子は儂のもんぢや、儂と貴樣は他人ぢや、儂は一日も長う玆に居たくないんだぞ、ええか、儂は、これが普通の息子ぢやつたら儂がいふまでもなく兄が澄子に意見して歸すのが本當ぢや、ぢやが儂はお前には何とも云はん、お前みたやうな人非人にはな、賴みもせん。澄子がぐずぐずして歸らんのなら儂は警察にお願ひしても、首に繩をつけてでも、そつ引いて連れて歸るつもりぢや、社會主義の家に大事な娘を置いとけると思ふか。何と思ふとるんぢや。」
その瞬間、平山は寄遜のない老父ではなく一人の專制家に對してゐる時の恐しい亢奮が胸に湧いた。澄子の上京について平山は彼女から何の相談もうけてはゐなかつた。その點ではさうであるにせよ、假りに、澄子から相談をうけた場合の平山は、どうしてあの父から離れるのは罪惡だと書いてやれやうか。しかし、平山は澄子に「歸れ」とも「歸るな」とも云はなかつたのは、老父に對する感傷的な情愛からでなくて何であらう。
一方澄子は父には怒つてゐるけれど、兄へは兄の主義のぼやかし、家庭的奴隷に一言の援助もなし得ないその不透徹な態度を無言で嗤つてゐた。
平山はひしやがれた。
その後で父は帽子をかむつて戸外にぷいと出て行くのだつた。平山は、あんなに憤つて出て行つた父が氣掛りで、澄子にそれとなくあとを尾行させた。するど、澄子は暫く經つて獨りで歸つて來て、素つけなく言つた。
「むかつ腹よ、見てたら八百屋のあそこの露地に毎晩出てるチヤン蕎麥の屋臺があるでせう。阿父さん、シユウマイとコツプ酒を誂へて

ゐたわ。」

澄子は、彼女が諾んといふまでは、獨りで鄕里には歸るまいと思はれる、そして若し彼女がキッパリ父を斷つたら、父は氣が狂ふかも知れぬと思ふと、苛々した。彼女は不良じみて朝日をぷかぷかふかしながら默つて沈んでゐた。

結局、澄子は父が押しつけたあの養子を破談にすることを納得さして、云へば澄子にまだまだ註文が澤山あつたが、日增しにグッタリとのうのうしてゐる父を見ると、老いほうけたその姿にまけて歸る氣になつた。父はさう話が纏ると、澄子をせき立て浮々しながら、夜汽車で澄子を擁ふやうに東京驛を發つた。

平山は、さうした追憶を辿りながら、どことは無しに街を步いた。

かうして出發以來、何年ぶりかで北九州の土を踏むことは平山には甘酸ばい感慨であらねばならない。それとともに、Y製鐵所が出來て以來、いま尙ほY製鐵所は北に西に、平山が汽車の窓から見た通り小山を堀り崩し淺い內灣を埋めたてゝ、底知れずあの鐵骨建造物が建て增されて行きつゝある…。しづかに疲れて眠靜つた街も家も看板も一切の風物は、やむことのない幾千本の煙突から吐き出す煤煙で黑づんでゐる。そして海際に延々と三里に亘るY製鐵所の上の赫く焦げた夜空、それらが齎す、ついて來るやうな刺戟は、絕えず平山の心を亢奮させた。

「だが…」

平山は、こんどの講演旅行についてまはる危惧が甦つた。

Y市からN町の演說會へ平山等の一行は明朝立つのである。平山にしてみれば父の住んでゐる町に行かねばならぬ…。

父はふだんから平山が北九州に歸つて來るのを惧へてゐた。そして、澄子にそれとなく父の意志を平山に通じさせてゐた。父は澄子や女房のお咲に云ふのだつた。

「昌作はな、儂の一生の重石ぢや、ええか澄子、お前だけは、兄さん達を見習ふやうな真似をしちやならんぞ。昌作はいふことと當ることはちぐはぐぢや、見てみい、あいつが儂の子供であるばつかりに、この儂は、世間樣に小さくなつて暮さにやならんのだぞ、あいつが九州に戾つてみい、儂は面目なくて、お咲、お前も肩身がせまいばかしか、第一社長さんが置いては吳れんぞ、さうなつたら、儂は…昌作は儂に首を吊らす氣かしらん。社會主義ちうて騷ぎまはつとるが、何が人のためぢや。親ひとりすら死ぬか殺す目に會はせて…他人はどうなつても介意はんちう主義ぢや。」

殊に平山が入獄した時の父の激怒は、狂つた牛であつた。父は知合の炭坑の請願巡査派出所に行つて、この八つ裂きにしても足りない極道者の散々な嘲罵を巡査にきかせるのだつた。

「儂はな熊谷さん、この年になつて、息子があるばつかしに夜もお

ちおち眠られん。大それたことを仕出かさにやええがと、朝起きるから胸が一杯になつて…それに何事ぢやらう、監獄に行くちうは、これがこの儂の子かと思ふと腸が煮へくりかへつて… 昌作は儂の子ぢやない、斷じて儂は勘當したのぢやが、世間様には何で通用しませう、やつぱり親がわるい、育て方がわるかつた――からとみんな儂達が惡者にされる。

熊谷さん、儂は無念でならん…。」

父はさう云つて躰をぶる〳〵顫はした。

「これが昔なら儂が儂の子供を成敗するのに他人様から指をさされるやうなことは、斷じてせん！儂は不肖者は容赦できんのぢや。ぢやが、いまはご時世が違ふ、儂の頼みぢやから、あんた、お上に願つて、昌作は不忠不孝の子ぢや、一生監獄にぶちこんで下さるやうに、あんたの官職で願つてもらへんぢやらうか。」

坑からトロがあがつたのであらう。棧橋から引込線の炭車に塊炭を落す音が、引つきりなしにガラガラッと四隣の空氣を掻きむしつた。

父は彼が九州へ來てゐることを最う知つただらう。知らずには濟まないことだ。怒つてゐる。いや、怒るより怖れてゐはしないだらうか、慴へてゐるであらう…。

「何ちう執念ぶかい奴ぢやらう！昌作、きさま、儂を、この親を殺しに來たんか。あれほど儂がきさまに二度と九州に戻つて來るなと、澄子から言つて遣つたのが、きさまといふきさまは、うぬ、畜生、極道、鬼奴！何ちう、ええッ、この大不幸者奴、さあ貴様、親に、この儂に、長年よくも俺を苦しめやがつたな、それでも足りずに、儂を襲ふんぢやな、よをし、どうしてくれる！お咲、早う持つて來い、昌作をたたき斬るんぢや、ええ、何を愚圖々々しとるんか…。」

息が塞まつて唾ばかりのみこんで父は、はあはあ肩で苦しさうに熱つぽたい呼吸をはいた…。骨ぐみのあらい、痩せた感覺のなくなりかけた老父の兩手が、膝の上で絕へず痙攣的に震ふ…。

「お咲、お咲、みんな昌作の仕業ぢや、見てみい、澄子、澄子もよく見とけ、ええか、お前の兄さんは俺達を呪ふ鬼ぢやぞ、お咲き、俺達は明日から、最う、此處ぢや働けん人間ぢや、使つても下さらん、さうぢや、俺等親子を裸にして、明日の日から食へんやうにするのは、この鬼ぢや！ これが、この鬼が俺の子か、ええ情ない、お咲、お咲！」

泪がポロ〳〵父の眼から古ばけた疊にこぼれる…。

この空想は、平山の胸を鉛のやうに壓しつけた。平山は遠くまで歩いて來てゐた。ふりかへると、寢てゐる街の向ふに、新らしい鑛石を投げこんだ時に起る、溶礦爐の地軸にひびくやうな底鳴りの音が、轟々と夜氣をゆすぶつてきた。そして、地獄の炎のやうな、ド

ロドロした火焔はひとしきり天に冲してゐた。平山は思はず體が震へた。ぐつとこみあげて來る複雜な激動が沁みわたるやうに體中をのたうち廻つてゐた。

「だが、父は俺を憎んでゐる……何故、父は俺を理解しないんだらう。」

平山は吐き出すやうに呟いた。歩きながら暫くすると、さうした父に對する一切の亢奮が妙に莫迦々々しくなつて來た。然し、憂鬱だつた――。

翌日の夕方一行は筑豐沿線の坑木と石炭で埋もれた風景を車窓に見ながら、N驛に着いた。そして、思ひ思ひに乘客の間に混つて驛のまへの一寸した廣場に出た。まだ少しばかり見透しの利くほどの薄暗がりのうちに、坑山にかこまれた盆地のN町の辻々には、早くも夜霧がみるみる下りて來て、街燈がぼうとした黄い燈をまたたいてゐた――。

多賀神社の神橋をそばを通つて左に折れる大通りの角に、彼等の演説會の立札が少し剝げかけたまま、しつとりと夜氣に濡れて、戸板にべつたり貼りつけられてゐた。

平山はじろじろ四隣を見廻しながら歩いた。坑のある個處は町を少しはなれてゐるので、恰度、坑から作業を終へてカンテラを提げて納屋に歸つてゆく男や女や子供の坑夫の姿はどこにも見えなかつた。しかしそのあたりを歩いてゐる男達は、どことなく骨つぽくまた黝んでゐて、筑後辨で何か大聲に饒舌りながら通つてゐる――。

街は全體として暗く見えた。

平山は時間潰しに方々歩きまはつて、一方の方角を歩きつめたところに、街がつきて廣い夜目にも白い砂の河原に、ひよつこり出た。その可成りながい橋を渡つて中程まで來ると川の夜風が身に泌みて來た。河の水は深いらしく、帆をかけた川船がときどき川下の方に下つて行つた。その橋を渡りきつて、堤の一とつゞきの商家をはづれると、萱の生へた野原がずうと擴がつてゐる――と、遙かにずつと向ふの黒い山らしいものの麓と見えるあたりに、眼がいたくなるほど瞶めた後に、やつと、チラチラする燈が見てとれた。

平山は通行人を捉へて、それが村であるかを訊ねた。

「坑山でござす。××村でござつしよ、あつちの方は、ずつと坑山ばつかしでござす。」

通行人は立停つた序に煙草を咥へてマッチを擦つてゐた――。

「S炭坑も、こつちの方角でせうか、」

「S炭坑？　それあ反對でござすよ、ほれ、その橋をわたつて、眞すぐ右に行くと一本道でござす。」

平山はもと來た方の道をぶらぶら歩いた。そして、その夜の演説會の論旨を、胸のなかで描いたり消したりしてゐた。會場に近づくにつれて、杜絶れとぎれにやつて來る聽衆らしい勞働者に行きあつ

た。その時、平山は、かるい亢奮に驅られた。

それでも會場はまだひつそりしてゐた。裏口から控室にまはつて這入ると火の氣のない鐵火鉢をかこんで、一同は、小さなしかし張りつめた聲で雜談してゐた。時がすぎた。

いつとはなしに聽衆はぎつちり平場に立てこんで來た……。二階も鈴なりに人の顏が重なり合つてゐる。やがて講演は始まつた。

控室にゐると、聽衆の熱狂や昂奮や罵聲や、さうした會場の次第に熱して行く空氣が手にとるやうにかんじられた。その合間合間に聽集がしづまり返つて辯士の朗々とした叫びにきき入つてゐるとき、荒れ果てたこの劇場の床の下で、晩い秋虫が思ひ出したやうに啼きつづけてゐた――。平山は、自分の順番をまちながら、ともすれば湧き立つやうな亢奮を覺えた。けれども、別のものが、胸のどこかに重々しく潛んで、そのことを考へ出してゐる自分を、思はずハッと見出してゐた。

「俺は何を考へてゐるのか、そんな莫迦なこと、父は父だ。だが母は俺のために失業するかもしれないのだ……失業、それは免れ得ない悲劇だ、今更俺がどうすることが出來やうか、澄子が働くんだ、働けば食へるには食へやう……澄子が親を養ふんだつて！ それは、では澄子はどうすればいゝんだ。」

中止!! 演壇の方で慌しい洋劍のなる音がした。平山は思はずきつと立上つた。司會者は窓から首を出して控室に怒鳴つた。「次ぎ！早く。」

平山はそうつと腰を下した。辯士は控室に下りては來なかつた。檢束らしい。すると彼は焦立たしげに立ち上つて、靴でコトコト床を履みながら往つたり來たりした。

「檢束！次、早く！」

司會者のがなる聲が、ガーンと耳を叩いた。チラと誰かゞ階段から躍び上るやうに演壇に走つて行つた。「いゝか、この次は君、次は君、次は君だ、用意してくれたまへ。」進行係りは昂奮しながら、さういつて名指した男の肩を手で小突いた。彼等は腰を浮かせて時々そうつと演壇の方を覗いて、室内を歩き廻つた。

「次！」

司會者の上ずつた聲がした。平山はその時硝子窓の方を向いて彼自身をじつと制してゐた。そして彼が叫ぼうとすることをいま一度復誦してゐた。

「あんた、平山君でござずか」

彼はふり返ると若い菜葉服の人が立つてゐた。

「え、僕、何ですか？」

「ぢあ、あんた面會の人がそこに來とりますぜ。」

平山はドキリとした。そして體をそつちに向けると剝げた格子縞のマントを着た老人が扉を背にして立つてゐた。

「……父だ！」

平山は瞬間たちすくんでゐた。父は、おどおどと帽子を脱いで、知らない五六人の方へ鳥渡頭を下げてから、平山の方に寄つて來た。平山は頭がぐらぐらした。そして、後を向いて控室のつづきのガランとした部屋に急いで這入つた。

「さあ、こつち、こつちへ來て下さい！」

父はきよろ〳〵四隣りを見廻すと、いきなり古びたそのマントを脱ごうとした。

「脱がないで——さむいから。あ、ちよつと待つて下さい。椅子をもつて來るから……」

「昌作、昌作、椅子はいらんぞ、椅子なんかいらんといつたら——。」

片方の手にぶらんと風呂敷づつみをさげて、別の手を宙でふつて見せながら、まどろこしさうに床の上へぐんにやりと坐り相にした。

「さあ、これに掛けて下さい、どうしたんです。え？ マントは着てゐなさいつたら。」

あてがふやうに椅子を父の足もとにおくと、父は、いくども見當を見定めて、やつと尻をつけた。

「昌作、俺のつくつた柿ぢや、みんなにあげて呉れんか、本熟りぢやぞ——。」

さういつて持つてゐた風呂敷づつみを兩手で振つてみせた。そしてぼんやり灯つてゐる薄暗い燈に後向に立つてゐる平山をしげしげと、父は見た。すると、父の泣聲が聽へた。

「俺は、お前に喰べさせうと思つて、ちぎつてきたんだぞ、お吹とふたりで——。澄子が表で俺をまつとる。俺は、昌作、俺は邪魔せんで最う歸らうかい。昌作、お前、こんばん家(うち)に來られんか。お吹が一遍會ひたいちうとるんぢやが……。」

舌が硬ばつてゐるのか、言葉がもつれて聽きとりにくかつた。そしてぶつぶつ呟くやうに云ふのだつた。

「昌作、俺はこの頃、トンとぼけてな……お前は身體は丈夫さうでええ、それがええ、體がまめなんか俺は嬉しうていけん……お吹も澄子も俺に親切にしてくれる。心配せんでええぞ、昌作。お前は、お前が俺は、ええ舌がもつれて……やつぱしお前にあ見込みがある氣がするんぢや、お吹もさう云ふとる。社會主義ちうはええやうに思はるる、やつぱし、ええやうぢや。昌作、俺が、俺は五體がしびれてな、此頃ぢやトンとお吹の厄介にばかしなるんぢやが、俺は生きとるうちに、お前の云ふやうな世の中になるとええが……俺は體が持てん……昌作、儂あ、最う歸らう、お前の丈夫な顏を見たけ、今晩は、お吹にも話さんならん、最う歸らう、昌作、一遍自家(うち)に寄れたら、ええに、さうも行かんかなあ、最う歸らう、昌作、送らんでもええだ、阿父さん、もうかへるぞ……」

さういつて父は泣きながら、それでも椅子に掴まつて立上つた。その拍子によろよろと倒れさうになつた。

「昌作そんなら、いぬるぞ……」(完)



吉田[illegible]子

目見得

窪川いね子

一

椅子の背に捉つて佇つたまゝ、ひろ子の視線はおづ〳〵と行き處を失つてゐた。彼女をその店へ連れて來た口入屋の老婆ももう歸つてしまつた。

そこはある盛り場の横町にある小さな、箱のやうな支那そばやである。朝の掃除が終つたところらしく、泥つぽい板張りの床には打水した跡が薄くにじんでゐる。三つばかり置いてあるむき出しの木の卓子の上も兎に角片づいてゐた。低い天井の下に貼り並べた短册形の赤い紙が油によごれて、煤けた壁にどす黒く沈んで見えた。

料理場との仕切りの板をはづして主人が出て來た。四十位の肥つた支那人である。ひろ子は默つて身をかはした。

「ちいちやい姉ちやん、皮剝けるか。」

彼はさう言つて馬鈴薯のはいつた笊を卓子の上に置いた。そして梯子段の所から首をあふ向けて二階へも聲を掛けた。足音がして、銀杏返しに結つた姉女中が梯子を降りて來た。

卓子をはさんで主人と姉女中が向ひ合ひになり、ひろ子がその間に腰をかけて、三人は皮を剝き始めた。ひろ子は怒つたやうな顏をして居た。庖丁が十三歳の掌よりはずつと幅が廣い。彼女は一生懸命であつた。然し庖丁は思ふやうに薯の皮の下をとほらなかつた。確かりと薯を握つた左手へ、すべつた庖丁が幾度か食ひ込みさうになり、その度に、狼狽へた神經が、ずうんと爪先へまで走つて行く。

主人と姉女中の剝いた白い薯が、笊の中へぽん〳〵と投げ入れられた。身體を折り曲げてしまつたひろ子は、その音を額の上に感じた。

彼女はやがて一つを剝き終つた。そして剝き終つたことが恥づかしかつた。そゝくさとそれを笊の中へ入れて次の薯を取つた。主人は無表情に笑つてゐた。ひろ子は主人のその笑顏を見た。彼女はホッとした。甘へた、微かな信賴に似たものをさへ感じたのであつた。

二

夕方の薄暗い、ある活動寫眞小屋の裏口であつた。ひろ子は岡持を下げて、泥でザラザラした梯子段の板を、一段〳〵下駄で踏みしめるやうにして登つて行つた。その急な狹い梯子に、岡持を打ちつけないやうに、肩をしやつちよこ張らして下げてゐた。

梯子段の突き當りに、廊下をへだてゝ扉があつた。中から男のひしやげた話聲がぼそ〳〵と聞えて來る。そこが辯士達の居る室なのであらう。然しあたりを見まはして、ひろ子は不安げな面持ちをした。彼女は手すりに捉つて一本調子な聲を掛けた。聞えないのか、二三度呼んでも室の中では話聲が止まなかつた。

右手の廊下の奧から、袴をぞろつとはいた男が出て來て、ひろ子をちよつと見て、その儘行き過ぎようとした。

「あの、萬來軒から來ましたけれど」

「なあに、どこから」

「萬來軒から」

「さあ、俺ぢやないよ。聞いてごらん」

男はさう言つて、空氣草履を引ずつて部屋の隣の廊下へはいつてしまつた。——梯子を登るとすぐ部屋があつて、料理を賴んだ男はちやんと待つてゐると聞いたのに、そこの樣子はどうも違つてゐたそれに料理は冷めてしまつては大變なのだ——ひろ子は少し上ずつた聲を上げて、また部屋の中へ呼びかけた。

「誰だい！」

ひしやげた男の聲が一段高く扉の中から聞えた。

「こちらでせうか、萬來軒から來ましたけど」

「違ふよッ！」

そしてまた、あとの取り付き場もないやうに、前の話がぼそ〳〵と續いてゐる。ひろ子は困憊に凹んだ眼を、岡持の上に落して佇つてゐた。どう聞き違へたのか、教へられた家は、こゝより他にない筈であつた。

三

ひろ子はまた、一段〳〵梯子を降り始めた。表の西洋館の方から、柔かな雲のやうに、たくさんの拍手の音が湧いて來て、音樂がそれに交つて聽えて來た。ひろ子は泣きさうな顏で、暗い足元を探つた。

髮はお下げにして、靴をはいて、この間までは學校へ通つてゐた

のに——ひろ子はまたしても自分の頭へ手を觸れて見た。引詰めた髪の毛が、頭のてつぺんに小さな銀杏返しを形づくつて載つてゐる。リボンの結び方にも好みのあつた彼女にとつては、そんな銀杏返しなどを頭に載つけてゐることは、侮辱をのせてゐるのも同じではないか。

　彼女は泣きさうに口元を慄はせながら、眉の間を吊り上げて、かつちりとまるめてあるその銀杏返しの輪をゆすぶつて見た。然し姉女中が、ひろ子が今まで結つてゐた、三ツ組みに編んでまるめたのよりも好いと言つて結つて呉れた髪なので、自分から崩してしまふことも出來なかつた。

　やがてひろ子は、もう髪のことなど忘れたやうにつッと立ち上つた。彼女は心持ち首をかしげてゐた。彼女はさうすることによつてその厭な髪を自分に似合はせようとするのだつた。そして床に鳴る下駄の音を氣にしながら入口へ出て行つて硝子戸を開けた。

　三月始めの白い日光が、前の木馬館の靑く塗つた札賣口に斜めに線を引いてゐる。もう身仕度をして遊びに來た人たちが歩いて行く。ひろ子は自分がまだ朝飯も食べてゐないことを思ひ合はせて、自分の今居る場所が、かけ離れて違つたものだといふことを考へた。そのかけ離れた所に、急に置き變えられたことを思ふと彼女は、よく讀んでゐた物語りを思ひ起すのだつた。そしてその哀しい物語りがこんなに自分の近くにあることは思ひがけなかつた。この半年ばかり父親に職がないと言ふことが原因であつた。會社の考へ一つで、いつまた同じことをくり返さなければならないかも知れないやうな、そんな勤め人生活はもう厭だと言つて、父親は何か仕樣と焦つてゐた。父親が早くその何かをして呉れることをひろ子は待つてゐるのだつた。

　木馬館の樂隊のラッパが、晴れた空へ筒抜けて行く。メリーゴーランドはまだ乘り手が少ない。倉庫の中のやうな濕つぽさの中で、ガタ〳〵音を立てゝ廻つてゐるのが、こちらから廻り燈籠の影繪のやうに見える。

　ひろ子がふと横を向くと、隣りの電氣寫眞屋の客引が、前掛けの下に手を突つこんで、あご髯の濃い顔をこちらに向けてにや〳〵笑つてゐた。突嗟にひろ子はまた髪へ手をやつて顔をしかめた。そしてあはてゝ部屋の中へ引返して、店の正面に嵌め込んである姿見に寫して見た。鏡が前から受ける光線を反射して、自分の小さな姿が入口のペンキ塗りの硝子戸の背景の中に黒く見えた。

四

　店に誰も居ない時のことだつた。ひろ子は腰かけた儘姿見の下から料理場をすかして見た。ひとり居る若い支那人が何かしてゐる。姉女中は先程湯道具を下げて出て行つた。主人は朝の仕込みを濟ましてから、近所にある住居の方へまた歸つて行つたらしい。靜かな

部屋の中にメリーゴーランドの單調な樂隊が流れてくるばかりである。

ひろ子は思ひ切つたやうに椅子から立つた。そして片手で懷を押えるやうにして、ちよつと目を宙においてゐたが、くるりと向きをかへて姿見の下から顏を覗かせた。

「ね、私にシウマイを二つ買つて下さいな」

そして彼女はあはてたやうに錢を臺の上に置いた。

「え？」料理人は仕事を續けながら言つた。

「あんたが食べるの」

「え〻」彼女は少し慄えた聲を出した。

「ちよつと待つて」

ひろ子はそれを聞いてホッとして顏を上げた。

「あいよう」

ひろ子は急いでふり向いた。湯氣のたつシウマイを入れた小皿が臺の上に置かれた。そのはづみに臺の上にあつた銅貨の音がした。

「錢なんか、いらないよ」

料理人はまた仕事にかゝりながらさう言つた。

「でも」ひろ子は銅貨を見ながらちよつとためらつてゐた。

シウマイは三つあつた。彼女はシウマイを知らなかつた。客の前にはこぶシウマイをどんなにか欲しく思つてゐた。始終はこんでゐるそのシウマイを、彼女は始めて自分のものとして卓子の上に置き、その前に腰かけた。

五

「なか〱いゝ姉ちやんだね」

二階に一間だけ座敷があつた。店が仕まひになるとひろ子と姉女中が寢る場所である。客はその部屋でちやぶ臺に肱をつきながらひろ子に話しかけてゐた。

「お前さん、三味線なんか好きかい」

「え、聽くのなら何でも好きです。」

それはひろ子の祖母の口眞似であつた。ひろ子はさう言ひながら前かけの端をしごいてゐた。客はなほ細々と住居のことや國を訊いた。その間連れの女はおつぼり出されてゐた。女もひろ子たちの話にはひらうともしなかつた。機嫌を惡くしてゐるらしく、うつむいたまゝ料理をつつ突いてゐた。ひろ子は氣を兼ねてそつと女の方を見た。小娘などには一べつも呉れない商賣人風の女である。が、ひろ子には素つ氣ない女の態度が不思議なのであつた。

客は立ち際にちやぶ臺の端にかちりと錢を置いた。

「これはお前さんのだよ。」

ひろ子はちよつと恥づかしさうに視線を宙にした。そして丁寧におじぎをした。

ちようどその日の夕方だつた。雨がとうとう本降りになつて、庇

の下のどぶ板の上にも明るい電燈が映つてゐた。その降りしきる雨の中に、眠つた子どもを膝の上に抱いて、あご髯のぼう〳〵と伸びたひとりの乞食がぬかるみの中に坐つてゐた。ひとしきり人通りがはげしくて、乞食の姿が人垣にかこまれて、ひろ子の所から見えないこともあつた。ひろ子は幾度も入口へ出て、子どもをかゝえたその姿に目を遣つてゐた。彼女は施すといふことは美しい行ひだと教へられてゐた。彼女はその乞食に施しをしたかつた。

彼女がこゝの家へ來る時、祖母は小さな蟇口に二十錢入れて呉れた。彼女は始めて自分の金として自由に處分することが出來るのだつた。彼女は鉛筆や端書を買つて、悲しい今の自分のことを友達に書き送つたりした。そして彼女の蟇口の中にはもう五錢しか殘つてゐないのだつた。しかもそれは白銅一つであつた。それを出してしまふことは心細く思へた。そしてまたその乞食に五錢遣るといふことは少し多過ぎるとも思へた。然しそれでも矢張り、その可哀想な乞食に何もしないといふことが氣にかゝつて彼女はまた戸口へ出てその乞食を見るのだつた。

そのうちにもう誰もその前に立ちどまらなくなつて、帽子も着物も泥と同じ色をしてゐる乞食の姿が、水色に塗つた活動寫眞小屋の板べいの前にむき出しになつてゐた。乞食は的もなく頭を下げてゐる。子どもは母に死なれたのだらうか、父親は子どもを雨に打たせて悲しいであらう——ひろ子は硝子戸に捉まつて、見据えるやうに見てゐたが、身體をねじ曲げて硝子戸の内側で蟇口を出した。そして白銅をつかんで外へ驅け出して行つた。彼女は人に顔を見られるのが恥づかしかつたので、跳んで歸つて來た。そして暫く戸口へ出なかつた。財布を空にしながら、しかし施しをしたといふ金持と同じ思ひ上つた喜びがいつまでも彼女の胸にあつた。

ひろ子は藝者屋の主人らしい客から貰つた五拾錢を姉女中に見せた。

「さうお、ぢやお前さんのだわ」

姉女中は意地の惡さうな目をちらつと五十錢へ投げた。ひろ子は惡いことをしたやうに、銀貨を弄びながら目を伏せてゐた。暫くしてから誰も居ない二階へあがつて、そこでその銀貨を空になつた蟇口へ入れた。店では祝儀を貰ふことなどはめづらしいのであつた。ひろ子はその日の夕方の自分の行爲を思ひ合せて、偶然ではないやうな氣がした。彼女にはその藝者屋の主人がどういふ心算で彼女などに錢を呉れたのか、そんなことまでは考へられないのだつた。

六

「あれッ！お止しつたら、厭だア！」

目の大きい肥つた姉女中は、壁の所で椅子に腰かけてゐたが、絆纏を着た小柄の男に蔽ひかぶせられて、大仰に喚き立てた。男はふざけながら、あくまでふざけてゐるやうに、厭らしいことを言ひな

がら何も女にのしかゝつて行つた。連れの男は何も言はずにゆがんだやうに笑つてゐた。女の聲があまり高いので、主人が料理場から顔を出した。
「はゝは」主人はそれを見てお愛想のやうに聲だけで笑つた。客は活動小屋の呼び込みでその店の常客であつた。
ひろ子は傍に立つてゐた。見てゐなければ悪いかのやうに。然し彼女にはみんなの笑ひに合はせることが出來なかつた。男たちはひろ子には一言も口をきかなかつた。
男たちが外へ出て行くと、姉女中は顔を上氣させて髪をかき上げた。
「あゝひどい目にあつちやつた。いたづらつたらありやしない。」
卓子の上を片づけてゐたひろ子は、それにも返事をすることを知らなかつた。

七

朝の水はまだ冷たくて、雑巾を持つた手がちよつと柱に打つかつても砕けるやうに痛かつた。ひろ子は手すりを拭いてゐた。
「頼むわ」梯子段の中途にゐた姉女中がさう言つて二階へ雑巾をほうり上げた。ひろ子はそれを梯子段の上にあるバケツでゆすいでまた落してやつた　それを受取つて姉女中は段を拭き始めながら言つた。
「お前さんはだんまりやだね、この前にゐた春ちやんツて子なんか、おかしなことばつかり言つちや、しよつちう笑はせてたもんだよ。お前さんとぢや陰氣でしやうがないね。」
ひろ子は口を尖がらしてうつむきになり、上目をつかふやうにして一つ處を幾度も拭いてゐた。彼女は不平に似た自尊心を持つてゐた。然し次第に胸がつまつて來るのだつた。
その日、口入屋の老婆が來た。
「あまりちいちやいから」
主人が言つた。そして可愛想だからと付け足した。口入屋の老婆はひろ子に歸る仕度をしろと言つた。ひろ子は風呂敷包を持つて二階から降りて來た。そして目を外らしたまゝ皆に挨拶をした。主人が言つた。
「も少し大きくなつたら、また、おいで」
彼女は目見得中だつたので給料は貰へなかつた。
彼女はまた別の奉公口へ遣られるだらう。然し彼女は今は、久しぶりに自分の家へ歸れることが何より嬉しかつた。その店に居ては着られないので、持つて來た時から仕まひ込んであつたマントを、彼女はその店から着て出ようか、外へ出てから着ようかと迷つてゐた。



大原アヤ子

巷の接待

鷹野つぎ

近ごろ遠縁の若い細君に、小さな事件があつた。それは彼女が何かの不平で家を出て、ひと夜いちんち、何處かをぶらついた揚句、もどつて來たと云つた事件だつた。

その事には私も多少關係してゐないこともなかつた。といふのは細君がさういふ事で訪ねて來たとも知らずに——いやそれは嘘だ。私は事ありげな細君には眼をつけてゐた——その夜、彼女をさりげなく追ひ歸してゐたからだ。

一つにはその若い細君といふのが、根は確りした敏感な女性で、多少私たちの現在の生活狀態に遠慮を感じ出してゐたのも、原因だつた。彼女は着物だけは折り目のあるものに着かへてゐたが、顏を粧る間も、髮を結びなほす間も、なかつたらしい、どこか若い女性に不調和な寂しい感じをもたせた。が、いかにも靜かな樣子で話してゐた。

『貞ちやんはどうしました?』と私は判つてることを知らないふりでたづねてみたりした。

『あの子はもう少しづゝ何か食べ始めましたし、心配はありませんの。』

『でも、よくお留守居しますね。』

彼女はちよつと見えすいた話のとりやりを、避けたい顏つきを見せた。

時刻はもう夜も十時近かつた。なんのためにこんなに遲く?、それだけでも彼女に何か事があつたのは、瞭かな筈だつた。

彼女は少しばかり良人の最近の、小事業の思はしくない事を話したりした。

『ずゐぶんあの雜誌の方では、投げ出したんですつてね？』

『えゝ、すつかり損しましたの。』

『ではあなたもお若いのに、苦勞しますわね。』

『えゝ、でも貧乏も苦しいには苦しいですけど、割合單純な性質のものですから、どうにか凌いでやつて行けないものでもないと思ひますの。けど、矢張り人間同志の事となると、とても複雜で、私などには息が詰るほど應へるんですの。』

『それもさうね、けどあなたに、さうした苦しみがあるとも見えませんわ。』

私は一笑するやうに云つた。彼女が戀愛結婚から家庭の人となつた事を、それとなく指してみせるつもりだつた。そんな餘計な氣持ちの働らいた私の眼顏には、どこかに面白くない批難の色が射してたかもしれない。

若い細君は再びその話には觸れなかつた。が、やがて私の末の子供が寢床から起き出してきて、わびしく泣き立てながら、私にまつはり始めたのを見ると、彼女は居たゝまれないやうにして歸つて行つた。

そのあとで、私は子供をねせつけながら、ついウトウトと眠りかけてゐた。すると格子戸を搖するやうにして、誰れか呼ぶ聲がした。私の家人が代つて起つた。

『遲がけにお邪魔です。』

はいつて來た人はさう云つてゐる。私は直ぐそれがいま歸つて行つた細君の良人であることを知つた。

『あの、家内はまゐつてゐませんでせうか。』

『あゝ居ましたよ、今まで居ましたけど、ひと足違ひで歸られたとこです。』

『なんとか申して居ましたでせうか。』

『いや別に、こちらでは久しぶり用たしの途中ででも、寄つて下すつた事と思つてゐたのです。』

『さうでしたか、では。』

彼れは歸つて行きさうにした。すると今度は、

『何かあつたんですか。』と、家人が引き止めてゐる。

『いや、實は今夜何かつまらない事に肚を立てて、行先も云はずに飛び出しちまつたのです。まるで此のせつは無茶でしてね。僕の肩の上つてる曲つてるまで云ふんですから。』

『そりあ、ちつと贅澤な不平だな。』

『あんなのは話をして解る範圍ぢやないですよ、何んにしても世間知らずですからね。』

『まあ、今に好い加減のところへおちつきますよ。』と、家人は多少

揶揄の口調で、愛想を云つた、

彼れは慌てて歸つて行つた。

私は靜かになつてからも、妙に眼が冴えて困つた。貧乏は性質が單純だ、と話したあの細君の言葉が、強く耳にのこつて居たからだ。彼女は最早歸つて、子供のそばにおちついてゐるだらうか。

私はひそかに意識しながら、いや不注意を裝ひながら、彼女に冷淡であつた自分の態度を愧かしく思つた。

それと云ふのも事實は私たちの現狀が、人に賴られるやうには、適してゐなかつたからだ。

一體食へないといふ事は、どうして無意味に私たちを苦しめるのだらう。何か明らかに、もつと重大な意味をもつた事がらがあつても、此の苦しみの中には、はいつて來られないのだ。いや何んの、貧乏には包容力もないのだ。

私はあの若い細君をもつと親切に觀、もつと彼女に必要な人物となつても、よかつたではないか。

私は愧ぢながら、そして私自身が貧乏に苦しんでゐて、何時の間にか冷酷な位置に据つてゐたことが、さびしくなつた。

その夜、あの細君は無事に歸つてゐたとも思つたのに、さうでなかつたことがあとで知れた。

彼女は結婚前にある畫塾で一緒に暮らしたことのある友だちを、その足で新宿まで訪ねて行つたのだといふ。

私は、自身にとつてもその畫學生は――もう老孃だつた――知らない間柄ではなかつた。細君が家に歸らないとすれば、第二の彼女の行先きは、私でもきつとその畫學生だと思つたであらう。それほど一時は短かい間であつたが、親しくつきあつてゐた。

それに畫學生の日常生活の大凡そは、私も少しは知つてゐる。彼女は私の鄕里と同じ出身で、私もたまには訪ねてゐたから。(實はあの細君が畫塾に學んだのも、斯うした私たちの交際が緣になつてゐたのだ。)

新宿の彼女の住家は、相當眼に立つ門構へだつた。彼女は塾生活を出ると、初めは次弟を鄕里から呼び寄せて、小さな一戶を構へた。その次ぎにはその下の弟を呼びよせ、年ごろの妹をも、つゞいて上京させた。

きようだい四人は、そして現在の家に移つて、一種の共産生活を始めてゐた。

姉は繪筆をとり、次弟は工藝品の製作をやり、その下の弟は晝間どこかに勤めながら夜學校に通ひ、妹はミシンを扱つた。そして、それぞれその道を習得しながら、食べる事をも兼ねてゐたのだ。

斯ういふ生活は活氣もあり、それだけ事務的にびしびし運んで行つた。私は其處には恰度私の貧乏のやうに、ある餘裕のなさが想像

される、無論積極的な明るい意味でさうなのだ。とにかく彼女たちのやうなグループには、煮えきらない逡巡した話は向かないのだ。私の想像は時代の相面圖に過ぎないとしても、多少そんなところはあつたであらう。

あの若い細君が斯うした活氣に滿ちたあの家をごく家庭的なそれも珍らしくもない苦悶をもつて訪れたのである。

此の事はあとで私は、あの細君の良人から聞かされたことだ。

彼れはその妻が、ひと夜いちんちを過した經路を、どうしても順を追つて問ひ訊す必要があつたので、たいていの事は詳しく知つてゐた。

細君の良人は、むしろ書學生の家の一夜のことは、あまり氣に止めてはゐなかつた。それは餘りに明瞭な話であつたし、實際誰れがきいても、ごくあたりまへの應對に過ぎなかつたから。

だが、細君は手短かに苦笑しながら、友の家の一泊の事を話してきかせたと云ふ。

『家内は、みんなが一心に働いて、愉快にしてゐるので、すつかり氣おくれがして了つて、これは自分が何時の間にか、恐ろしく時世遅れになつて了つたと思ひ込んださうですよ。實際なんと云つてもあれなどは、それにちがひないんですからね。例のノラの話なども出て友だちが『あれは社會がうまく溫かいベッドを用意しておいたんですね』と、云つたさうですがね。それで家内は寢床の支度をしてもらつても、帶もとかずにやすんだと云ふんです。』

彼女の良人はむしろ書學生の聰明な皮肉を賞讃するやうに話した。

その翌日の晝すぎ、細君は用向きに急ぐ友だちと一緒に外へ出て彼女の親切な歸宅の勸告に從ふやうに見せながら、實はそのまゝ街中をさまよひ歩いてたのだといふ。

それをきいて私は、その時の彼女の姿を改めてまざまざと眼に浮べて見るやうに思つた。

『あれはおめ〳〵と歸られない氣がした。と云ふんですがね、つまり素直でないからですよ。一つには強情な性質と、今どき通用しない古臭い誇りをもつてたからにちがひないんです。公園の堅いベンチで埃風に吹かれて居たり、わざ〳〵驛の方に急いで行つて、郷里の汽車時間表といつまでも睨めつくらしてみたり、さうかと思へば紹介所の汚ない紙ビラを、一枚々々丁寧に眺めてきたと云ふんですからね。僕は何故カフエーへでも寄つて、熱い茶の一杯も飲んで來なかつたかつて笑つたんですよ。』

彼れの口吻は、併し一概に細君を惡評してゐるのでもなかつた。矢張り何か女らしい彼女の窮迫した感情には觸れてゐるのであつた。

『それで奥さんは、どんな樣子で歸つて來なすつたんでせう?』

『すつかりしほれてしまつてゐたには、さすがの僕も驚ろきましたよ。それがまだ訊いてみると、こんな事もあつたんです。あれがその通りまるで歩きつゞけてゐたので、何か腹などもゲッソリしてしまつて帶がみるみる箍のやうにゆるんでしまつたと云ふんです。

するとふと途なかで、背中をいやと云ふほど、ひと突きしたものがあつたさうです。灯の明るい通りだつたさうですがね、家内はこれはてつきり自分がばかに見えるか、さうでなければ心配がそとに表はれて、とても慘めな姿に見えるのだらう、と思つて自分のみなりをそれとなく見廻してみたさうです、すると漸と裾の方に帶の端が三四寸も垂れてゐるのに氣がついたと云ひます。そんな話をきかされては僕もちよつとあれの、とぼとぼとうろついた姿が見えて氣の毒な氣持ちになりましたよ。』

『で、その荒々しいひと突きといふのは、實は好意のあるものだつたんですね。』

『いや、まあ相當した一突きだつたんですよ。』

私は彼女の良人の話を、あまりに締りなく傳へ過ぎたかもしれない。いやあまりに概略に過ぎたやうにも思ふ。なぜと云へばそれらの話は私に實に、多くの經過を眼に彷彿させるからだ。彼れの細君は恐らくもつと幾倍か、行場のない彷徨をつゞけてゐたのではなからうか。良人の云ふやうに、カフエーに立ち寄つても、若しくは百貨店の流行品を見て歩くだけでも、または活動館あたりにはいつてみるだけでも、時を經過させることは實に、今どき易々たる事ではなかつたか。

『結局、奥さんも紹介所の紙ビラなどを眺めて、引き返すところが徹底しないと云へるかもしれませんね。』と、私はむしろ彼女の良人に少しばかり衝撃を與へてみるやうに云つた。『その反對でしたら、今ごろあなたもこんな笑ひ話はしてゐられなかつたかもしれませんよ。』

『いや、全くです、さうなると子供が問題ですからね。』

と良人も素直に受けた。

私はこんな話を彼女の良人から、もつと實際は座談的にぼつぼつ聽いたのであつたが、それ以上は何も知らなかつた。それに、その夜遅くなつて細君が歸宅したといふことに結びつければ、もう別に聽いてみるにも及ばないやうなものであつた。

だが、入れ違ひに二三日して、あの細君が訪ねてくれた。その事から私は今少し先きを話してみたい興味を覺える。

細君はその時子供づれで、ちやんと髮容(かみかたち)もとゝのへてゐた。しかし上元氣といふやうには見えなかつた。勿論私としても、あゝした小事件を彼女の過失として見るといふ氣は、今もつて少しもなかつたのだ。

『お母さんと一緒でいゝことね。』私は彼女のまだ乳に甘へる子供

の方へ聲をかけた。彼れだけは誰れが見ても、今がいちばん幸福に見えたにちがひなかつた。

『この子、少し加減をわるくしてゐましてね、やつと此のごろ持ち直しましたの』と、細君は子供を見ながら云つた。

『どこをおわるくなさいましたの。』

『矢張り食べ過ぎなんですの、あんなことがあつて、私が手を放したりしたものですから。』

『さう、さう。そんなことが原因だつたんですね』と、私は言つた。

細君は改めて先夜の訪問の詫びを述べた。

『あの時はどんなに失禮しましたでせう。自分がむき出しになつてしまつて、お辭儀もご迷惑も考へなかつたかと思ひますの。』

私は彼女の云ひわけを、却つて寂しく聽いた。

『あんなことでお歸しした事をわるく思はないで下さい』と私は云つた。『それで、その後はいかがでノの！』

『まあ』と、細君は私のおしまひの問ひに、多少辱しめられたやうに苦笑した。『いいわけはありませんの。』

『どうしてでせう。』

『やつぱり、あんな事があつたのは、私の不始末なんですから。』

『すると、よく歸つて來た　とは思はれないんですね』

『さうは、あゝいふ場合どなたも思はないものではないでせうか。たくなども口には出しませんけれど、耻さらしめ、と云つた樣子は持つてゐますの。』

『それは苦しい話ですね。』

『實際なんですわ、私も自分をどうにか仕樣と焦つて、餘計下落させて了つたやうな氣もしますの。』

細君は寂しいほゝゑみを浮べた。

私は彼女の良人を思ひ出してみた。彼れは決してわけの解らぬ人物とは思へなかつた。むしろ單純な良い意味の常識家であつた。それに思つてみると、肝心の細君の根本の家庭的な悩みについても、私はまだ深く知らうとする氣持ちは持たずに來てゐた。

ところがこれらの知る必要もないやうな事情が、ふと今の彼女の片言のうちに繹然としてきた氣がした。

つまり弱つて歸つて來た者をさらに壓へつけてみる、斯うした良人の理解の仕方にあつたのだ。

私は『一事は萬事』と云つた、恐ろしく曖昧な諺が、此の細君の時ばかりは、妙に眞理のレンズにぴつたり合致したやうに思ひ込んだ。それといふのが人々の性格的な折衝も、私は今もつて小面倒な一つに數へてゐたからだ。

『でも、お歸りになつた夜には如何でしたの、卒直の方ですから、頭からガミガミなすつて、却つてよくはなかつたのですか。』

私は再びこんな事をたづねてみた。

『さつぱりちがひますの』と、細君の方では存外此の話を避けなかつた。『時々子供つぼいことをする人だものですから。その時もあたしの足音がして――夜ふけはとても響きますの――格子戸のそとでためらつてゐたのを聽きつけたと見えましてね、今度は反對に、内から鍵をかけてしまひましたの。』

『おや、おや。』

『それまでは鍵も掛けずに待つてゐたらしいんですのに、さういふ事をしますの。』

私は思はず笑ひ出した。彼女は事件の一端に觸れてゐた私に、最早何もかくさないつもりらしかつた。

『あたし仕方がありませんから、裏口へ廻りましてね、炭納屋へ入つてゐましたの。今度はあたしが追ひ出された格で、つくづく犬のやうに慘めな氣になりましたわ。』

『實は、こはいんですね、あなたは』と私は云つた。

『えゝ、手をあげられるやうなことでもあれば、あたしはとてもゾッとするやうなんですの。そのくせほんたうに打たれた事がないから、たゞ却つてこはいのかもしれませんけど。』

『そんなこともありませうね。』

「あの時の氣持ちは忘れませんの』と、細君はつゞけた。『矢張り街中で途方に暮れたと同じものでしたわ、全然路傍の者が他人の家に浸入してゐるやうで、とても卑屈な氣持ちでしたの。』

『どうして鍵の格子をお叩きにならなかつたんでせうね。』

私が駄目を押すと、細君は煩はしさうに、笑つて答へなかつた。彼女は思ひ出したやうに、傍らに坐つてゐる子供を膝に抱きとりながら、

『實はその夜には、あたし乳が凝りましてね、針金のやうに突張つて、痛みつゞけましたの。母家の方では子供の泣く聲がしてゐるんです。その時にはあたしつくづく友達の云つた言葉が的中したと思つて、をかしい位でしたわ。』

『あの新宿のかたですか。』私は彼女の良人の傳へた話、『社會の温かいベット』と云つた、畫學生の言葉を憶えてゐた。

『えゝ、あの勢ひのいゝ友だちが云つたことですの、『世間はこちらのあつらへ向きには迎へてくれないものだ』などと、あの潔癖な友だちの事ですから、それはきつとあたしたちのスタートを指して云つてたことだとは思ひますけど、それにしても歩き疲れて足は棒のやうになつてるし、胸は痛みますし、その上刺々した炭俵に腰かけて、黴臭い納屋の中にゐるんですもの、友だちの言葉を思ひ出すだけでもこれでたくさんだといふ氣がしましたわ。』

細君は自嘲するやうにさびしく笑つてみせた。何んといふ妙な彼女だつたらう。ひと夜いちんちボールのやうに、何處からも何處からも投げかへされて、そしてそれが不思議に宙にひつかゝつてゐたのだ。斯うした拒否された靜止もあるものかと、私は思つた。

いまも眼に見る彼女は至極靜かである。彼女はその日、なんのもてなしもない、私たちの貧しい食卓に一緒に並んでから、子供をつれて暇を告げて行つた。



土藏の二階

眞杉靜枝

一

午後になつたので、陽が西向きの窓から、疊の上へ伸びて來た。私は、木綿の紺がすりの蒲團ぐるみ、炬燵をその方へ引ずつて行き又その中に足をさし入れて丸くなつた。かうして片方の頬を火燵の櫓の上にあててゐると私のからだは全くまんまるである。私の脊骨は、腰のあたりから丸く曲つてゐるので――。私は、脊むしである自分の正體を、誰れの目も無い部屋で氣樂に露骨にしてのんびり、若し自分が脊むしで無かつたら――の空想を樂しむ事が、せめて好きなのである。

窓の下で、裸かになつた柿の樹や猿滑りやが、和かい冬の陽を浴びてゐた。その樹の足許はもう幾年か庭男の手を入れない雜草で埋つてゐた。それらの景色を、私は此の鐵棒の並んだ三尺四方の切り窓から毎日眺めてゐる。私の居る此の土藏の二階には、窓が二つしか無い。午前中は、いま一つの南向きの窓から陽が斜めに疊から壁に迄さし込むが、私は天氣の良い日、大ていその窓を見る事を避けた。窓のずつと向ふは、此の邸の奧庭になつてゐて、亭や小池があるが、窓の直ぐ下は物干場になつてゐて、そこに私の母が、毎朝關節がぬけはしないかと思へ

る程、澤山の洗濯物をさげて來て、竿に通してゐるのを、みねばならない。

私は若し脊むしで無かつたらあの不幸な私の母を此の家から連れ出さずにはおかない。――私は譯の判らぬ腹立ちがこみあげて、毎朝到底母の手拭をかぶつたその姿をみては居れない。母は少しの苦痛も感じないやうに、まるで夢中になつて、小さい子供の着物やおまけに、お千代の着物まで、さつさと干してゐるのだ。お千代の着物など、私は幾度此處からナイフを投げ突けて破つてやらうと思つたかしれない。

私は今でもお千代を殺して、私も死ぬ事が一番必然な氣がしてゐる。

私の母は、此の邸の正妻で、私の父は此の家の主人なのだ。それでゐて、母は終日此の家の臺所で働き、私や兄は母と共に、此の暗い土藏の二階を住居にして暮してゐる。

私は廿四と云ふ今の齡になつて、初めて自分の家庭が持つ一切の事情が判つて來た。そして中でも、私は母の氣持が實によく判るやうになつて來た。

生れつき、からだが惡く、いつも自分の健康と戰つてばかり來た私は子供らしい潑らつとした氣力を持たずに過した故、只ほんの記憶の中に消えかかつてゐる事は、私がたしか十の時――あれが今思へば、私の母にとり最も苦痛の最初であつたのだ。今の健一と云ふ子を懷ろに抱いたお千代が、私の家へ荷物と一緒に移つて來た。母にとり、それは多分突然では無かつたらしく、母がお千代をもてなしてゐた。お千代はよく肥えた色白の顏に、房々した束髮の毛をたれて、俯向きながら白い胸をあけ、健一に乳をやつてゐた。いつも臺所に近い、今女中部屋にしてゐる部屋にお千代はゐたやうである。私の母に對しても、兎に角く、よくつかへてゐたやうだつた。

その頃の、お千代に向ふ母の顏が妙に今でも私の目に殘つてゐる。白い歯をむき出し、無暗と人の好い相だつた。――

その後、今思へば、時々母は目に泪をためてゐたし、何か譯の判らぬ事で、ひどく私たちを叱る事もあつた。いつか、家の離れになつてゐる暗い部屋に、私が何の氣なしに入ると、そこに母が俯向けに打ちたほれてゐた。母は私が入ると直ぐ、起きあがり、手に持つてゐた手拭を懷ろへねぢ込んで、そこを出て仕舞つた。餘程、思ひ惱んでゐた母の姿だつたのだと今になつて思ひあたる。――

お千代の子供の健一も、私の父を『お父さん』と呼んでゐる事でお千代が私の家にとり、何者であるかを私がはつきり考へ初めたのは、女學校の寄宿に入つてからだつた。同時に母に對する同情や、お千代に對し、激しい憎みを覺へた。若し、その頃その他のもう一つの事が同時に私を苦しめなかつたら、私は多分、母を救ふ働きをしたであらうけれど、私にその頃もう一つ大きい傷手がやつて來たそれは私が不具者である、と云ふ宿命的なものだつた。十五、六に

なつて初めて此の二つの事が私の運命を暗くした、

十七の時、腹膜と云ふ病氣で、手術を受けねばならなくなつた私が、寄宿から家へ運ばれて歸つた時、玄關へ走り出て來た母が、恰も未亡人のやうに、髮をブッツリと切り下げにしてゐた。私はひどく悲しかつた。母はとう〳〵お千代に妻と云ふ權利を剝ぎとられたのだ――と思ひ、私は母を怒鳴りつけたかつた。二ヶ月程の入院生活から歸つた私は、母家にゐては、小さい子供たちに妨げられるから、と云ふ母の口實で、私の居間を以來、此の土藏に持つて來られた。お千代は健一のあとから、健二、花子の二人の子供を私の家で生んでゐた。

『なぜ、私たちはこんな土藏で暮さねばならないの?』。或日私は堪らなくなり、努めて氣輕に切り出した時、母は何か用をして立ちかけてゐたが、私の言葉の不意に打たれて、フト首を私の方に向け暫く押し默つたが突然バタリと、私の前へ座り、持つてゐた盆を投げ出すと。

『友江さん――』と、突拍子に亢奮した聲をあげた。『何もかんもは私が惡いのや、私が、惡いのや――私が惡い――。』云ひつゝ、亢奮で震へた母の咽喉がゴクリと詰つた。急に蒼くなつた母の首筋や唇を私は見た。母のあまりの激動に打たれ、私はそこへ聲をあげて泣き伏した。心では二度とこの事に觸れぬ事を誓つた。

母はなぜか滿足仕切つて家の仕事をせつせと働らいてゐた。お千代に私が會ふ機會は、稀れだが、すつかり主婦氣取りにおさまり、太い腰に家内の鍵などをブラさげてがちやつかせ、兄などに會つた時は、愛想がよかつた。

お千代は私の母を『ねえさん――』と呼んでゐた。――

二

そのうち、私は家の中のこの許し難い矛盾から、やゝ眞理に近い事實を教へられた。

それは私の兄が、兵隊から歸り、此の土藏の二階に暮す事になつた二日目の夜、私に話した事である。

兄は一途に母を憐み輕蔑してゐた。自分迄が此のやうに暗い生活をせねばならないのは、只々母の不仕鱈からだと云つた。

私は、初めて知つた事實に胸を打ちぬかれ、尙ほ兄の説明を促した。

私が丁度女學校の寄宿にゐる間の出來事で、その頃ほんの一寸した不身持ちが母の上に起つたと云ふのである。兄はその時分中學を終へ、家にゐた。兄も、その時目擊した事件としては、只何も無く、突然母が一人土藏の二階で寢るやうになつた事と、友川の叔父が、何度も來て座敷にゐる父と、臺所のたたきの隅に立つてゐる母との間を往復し、何か事件の結末をつけるやうであつた事。母は、兄の言葉に依ると、その時すつかり取りのぼせて仕舞つてゐて、臺所を

あつち、こつちと、うろ〳〵に走りまはつてゐた。お千代が、どこかへ出かけるときいて、母はいきなり玄關へ駈けて行き、お千代の下駄を臺所へ持つて來て雜巾で裏表を拭くのであつた。——と、女中たちの素振りや、家の中の凡ての空氣が、非常に母を壓迫してゐる事を感じた兄は、友川の叔母のところへ出かけて聞いてみた。叔母は、

『おつかさんに一寸した間違ひがあつたのだが——』と、父の弟嫁として、私の母とも仲の良かつた丈けに、心配した風で、

『あんな正直な氣のいゝ人に、魔がさしたとはこの事なんだ。——私たちはあんたのお母さんには、かげからどれ丈け同情して、いつも力にならうと思つてゐたかしれない。——今度の事さへなければどんな事があつたつてお千代なんかにヒケはとらせない氣だつたのだが——本當に魔がさしたんだ。人間の力ではどうする事も出來ない魔がさすと云ふ事も、確かにあるものなんだねえ——』と、感慨を深めて云ひ、完全に母の同情者である叔母は、母の今度のあやまちは、確かに母の意志ではなく、一時的な通り魔のやうなものゝ意志なのだと云ふ意味の事を力說し、その證據に、母の今の夢から醒めたやうなうろたへ方を見よ、と云つた。母は、四方向いて拜みつきながら、何卒臺所の下女としてでいゝから此の家に自分を置いて呉れ、子供の世話をさせて呉れと賴むのだつた。——

その翌日から、兄は、髮を切り下げにし、昨日とは全く變つた、臺所の下働らきのやうな心構へで、立働らいてゐる母を見た。が、兄は、數日の間母と口をきく事や、顏を合せる事を避けた。母は、兄の絣の單衣を、勝手許の板張りに腰かけて縫ひあげたが、それを兄に着せる爲めに、兄が父の部屋から出て來るのを廊下で待つてゐた。けれど兄が意地惡くそれを避けるので、終ひには兄が便所から出るのを待ち受けて

『これを着て——それをぬいで。もう暑いから——』と早口に云ひ、ひろげて渡した。兄はそれを引つたくるやうに取り、さつさと首も曲げずに部屋に入つて仕舞つた。——

私はそれ丈けの兄の話で、その頃の有樣をすつかり心に描く事が出來た。わけて、正直な母の心が、フト病氣のやうにとりついて來た惡夢から醒めて、どのやうにうろたへたであらうと云ふ事。一時に、母として私たちの運命を思ひ、ぼんやりと、取りかへしのつかない惡夢におそはれてゐた事を、身を打ち碎き度い程悔いたにちがひない。悲しい家庭の病點にばかり氣を奪はれ、心にうつかりと淋しい穴を作つてゐた不甲斐ない自分に氣付くと、どうすれば此の罪がつぐなはれるかとうろたへ、心から罪の許しを乞うたにちがひない。それだから母は、自分の足でも、早翌日から、づか〳〵と家の座敷の疊を踏む事さへおそれたのだ。臺所働らきになり下る事。髮を切る事、土藏に引移る事　皆母は心から當りまへに思つたにちがひない。

私は、その夜泣く事も出來ずに、ぼんやりとして仕舞つた。幾分身のまはりの不合理から救はれた氣もした。そして夜中になつて、夢うつゝの中から初めてしみ〴〵と泪があふれ出た。

私の父と母は、三十年程前、紀州の田舍で結婚して、二人は互ひの愛丈けを奮闘のかてに、裸一貫で大阪へ出て來て、夜店に二人で蜜柑賣りの車を引いて出た。私の兄が生れたのはその頃で、西九條あたりの二階借りが母の產室だつたらしい。父が今の財產を握る迄には、歐洲戰爭と云ふ時變も手傳つてゐるやうだが、概して父の金を殖やす機智に依るものらしかつた。私の生れる頃は、二階借りをやめ、小さい一軒の家を借りてゐた。

私が小學校に入る年に、今の邸を手に入れて引移つた。

が、私の記憶にある幼少の頃の家庭生活の中には、殆んど父は現れない。父はそれ程家を外にして、働きかつ遊んだ。鐵を扱つて遠く戰地へ行き、長く留守だつた事もあるさうだが――肥滿した父の膝に一度抱かれた憶へがあるが、確か父は酒に醉つてゐたらしく、胸の激しい動機や、苦しさうな息づかひに妙に、怖ろしい氣がして私は直ぐ立ち、赫い父の顏をうかゞひつゝ後ずざりして仕舞つた。

父は最近府會議員に立候補したが、落選した。此の次ぎは大丈夫だと母は意氣込んで云つてゐた。

父には今、家のお千代の他に藝者をひかしたお久と云ふ女が、或る所に住はせてある。お久は私に三つ齡上で、よく此處へ遊びに來私の母や、お千代とも仲良くしてゐる。

私の兄は別に秀才らしいところも無く、近頃巡査になつてゐるが此の四五日身體を惡くして此の土藏へ歸り養生してゐる。

此の家の財產が、何程自分のものになるかと云ふ事が、兄にとりて一生の重大事らしく、よく叔父とその事で相談してゐる。

斯樣な私の家庭だから、そして此のやうな私の身體だから、私は廿才の時、母の奬める結婚を默つて承知して仕舞つた。その事で、私は、私の母が喘へぎながら擔つてゐる母としての義務の半分を、輕くしてあげる事が出來ると考へた。

けれど、今考へれば、私の結婚は母に只一時的の悅びをあたへたに過ぎなかつた。

母の忍苦の甲斐とも云ふべき、多額のお金を父は私の持參金に與れた。それは、母を泣く程悅ばせた。併し、私の肉體は、いかにも必然に、結婚生活に堪へられなくなり、夫とは別居の形式で此の母の膝許へ又戾つて來た。

私の夫は私の丸くなつた背骨や、胸の大きい手術のあとをみて、手でさすつて、可哀想だと云つて與れたが、決して賴りになる人では無かつた。私の持參金は、直ぐ彼れの下手な商賣の捨石になつて仕舞ひ、私の胸の傷あとからは、又膿が出初めた。

それ以來、もう此處で二年になる。――

三

下の重い木戸の開く音がして、薬瓶をさげた兄が、痩せて細長くなつた顔をみせた。

兄は疊の上へ直ぐ膝を曲げて、薬瓶からぢかに水薬を呑んだ。而して羽織をぬぎ、そこに白い布をかぶせてある食卓の方へにぢり寄つた。急いで私は疊の上の白布を除け、長火鉢の火を掘つて網をかけさつき私と母がしてたべたやうに、干し餅を燒いて兄に出した。

『喰べものは、別に用心しなくてもいゝの』

と私が訊くと、兄は首肯いたが、次ぎに眉を見る間に八の字によせ

『まづくて、くへやしない。晩、何か拵らへて呉れ――』と、泣きさうな聲を出した。

兄が寐床へ長くなると直ぐ、母が戸をあけてあがつて來た。

母は、白いエプロンの裾をくる／＼と前へ卷きあげ、何かかくして持つて來た。が、兄が歸つてゐるのをみると。

『お醫者、けふは早かつたなあ、――どう云ひなつた――』と訊ねた。兄は例の如く口重く直ぐに返事なぞしなかつた。

母はそのまゝ、私の方へ早足に寄つて來て、座りながら、卷きあげたエプロンの中から、かくして來たものを、仰山な手つきで出し初めた。やがてザルに入つた蒸したての薩摩藷が、私たちの前へ現れた。

『おや／＼ッ――』、私はわざと子供らしい嬌聲をあげた。すると母は、うぶ毛の見える口の先を皺を寄せて尖らせ、私の悦ぶのを感じると尙ほ剽輕らしく、直ぐ喰べよと云ふ風にザルを私の鼻先へ突きつけた。私は小さいのを一つ取つて喰べ初めた。母も一と口たべながら、直ぐ立つてそこの兄のたべた食卓を片つけ初めた。

母は、私の夫が住み込んでゐる難波の店へ一昨日、蒲團を洗ひ張りして屆けた故、今日あたり又夫が此處へ顏をみせるかもしれぬと云つた。そして直ぐ、ザルに入れた茶碗の洗ひものを持つて出て行つた。

間も無く、私は戸の開く音と夫の聲をきいた。直ぐ炬燵から身を起そうとしてゐる私の後ろに、もう夫は近寄つてゐた。

『赤井君も一緒なんだ――』と、夫が云つた。赤井は直ぐ、私の前へ油で光つた頭をみせて挨拶した。

『どうですか、からだの方少しよろしい？。』赤井は中腰で、お座なりのいたはりを云ひ、目でさも氣の毒さうに私のからだを見た。

その間に夫は、兄の方へ行き、病氣の樣子を訊ねてゐた。巨きい夫の背中に、此の間私が縫つた銘仙の羽織が、よく落付いてゐた。床屋の門から眞直ぐ此處へ來たらしく、夫の横顏は靑味を帶ひ、髮もきちんと角張つてゐた。赤井も私の前から立ち、兄の方へ行き、三人は、何か私に聞えぬ聲で云ひ、そして、一時にくつ／＼と笑つた。夫の眉が、笑ひつゝ狡るさうに上下した。茶を入れつゝ私は、

その夫の目と視線を打突けた。瞬間、私の頭が熱くなつた。夫の目の色は、冷めたく私の心を差し貫いた。あわてゝ私は、譯もなく夫の方へ正面に座り直し、夫の方から見える私のポーズを變へやうとした。併し、心がごちやごちやになつて、目があつくなつた。――なにも、今更私は夫に背むしをかくすわけは無い筈だが――。

『友江さん、もういゝ加減にこの男を手厳しく束縛して仕舞はないといけませんよ。少し此の男出鱈目過ぎますよ――』。赤井は私に告げ口の口調で云つた。夫は、赤井を毆ぐる眞似をして、『馬鹿を云へ――』と云つた。

赤井は輕口でよく喋り皆を笑はせた。夫はそれに乘つて、話し家の聲色をやつた。

私は、いつも夫が訪ねて來た時するやうに、夫に身をすり寄せ、小さく座つてゐた。夫は雜談の中から私の頭の所へ口を寄せ時々聲を潛めて私のからだの具合ひを訊ねた。近頃は、胸の傷を鏡に寫してみないか、とか、醫者の水藥は矢張りあのドロドロしたクリーム色か、と云つた。頭を夫の腕にすりあてるやうにし、甘へた口調で私は、昨日もガーゼにまだ膿がついてゐた事、夕方にはどうしても卅七度の熱が出る事を訴へた。併し夫は、それを耳に入れながら、私の爲めに心を全部使つてゐて呉れると云ふわけでは無かつた。夫は直ぐ雜談の中へ顏を向け、愉快さうに笑つた。私は併し、尙ほ夫に寄りかゝるやうにして、じつと目をつむつた。胸のあたりから、もう夕方近い徴しに、ゆるく熱が昇つて來るのを感じた。

母が、せわしさうにそこへあがつて來たが、長火鉢のところへ座り、手で火鉢の角を拭きつゝ、こちらへ向いて何か聲をかけた。

『何あに――』。私は手で男たちの話聲を制しながら、母の方へ首を差出した。

『晩は、皆さん何がいゝ？』云ひつゝ母はいかにも人の好い目をした。

『鰻が、いゝなあ――』。兄が即座に云つた。

『鰻――と』。母は聞くなり目を空にやつて少し考へ込む風をした。私は直ぐそのわけを讀んだ。

『駄目でせう。ねえ母さん鰻又うるさいんでせう――』

『いゝえ、かまへん、かまへん、私が行つてさげて來るよつて――』と母は打ち消した。

『だつて重いわ、これ丈けの人のもの』。

『ぢや、僕行つて來う――』。夫が口を出した

『あゝさうして、さうして――』

では電話丈け、今そつと掛けておくから、少時したら取りに行くやうにと云ひおいて、又せわしさうに母は出て行つた。

そのあと、私は何となく心がすつかり白けてしまつた。かうして此の土藏へ御馳走を持ち込む時は、我々の唯一の味方であるあのおでんや以外の店から取らうとすると、先づ母家の者たちに氣取られ

ない爲めに、一と苦勞せねばならなかつた。私はさう遠慮をさせられると云ふ腹立たしさに、いつも母の考へに逆らつてみたが、結局はかうして遠慮しておく方が、かへつて自分自身の神經をいたはる事になるのだと云ふ事を悟らねばならなかつた。

母家にゐる子供たちや、經濟觀念の病的に發達して仕舞つたお千代が、これを知ると、何か、私たちの氣を惡くせずにはおかないからだつた。引いては、お千代對、私の母と云ふ病點に迄私の感情が引き出されねばならなくなるのだ。――

『もう廿分たつた、行つて來う』。夫はさう云つて立ちあがつた。

私の手から金を受取つた夫は、直ぐ身をひるがへし、階段を降りかけた。私も追ふやうに後に續いた。階段の下の眞暗な所で、夫は手探りに木戸を引きあけやうとした、が、あとから私の降りて來たのを知ると、戸を開ける前に、二三歩私へ近付いた。――私の額が夫の唇を一寸感じた。――けれど次ぎの瞬間には、夫はその重い戸を勢ひよく引きあけ、下駄を履いた。

どんよりと、たそがれの落ちた戸外へ出ると夫は懷ろ手して、空に袖をひるがへしつゝ、斜めに飛ぶ落葉の中を通用門の方へ小走つた。

灯がついて間も無く、皆の前へ、夫の筋肉の張つた腕が鰻の箱を持ち込んだ。母の分を私の横におき、皆は箸を劃つた。

少時してあがつて來た母は、階段の所から口の內で念佛を唱へ、手にいつもの如く、佛前にそなへる御飯を持つてゐた。

部屋の片隅にある、此の部屋には不相應な立派な佛壇の前へ、母はそのおそなへを置き而して、エプロンをかなぐり捨て、念佛を一層聲高にしつゝ金具の佛壇の戸を開らき、お燈明をつけた。その灯がゆれるにつれ、一方の壁に映つた母の切り下げ髮の影が、大きく匍ふやうに動いた。光りに浴する人のやうに、佛像を見あげた母の目は異樣に輝いた。

やがてそこを立つた母は、朗らかな顏で、私たちに近付き、手早く私は割箸と鰻のどんぶりを母の方に押しやつた。

『口に合うた？』。母は箸を割りつゝ兄にきいた。母が自分のどんぶりの蓋をあけると直ぐ兄は箸を伸ばし鰻を一切れ突きさして取つた。喰べ終つた母は、一と休みもせず、立つて其處を片付けエプロンを持つて出て行つた。

夫と赤井は疊へ腹匍ひながら煙草を吹つてゐた。ほてつた夫の顏をみてゐると、フト私の心は、夫から他人以上に遠く飛びはなれたそして凍へるやうに淋しかつた。もう何年か、夫とさう云ふ關係を持たない。――

併し此の時間になると、私の胸の結核菌は、私の熱をすつかり高め、幾分氣持を上氣させ浮いた調子にした。トランプのカードを持ち出し、私は夫のそばへ立つて行つた。

この時、下の戸を開け、重い足音があがつて來た。それは珍しく

父だつた。
　八反のどてらを着た父の巨大なからだが、其處に現はれると夫や赤井は哀れな程あわてゝ座り直した。
『どうだ？　具合――』。兄の寢床に近付いた父の足許に、急いで私は座蒲團をすえた。父の酒で赫らんだ上機嫌の顏が、一時に部屋の中を明るくした。私は何かしら、はしやぎ度くなつてうろ〳〵した。
此處へ父が來るなど、半年に一度程である。
　巡査としての兄に、近い内に何か頼まねばならぬ事件が起つたと父は云つた。父が、夫や赤井の方を振り向くと、赤井は頭を掻いた夫は、父の店で仕事をしてゐるので、その動らき振りに意生地が無いと、父に散々やられた。
　少時して、彈んだ調子で何か喋りながら、母が父の店の勤め人である、砂田の妻君を案内して來た。
　砂田の妻は、見るから卑しいお世辭笑ひで顏をゆがめ、いきなり父の側へべたんと坐り『旦那はん、まあ此處でおましたか、あんたはんまあ、お珍らしい――』と、非常な意氣込みで、父の肩に手を掛けんばかりの嬌態をみせた。
　ずつと離れた火鉢のそばで、それを見てゐる私の母は、白い齒をむき出し顏中をゆるめて、人の好い性質をむき出しながら、砂田の妻の仰山な動作に氣を奪れて笑つてゐた。
　私の夫と赤井は、口を揃へて年上の砂田の妻をからかつた。
　やがて父は立ちあがり、谷煙草入れを腰につけると、階段の方へ行きかけた、砂田の妻は疊の上でくる〳〵舞ひしながら、私の兄や夫の赤井にお辭儀をし、而してあわてゝ私の父の後を追つた。私は直ぐ母の顏をみた。砂田の妻に無視され、挨拶を忘れられてゐるのに私の母はその人の好いくづれた顏を引きしめやうともせず、立つて階段の所迄砂田の妻を追つて行き
『まあ、ほんまにおあいそなしで――』と聲をかけた。
『御免んやす――御邪魔しまして――』と、階段に立つたまゝ、相手は至極無愛想に挨拶し、直ぐあわてゝ降りて行つた。
『あんな人間に、お辭儀なんてせんでもいゝのに――』私は直ぐ、しやくり聲で母になぢりつけた。
『何んでや――』。母は腑に落ちぬと云ふ顏で私をじろ〳〵みた。私は、何か一つ物でも叩き壞したい氣がした。
　茶器などを片付け、母は又母家の臺所の洗物をすませる爲めに出て行つた。私は疲れて、ぐつたりと火燵へ足を差し入れた。すると此の時夫は疊の上の、敷島の袋を取つてたもとへ入れた。
『もう行くのか？』私の兄がまるで私の口に代つたやうに直ぐ訊ねた。
『うん――』とあいまいに答へ、夫は赤井と目を見合せた。その時の赤井の顏を、私は見ねばよかつた。野卑なくすぐつたい笑ひも浮べた赤井の顏、――私は何か云うとしたが聲を呑んで仕舞つた。

『チェッ――いかんぞ、あんまり出鱈目やつちや――。』兄の低く云ふ聲が、熱くなつた私の耳に流れて來た。重苦しいものが皆の間へおちたやうに思つた。でも夫と赤井はへんな笑ひをやめなかつた兄は何か吐き出すやうに一言云ひ、くるりと仰向けになつた。

私は悲しく、目に泪が浮きあがらうとするときいつもするやうに鼻先きでとぼけたやうな鼻唄を唄つた。けれど、もう目先きが熱くなつた。

併し夫は立ちあがつた。そして赤井も立ちあがりつゝ無遠慮に私の顔をみた。すると不思議に、私の顔は笑ひにゆがんだ。

『さよなら、又來ます――』。

『えゝ何卒――』。私は皆に脊を向け、壁のマントと帽子を取る時素早く瞼を合せて、目の中に泪が無いかを確かめ、而して皆の方へ振り向いた時には、へんに私の心は武裝が出來たやうに氣輕だつただから、夫へも素直な樣子でマントを手渡す事が出來た。

『いゝよ送つて來なくて――』。夫は階段の下から降りて行く私を見あげて云つた。でも私は下へ降り、二人のあとから戸外へ出て、後ろ手で木戸をしめた。

『寒いのに、よせばいゝのに――』。夫は一寸私を振り返つて、さう云つたが、さつさと赤井と肩を並べて母家の木戸の方へいそいだ袖口に手を引つ込め小走りにそのあとから續いて行きながら、私は暗い植込み迄來て、フト立ち止つた。

『私、此處でもう行かない、――さようなら』。

足がもう前へ出なかつた。自分がみぢめに尾を振つて行く犬のやうにみえて來た。

『さう、ぢや、大事に。――又』。夫は云ひつつ二三歩こちらへ引きかへして來た。私は、くるりと脊を向け、バタ〱と土藏の前迄走つた。振りかへると、夫と赤井の白足袋は、もう暗闇の中に見えなかつた。

尚ほ目をこらすと、母家の臺所の窓の灯の前を、すうつと、二つの帽子の影が行き過ぎた。

私は土藏の木戸を馬鹿に重く感じながら、引きあけた。もう併し泪は出なかつた。階段を一段づゝあがりながら、中程へ來た時、『友江かい――』と云ふ兄の聲がした。それがあんまり優しかつたので私は一時にそこで泣き度くなつた。その階段に突俯したまゝしやくりあげて泣いた。

立つてくる兄の音がした。階段の上迄兄は來た。けれど私は、兄だから、丸くなつて、みつともなく、いぢらしく、かうして泣いてある自分の姿を氣樂に見せて仕舞へた。



深澤紅子

みちづれ

ヴイクトオル・マルゲリツト

望月百合子譯

第一章

自然は惡を知らない。教育が惡を發明したのである。カミイル・モオクレエル（肉體的戀愛より）

一

玄關の呼鈴が鳴つた。

アニイックは、化粧部屋と臺所とを兼ねた片隅で、大きな海綿を屈めた裸足に擦りつけ乍ら『ポールか知ら？……いいえ、あの人なら鍵を持つてゐるわ』と思つた。けれども浴槽の中に裸體で立つてゐたので、彼女は動かうともしなかつた。そして流し場の上の水口で海綿に水をふくませると、それをまた靜かに體中に流した。

『なんていい氣持ち！』

冷たい水の衛生的な愛撫は、戰慄と共に、筋肉の逞ましい背や、若き戰士のやうな胸や、象牙の柄のやうに漸錐形に張り出した腹部等を走り廻り、それから肉の締つた、紡錘形の脚を辷つて、子供のやうな足の甲や、圓い爪の薔薇色の瑪瑙を、滴の雨で濡らした。呼鈴

はまた鳴つた。

『ちえつ！誰だらう、一體？』

彼女は斷髮の栗色の卷毛を振つて、金色の眼に瞬間さつときつい色を浮べた强情な顏を向けた。

『まだ鳴つてゐる！』

彼女は放つておくことに決めた。姉以外には何にも、誰をも待つてゐはしなかつたので……第一、日曜日だもの、相談に來る日ぢやないわ。自由、さうぢやなくて？ 苦しい週間の後だもの！……唄つたり、走つたりする欲求が彼女を喚つた。いいお天氣だ！……自動車の散策、田舍のお晝餐(デジュネ)……十一時にはすつかり仕度をすませてゐなければならない。ピエール・ルボオが來るだらうから。

併し執拗な呼鈴の音と、閉された扉を絶望的に叩く音について、失望したやうな聲が聞えた。

『アニック！ アニック？……私よ、セシルよ……セシル・アルディよ、メレットよ！』

『あら！……待つて頂戴、いま行きます』

呆氣にとられて、けれどそれよりも一層嬉しげに、アニイックはポンと浴槽から飛び出した。突差に大きなタオルを體にまきつけると、アトリエ（彼女のアパルトマンの全部の部屋を含んでゐる處の）の摩りへらされた敷物(タピ)の上に、大きな濡れ跡を印し乍ら大股に飛んで行つて、扉を一杯に開け、ほつとした顏つきで立つてゐた婦人をやさしく引き寄せた。そして子が母にするやうに、愛情をこめて、やさしく色褪せた双頬に接吻した。そして笑ひな爆發させ乍ら一寸後退じさつて、また飛びついて接吻した。

『仕方がないわ、あなたを濡らしたつて……』

『まあ、ともかくもはいりませうよ！』この不意の訪問者も笑ひ乍ら言つた。

彼女は、古い生徒達のうちの誰よりも愛してゐた、この精神的の娘をしみ〴〵とみた。この娘こそ、暗い彼女の生涯の誇りであらう、孤獨の慈しみの慰めである。

『變つてはゐないわ、少くとも氣持ちだけは……だつて他のことは、こんなに大きくなつて！ この辯護士孃さんは……二年逢はなかつたんだものねえ！』

『それやさうよ』

彼女達は二人で、何にも家具が置けない程狹い玄關をいつぱいに塞いでゐた。

『おはいり下さいな。私の仕事室を御紹介しますわ……』とアニックが言つた。

彼女はいたづらつ子のやうに、大げさな身振りで、黄金石で塗つた部屋を示した。そこには友達の若い畫家達の繪が數枚、明るい斑點を點綴してゐた。

『これは素敵だこと』

『ほんとにさうお思ひになつて？』

彼女は滿足して部屋の一隅を指ざした。そこには寢臺兼用の長椅子や、書架がおかれてある。

『私の寢室』……それから古風な二脚の椅子の間に、黒と金を塗つた木の圓卓があつて、その上には紅チユーリツプが長い水晶の一輪ざしに、深紅色の飾りをつけてゐる。

『私の食堂』……

マドモアゼル・アルデイは、小さな田舍町の女教員らしい單純さで、こと〴〵に感心した。何故なら彼女は生涯貧しくて、美しい凝つたものには馴れてゐなかつたから。そしてまたアニイツクに觸れた凡てのものが、アニイツクが觸れた凡てのものが、突如として美しくなつたから。

アニイツクは事務机――總檜の近代風の卓子で、その上には訴訟記錄が山積してゐる――の角に腰かけた。そして野蠻人の女の腰卷のやうに、腰に卷きつけたタオルを膝の所でひきしめて、脚をぶら〳〵させ乍ら。

『メレツト、貴女にお目にかゝるなんて、ほんとに嬉しいわ！　何んでいらしたの？……』

『お前さんがイヴリンをたつた時、私は校長になる試驗準備をしてゐただらう？　ね、そして今私はその辭令を貰つたのだよ。ヴエルサイユに赴任するやうに……素敵だらう！　え？　お前さんのこのサン、スユルピスの町から汽車で一時間……私は不意にお前さんをびつくりさせてやらうと思つてやつて來たのよ』

アニイツクは手を打つた。そして發條仕掛のやうに言葉も出ず、アルデイに飛びついた。彼女こそ、かつてアニイツクの母の喪が明けた時、この小さな賴りない孤兒を引とり、姉のボオルが遠くに離れて行つたのだ――自立して生活と鬪ふために――母ともなり、敎師ともなり、友達ともなつてくれた人であつた。アニイツクはアルデイを抱きしめて、

『だいじな、だいじなメレツト……貴女があそこにゐて下さることが、貴女がすぐ近くにゐて下さることが、どんなに嬉しいか貴女にはお分りにならないでしよ……』

彼女はアルデイの肩に頭をもたせた。その肩は幾度、發見や、幻滅の度毎に生じる彼女の美しい魂の信賴や、夢や、不安なやさしさを、甘やかに支え、元氣づけたことか……

この『メレツト』のおかげで今では、鬪ふために武裝し、熱情に滿ちた強い彼女は、感動してメレツトの顏の皺の上に、母のやうな眼に時の損傷を見た。明日の少女達や、女達や、母達が、彼女達の道を開拓するために、彼女達の辛い未來への險岨な道を平坦にするために、惜しげもなく與へた時……。セシル・アルデイは老いた。けれど彼女の精神は老いない……彼女の眼は昔と變らぬ淸らかな泉の迸りのやうな淸澄さを保つてゐる。

アニイックは閃めくやうな記憶を辿つて、いつか少女時代の思ひ出に浸つた……食料品や、小間物や、金物を商ふよろづ屋（信用の店、レンベエル）の店に閉ぢこめられてゐた幼年時代……黴くさい思ひ出、そこには後家になつていつも病んでゐた母の、青ざめた幻が幽靈のやうにさまよつてゐた……それから不意の解放、それは學校に入つたことだつた。そこには花が咲いたやうな樂しい生活や、とつておきの太陽があつた。

マドモアゼル・アルデイ――もう老嬢で、母にならなかつた淋しさに苦しめられてゐた――は、ある日、課業の後に、熱で赤い顔をして咳をするアニイックを殘しておいた。そしてこのやつれ果てた子供を可哀さうに思つた……兩親も親戚もない。慾得づくで――マダム・レンベエルが死に、店が賣られた後――厄介物として預つてくれる近所の人達の家で、ポオルとアニイックは屋根裏の粗末なたつた一つしかない寢床に寢てゐた。公證人からレンベエルの遺産三萬フランの利子で月々賄費が拂はれてゐたのに、殘パンで養はれてゐた彼女達は、ポオルが十七、アニイックが十三だといふのに、巢からまろび落ちた小鳥のやうに痩せこけてゐた……

『あゝ！　痩せてゐる、痩せてゐるつてこぼしてゐたつけが、まるで見ちがへる程肥つたこと！』

『えゝ、この通り』

『一人前の女だ！』マドモアゼル・アルデイは感嘆して折紙をつけた。

アニイックは額を上げた。そして抱きついてゐた腕を解いて、腰のタオルをひきしめ乍ら投げつけるやうに言つた。

『え、え！　メレット！……だつて私、一昨日から二十四なんですもの！　だけどいくらなんでも、もう着物を着なくつちやね、貴女の娘も！　貴女の年とつた娘……だつてもう一年たてば聖女カテリンのお祭りになるんですもの……』

彼女は氣に入りの、プロヴアンス風の古びたピカピカ輝やく戸棚の前に行つた。扉を開けると、下着類や、ロープ等がきちんと並べられてあるのが見えた。

毎日の體操で練られた健全な體に宿る健全な精神を持つ彼女は、美しいので裸體でゐることを決して恥ぢなかつた。まだイヴリンにゐた頃、マドモアゼル・アルデイは彼女を、第一の自己尊重たる清潔を宗敎として、自然作用のあらゆる知識を授けつゝ育てたのであつた。だから隣りの宗敎學校――神の御告、そこにアニイックの姉が三年ゐた――の生徒達が、凡ての惡の萠芽たる虛僞を强ひられて、敎室でうじよ〳〵してゐる間に、アニイックは一輪の自由な花のやうに、無邪氣に成長した。

彼女はことさらに含羞みもせず、常に端正に調和を保つた手速さで下着を着た。

『失禮しますわ、少々衝立の必要がありますわね。でもこゝには仕

事の依頼者の他、誰も來ないもんですから』

マドモアゼル・アルデイは指で彼女を威脅するやうな眞似をしながら微笑して、

『だが、お前さんのやうな娘の處に一人の惡人も來ないなんてことは、私は信じないよ』

『あら！ 戀人なんかいくらでもあつてよ！……いいえ！……若し本當にそんなものがあれば、貴女にお話してよ。私の手紙は決して貴女に何んにもかくしはしなかつたんですもの』

『そんなことを言つたつてお前さん、お前さんの時代の娘達のやうにお前さんも獨身女の自由を徒らに吹聽したいといふものだよ。お前さんはまだ『私の心はあの人の祕密を持つてゐる。私の魂は…』といふアルヴエールの唄の時代にゐるよ』

『祕密も、神祕もなんにも…少くとも、お話する程はつきりしたことはまだ何んにもありませんのよ、若し私がそんなことを考へるとしても、それはほんの一寸ばかり』

彼女は言ひさして、考へ直した『いいえ、それは噓、私はだん〲それをはつきり考へますの…』そして默つて問ひかけるアルデイの前で、今度は高らかに樂しく思ふのであつた。

『何んにも、いいえ、何んにも決つたものはありませんの…』

併し彼女に近づく男達は少くなかつた。けれどその中の二人だけが彼女の氣に入つてゐた。何故なら確かにこの二人は彼女に對していつも愼しみを保つてゐたからだ。アメデエ・ジヤクマンは社會黨の代議士で、快活ないい仲間として、彼女は敬愛してゐた…そして殊にピエール・ルボオには、性質上屢々苛立たせられるけれど、よくある心の自然な反撥で、彼女は餘計彼の容貌に惹きつけられてゐた。

けれどアメデエ・ジヤクマンは自由な體であつた。そしてピエール・ルボオには古い關係があつた。

その關係は——少くとも彼が最近さう斷言した——破れるばかりになつてゐた。それでなければ、頑固な性的道德觀念を持ち、相互の平等や正義を渴望する彼女が、一分間だつて彼を愛し得る可能性など考へはしなかつたであらう。けれどかうした考へには些の打算もなければ、結婚などと云ふ考へはなほさらなかつた。

アニイックは、彼等自身の鎖で、憎みの復讐に、或は諦めの妥協に、しめつけられた不幸な家庭を餘りに多く見て來た…彼女はだから、結婚しないかぎり、法律が女や母に與へる自由と權利とを決して棄てないことにきめてゐた。それは政治上の權利（それもいつかは享樂したいと望んでゐるが）を除けば殆んど男子と同等な自由だ。それで彼女は彼女自身と彼女の子供達の統禦者であることが出來る。

『私は二つの可能性の間に立つて迷つてますの…どちらにも引力があるんですもの。でも私、一つの方にづつと惹きつけられてゐます。私をアッペルに入れて下すつたルボオさんが、どんなに私の力

になつて下すつたか、手紙で申上げましたわね……最初は司法記者として……それから暫らくして特別祕書として……巴里で、タイプライター速記者として、而も一文なしで！　だつて、休戰後、私の手に殘つてゐた遺產のいくらかのお金は、丁度——貴女が御存知の通り——巴里に來た月になくなつてしまつたんですもの……宿ること、ねえ？　どんなに質素にしたつて着ること……機械の買入れ……そして仕事を探すこと。斷られたり、試用されたり、迚も大變なの！……自分で生活するつてことは、辛いことですわ。殊にこちらが醜くなければ、何處に行つても、どんな仕事にでも、外では結局どうしたつて『寢るか、死ぬか』つて云ふ同じ文句につまづくのですわ……その上にまだ試驗準備の法律の勉强です……意志が弱くつちや迚もやり遂げられませんわ！……幸ひと、私は貴女のお敎えや御助力のおかげで、强い意志を持つてゐましたけれど。そしていま私はルボオさんのおかげで息をついてゐます……大きな新聞の主幹で、巴里では迚も素晴らしい勢力なの！……殊にあの方の才能では……私の最初の仕事はあの方のおかげですわ……あの方は迚も親切だつたんですよ』

『それとも迚も狡猾だつたかも知れないね……』

　この觀察は、アニイックがびつくりする程苦い敵意を以つて言ひ放された……一瞬間、嚴つい表情が、マドモアゼル・アルデイの變り易い顏面を硬ばらせた……注意深い愛の動作か知ら？……

　アニイックはそれにはかまはず言ひつゞけた。

『私は全くのひとりぼつちで……』

『ボオル？』

　アニイックは話頭が變つて、ルボオの話が打ち切れることを喜んだ。彼女にはまだよくアルデイの心が分らなかつた。

『ボオルは私が來る前から仕事がなくて可成り困つてゐたんです。今でもまだ困つてゐますけど……何も私、あの女（ひと）を責めるんぢやありませんけど……それにお互に性質が違ふんですもの』

『それやさうだよ……それでどうなつたの？　やつぱり音樂をやつてゐる？　アルプ「竪琴」を？』

『えゝ、やつぱり。でも夜だけですの。お稽古だの、音樂會だので……そして、晝間は——食べて行かなきやあならないんで！——モオリセットのマヌカン（マネキンガール）をしてゐますの。その店は大きな婦人服屋です』

『ぢや、あの女（ひと）の年來の宿望だつた結婚は？』

『前よりもつとそんなことを考へてゐますわ』

『で……いまは？』

『やはりモオリセットの賣子をしてゐる女友達と一緒に生活してゐますわ』

『まあ！』

アニイックはこの『まあ！』の次に嘲けるやうな言葉が、アルデイの唇をもれないとも限らないので、それに對して姉を庇はうと思つた。けれど、些の惡意を持たないマドモアゼル・アルデイは――それに女といふものが、自ら進んで惡化し得るといふことは知らないので――『まあ！』とは言つたが、そこに何の惡意もあつたのではなかつた。そして言ひ足した。

『可哀さうなポオル！　あの娘はお前さんとは似てゐないね、あの娘の教育が、あの娘を世の中と闘ふためには不都合にしてしまつたんだよ！　天職としてはお臺所、仕事としては竪琴しかない女に：……』

『だつて』アニイックは靴を穿き終へ乍ら言つた。『修道院で教育されたあの女(ひと)の少女時代と、貴女に訓練された私の少女時代とは違ひますわ……それに、戰爭があつたんですもの！……あれでお互の性質に從つて、それ〴〵違つた方向に動き出したんですわ』

『それやさうね、年とつた人達は、決してあの騷動を十分に考へに入れないが。家庭を空つぽにして、何百萬といふ人間を殺したあの災厄は、不意に何百萬といふ女を解放した……そして、あゝ！　十分自立する力がなかつた女達は……』

アニイックはあの恐怖時代を、死に隣り合つた自棄的無我夢中の生活を思ひ出した……工場の坩堝や、病院の男女混合や、ダンシングの體と體の渦卷……彼女自身はかうしたあらゆる狂亂からは、マドモアゼル・アルデイの庇護のおかげで、免がれてゐた。けれど一九一七年には、この翅の下を去つて、彼女も亦、女の勞役と、兵士の辛苦とを分け持つことになつた。

赤十字看護婦の免狀を受けた彼女は、戰爭が終らない先に疲れてしまつた看護婦の一人と代つて、特志看護婦として熱心に働らき始めた……彼女がけなげにも看護した人々は――傳染性患者の病院から、普通の負傷者の病院に移つて來た人々で――どんな魂が慈善看護婦としての尼や僧侶の薄皮の下に隱されてゐたかを知つてゐた。

學業半ばの十五歳にして戰爭の勃發に遭ひ、やがて全くの地獄に沈んで行つたこの少女は忽ち若い娘となり、一人前の女になつた。そして憤激したり、社會惡をみたり、人類の痛苦にふれたりしたことから、彼女は新らしい社會組織に向つて神秘的な飛躍を心に抱くやうになつた。ポオルが横道にそれてしまつたのに、アニイックは自分が献身的に働らいてゐる環境そのものの中で、恐ろしい目征の幻の中で、それに浸り切り、何物にも侵されなかつた。休息時間の彼女自身の撓まぬ勉强と、スポーツの趣味が、かく彼女を戀愛には無垢に導びいたのであつた。

『ポオルは他の人達と同じなんですわ……偏見に隷屬しきつてゐますもの……あのひとにとつては結婚は輝やかしい鎖なのよ。その鎖の端に食物と衣とがある……でも、家庭といふものが單に完全な結合にしか存在しないと考へる私達のやうな人間がいくたりあるでせ

う？』

マドモアゼル・アルデイは誇らかにアニイックを見た。そして彼女のうちに、自分の信念、婦人解放に依つて一新された世界を弘める爲に巣立つ若い自分自身の姿をみるのであつた。

あるもの達の利己主義が滿足されることなく、他のもの達が無慘に打ちひしがれることがなければ、どれ程多くの惡が避けられるであらう！……あゝ！　若しあの恐ろしい戰爭の後に、もう一度皆が不正に對して、貧窮に對して一致しようとするなら！　殊にあらゆる罪惡の源であり、巣窟である戰爭に對して！

『可愛い娘！』とマドモアゼル・アルデイは呟いた。

アニイックは後繼者として、アルデイ自身が先驅者の意氣で企てて果し得なかつたことを、男性によつて、男性の爲に造られたこの社會の敵意に滿ちた壁に常に粉碎されてしまふ彼女の無力な夢を、實現するであらう。

彼女は兩手を差出した。それをアニイックはやさしく握つた。

『メレット、私どんなに貴女を熱愛してゐるでせう！　貴女はあんな恐ろしい時代に、私を引取つて育てゝ下すつたんです……貴女がゐて下さらなかつたら！……おかげでポオルは私より年上ですけど、私の方がづつと自由といふことは考へてゐますの。だからまるで私の方が年上のやうに二人分氣をつけなくつちやならないんですよ。あのひとももう來るでせうからお會ひになつてね、今日は丁度、ルポオさんと御一緒にオアズのあるきれいな處にお晝餐（デジュネ）に行くことになつてゐますの……私達だつて貴女をぜひ引つぱつて行きますもの……いいえ、いいえ！　反對なんかなさつちやいけません！　今日は貴女がお從ひになるのよ。そしてあの人をどうお思ひになるか後で分つてよ』

彼女は枝葉模様のある紅縮緬の、眞直なロープを裾短かに着て、黑いエナメルの帶をしめ、きびきびした感じを添へる白い平らな、幅廣いカラーをつけて、すつかり身仕度を整へた。それは昔の『クロオデイン』の思はせぶりな裝ひではなくて、純な青春の淸らかな魅力を持つ姿であつた。彼女は柔らかな空色が、開け放した窓から入つてくる五月空にも拘らず、古ぼけた毛皮の緣無し帽を被つてゐる灰色の頭に、命令的に手をのせた。

『好いでしよ？』

けれどマドモアゼル・アルデイは頭をふつた。

『いいえ』

そして不意に言ひ出した。

『お前さんがルポオのことを何んと言つたつて、私には何んにもなりはしないよ。お前さんは若いから、戰爭前の、キヤベツの葉つぱ位でしかなかつた頃のアッペルを知らないけれど……そこに本當のルポオが赤裸の姿で現はれてゐたんだよ。つまり强請が仕事の腐り果てた姿でだよ！……本當だとも！　そりや本當なのだよ。お腹を

空かしてゐた頃のあの男は、共和政治を『牛糞』だなんて言つてたんだよ…今では金も出來、地位も出來、そしてもう、アカデミイと國會にしか執着がないものだから、宗旨と方針を變へたのさ。だが眞底はいつでも同じ人間だよ。つまり慾と惜みだけの人間なのさ。悧口には違ひないがね、だがそれだけ一層輕蔑すべきだよ、あゝあ！　巴里のなんて人達は健忘性だこと！』

アニイックはびつくりして默つてしまつた。どうしたといふのだらう、善良なメレットだのに？……

『あの男がお前さんの仕事の世話をしたつて？　だつてお前さんは比類のない祕書だもの！　あの男がお前さんの裁判所への第一歩の手引きをしたつて？　それやそのお返しに、お前さんを他の女達のやうにしようと思ふからだよ。それに違ひないとも』

ほんの一寸冷笑するやうな氣持ちで、アニイックは靜かに眼を上げた。

『どうしてそれが惡いんでせう？　私は自分のすることは何んだつて知つてゐますよ。私だつて大人ですもの』

『お前さんの考へは分つてゐるよ！』

『私の考へは貴女のお考へなのよ、メレット……』

『私の…私の…訂正し、補增した考へ！』

『何んですつて！　貴女は、女にとつては、惡い結婚よりも、いい自由結婚の方がましだつて、いつも仰つてゐらしたぢやありませんか？』

『それやさうよ！…だがね、何んだつて場合によるよ…何故つて、私達の保守的な風習では、大抵のものが、そんなことをすれば悧口の道を失ふ危險があるからね』

『弱蟲！　私はさうぢやないわ』

『それに大切なことは、根本問題だよ。自由結合？…結婚？……二つとも、撰擇といふ同じ富籤の番號を含んでゐるんだからね。それで私が心配するのはお前さんのことだよ』

『どうして？』

『さつき言つた通りさ』

『一つの印象！…それで貴女は御存知ない一人の男に罪の宣言が下せるとお思ひになつて？』

『では！…』

マドモアゼル・アルデイはためらつた。アニイックは彼女がルウルダルとの三角關係を竝べ立てるかと思つて、冷笑的に自分から言ひ出した。

『ルウルダル夫人のことでせう？』

マドモアゼル・アルデイはびつくりした眼をあげた。

『いゝえ、まだそんな女が！　それはまた一體誰なの？』

お人好のメレット！　やつぱりこの人は田舍ものだ！　アニイックはしぶしぶいかにルボオが巴里中の人々に公然と、この有名な夫

婦の喰物になつてゐたかを説明しなければならなかつた。

『ルウルダル夫婦は、貴女も御存知よ！……ルウルダルは倫理學及び政治學のアカデミイの哲學者で、『物質主義至上論』を書いたり・シモン・ヴイアルと結婚したりしてから、時代精神に、つまり武力萬能主義に變つた人です』

　マドモアゼル・アルデイは更らに續いた。

『シモン？……自分をモデルにして、淫らな裸體を澤山書いたといふあの女かい？』

『えゝ、さうよ！　漫畫家ヴイアルのモデルで妻君だつた女よ。年をとるにつれてあの女(ひと)も二度目の夫のやうに、よく物を考へるやうになりましたの……そしてアッペルの美術批評家なんですの……だけどルボオはもう飽き始めてゐるんです……』

『三角關係に？』

『いいえ！　ルウルダルはうるさくないの……可哀さうに！　あの男は何んでも承認するのよ。だから三角關係にぢやないの。私は、若し私が……』

　マドモアゼル・アルデイは激しく言ひ放つた。

『そんなことはいけない……若しお手前が知つてゐるなら！……』

『何を？……さあもう默つておしまひになるわけには行きませんよ！　話して下さい（肩をそびやかして）……それに私は冷靜です！若し貴女があの人のことを御存知なら……』

『私はお前さんが言ふ通り、一度もあの男に會つたことはない。だが私はあの男の書いたものを澤山讀んだから、たしかにお前さんよりよく知つてゐるよ……まあおきゝ……お前、イヴリンのローザを覺えておいでかい？……大きな　ブロンドの……お馬鹿さんよ。だけどきれいな……あの娘も暫らく學校へ來てゐたよ……來てゐたともね！　ほらあの額に葡萄酒色の傷痕のあるブランカアルといふ家政婦の娘さ……』

『あゝさう！　覺えてますわ』

『そのローザがモルガアル家の小間使をしてゐたんだよ』

『あの社會黨の代議士のアメデエ・ジヤクマンの義理のお父さんの？』

　マドモアゼル・アルデイは、そんなことは知らないといふ身振りをした。

『私が知つてることは、お婆さんがアジル・デユ・ソアール慈善會の會長で……お爺さんが貴族院議員で……前に大臣だつたとか、高官だつたとか、何んだとかいふだけ……』

『さうですよ！　アメデエ・ジヤクマンはピエール・ルボオのやうに私の親友ですわ』

『ぢやそれがお前さんの二番目の可能性なの？』

『えゝさうよ』

『おやさう！　息子さんは評判がいいかも知れないね！　けれど親

御さん達は……』
『分つてます！……恐ろしい迷信家ですつてね、敎派的の慾張りにかけちやあれ程の人達はないんですつてね……でもそんなことは勿論、大ざつぱな言ひ方ですわ……名譽が！　レヂヨン・ド・ナブールさへもあるんですもの……だつてモルヴアル氏は高官として名のある方ですもの……あの方は昔、外交官だつたんです……けれどそんなことは何んにも今のお話に關係のないことですわ……』
『ところがローザは、姙娠してゐることをみつけられるとすぐ不意に暇を出されてしまつたんだよ』
『誰の子を？……』
『それが問題なのだよ』
ピコール・ルボオの名は一瞬間だつて、アニイックの輕信する感情に一沫の疑ひをさへ起させなかつた。彼女はびつくりして言つた。
『アメデエ？……』
けれど彼女の憐れむやうな表情は、かなしみに沈んだ。マドモアゼル・アルデイは溜息をついた。
『いいえ、お前さんのルボオだよ』
『あの人が？　そんなことがあるもんですか！　いくら何んだつて！　あの人が、あんな娘を愛すなんて！』
マドモアゼル・アルデイは嚴つい顔つきになつて言つた。
『誰が愛すなんて言ひました？』

アニイックの驚き方をみて、彼女は、熱情的な眞摯な若い魂の上に伸ばされた魔手をはつきりと見た。そして、よし一時的な苦痛を與へるにしても、少しも早く注意する必要があると思つた。
そして鋭く斷ち切るやうに言つた。
『まだ男といふものが皆同じでないなんて信じてゐるなら、特志看護婦になつたことも、大學入學資格を得たことも、學士になつたことも、何んにもなりはしないよ！……疑ること？　それや誰だつて！皆だよ。お前自身もさう言つてたぢやないか。出來るだけは疑るさ……だが愛すこと、それやまた違ふよ！』
『ピエール・ルボオはつまらない人間ぢやありません……あの人と、あの娘と！　いいかげんなことだわ！　そんなことは汚らはしい惡口ですわ』
『それならローザにきいてごらんなさい……』
『そんなこと、作りごとです！　強辯です！』
『あの娘の話には胡麻化しのない眞實な處があるよ』
『だけど一體、どうして貴女はそんなことを御存知なんです？　仰つて下さい！　ねえ！　仰つてよ……私のためです。本當の大きなためになります』
『ローザがみんな私に話したんだよ、ある日あの娘が急ぎの手紙をあの男の處へ持つて行くと……』
『新聞社へ？……』

『いいえ、家へ……ある訴訟についてのモルヴアル氏の手紙なんだよ……』

『訴訟の？　一寸待つて下さい……牛乳會社に對するアジル・デユ・ソアール慈善會のものでせう、多分』

『さうかも知れない。ともかく、たしかなことは、お前さんのルボオが、ローザをきれいだと思つたことだよ。さうあの娘に言つたんださうな。そしてそれを證據立てたのさ！……本當だよ。すぐに……そのまゝ、あの男の仕事部屋です。無論それや、女を見て欲望を起し、欲望から行爲にまで行かずにはゐられない一種の病氣だよ』

『おゝ！　私は誓つてさうでないことを斷言します』

『あの男は人をみることを知つてゐるのさ！……あのお馬鹿さんはすつかり馬鹿にされ、多分いい氣になつて、されるまゝになつたんだよ。そしてあの娘がいたづらに趣味をもつたものだから、あの男は、姙娠したらしいと告白されるまで關係をつゞけてゐたんだよ。あゝ！　だけどぐちぐちしちやゐなかつたよ……姙娠したことが分ると……』

『で、いつあの娘はそんなことを貴女に言つたんです？』

『あの娘は十五日程前に、イヴリンに歸つて來たんだよ。何んといふ有樣だつたか！　人目につき始めるが否や、モルヴアル家から暇を出されて、あの娘は大きなお腹を抱えて、家から家に轉々としたんだよ。そして何處でも雇つてくれなかつたものだから、町の辻をさまよつたんださ……そして終ひに、たうとう肺病に罹つて弱り切つてしまつて、一人でも十分に食べられないやうな母親の處へ轉げ込んだんだよ……だから私が世話をしてやつたのさ……少しばかり助けてやつたのさ。そして無給ではあるけれど、新らしい内屋のスウリオさんの處へ入れることが出來たんだよ』

いろいろな想像が、渦卷のやうにアニイックの幻想を通り過ぎた。信ずべからざる馬鹿らしさだ……あの娘が町の辻に立つて、それから役に立たない人間に……誘惑と、拋棄と、女性の弱さと、邪惡な社會との全くの悲喜劇だ。併し彼女ははつとして反抗した。

『若し貴女があの娘の言ふことを皆なお信じになるなら……常識を失つてゐらつしやることを、貴女御自身で告白なさるといふものですわ！……そんなこと、皆寃罪です！』

『いいえ、ローザは馬鹿だけれど、嘘つきぢやない。あの娘は結果を恐れて默つてゐたのだよ。あの娘は結婚しようと……本當のオレンヂ花の冠をつけて、ガス會社に勤めてゐるある男と一緒にならうとしてゐたんだよ……それを運惡くお前のルボオに手をつけられてしまつたのさ』

アニイックはかうした惡口を幾度も腹立たしく思つたので、自分乍らびつくりする程激しく反抗的に叫んだ。

『貴女はいつでも貴女の親切氣に騙されなさるでせう！……ルボオさんはそんな氣まぐれをなさるには、あんまり趣味が高すぎます。

いつも正しい男として行動しないやうな方にしてはあんまり良心を持ちすぎてゐます……いいえ、いいえ。若しこの……小說中に、一部分の責任があるとすれば、私はたしかに、あの方がもつと違つた行動をなさるに違ひないと思ふんです』

『ローザの幾度もの呼び出しに對して、あの男が何んて返事をしたお前さん知つておいでかい？……あの娘が馬鹿だつたとか、若しもつとうるさくするなら——警察だ！　なんて言つたんだよ』

呼鈴が鳴つた。アニイックは投げつけるやうに『ほら、あの人よ！』と言ひ乍ら戸の所に走つて行つた。マドモアゼル・アルデイはきつぱりと言つた。

『私は歸るよ……こんなことを言つた後であの男に會ひたかあないからね……おや！　ポオルだ……』（つゞく）

このみちづれは現代フランスの錚々たる作家、ヴイクトオル・マルゲリツトの作で、もと途上と題する二部作の後編なのである。前編は『ラ・ガルソンヌ』と云ふ題で、戰後のフランス讀書界に發表され、忽ち全フランス、全ヨーロツパ、全アメリカ、否全世界に弘まつたのである。それは現代のフランスのモガを描いて遺憾なく、そこには不倫な戀、不德な愛慾、大膽な女人の自由奔放が描き出された。それ故にフランス一般社會に大センセエションをまき起し、作者はアカデミイ、フランセエズから除名され、社交界からは『フランス婦人の體面を汚すもの』として退けられた。けれどもそれに反して『ラ・ガルソンヌ』の賣行は文字通り飛ぶやうに賣れ、忽ち五十萬を突破するに至つた。そして作者は一般社會の反目にも拘らず一部の眞に明日に對する理想を抱く人々からは非常な敬愛を受けた。このみちづれはその後編で、心ある人々の期待を完全に滿足せしめるものである。こゝには前編のたゞれた廢頽の愛慾の代りに、淸らかな永遠の愛があり、理想があり、完成がある。私は順序としてはまづラ・ガルソンヌを譯し、それからこのみちづれに移りたかつたけれど、それは雜誌に連載すべく餘りに長編すぎるのと、もう一つはラ・ガルソンヌは若し譯しても日本のお役人は嚴めしい顏をして發表を禁止するだらうといふことゝ、それから私を子供のやうに愛してくれるフランスの年上の友人が、ある日ふと私の机上に讀みさしてあつたラ・ガルソンヌをみて『こんな汚らはしい本を讀んではいけない。若しお前が日本へ歸つて、こんなものを譯して紹介したら、それこそ永久の絶交だ』といつて私のその本を取り上げてしまつたことのために、一足飛びに完成された女人アニイックを女人藝術の讀者諸姉に御紹介する。　——一九二八、一一、一——

婦人彙報

▼婦人議員の當選

米國大統領の選擧と共に十一月六日、米國下院議員の選擧が行はれ、三名の婦人當選者を出した。この新らしい婦人代議士は、ニューヨーク市選出ルース・プラット孃（共和黨）シカゴ選出、ハンナ・マツコーミツク夫人（共和黨）、フロリダ選出ルース・オーエン夫人（民主黨）である。

▼米國の女子有權者

今回のアメリカ大統領の選擧は稀に見る激烈さを引おこして、南北戰爭以來の政治騷ぎであるといつてゐるものさへあるが、選擧有權者の登錄數も激增して三千五百萬人以上となつた。そのうち女子有權者六百萬人と見られてゐる。因みに、六日選擧の結果、競爭者スミス氏が落選して、フアーバー氏が大統領となつた。

▼エリザベス女史の死

著述家として、また、現在の華盛頓に櫻樹の移植を考案した人として有名なエリザベス・シドモーア女史は、セネヴアに於いて死去した報があつた。女史は國際聯盟の婦人運動にたづさわる爲に、五年前わざ〳〵セネヴアに移住してゐたものである。

▼婦人問題講演會

日本大學女子學生會においては十月二十一日婦人問題の講演會を開き、過渡期にある女性の男性に對する理解、女性向上等の問題を論じた。講師は岡本一平氏、永井享氏、和田富子女史、奥むめお女史、山田やす子女史等の顔ぶれであつた。

▼女流にノーベル賞金

諾威の女流作家シグリツト・ウントセツト女史は、今年のノーベル賞金を授與された。女史は有名な「大地の成長」の著者で、諾威文壇に重きをなし、その著書は各國語に飜譯されてゐる。

▼私立高女聯合體育協會

御大典奉祝體育大會が機縁となつて、今回私立高等女學校聯合協會を組織する機運が動き、近く協議會が開かれるといふ。

▼婦人の政治學校

山川菊榮女史とその統、及び全國婦人同盟、無產婦人聯盟の有志個人參加者たちをもつて結成されてゐる、無產婦人研究會は、マルクス經濟學、唯物史觀辨證法の研究を終へ、進んで婦人運動テーゼ作成の前提として、婦人運動の研究に入つた。なほ、十一月から新會員の教育に當たる可く、婦人政治學校を設け、婦人運動のオルガナイザー養成の準備を進めてゐる日下學校のテキストコース作成委員講師交涉委員等が專ら奔走し、一方學校の場所を選擇中であるといふ。

▼產婦死亡問題

產兒制限で有多なマーガレットサンガー夫人は、今度夫人の非常な努力になる產兒調節聯盟の會長の職を辭して、產婦死亡問題の科學的研究に沒頭することになつたサンガー夫人に依れば、產婦死亡率の高いのは、適當な產兒調節知識のない結果であるとして、この點からも益々產兒調節を一般化する必要があると力說してゐるが、直接の動機は米國における產婦の死亡率が非常に高いところから來てゐるらしい。

▲インドに行く吉原きみさん

キリスト教女子青年會學生部幹事吉原キミ子さんは、印度南部のマイソール市に開かれる萬國キリスト教學生聯盟の委員總會に出席することになつた。萬國キリスト教學生聯盟といふのは世界四十ケ國の男女キリスト教學生運動の人達が加盟してゐて、二年に一度づゝ集まるのだといふ。

▼妻を征服するのクラブ

「男子の命令に絕對に服從すべきもの、その名を女といふ」と至極お目出度い、痛快なる定義を下したのはイタリアのフアシズムの親分ムツソリーニである。ところが、米國クルツクストンの御亭主連中は、それを聞いて喜ぶまい事か、早速「妻を征服するのクラブ」といふものを作つて發會式をあげ、主唱者ムツソリーニに敬意を表する電報を送つた。そればかりか調子に乘つたこの會は近くムツソリーニの記念碑を作つて、その勇敢なる男性を表彰しやうと計畫してゐるが、一方その夫人達は「夫を征服するの會」を作る可く、準備中と新聞の報導はよたつてゐる。

▼婦人と少年の技師

過日讀賣新聞社の主催でラヂオ技術講習會が開かれ、懇切な技師の指導の下に好成績を納めたが、中には婦人及び少年聽講者があつて、それ〴〵立派な受信機を組上げ得たといふことである。

▼四谷婦人會の映畫の夕

四谷旭町の二葉保育園は、過去二十九年の久しい間、貧しい隣人の爲にまた不憫な母子のために不斷の情熱をもつて働いて來たが、今度改築することになり、その費用の不足を補ふ爲に、四谷婦人會は「舞踊と映畫會」の會を催した。

▼フランシス・ウヰラード・ワング女史

婦人矯風事業の創設者、フランシス・ウヰラード女史の偉德に感化された支那の一婦人が、今度自らフランシス・ウヰラード・王と名のつて、支那の矯風事業に働き、着々と成績を上げてゐる。彼の女はかつて米國にゐて、故ウヰラード女史の秘書であつた人及び矯風事業に親しみと理解とをもつて働いてゐた人で、支那へ行つてからは、矯風事業の他に、乞食達が自活出來るやうな教育をもはじめてゐるといふ。

▼米國大學から英國留學

元ファーイースト主筆喜内氏の令孃喜内文子さんは六年前米國に渡りミシガン大學に學んでゐたが同大學を卒業後同大學から選ばれて、英國オックスフォード大學に留學生として二年間文學を專攻して學位を得て今度歸朝することになつた。歸朝後はたしか、どこかの大學に教鞭をとるだらうと評されてゐる。

▼婦人佛教哲學者渡獨

今春東北帝大を出た婦人文學士德永茅生女史は、婦人として珍しくも梵文學、印度、支那、哲學を專攻してゐたが、更に深く印度哲學を研究する爲に、今度獨逸へ渡り、フライブルグ大學のロイマン教授の下に指導をうけることになつた。滯在三ヶ年の豫定で、歸途を印度に立寄られるさうである。婦人として此方面の研究留學生は女史が最初である。

▼最近の無產婦人團體

最近の無產派婦人團體は、各所屬の無產黨の關係で、勞農黨一派はふるはず、社會民衆婦人同盟日勞黨系の全國婦人同盟が中心になつて、會員も逐次吸收されて行くさうである。

▼男女共學の公認運動

日本大學女子聽講生八十餘名は去る十月廿一日、結束して男女共學公認運動を起すことになつた。この問題は既に久しい以前から叫ばれてゐたもので、單に聽講生としては十年以前開放されてゐるが一歩進んで男女共學の資格を文部省に認めしめようといふのである。過去十年の經驗は、早尚の城を脫してゐるであらう。

▲樋口一葉女史三十三回忌

明治文壇の生んだ天才、紅葉と並び稱された樋口一葉女史逝いても早三十二年、十一月二十三日は三十三回忌にあたる。その紀念として二十二日偕樂園に文壇諸氏集り法要がいとなまれた。

▲シャルラ・ハルレング朝來夫人

ベルツン生れの女流畫家、シャルラハルツング女史（東京大阪朝日新聞社特派員黑田禮二氏夫人）は、今般最近の作品數十點をたづさへて最初の日本訪問をされた。同夫人は黑と白との色彩によりて畫面を生かす「はさみ畫」の獨創者でアメリカでその展覽會を催し好評を博した。十一月十七十八兩日朝日新聞社講堂で個展開催する由。

男性訪問の第一に立つ候補者は左の諸氏です。この中からどなたがどなたを訪問したらよいかお指示下さい。

生田花世、八木秋子、北川千代、伊福部敬子。佐々木ふさ、望月百合子、長谷川春子、小寺菊子、北村兼子、野溝七生、眞杉靜枝、林芙美子、堀江かど江。英 華子、大井洋子、

愛讀者券

對話條件	訪ふ方	訪はれる方

編輯後記

私達の愛する『女人藝術』に取つてこの昭和三年度掉尾の活躍ならびに反響は如何ばかり強き燃燒的なるものであつたか。特に喜ばしきは、德富老先生の本誌に親しまるゝことを傳へきたることである。實に本誌に對する親愛は若き讀者のみにはとどまらないのである。從つて編輯者なる私達にとつてはかゝる多方面優秀なる讀者の聲なき聲をもつて聽かるゝ批評は非常なる鞭達となる。新春と共に猶一層の考慮猶一層の努力をもつて內に充たし外に擴げる二方向の處置よろしきを得たいものだと考へてゐる。さらば、さやうなら。(花世)

本誌もすでに六號を數へるやうになつた。六號といへば半年を經過してゐるから、その間に本誌の基礎もゆるがないまでに定まつた『女人藝術には方向がない』といふ批評を耳にしないこともないが、その思想的立場は最初に揭げた通り、プロレタリアにもブルジョアにも偏せずひとしく女流作家の進出の一機關として編輯するのが主意であるから、今さらそれを繰返されても仕方がないと思ふ。ともかくも今日までに何ら發表機關をもたない隱れた女性が本誌によつて進出したことは事實である。それが世間にどう認められるかは別問題であるからここに述べるまでもないが、今後多くの女性が本誌によつて進出してゆくであらう。(かど江)

戶外はこがらしの音がする。編輯室は明るくあたゝかで机のまはりに六人の女性が賑かに談笑しながら校正をしたり後記をかいたり――お手傳の私もたのしい。伸びて行くものゝ姿を見つめることは嬉な氣持にちがひない。時雨さんが氷屋のはなしから臘燭の說明に及ぶと城さんが「まあ、ずゐぶん博識な――どうしてさういう事まで御存じなんですか」と感動した顏でたづねる。時雨さんの「多情論」に移つたところである。(秋子)

氷屋なら解けてしまふ、ろふそくならたつてしまふ。あたしの博學はそんなところです。ところで眞面目なお願ひは月極愛讀者の方たちは女人藝術の根になる方たちですから、六號記念として誌友となつて頂きたく、本誌へ對しての御注意も伺ひたく思ひます。猶お一人が一人と本誌のある事を御紹介願ひます。

以前「ピアトリス」を發行してゐられた加藤田鶴子(舊姓山田)さんが、目下ハワイにあつて、大層本誌の爲に力をつくして下さる事をもお禮申たく存じます。

よき年をおくりよき新春をむかへる事を祈りつゝ。(時雨)

未だ巷に師走の風は吹かれど雜誌の上ではもう早今年の最終號です十二月號つていふと、どの雜誌も新年號の特輯を控へてゐる爲かともすればおろそかになり勝ちのやうです。其すきをねらふわけではないけれど、本誌は恰度大切な六號でもある――とだけ言つて「女人藝術」を可愛がつて下さる皆さまの御批判を待ちます。では皆さまの御機嫌よろしう。來る春は、みなさまの上に、本誌の上に、光と榮えの惠まれますやうに。(しづか)

子供の時分大晦日の晩は樂しいものでした、お年越しの御馳走がすむとその時から年が一つふえるのですもあんた未だなの、私もう十一になつたのよ」なんて、お夕飯の濟まないらしい友だちに街で逢ふと威張つたものでした。今夜は十二月號の編輯が終つて「女人藝術」の大晦日です。明日になると女人藝術も二つになる筈です。

私も二つになつたのよ!(素子)

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割增の事。

昭和三年十一月廿日印刷
昭和三年十二月一日發行
(毎月一回 一日發行)

發行者 長谷川時雨
編輯者 素川絹子
印刷者 生田花世
印刷所 日清印刷株式會社

東京市牛込區左內町三十一番地
發行所 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五

大賣捌 東京堂 大東館 北隆館 東海堂

大河内傳次郎 復歸第一回特作品

酒井米子 共演 脚色 如月敏

沓掛時次郎

原作 長谷川伸 監督 辻吉郎

日活獨占映畫化

昭和三年十一月廿日印刷納本　第一巻第六號　定價金四十錢（送料金一錢五厘）

定價・五十錢

月刊

期待さるゝ新春號

特大長編

菊池寛氏
加藤武雄氏
吉川英治氏
大佛次郎氏

連載長編

三上於莵吉氏
佐藤紅綠氏
岡本綺堂氏
葱洋平氏

振替東京二九六三九
東京市麹町區下六番町
平凡社